一般国道９号松江道路建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

（中竹矢遺跡）

1992年３月

建設省松江国道工事事務所
島 根 県 教 育 委 員 会

一般国道９号松江道路建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

（中竹矢遺跡）

1992年３月

建設省松江国道工事事務所
島 根 県 教 育 委 員 会

序

建設省松江国道工事事務所においては，松江地区の一般国道９号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため，一般国道９号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路整備に際しては，埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが，避けることのできない文化財については，道路事業者の負担によって必要な調査を実施し，記録保存を行っています。

当松江道路においても，道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し，同委員会の御協力のもとに昭和50年度以降現在まで５億円の費用を投じ発掘調査を実施してきております。

本報告は，平成２年度に実施した中竹矢遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として，学術ならびに教育のために広く活用されることを期待すると共に，道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへの御理解を頂きたいと思うものであります。

最後に，今回の発掘調査及び本書の編集にあたり，御指導御協力頂いた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成４年３月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所長

神　長　耕　二

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受けて，平成２年度に一般国道９号松江道路建設予定地内に所在する中竹矢遺跡の発掘調査を実施しました。

松江道路の調査は，昭和50年度から昭和57年度にかけて現在使用されている２車線部分の調査を行い，昭和61年度からは車線拡幅に伴う部分の調査を実施しております。平成２年度の調査区は昭和55・56年度調査区の隣接地にあたり，横穴墓や弥生時代から近世にかけての居住跡を検出しました。特に，今回発見した平安時代の瓦窯跡は隣接する出雲国分寺瓦窯跡とともに，出雲国分寺，出雲国分尼寺で使用した瓦を焼いた窯と思われ，当時の瓦窯の様子を知る上で貴重な資料になることと思われます。

本報告は，発掘調査の結果をまとめたものですが，広く各方面においてご活用いただき，多少なりとも埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることができれば幸いです。

なお，発掘調査にあたり建設省松江国道工事事務所をはじめ関係者各位から暖かい御理解，御協力を賜りましたことに対して心から感謝申し上げます。

平成４年３月

島根県教育委員会

教育長　坂本和男

例　　言

1．本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて，島根県教育委員会が平成２年度に実施した一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．平成２年度は，中竹矢遺跡の発掘調査を実施し，発掘地は次のとおりである。

中竹矢遺跡―島根県松江市竹矢町字畑廻674－２，他

3．調査組織は次のとおりである。

〔平成２年度〕

事　務　局　　泉　恒雄（文化課長），藤原義光（同課長補佐），勝部　昭（同課長補佐），野村純一（文化係長），坂根　繁（文化係主事），田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

〔平成３年度〕

事　務　局　　目次理雄（文化課長），藤原義光（同課長補佐），勝部　昭（同課長補佐），高橋研（文化係長），伊藤　宏（文化係主事），田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　　宮沢明久（埋蔵文化財第一係長），広江耕史（文化課主事），藤井和久（同教諭兼主事），津森　敏（同教諭兼主事）

調査指導者　　山本　清（島根県文化財保護審議会会長），池田満雄（同委員），田中義昭（島根大学法文学部教授），金子浩昌（早稲田大学教育学部講師），安田博幸（武庫川女子大学薬学部教授），森　眞由美（同助手），大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長）

遺物整理　　三島千富美，横山知子，菅井国江，加納里香，三島　豊，高角恭子，馬庭志津子，津森眞弓，曽田摂子

4．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SD－溝，SB－掘立柱建物跡，SK－土壙，P－ピット

5．本書で使用した方位は磁北を示す。

6．本書の執筆・編集は，調査員が討議して行い，文責は目次に表記した。

7．本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院のものを使用し，「調査区位置図」は建設省松江国道工事事務所のものを浄書して使用した。

8．本遺跡出土遺物及び実測図，写真は島根県教育委員会で保管している。

目　　次

Ⅰ　位置と環境 …… （藤　井） …… 1

Ⅱ　調査に至る経緯 …… （　〃　） …… 3

Ⅲ　調査の経過 …… （　〃　） …… 3

Ⅳ　遺跡の概要 …… （藤井，津森，萩，広江） …… 4

Ⅴ　中竹矢遺跡出土の瓦について …… （津　森） …… 123

Ⅵ　自然科学的分析 …… 128

松江市中竹矢遺跡３号横穴出土のウシBostaurus …… （金子　浩昌） …… 128

松江市中竹矢遺跡Ⅲ区５号穴の側壁下部に塗りめぐらされた
赤色顔料物質の化学分析 …… （安田　博幸・森　眞由美） …… 129

Ⅶ　ま　と　め …… （広　江） …… 134

Ⅰ　位　置　と　環　境

中竹矢遺跡は，松江市街地の東南，松江市竹矢町中竹矢字畑廻に所在する遺跡で，水田部と丘陵部から成っている。遺跡の南方には，意宇平野の水田地帯が広がり，その周辺には多くの遺跡が点在する。昭和55年から56年にかけての中竹矢遺跡の前回調査では，弥生時代の土壙をはじめとして，古墳・横穴墓及び奈良・平安時代の建物跡などを検出している。

周辺には，縄文時代の遺跡が，意宇平野の縁辺や馬橋川下流域の低湿地に点在しており，さっぺい遺跡，保地遺跡などが知られる。また，才塚遺跡からは石斧が出土し，旧竹矢小学校校庭遺跡からは石鏃も発見されている。

弥生時代の遺跡としては，向小紋遺跡，上小紋遺跡，夫敷遺跡などから後期の水田跡が検出されている。また，中竹矢遺跡の東南に隣接する布田遺跡では前期から中期の溝状遺構を中心として土壙や居住跡が検出されている。

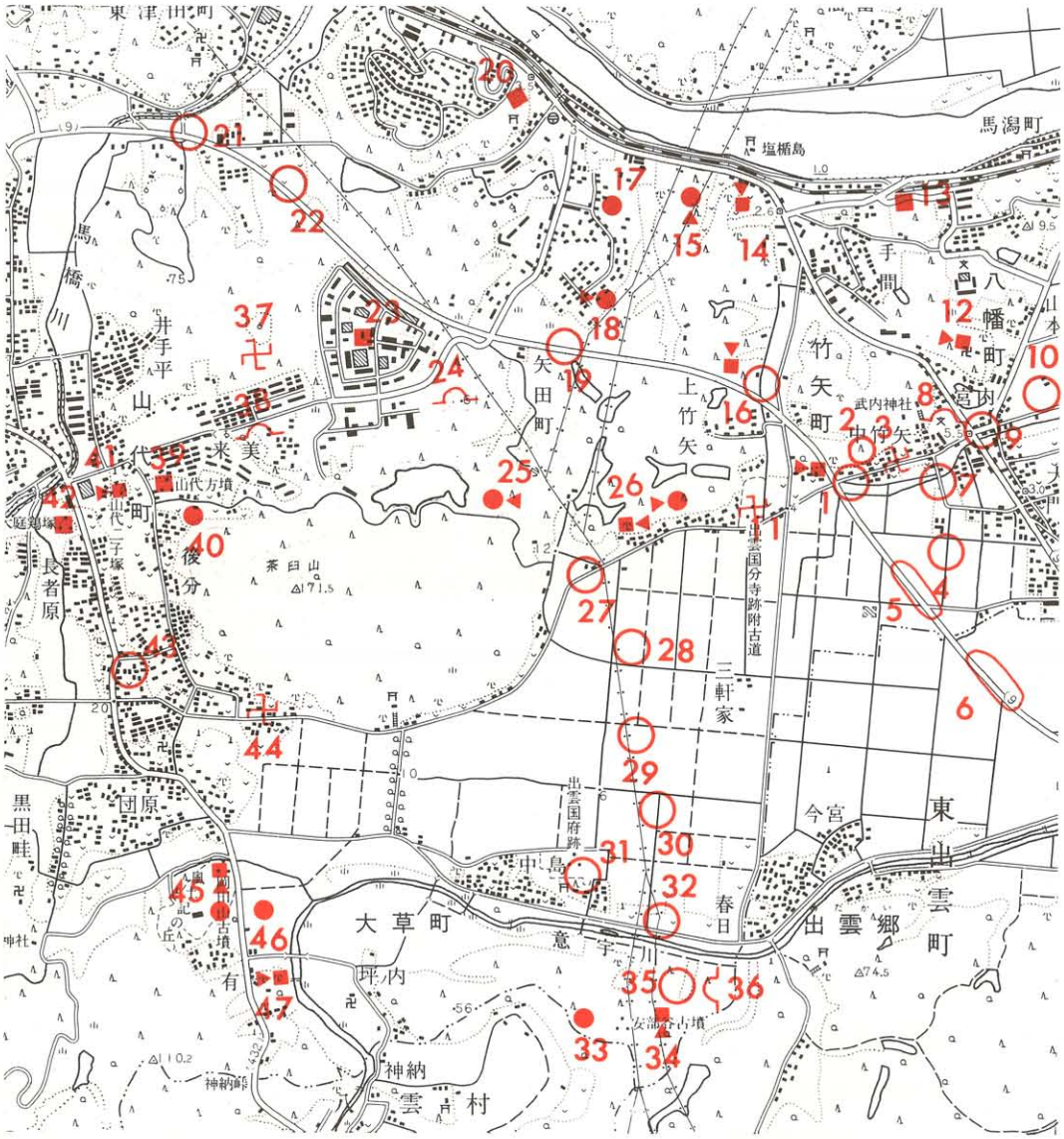
古墳時代の遺跡は，意宇平野北縁部の丘陵上や大橋川南岸に多く，中期の比較的大型の古墳が築造されている。その代表的なものとしては，前方後円墳では手間古墳，井ノ奥４号墳，方墳では大庭鶏塚，石屋古墳などがある。また，平野南縁の丘陵には，西百塚，東百塚，後谷古墳群などの群集墳も造られている。

後期の古墳では，御崎山古墳や「額田部臣」銘文入り大刀が発見された岡田山１号墳など横穴式石室をもつものや，石棺式石室を伴う山代方墳，古天神古墳，岩屋後古墳などがある。さらに，これらと同時期の十王免横穴群，狐谷横穴群，安部谷横穴群など，石棺式石室の形態をまねた大規模な横穴群が意宇平野周辺部の丘陵斜面に点在する。

奈良・平安時代の遺跡としては，出雲国分寺跡，出雲国分尼寺跡があり，これらの寺院で使用した瓦を焼いたと思われる瓦窯跡が中竹矢遺跡にある。また，出雲国庁跡も意宇平野南部中央付近にあり，この地が古代出雲の中心地であったことがわかる。

参考文献

『国道９号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』　島根県教育委員会　1976年
『　　同　　上　　Ⅴ』　島根県教育委員会　1983年
『一般国道松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』　島根県教育委員会　1990年



1．中竹矢遺跡・中竹矢１号墳　2．出雲国分寺瓦窯跡　3．出雲国分尼寺跡　4．宮内遺跡　5．布田遺跡
6．夫敷遺跡　7．平浜八幡宮前遺跡　8．代官家後横穴群　9．的場土壙墓　10．さっぺい遺跡
11．出雲国分寺跡　12．迎接寺古墳群　13．灘山古墳　14．竹矢岩舟古墳　15．手間古墳
16．才ノ峠遺跡・才ノ峠１号墳　17．井ノ奥古墳群　18．井ノ奥４号墳　19．平所遺跡　20．石屋古墳
21．石台遺跡　22．勝負遺跡　23．来美古墳　24．十王免横穴群　25．廻田古墳　26．上竹矢古墳群
27．間内遺跡　28．上小紋遺跡　29．四配田遺跡　30．神田遺跡　31．出雲国庁跡　32．大屋敷遺跡
33．百塚山古墳群　34．古天神古墳　35．天満谷遺跡　36．安部谷横穴群　37．来美廃寺
38．狐谷横穴群　39．山代方墳　40．山代円墳　41．山代二子塚　42．大庭鶏塚　43．山代郷正倉跡
44．四王寺跡　45．岡田山古墳群　46．岩屋後古墳　47．御崎山古墳

第１図　中竹矢遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ　調査に至る経緯

今回の中竹矢遺跡の調査は，昭和55年から56年にかけて行った暫定道路部分の調査区に隣接する４車線の本道工部分について実施した。

一般国道９号松江道路は，６車線が計画され，昭和57年に開催された島根国体の主要関連道路として供用するために，暫定２車線分の発掘調査を昭和55・56年の２ケ年にわたって，計７遺跡（春日遺跡，夫敷遺跡，布田遺跡，中竹矢遺跡，才ノ峠遺跡，勝負遺跡，石台遺跡）で行った。

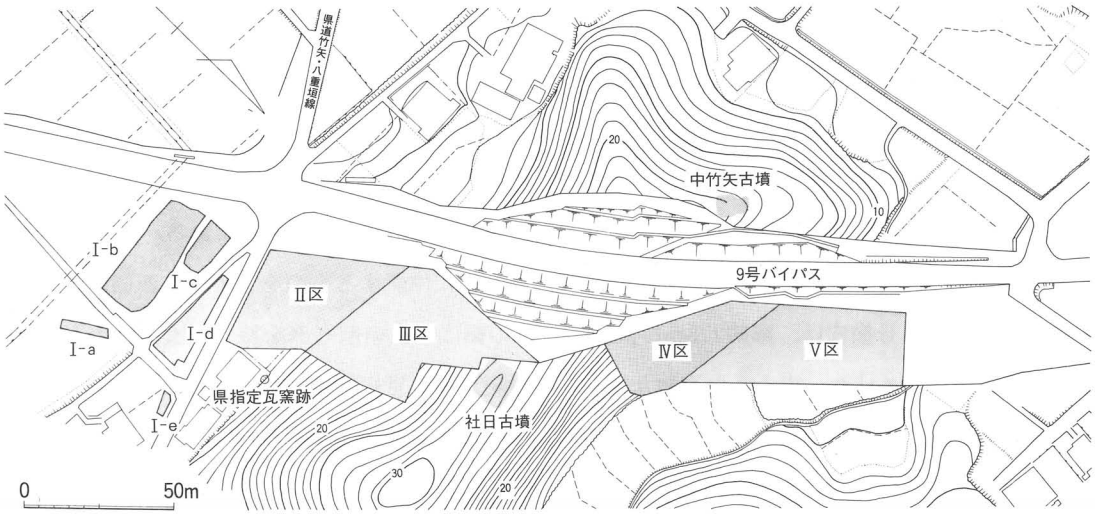
その後，昭和60年度に建設省から一般国道松江道路の残り４車線の本道工部分の調査依頼があり，協議の結果，昭和61年度に春日遺跡から発掘調査を再開した。

平成２年は，本道工部分の調査に入って５年目であり，一般国道９号松江道路ルート内の中竹矢遺跡の調査を行った。

Ⅲ　調査の経過

平成２年度の調査区は，前回調査区域の北側に位置し，東から第Ⅰ～Ⅴ調査区を設定した。

第Ⅰ調査区は，ａ～ｅの５区に分けた。５月８日から盛土除去を行い，９月26日から表土掘削を開始した。その後，ｄ区から遺構精査を行い，土壙などを検出した。11月27日にバルーンによる空中写真撮影を行い調査を終了した。



第２図　中竹矢遺跡調査区位置図

第Ⅱ調査区は，７月31日から表土掘削を開始し，８月６日から遺構の精査を行った。調側に黒色土の遺物包含層があり，瓦，須恵器が数多く出土した。黒色土の除去後，地山面において柱穴を検出した。11月27日に空中写真を撮影し，調査を終了した。

第Ⅲ調査区は，５月７日から地形測量を行い，５月14日に表土掘削を開始した。６月18日に横穴を確認し，前庭部から検出を行った。３・４号穴の二つの横穴が検出されたが，８月27日に，この二つを結ぶ形で５号穴が穿たれていることを確認した。９月25日に調査区の南東隅において土壙のプランが確認されたが，壁の一部が焼けていたことや土壙内から瓦が出土したことなどから瓦窯跡とわかった。11月27日に空中写真を撮影し，瓦窯跡を12月18日に現状のまま埋め戻して，調査を終了した。

第Ⅳ調査区は，８月３日から表土掘削を行った。11月27日から遺構の精査を行い柱穴などを検出した。実測の後，12月21日に調査を終了した。

第Ⅴ調査区は，５月21日より表土を除去し，７月５日に西壁に沿ってトレンチを入れた後，７月６日に実測を行い，調査を終了した。

Ⅳ　遺　跡　の　概　要

今回の調査の結果，第Ⅰ調査区で弥生時代～古墳時代前期の遺物と土壙群を検出した。第Ⅱ調査区では約200ピットを検出し，調査区のほぼ中央部で平安時代の掘立柱建物跡を確認した。また，中央南側の溝に囲まれた部分では近世初頭の柱穴を検出した。第Ⅲ調査区では，古墳時代後期の横穴，平安時代の建物跡を検出している。

第Ⅲ調査区で検出した瓦窯跡は，標高12mの丘陵斜面に位置している。構造は平窯で，焚口と焼成室が見つかったが，焼成室の天井部は残っていなかった。出雲国分寺，国分尼寺で使われた瓦を焼いていたと思われる。瓦窯の時期は，出土した須恵器と軒平瓦の文様から平安時代と思われる。この瓦窯と併行する時期の遺構としては，第Ⅱ調査区で検出した掘立柱建物跡がある。

第Ⅲ調査区の丘陵斜面南側で検出した二つの横穴は，東に位置するものを３号穴，西側のものを４号穴とした。３号横穴は，幅約2.5m，長さ約10mの幅広で長い前庭部を持つ。玄室は家形を呈し，屍床が作られていた。出土した遺物などから７世紀末～８世紀初頭のものと思われる。４号横穴は，幅約２m，長さ約７mの細長い墓道を持ち，玄門部には閉塞石が置かれていた。出土遺物から６世紀後半のものと思われる。５号穴は，３・４号穴をトンネル状につないだもので，後世に穿たれ，祈禱などの祭祀が行われていたと考えられる。３・４号穴はいずれも近世初頭に再利用され

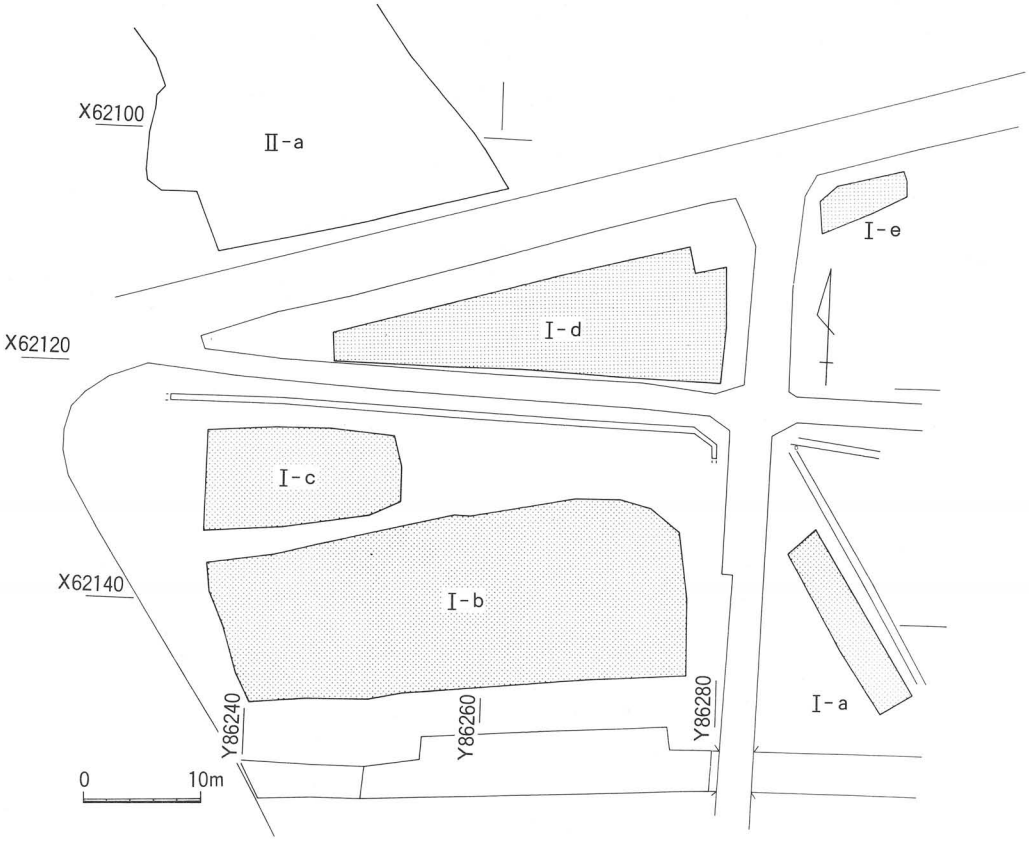
ており，５号穴が穿たれたのもこの時期と思われる。

第Ⅳ調査区で検出された建物跡は，第Ⅱ調査区の掘立柱建物跡よりも後の時代のもので，出土した遺物から平安時代後期のものと思われる。柱穴も小さなものであった。

第Ⅰ調査区

第Ⅰ調査区は，県道竹矢－八重垣線の南側に立地している。調査の便宜上５つに分け，南側からⅠ－ａ，ｂ，ｃ，ｄ，ｅ区と呼称することにした。ａ，ｂ，ｃ区は水田部で基盤層の標高はａ，ｂ，ｃ区が約1.6mである。ｄ，ｅ区は丘陵部から水田部へと移行する部分であり，ｄ区では調査区の南北で約1.5ｍの高低差がある。

土層は，ａ，ｂ，ｃ区では，盛土の下層に灰褐色土（耕作土），灰褐色粘土質，褐色粘土質，暗褐色粘土質，黒色土が約20cmほどずつ堆積しており，その下に白色粘土層がある。この白色粘土層の上面から遺構が掘り込まれており，これが基盤層であると考えられる。ｄ区は，上層から盛土，灰褐色土（耕作土），灰茶褐色土（約50cm），暗褐色土，黒色土となっている。灰茶褐色土層から瓦，須恵器が多く出土したが，遺構は検出できなかった。ｅ区は，明褐色土（耕作土），黒褐色土，暗



第３図　第Ⅰ調査区配置図

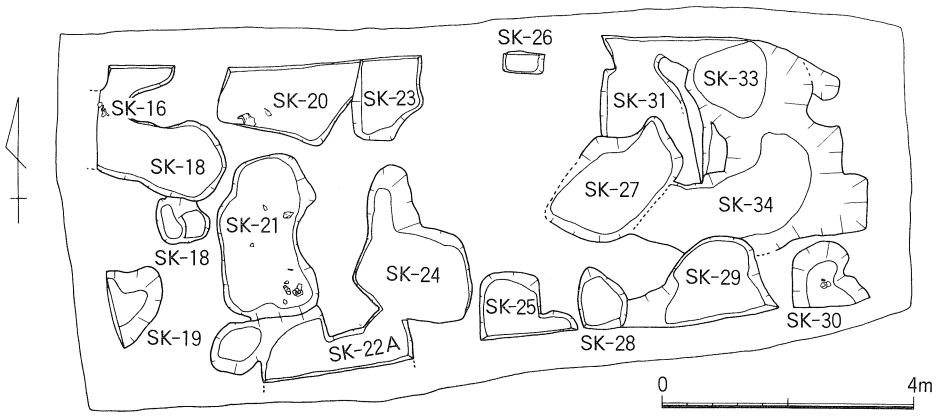
褐色土，黒色土の順に堆積していた。耕作土の下層から須恵器など奈良～平安時代にかけての遺物が出土し，地山からピット３が検出されたが，調査区の東西で80cm，南北で30cmの傾斜があり，建物跡とは考えにくい。

遺　構

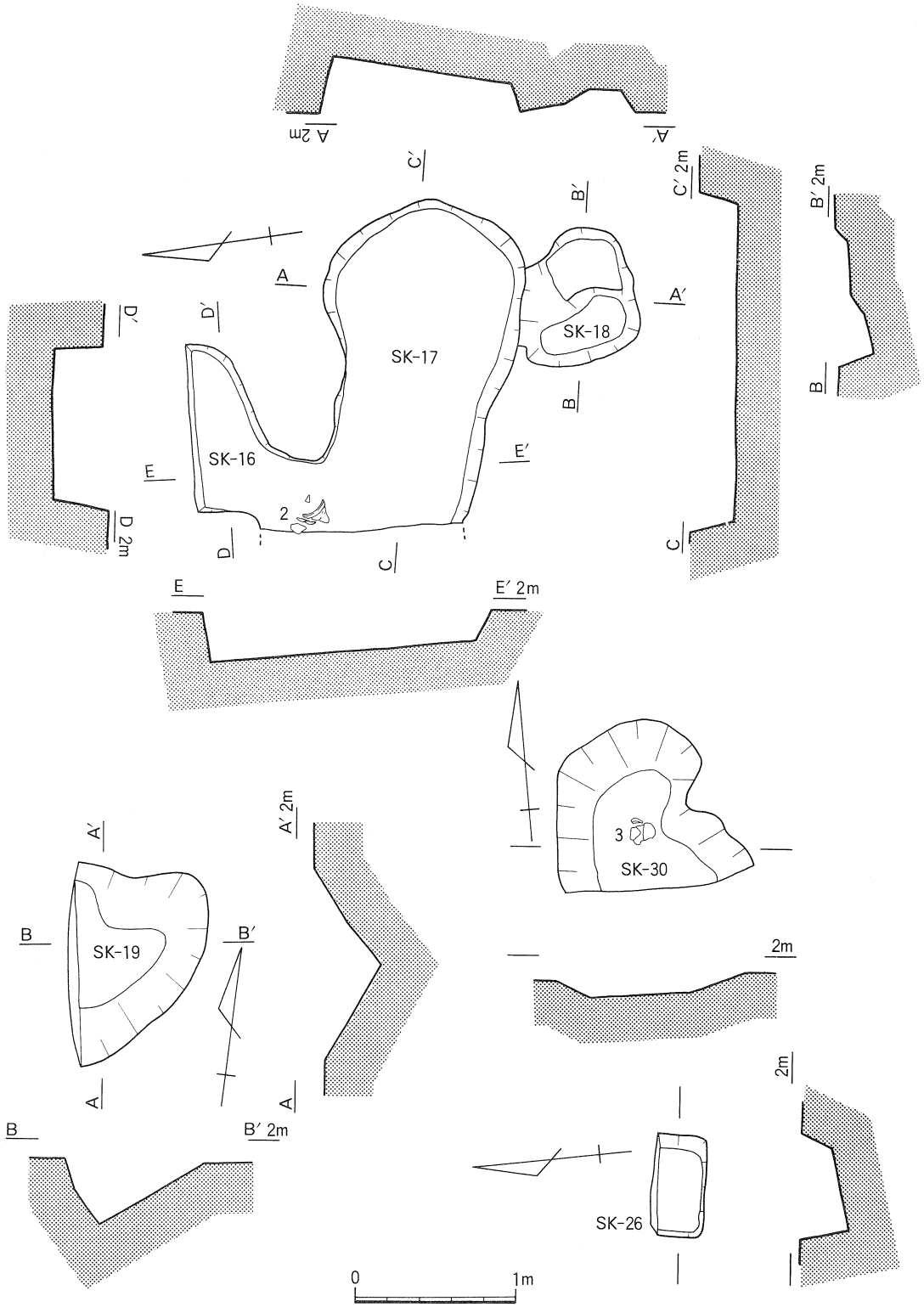
遺構は，ａ～ｃ区から土壙75が検出された。これらの土壙はいずれも白色粘土の基盤層に掘り込まれ，ａ区から２，ｂ区から53，ｃ区から20が検出された。ｄ・ｅ区からは土壙は検出されなかった。土壙は，平面形が長方形，方形，円形，楕円形，三角形などを呈している。楕円形，長方形がやや多いが，不整形のものがほとんどであり，平面形の規格性は認められない。その規模は最大で524×436cm，最小で64×36cmであるが，長軸の長さが100～200cm，短軸が50～150cmのものが中心となっており，60％以上を占めている。深さも最大70cm，最小13cmとばらつきがあるが，20～40cmのものが58％を占めている。このように土壙の規模はある程度の規格性は認められるが，必ずしも明確なものではない。また，底面は平坦なものが少なく，凹凸が著しいものや，テラス状になっているものが多い。壁面も垂直に掘り込まれたものや，緩い角度をもつものなど様々な形態を呈している。

以上のように，第Ⅰ調査区で検出された土壙には，形態，法量などの点でほとんど規格性が認められない。また，土壙の位置関係についても規則性は認められず，遺構の性格は不明である。ただ，これらの遺構に伴う土器は，弥生時代前・中期から古墳時代前期のものまでがあり，Ⅰ区の土壙が比較的長期間にわたって，作られていたと考えられる。

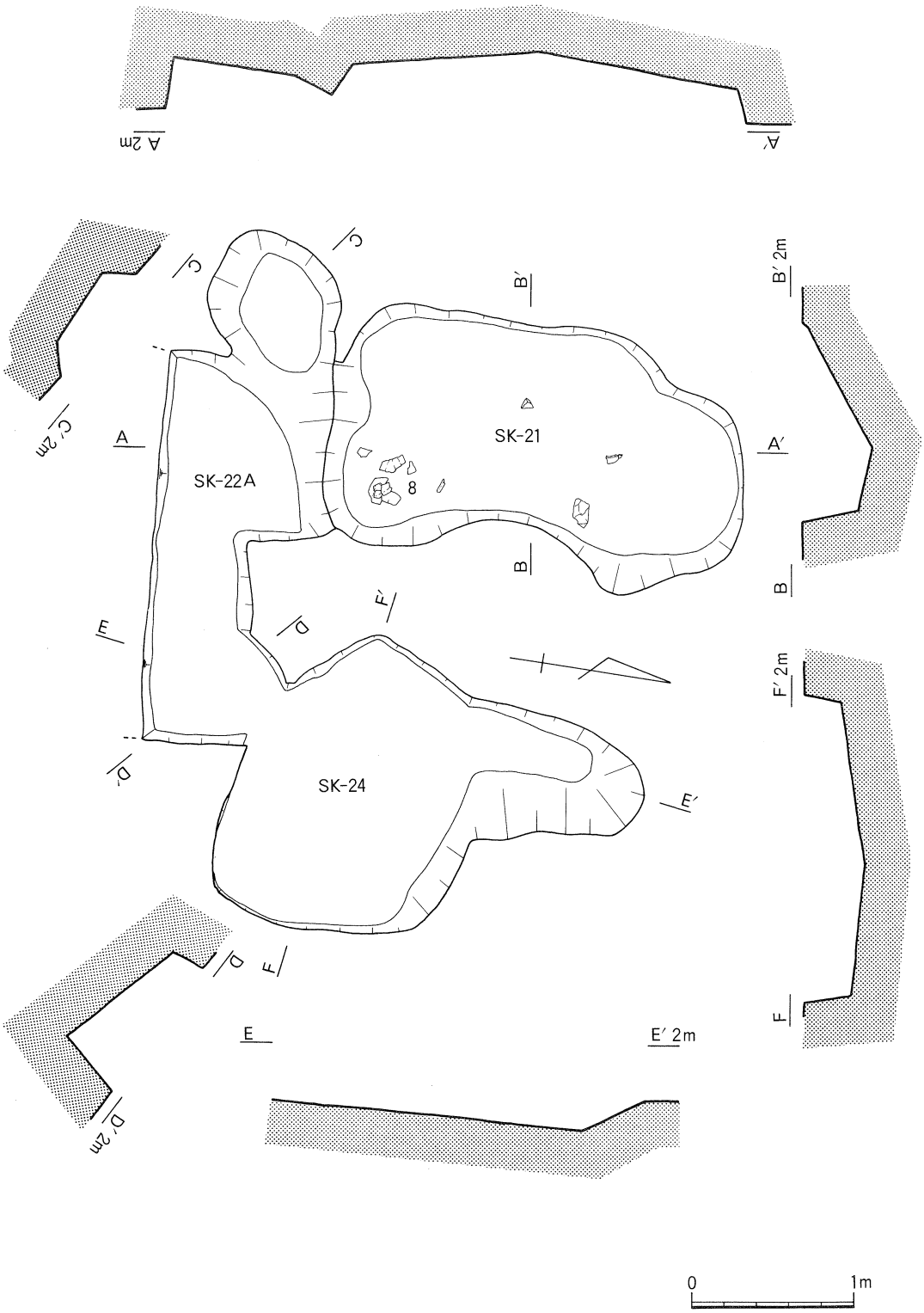
ｄ区からは，遺構は検出できなかったが，1,800点あまりの大量の瓦が出土した。これらの瓦は破損したものがほとんどであり，焼成の不良なものや溶着したものもかなり含まれていた。このことから，ｄ区北側の丘陵斜面に位置する出雲国分寺瓦窯跡から流出した不良品や国分尼寺で使用した瓦などを廃棄した場所と考えられる。



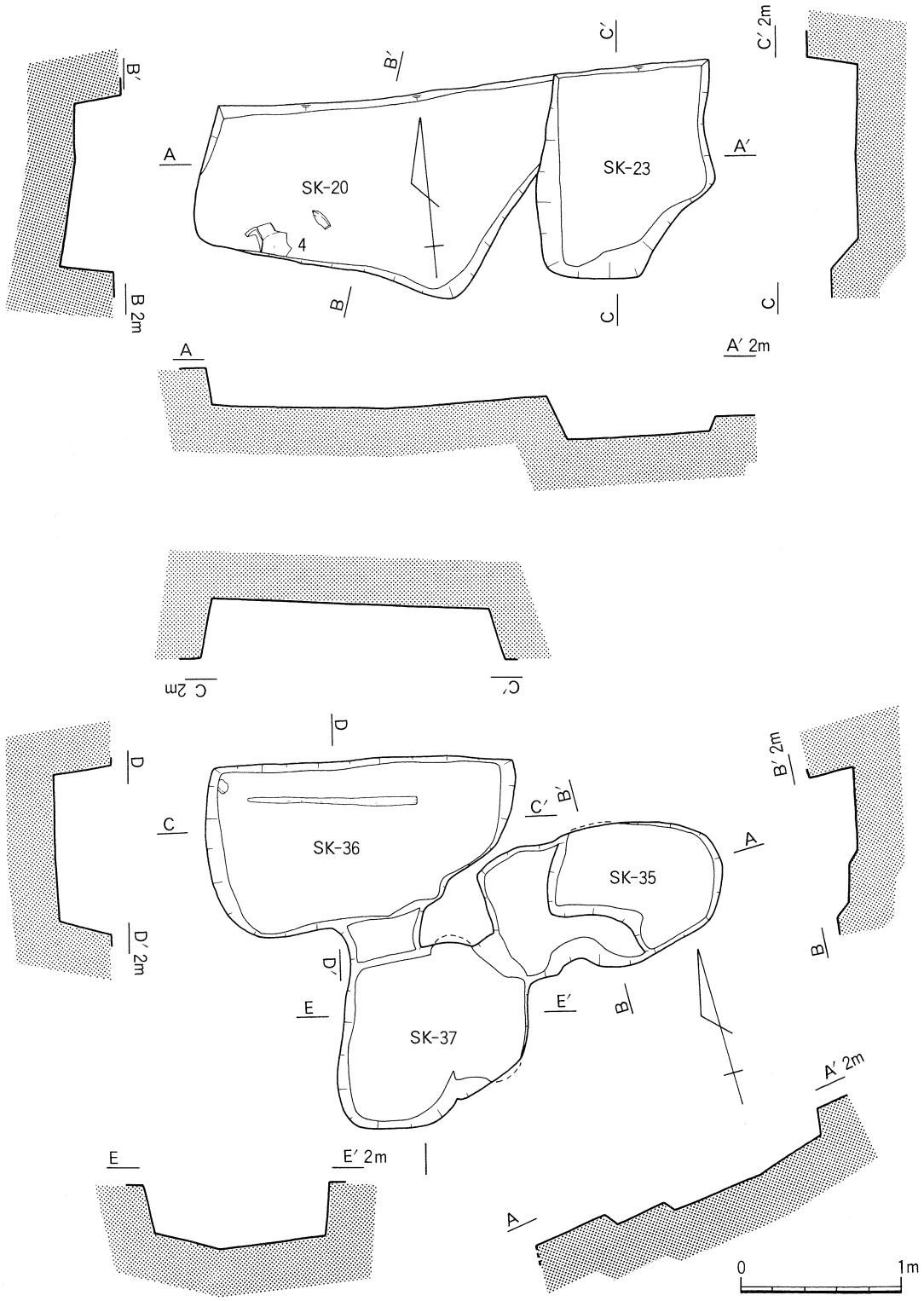
第４図　Ⅰ-c区遺構実測図



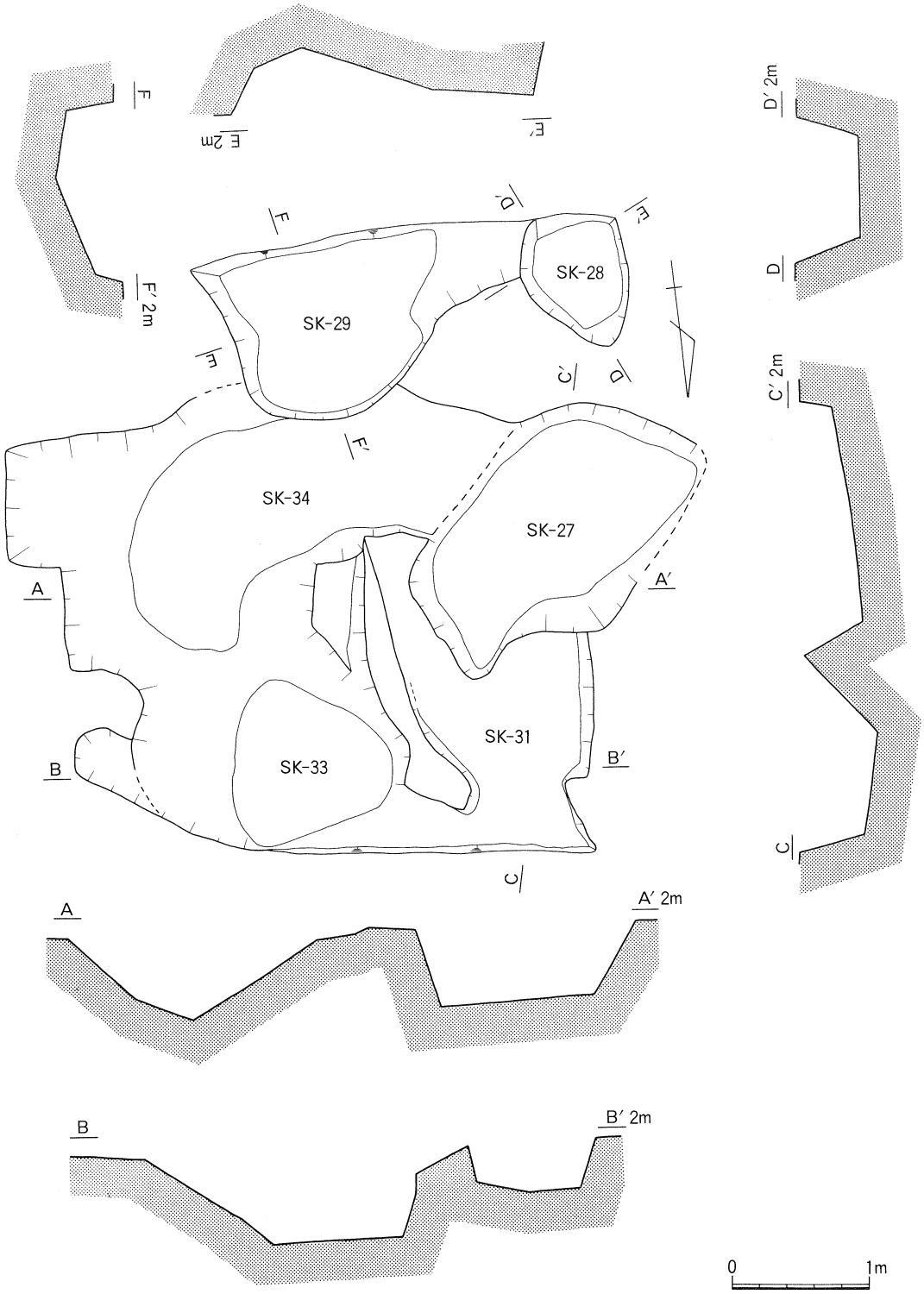
第５図　Ⅰ-c区土壙実測図(1)



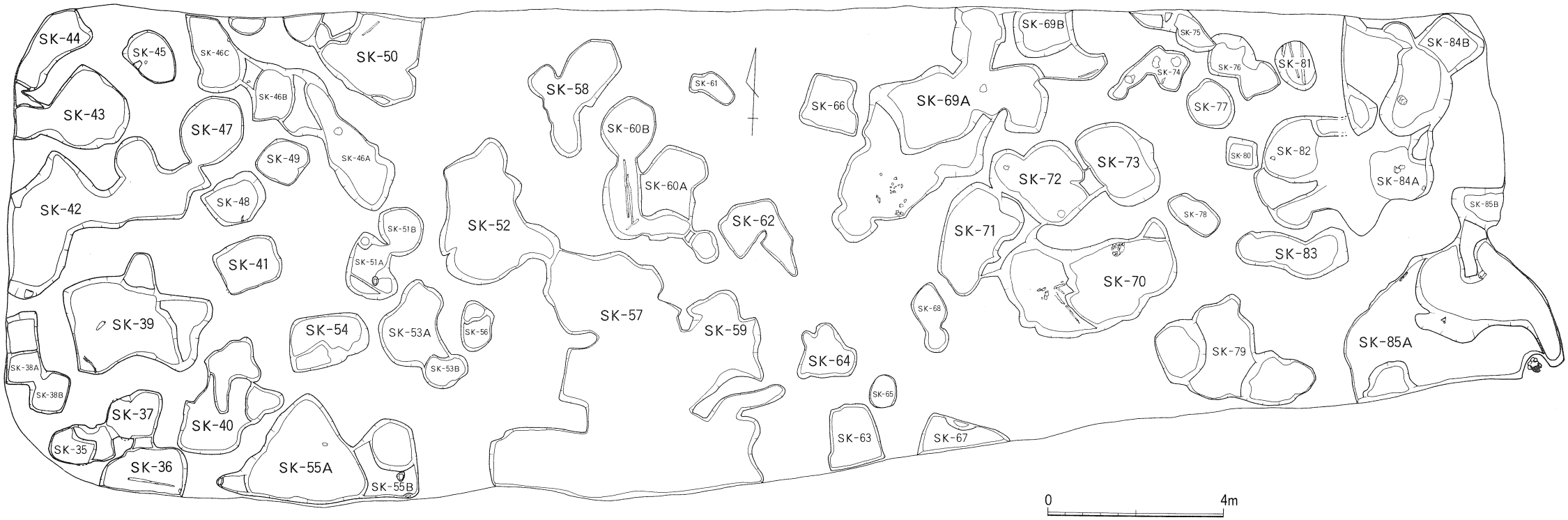
第6図　Ⅰ-c区土壙実測図(2)



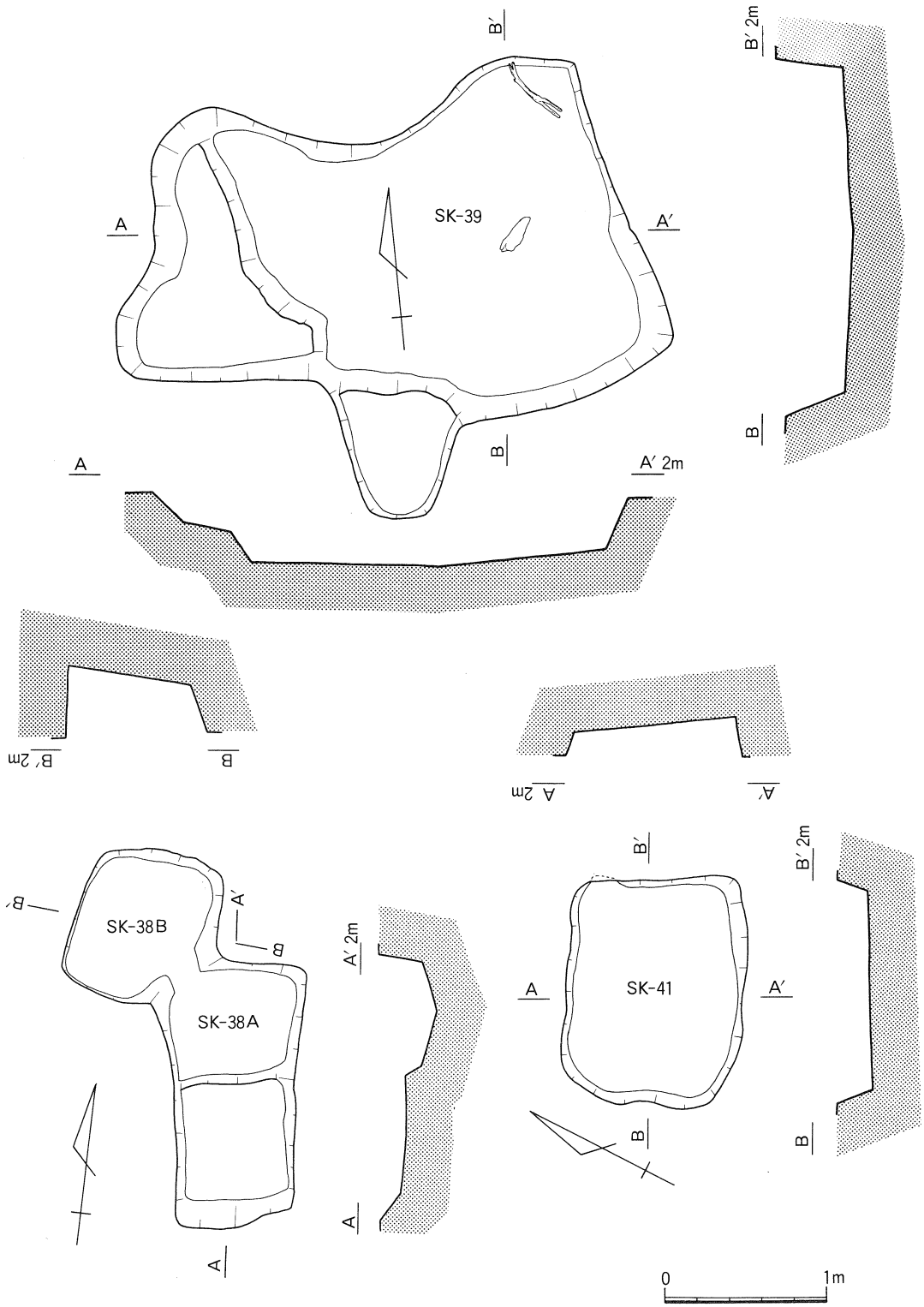
第７図　Ⅰ-c区土壙実測図(3)



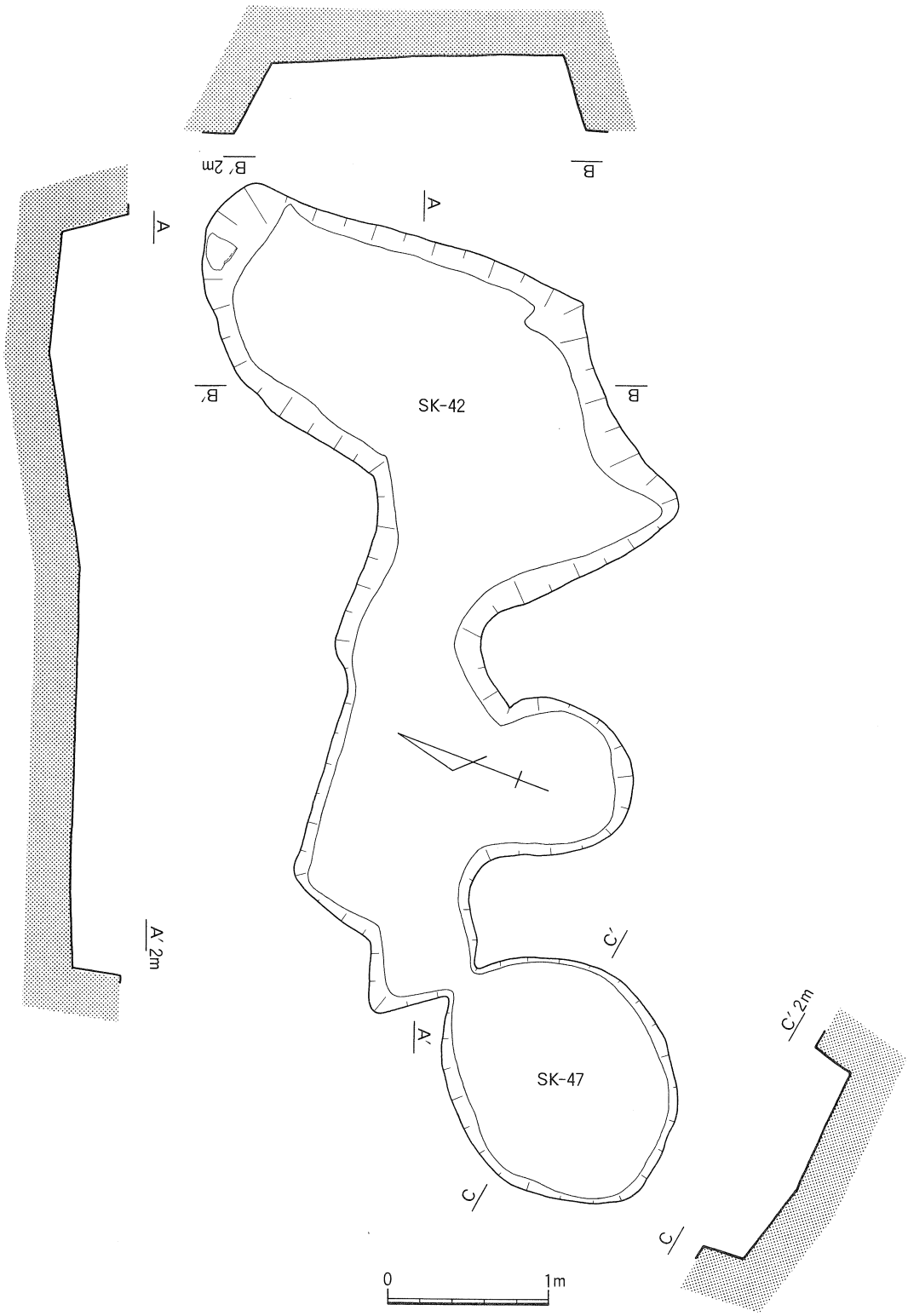
第8図　Ⅰ-c区土壙実測図(4)



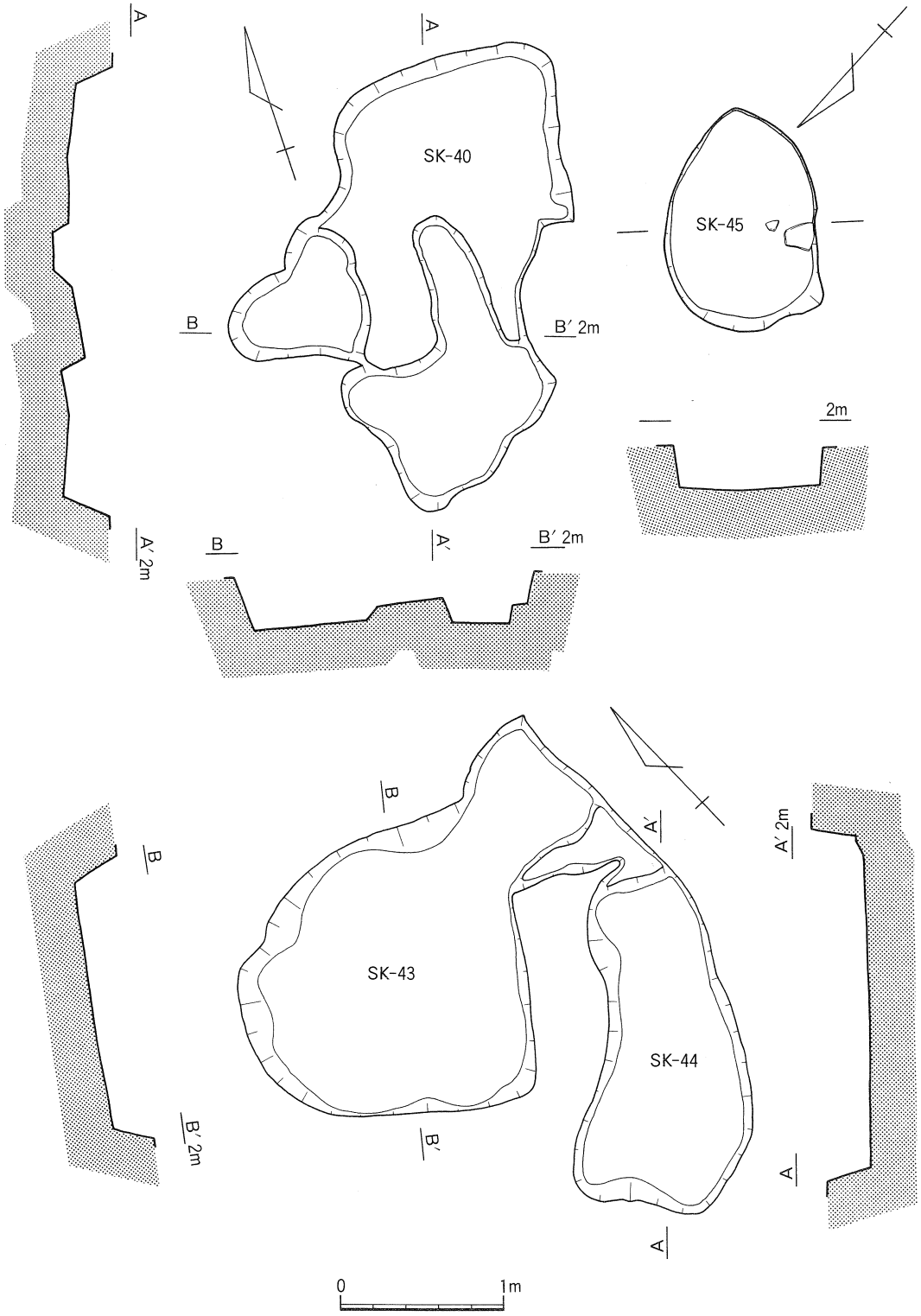
第9図　Ⅰ－b区遺構位置図



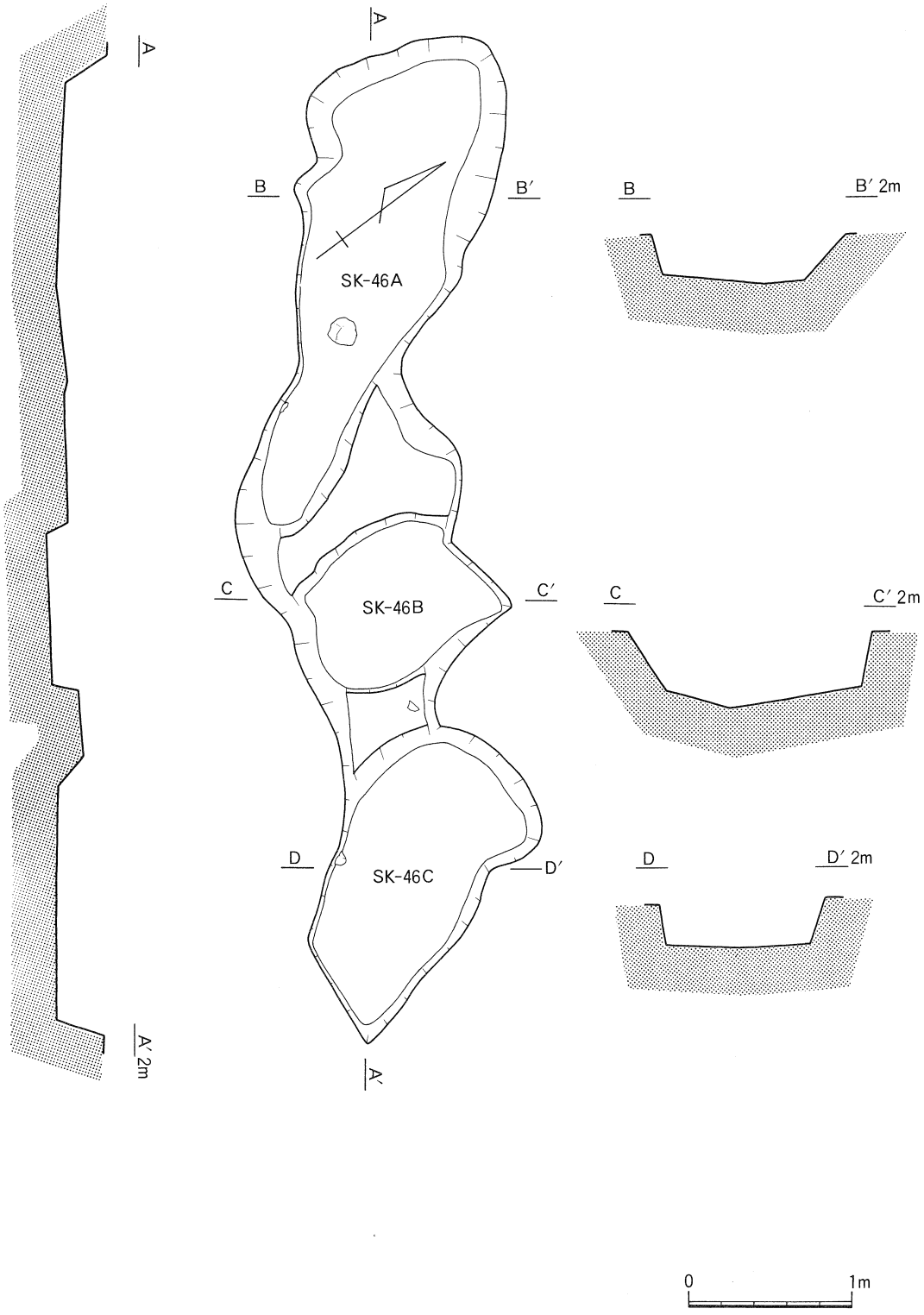
第10図　Ⅰ-b区土壙実測図



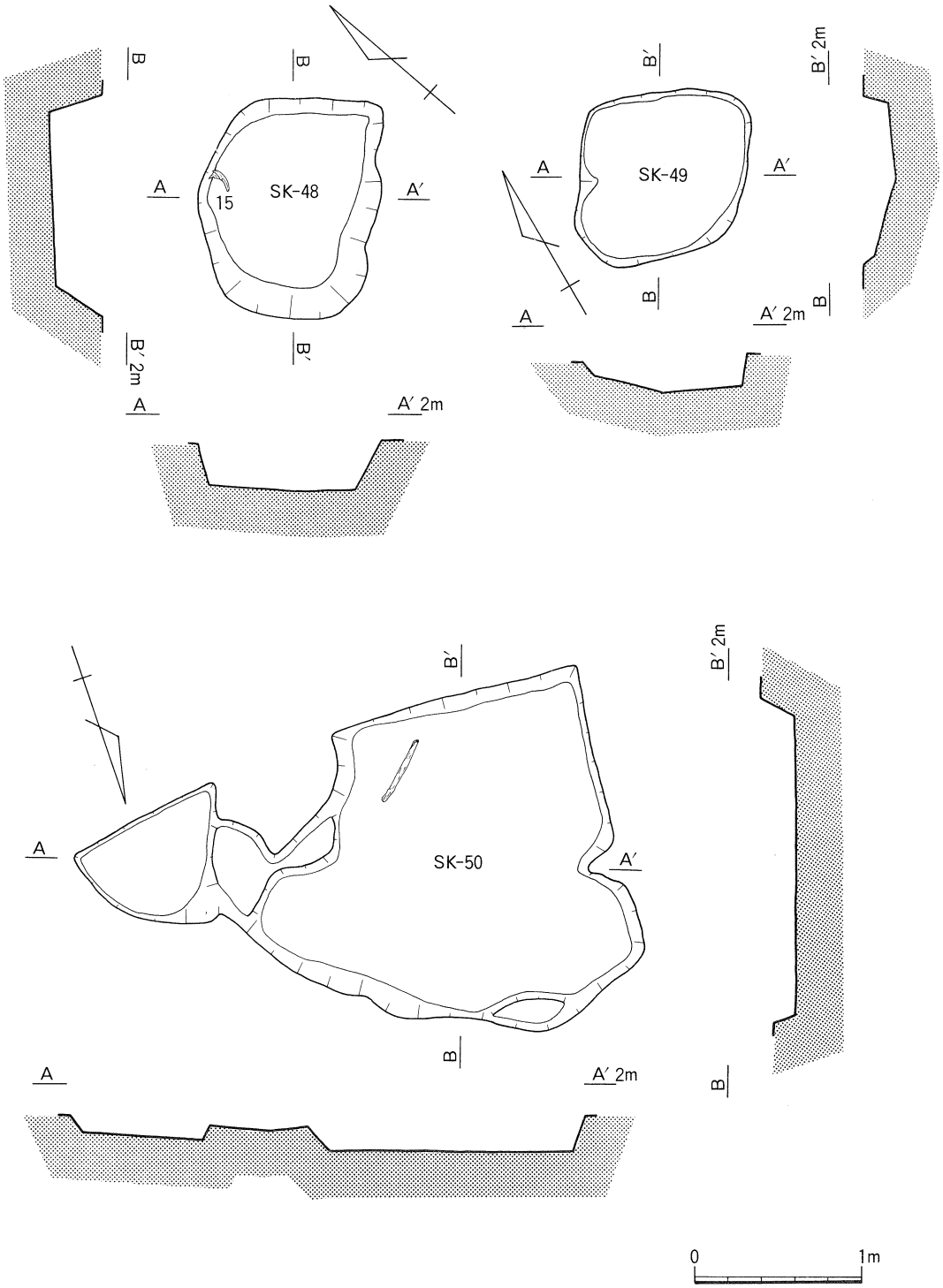
第11図　Ⅰ-b区土壙実測図



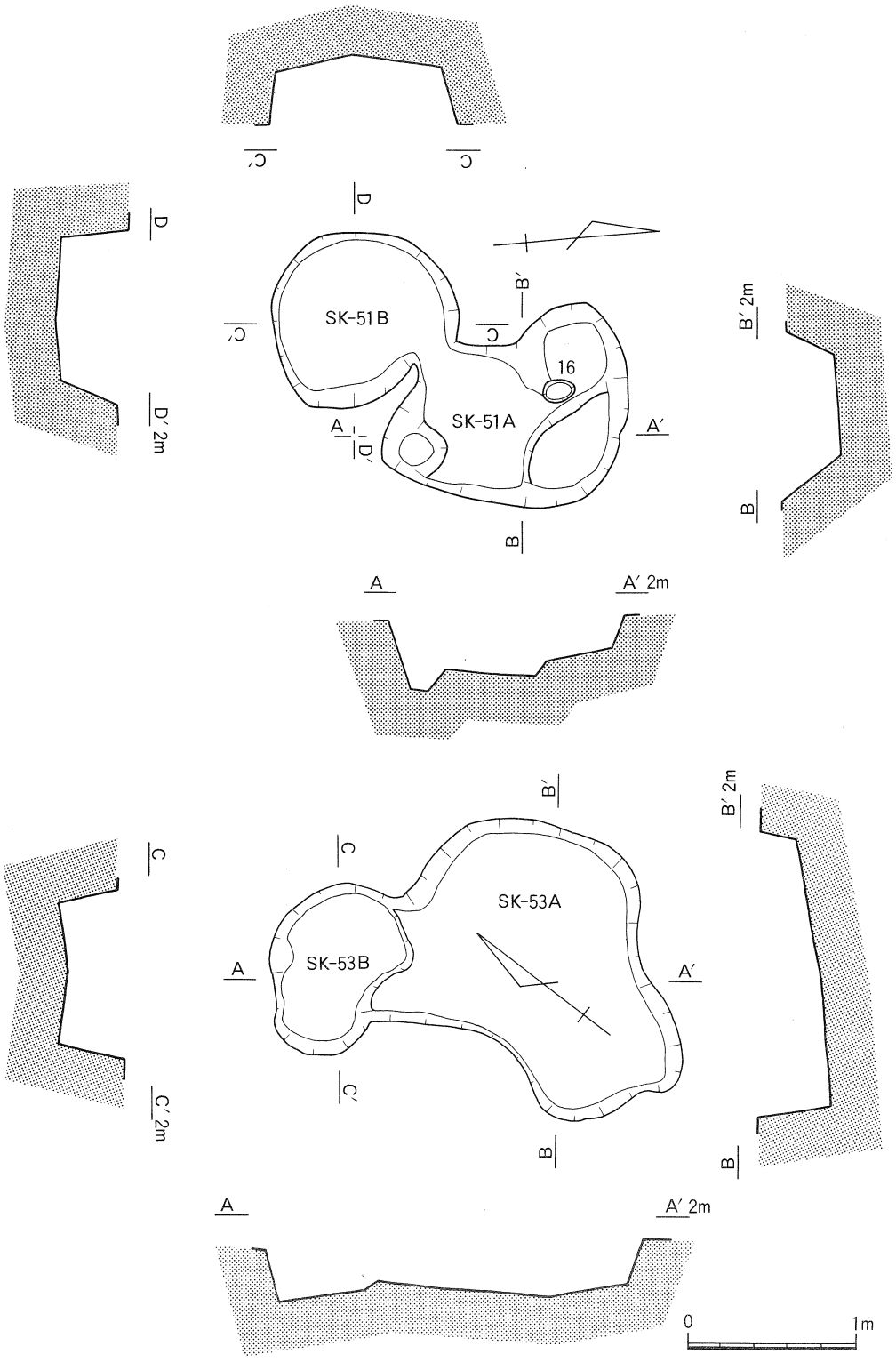
第12図　Ⅰ-b区土壙実測図



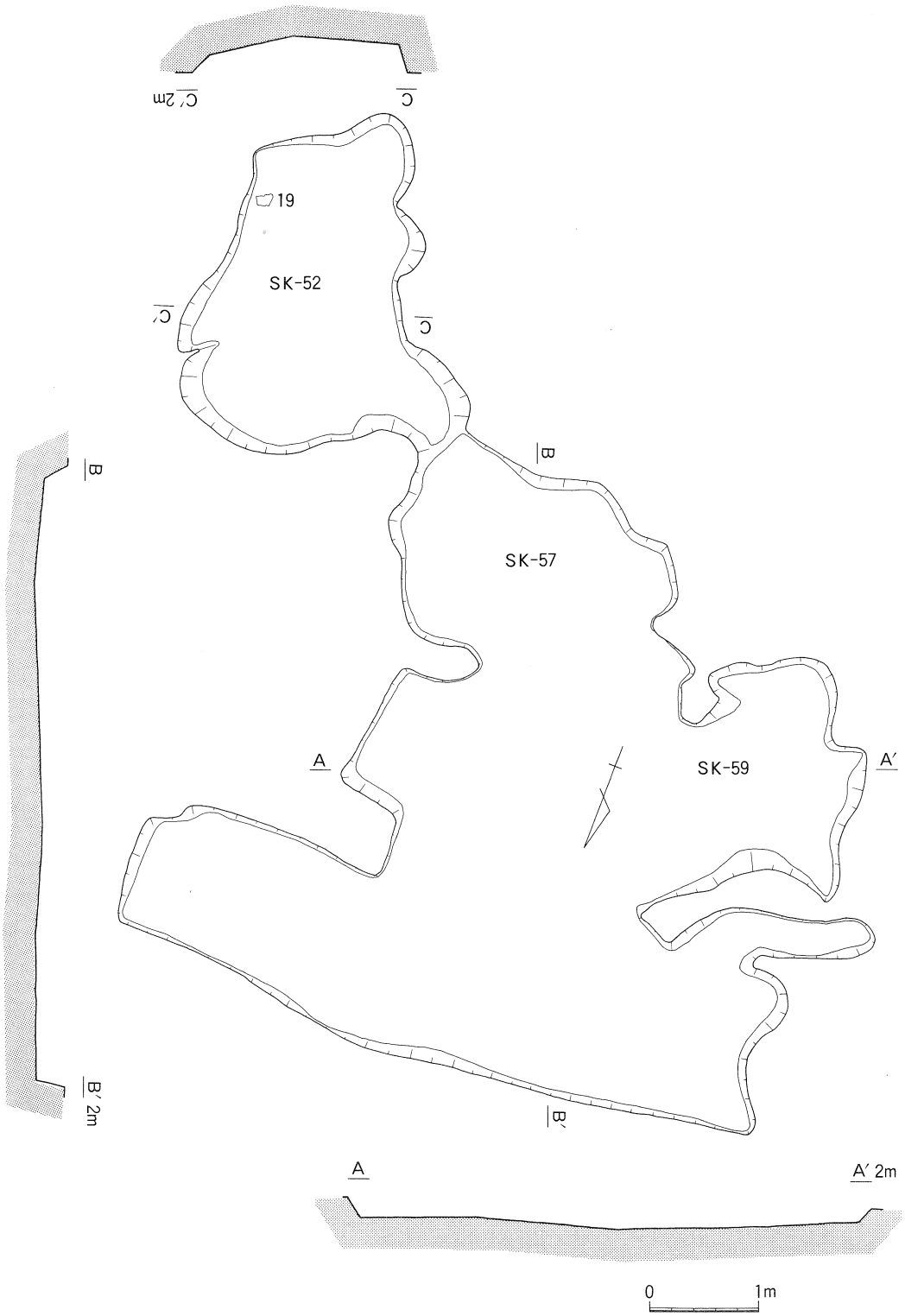
第13図　Ⅰ-b区土壙実測図



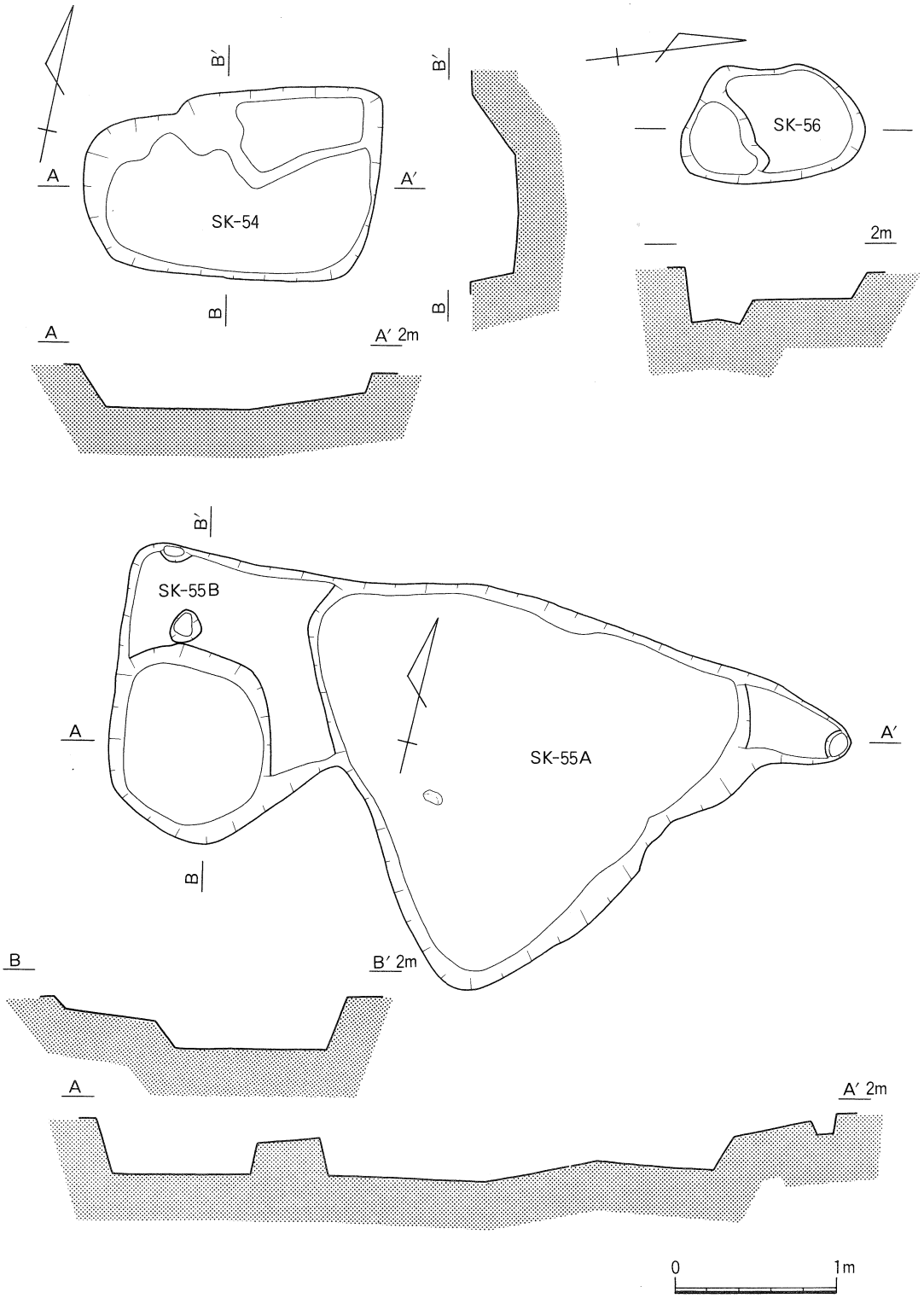
第14図　Ⅰ-b区土壙実測図



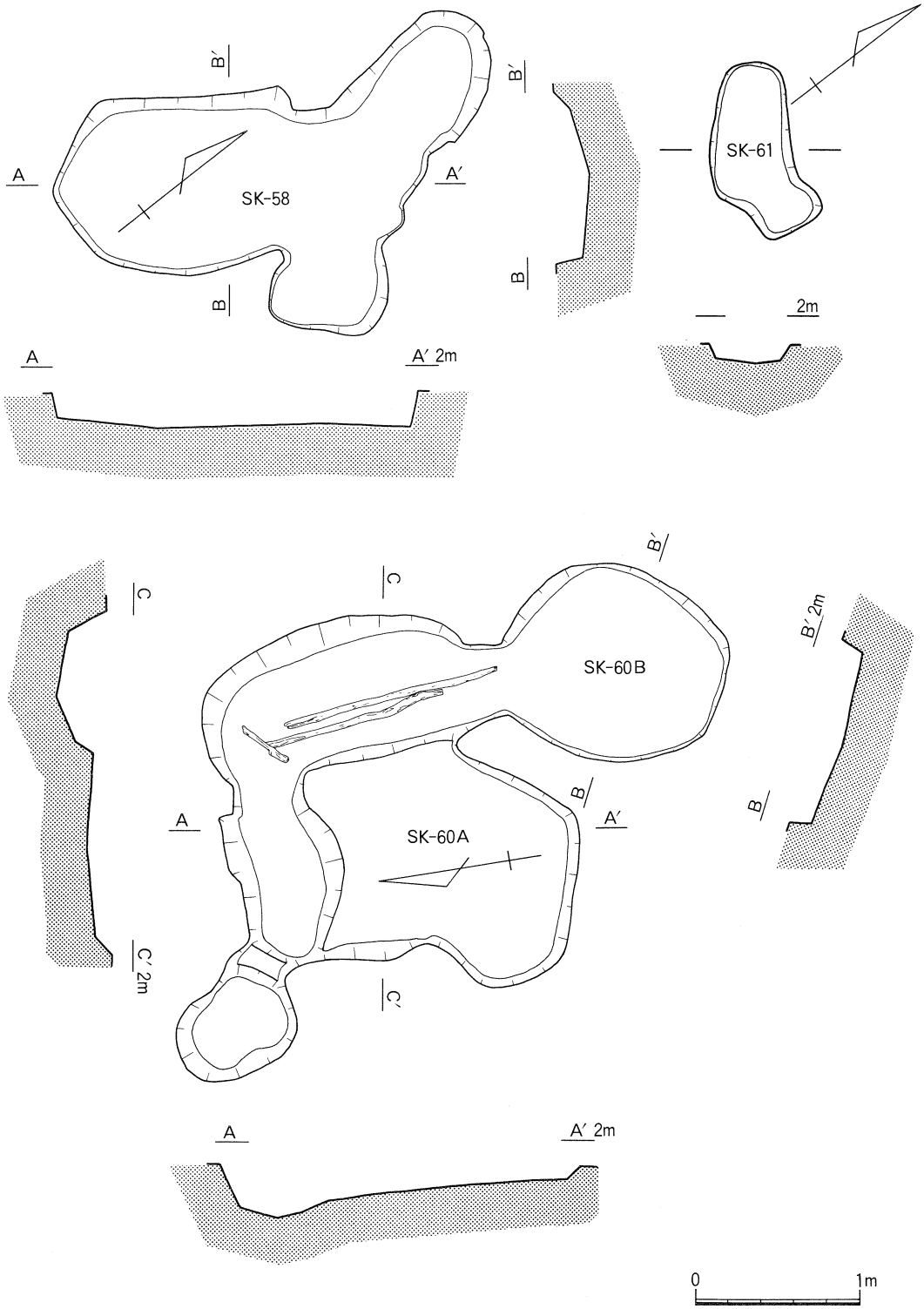
第15図　Ⅰ-b区土壙実測図



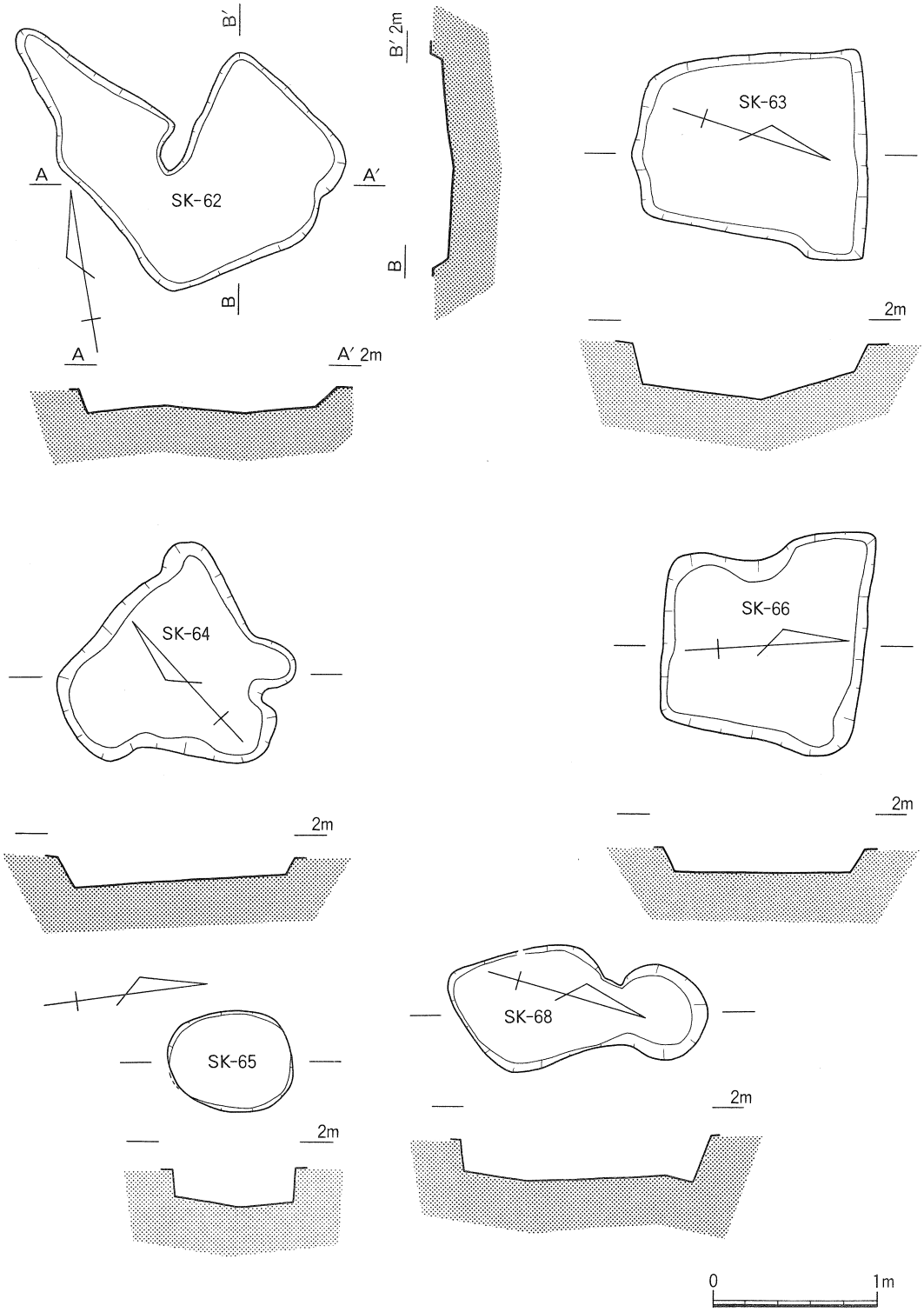
第16図　Ⅰ-b区土壙実測図



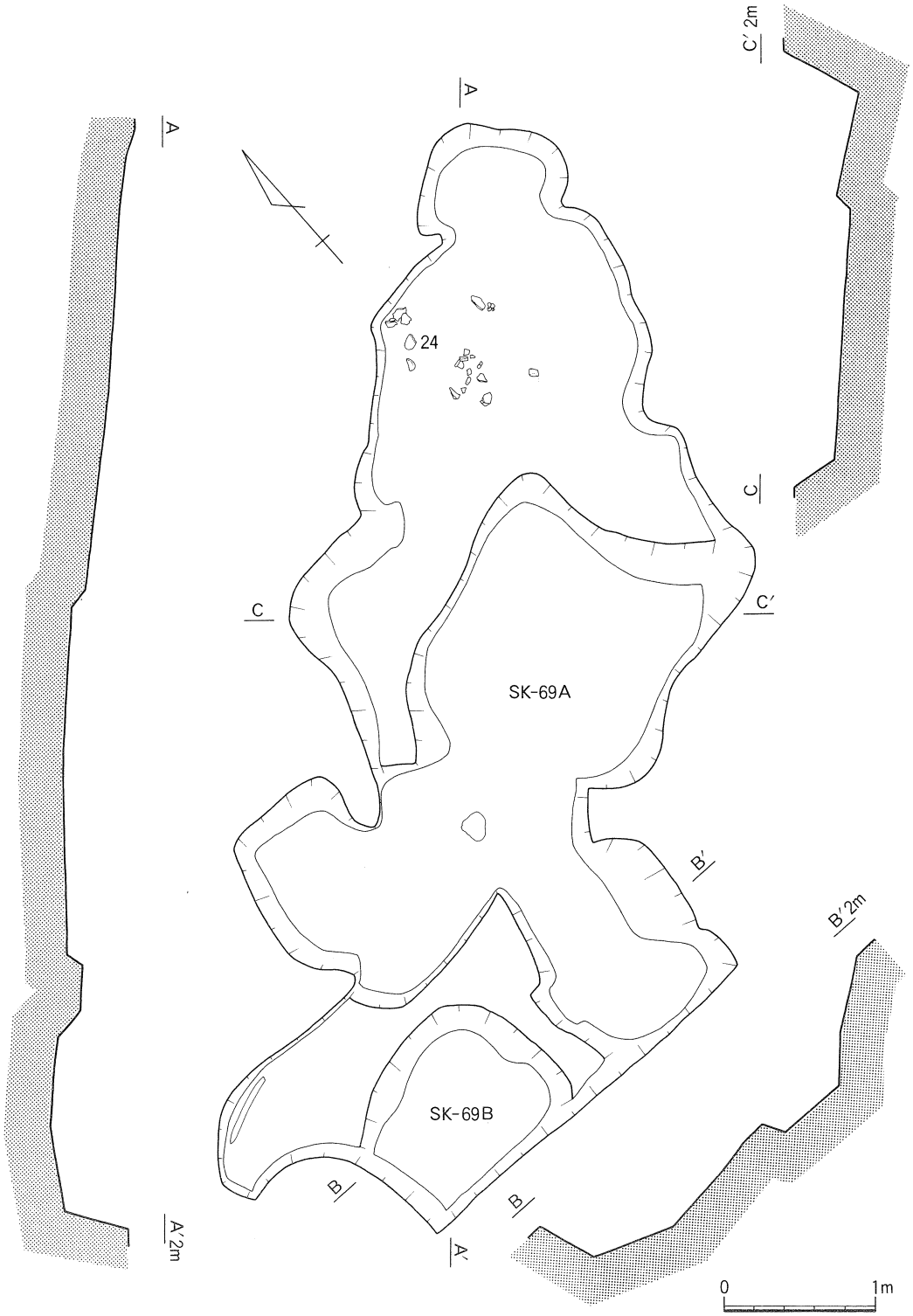
第17図　Ⅰ-b区土壙実測図



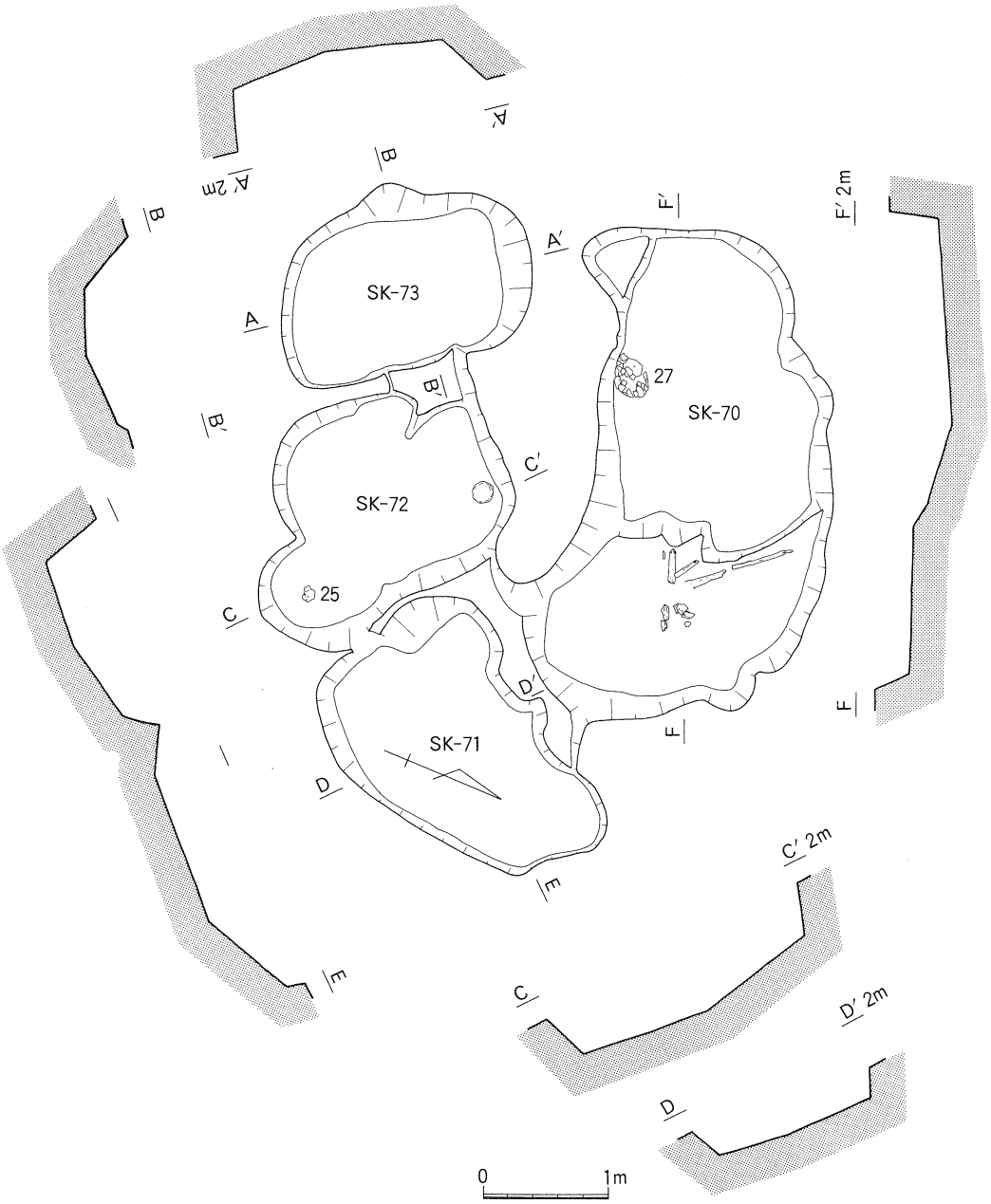
第18図　Ⅰ-b区土壙実測図



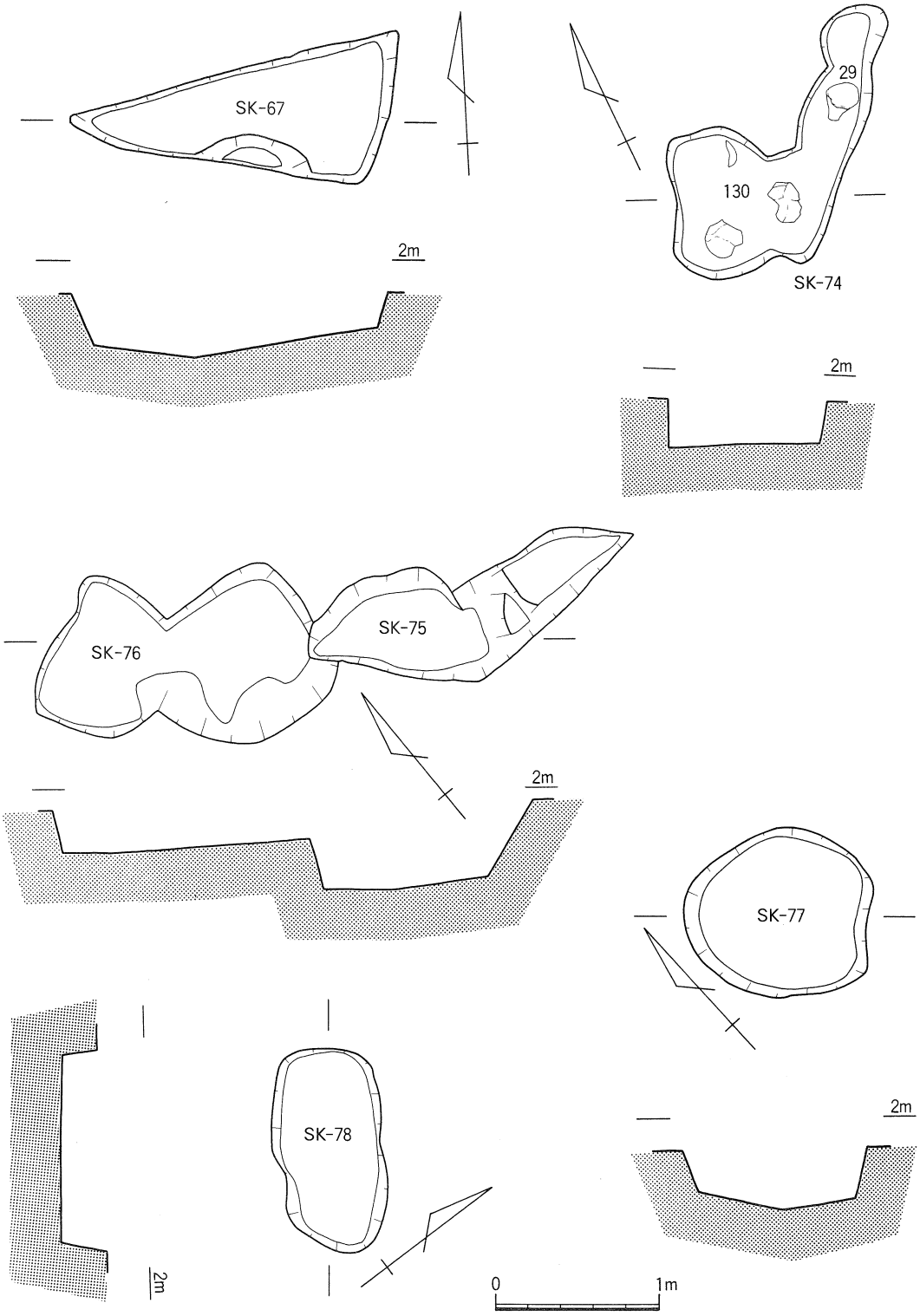
第19図　Ⅰ-b区土壙実測図



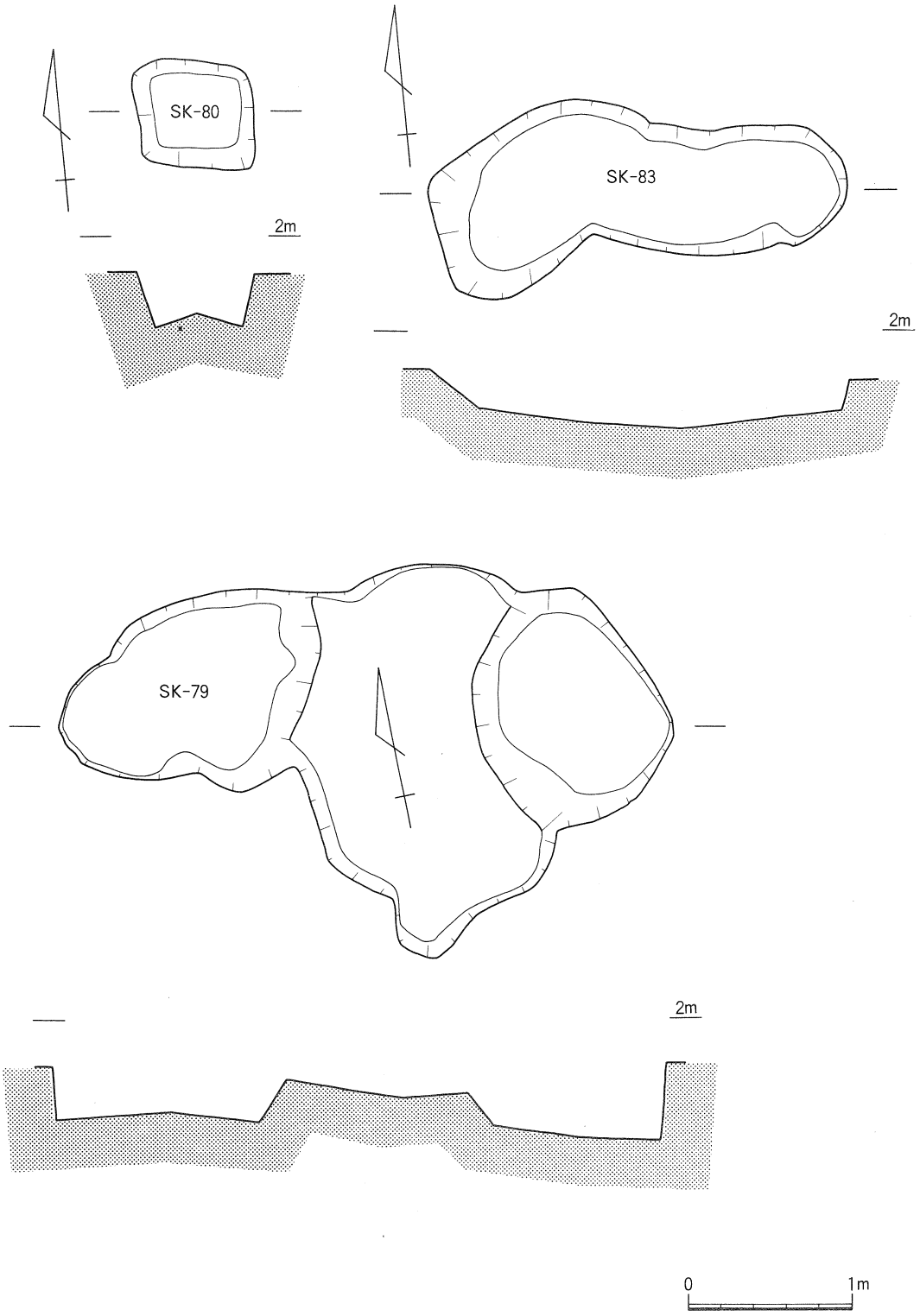
第20図　Ⅰ-b区土壙実測図



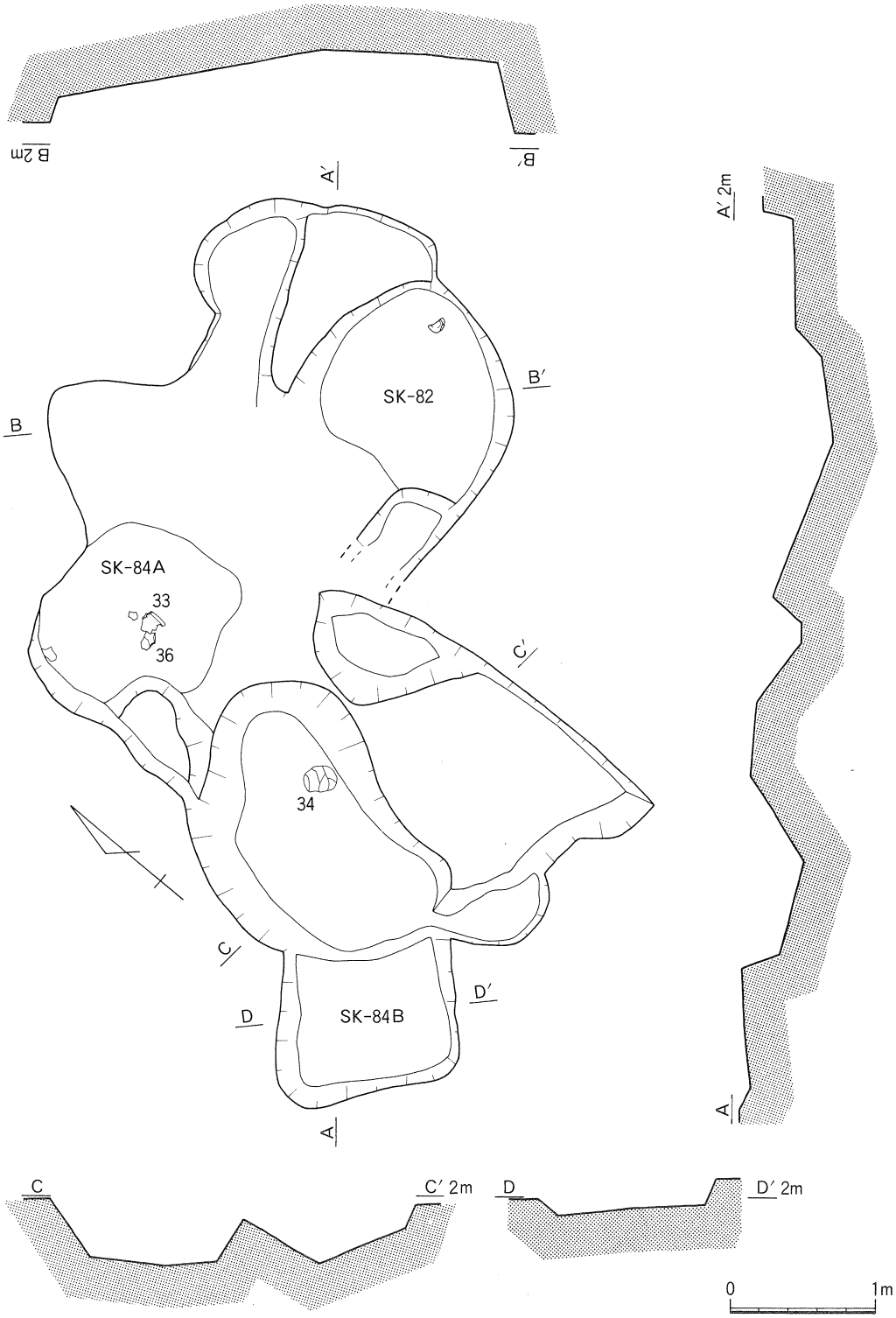
第21図　Ⅰ-b区土壙実測図



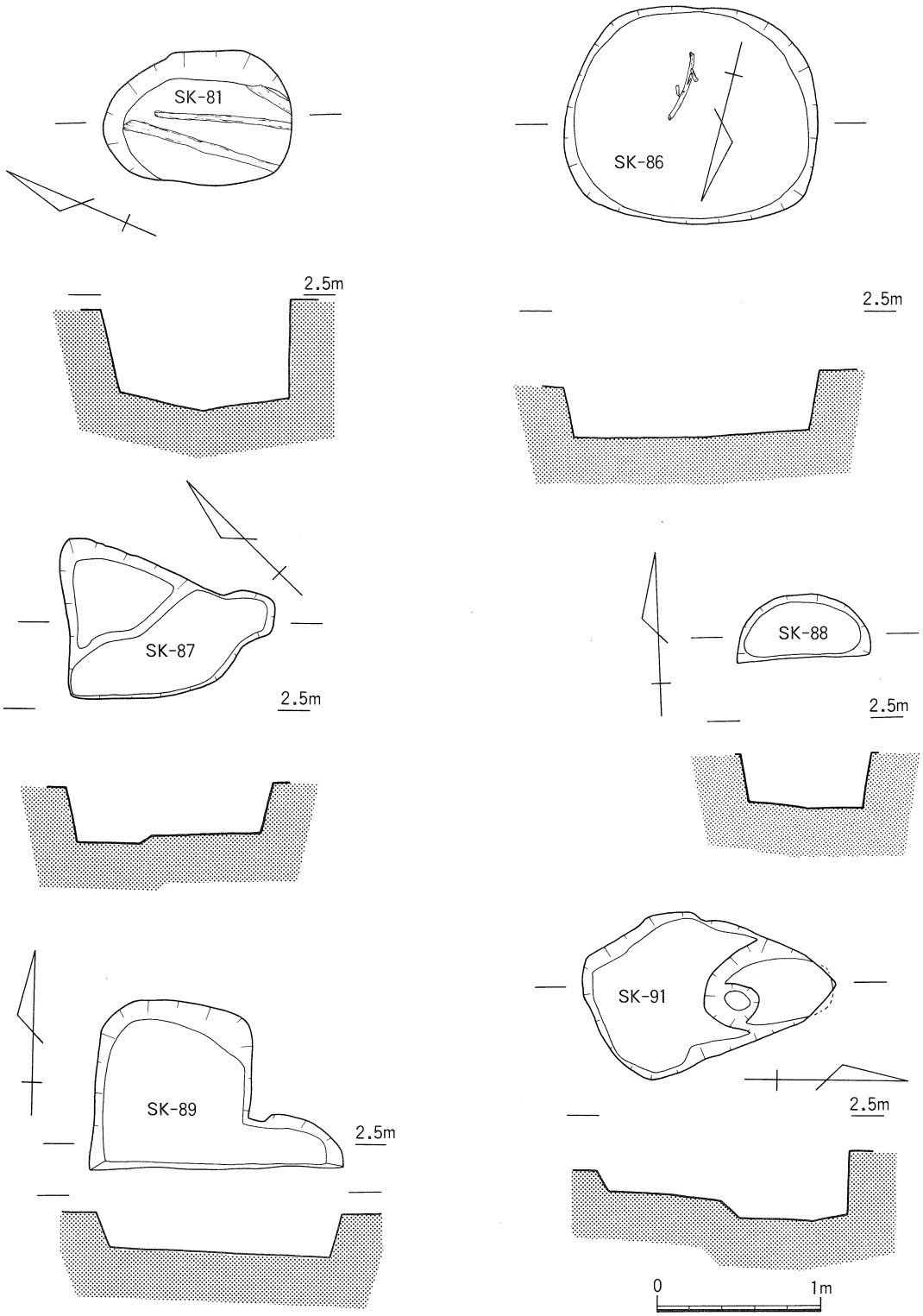
第22図　Ⅰ-b区土壙実測図



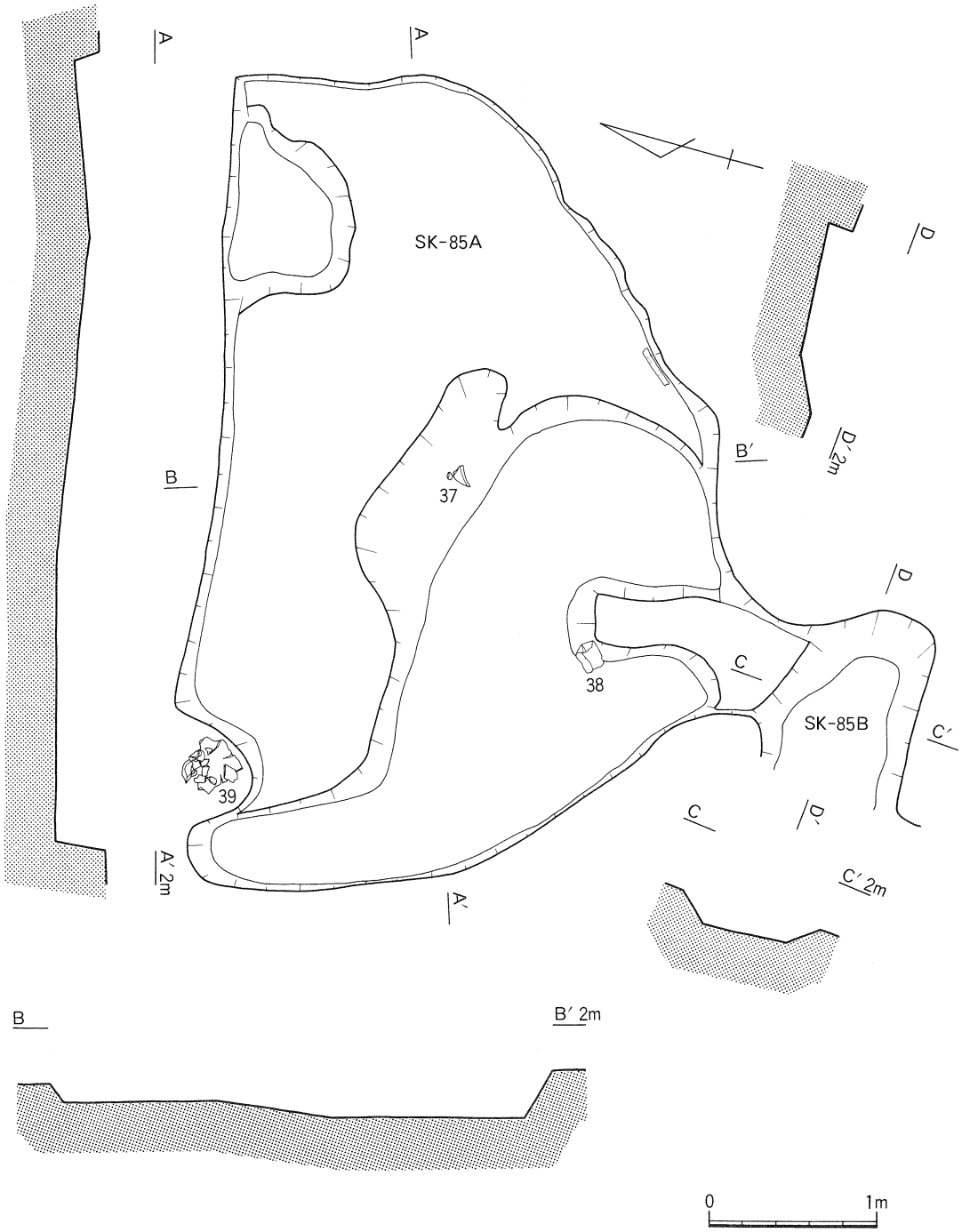
第23図　Ⅰ-b区土壙実測図



第24図　Ⅰ-b区土壙実測図



第25図　Ⅰ-a区(SK-86・87) Ⅰ-b区(81・88～91)土壙実測図

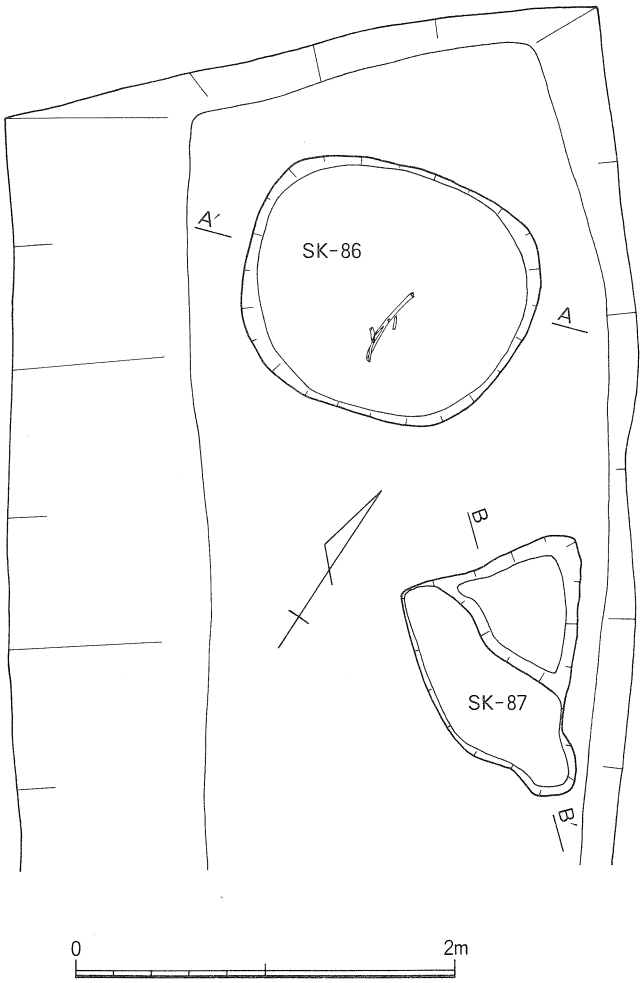


第26図　Ⅰ-b区土壙実測図

Ⅰ－ａ区（第27図）

第Ⅰ調査区の東南部に位置する。周囲は，水田部となっており，遺構の掘り込まれていた基盤層（白色粘土層）の標高は1.6mを測る。調査区は，16×3.3mの範囲で，土壙は北側から検出されている。SK－86は，円形のプランを呈し，規模は1.3×1.55m，深さ35cmを測る。この土壙の覆土中より土師器・甕（第28図１）が出土している。SK－87は，三角形のプランを呈し，規模は1.0×1.36m，深さ0.4mを測る。

SK－86出土遺物（第28図１）　二重口縁の土師器，甕である。口縁部の上端に平端面を有し，下端部は外方へ向け突出する。体部は丸味を有し，外面の上半に横方向のハケメ，下半に縦方向のハケメを施す。この甕の時期は，古墳時代前期，小谷式と思われる。口径15.3cm，器高24.4cmを測る。



第27図　Ⅰ-a区遺構実測図

第１表　中竹矢遺跡土壙一覧(1)

挿図番号	遺構番号	平面形	区	上面 長軸×短軸	深さ	出土遺物		出土遺物挿図番号	時期
53	SK－01	不整円形	2	104× 96	47				
53	SK－02	不整長方形	2	124× 92	23	156, 157			
57	SK－03	不整方形	2	160×156	27	158～175			
57	SK－04	不整長方形	2	208×104	24				
57	SK－05	不整長方形？	2	168× 76	24				
57	SK－06	不整楕円形？	2	212×104	13				
58	SK－07	不整長方形	2	188× 84	26				
58	SK－08	不整長方形	2	168× 76	35				
58	SK－09	不整長方形	2	196× 64	17				
58	SK－10	方形	2b	132×120	29				
59	SK－11	不整円形	2b	168×132	60				
59	SK－12	楕円形	2b	132×104	41				
59	SK－13	不整楕円形	2b	180× 64	46				
59	SK－14	不整長方形	2b	200× 88	24				
	SK－15	不整方形	2b	184×176	19				
	SK－16	不整半楕円形？	1c	100× 80	38	2	土師器古墳時代前期		
5	SK－17	不整楕円形？	1c	208×124	26				
5	SK－18	不整円形	1c	88× 72	24				
5	SK－19	不整半円形？	1c	100× 88	42				
7	SK－20	不整長方形	1c	192×148	29	3, 4, 5			
6	SK－21	不整長方形	1c	256×128	45	8	弥生土器・中期		
6	SK－22A	不整長方形？	1c	116×100	31				
6	SK－22B	不整楕円形	1c	100× 80	20				
7	SK－23	不整方形	1c	132×104	41		弥生土器・中期		
6	SK－24	不整長方形	1c	236×188	38				
	SK－25	不整方形	1c	96× 92	43				
5	SK－26	不整長方形	1c	64× 36	32				
8	SK－27	不整長方形	1c	176×168	57	7			
8	SK－28	不整楕円形	1c	108× 80	49				
8	SK－29	不整半楕円形	1c	224×132	50				
5	SK－30	不整半楕円形？	1c	120×104	20	3			
8	SK－31	不整楕円形？	1c	164× 92	38				
	SK－32	不整三角形？	1c	？× ？	21				
8	SK－33	不整円形	1c	240× ？	68				
8	SK－34	不整楕円形？	1c	220× ？	21				
7	SK－35	不整長方形	1b	148× 88	23	9			
7	SK－36	不整長方形	1b	188×104	49		弥生土器		
7	SK－37	不整方形	1b	120×112	41				
10	SK－38A	不整長方形	1b	168× 76	39	10, 14	弥生土器・中期		
10	SK－38B	不整方形	1b	96× 88	45				
10	SK－39	不整長方形	1b	304×224	48				
12	SK－40	不整楕円形？	1b	280×180	30				
10	SK－41	不整方形	1b	144×108	28				
11	SK－42	不整長方形？	1b	464×232	46	11			
12	SK－43	不整楕円形？	1b	176×172	29				
12	SK－44	不整長方形	1b	200× 84	29				
12	SK－45	不整楕円形	1b	136× 92	28	12, 13	土師器		
13	SK－46A	不整長方形	1b	196×116	35		弥生土器		
13	SK－46B	不整楕円形？	1b	236×156	48				
13	SK－46C	不整楕円形	1b	172× 96	33				
11	SK－47	円形	1b	172×140	33		弥生土器		

第２表　中竹矢遺跡土壙一覧(2)

挿図番号	遺構番号	平面形	区	上面 長軸×短軸	深さ	出土遺物		出土遺物挿図番号	時期
14	SK－48	不整長方形	1b	132×104	31	15			
14	SK－49	不整方形	1b	100×100	25				
14	SK－50	不整三角形？	1b	320×192	31				
15	SK－51A	不整楕円形？	1b	144×100	38	16			
15	SK－51B	不整円形	1b	112×104	43				
16	SK－52	不整長方形	1b	280×188	30	19			
15	SK－53A	不整楕円形？	1b	172×156	38				
15	SK－53B	不整円形	1b	100× 64	32				
17	SK－54	不整長方形	1b	180×112	32				
17	SK－55A	不整三角形？	1b	316×252	45		弥生土器・前期		
17	SK－55B	不整長方形	1b	184×140	36				
17	SK－56	不整楕円形	1b	108× 68	23				
16	SK－57	？	1b	524×436	37	17，18			
18	SK－58	不整楕円形？	1b	216×108	25				
16	SK－59	不整方形？	1b	0× 0	20		弥生土器		
18	SK－60A	不整長方形？	1b	216×204	33				
18	SK－60B	不整円形	1b	140×124	18				
18	SK－61	不整楕円形	1b	136×124	16				
19	SK－62	不整方形？	1b	108× 48	14				
19	SK－63	不整長方形	1b	140×112	37				
19	SK－64	不整方形	1b	128×124	13				
19	SK－65	楕円形	1b	76× 60	26	20			
19	SK－66	不整方形	1b	124×112	16				
22	SK－67	不整三角形	1b	196× 76	30				
19	SK－68	不整長方形？	1b	128× 68	28				
20	SK－69A	不整楕円形？	1b	532×252	61	21，22，23，24	弥生土器，土師器		
20	SK－69B	不整長方形	1b	272×184	59				
21	SK－70	不整長方形	1b	376×188	70	27	弥生土器		
21	SK－71	不整楕円形	1b	232×148	44				
21	SK－72	不整方形	1b	220×164	58	25			
21	SK－73	不整長方形	1b	208×144	61		弥生土器・前期		
22	SK－74	不整方形？	1b	96× 88	29	28，29，30			
22	SK－75	不整楕円形？	1b	140× 72	50		弥生土器・中期		
22	SK－76	不整楕円形？	1b	164×112	33				
22	SK－77	不整円形	1b	108×104	39				
22	SK－78	不整長方形	1b	120× 68	36				
23	SK－79	不整楕円形	1b	376×208	54		土師器		
23	SK－80	方形	1b	72× 68	31				
25	SK－81	楕円形	1b	116× 84	67				
24	SK－82	不整楕円形？	1b	316×256	55	26，31	弥生土器・中期		
23	SK－83	不整楕円形	1b	256× 84	30	32			
24	SK－84A	不整楕円形	1b	264×252	38	33，34，35，36	土師器前期，弥生土器中期		
24	SK－84B	方形	1b	120×104	29				
26	SK－85A	不整方形？	1b	476×296	31	37，38，39			
26	SK－85B	不整方形	1b	112× 88	34				
25	SK－86	不整円形	1a	156×132	43				
25	SK－87	不整方形	1a	128× 80	42	40			
25	SK－88	不整楕円形？	1b	84× 40	39				
25	SK－89	不整方形？	1c	132×104	22				
53	SK－90	不整方形	2	96× 88	23				
25	SK－91	不整楕円形	2b	152× 88	19				

Ⅰ－C区出土遺物（2～8）

SK－16出土遺物（2）　弥生土器・甕で，口縁部がやや外反し，頸部から体部の肩にかけて直線的に開いている。口縁部の上端は，細く丸味を有し，下端部は斜め下方へ向け鋭く突出する。体部外面上半に櫛描沈線文を入れ，下半にハケメを施している。この甕の時期は，弥生時代後期末と思われる。

SK－20出土遺物（4，5）　4は，弥生土器・壺で，口縁部が朝顔形に開き，端部を上下に肥厚させ，外面に斜格子文を入れている。口縁部から頸部にかけての内面にも，櫛描斜格子文，刺突文を施す。頸部外面に3条の貼付突帯をめぐらせ，頸部に18条，体部に2列，各8条の櫛描沈線文を入れ，その沈線文の間に斜格子文が描かれている。体部中程には刺突文を入れている。時期は，弥生時代中期中葉である。5は，磨製の太型蛤刃石斧の完形品である。体部中程から刃部にかけて研磨しており，中程から頸部にかけて敲打痕が残っている。

SK－21出土遺物（8）　弥生土器・壺の体部上半の破片である。外面は，縦方向のハケメの後に刺突文を2列施している。時期は，弥生時代中期中葉である。

SK－27出土遺物（7）　弥生土器・甕の口縁部である。口縁部は，短く外反し，体部内外面にヘラミガキを施す。時期は，弥生時代前期である。

6は，Ⅰ－c区出土の弥生土器・甕で，口縁部が肥厚し，外面に斜格子文を入れている。時期は中期中葉と思われる。

Ⅰ－b区出土遺物

SK－35出土遺物（9）　縄文土器・晩期の鉢の口縁部で，外面に刻目を有する突帯を持つ。

SK－38出土遺物（10，14）　弥生土器・高坏である。14は，坏部口縁部が外反し，穿孔がなされている。時期は，ともに中期中葉である。

SK－42出土遺物（11）　石鋸の破片であり，厚さ5㎜で，刃部は直線的に研磨している。

SK－45出土遺物（12，13）　12は，弥生土器。中期の壺の口縁部である。13は，土師器・壺の体部の破片で，肩部外面に羽状文を入れている。この土器は，古墳時代前期のものである。

SK－48出土遺物（15）　弥生土器．中期の壺の体部で内外面にハケメを施している。

SK－51出土遺物（16）　弥生土器の底部である。外面にハケメを施す。

SK－52出土遺物（19）　弥生土器の甕で，口縁部が外反し，端部が上下にやや肥厚している。時期は，中期中葉である。

SK－57出土遺物（17，18）　17は弥生土器の底部で，内外面にヘラミガキを施す。18は，土師器・甕で，時期は古墳時代前期である。

SK－65出土遺物（20）　縄文土器．晩期の鉢で，口縁外面に突帯を有し，外面に条痕文を施す。

SK－69出土遺物（21～24）　21は，畿内庄内式の甕で，外面に右上がりの平行叩きを，内面は細いハケメの後ヘラミガキを施している。23は，土師器・甕の底部であり，時期は古墳時代前期である。24は，太型蛤歯石斧の刃部である。

SK－70出土遺物（27）　土師器・二重口縁の甕である。体部外面にハケメを施した後，波状文を入れている。時期は，古墳時代前期である。

SK－74出土遺物（28～30）　弥生時代前期の壺である。28は体部下半の内外面にヘラミガキを施している。29は，頸部と肩部に段を有すもので，体部外面にヘラミガキ，内面にハケメ，底部内面にナデを施す。30は，肩部に9条と4条の篦描沈線文を入れ，その間に8～10本の単位で斜方向の篦描沈線文を入れている。内外面ともヘラミガキを施すが，内面頸部から体部にかけ指頭によるナデが残る。底部内面に一部ヘラケズリがみられる。

SK－82出土遺物（31）　弥生土器・甕で，口縁部が緩く外反する。時期は，前期である。

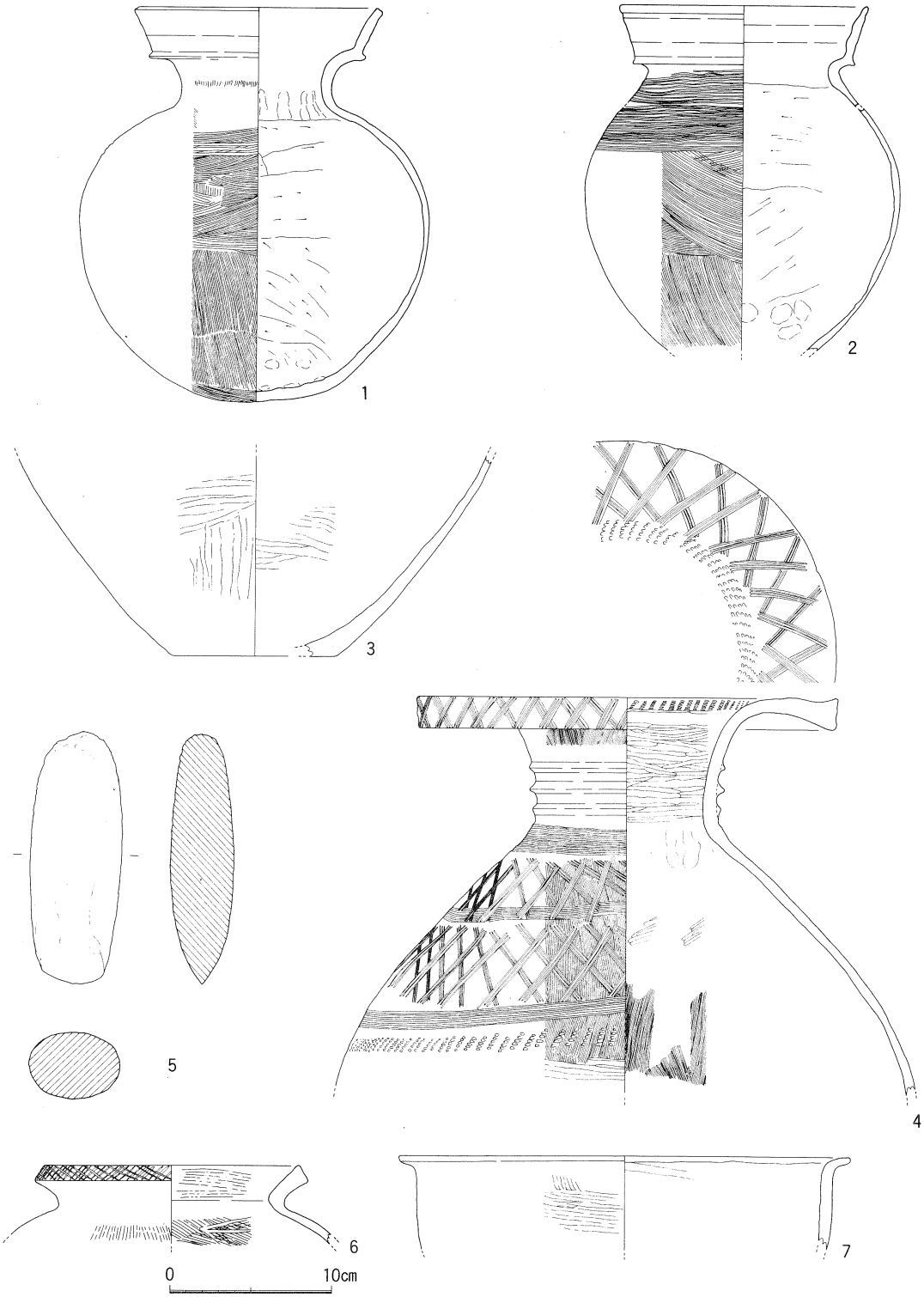
SK－83出土遺物（32）　弥生土器・甕で，口縁部がやや肥厚し，外面に刺突を施す。時期は，中期中葉である。

SK－84出土遺物（33～36）　35・36は，弥生土器・甕である。35は，口縁部が「く」の字状に折曲し，体部外面上半にハケメ，下半にヘラミガキ，体部内面上半ハケメ，下半にヘラミガキを施す。外面肩部に刺突文をめぐらしている。36は，外面に粗いハケメ，内面にナデを施す。時期は，中期中葉である。33・34は，土師器・甕である。35は，口縁部が「く」の字状に折曲し，体部外面上半にハケメ，下半にヘラミガキ，体部内面上半にハケメ，下半にヘラミガキを施す。36は，外面に粗いハケメ，内面にナデを施す。時期は，中期中葉である。33・34は，古墳時代前期の土師器である。

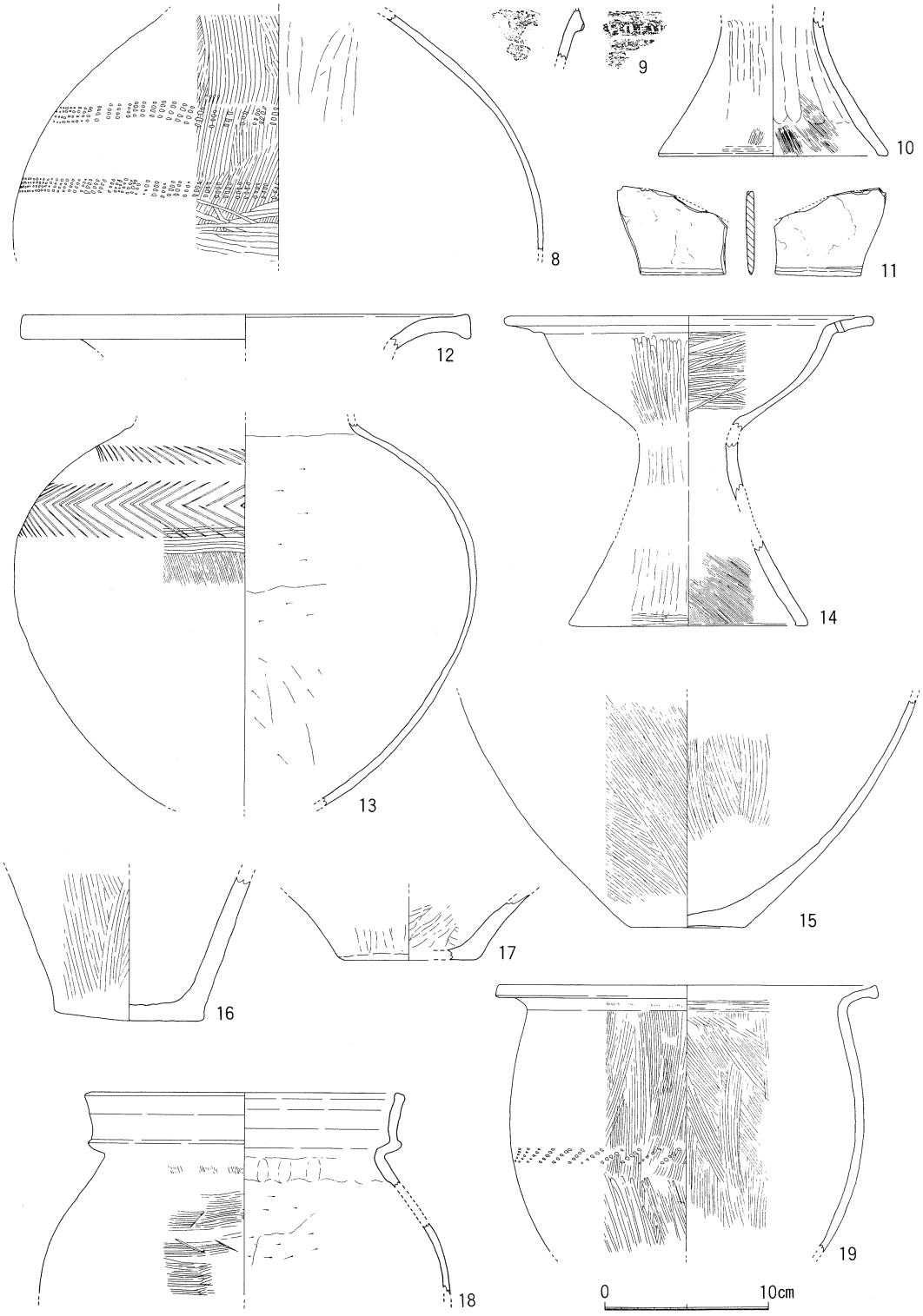
SK－85出土遺物（37～39）　弥生土器・甕である。37は，口縁部が「く」の字状に折曲し，やや肥厚している。体部は丸味を持ち，底部の径がやや大きなものである。体部外面上半にハケメ，下半にヘラミガキ，体部内面上半はハケメの後ヘラミガキ，下半にヘラミガキを施している。39は，口縁部が外反し，体部に丸味を有している。38・39は，弥生時代中期中葉である。

SK－87出土遺物（40）　土師器・小形丸底壺の体部の破片である。外面ヘラミガキ，内面ヘラケズリを施す。時期は，古墳時代前期である。

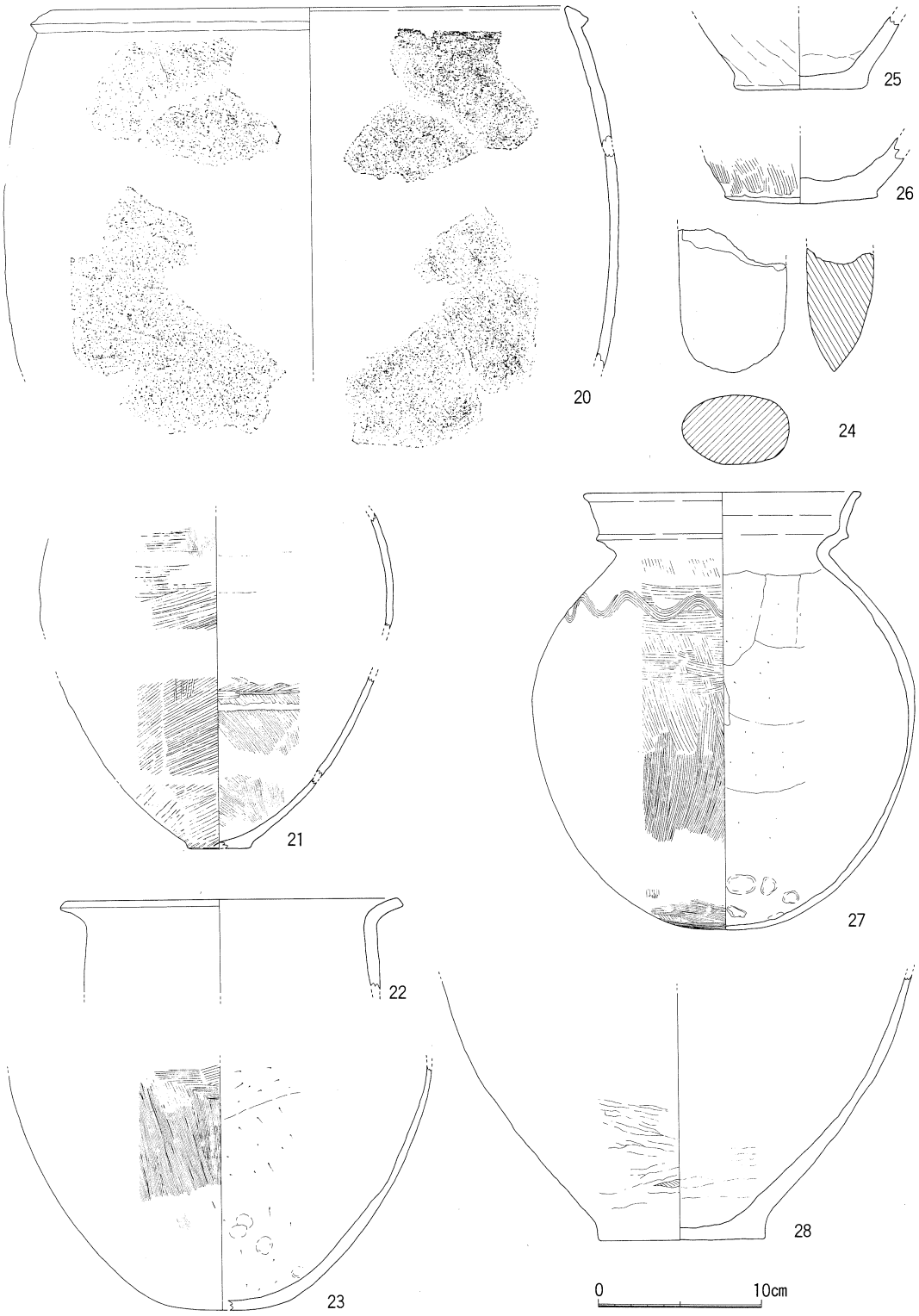
Ⅰ－b区出土遺物（41～43）　41は，土師器・小形丸底壺の体部の破片である。全体に器壁が厚く，口縁内外面にヘラミガキ，体部内外面にヘラケズリを施している。時期は，古墳時代中期である。42は，木製品・高坏脚部である。脚部は，断面が円形に近く仕上げられており，脚端部は段を持ち肥厚している。木取りは柾目取りである。43は，板状の木製品であり，両面にケズリ痕が残っている。



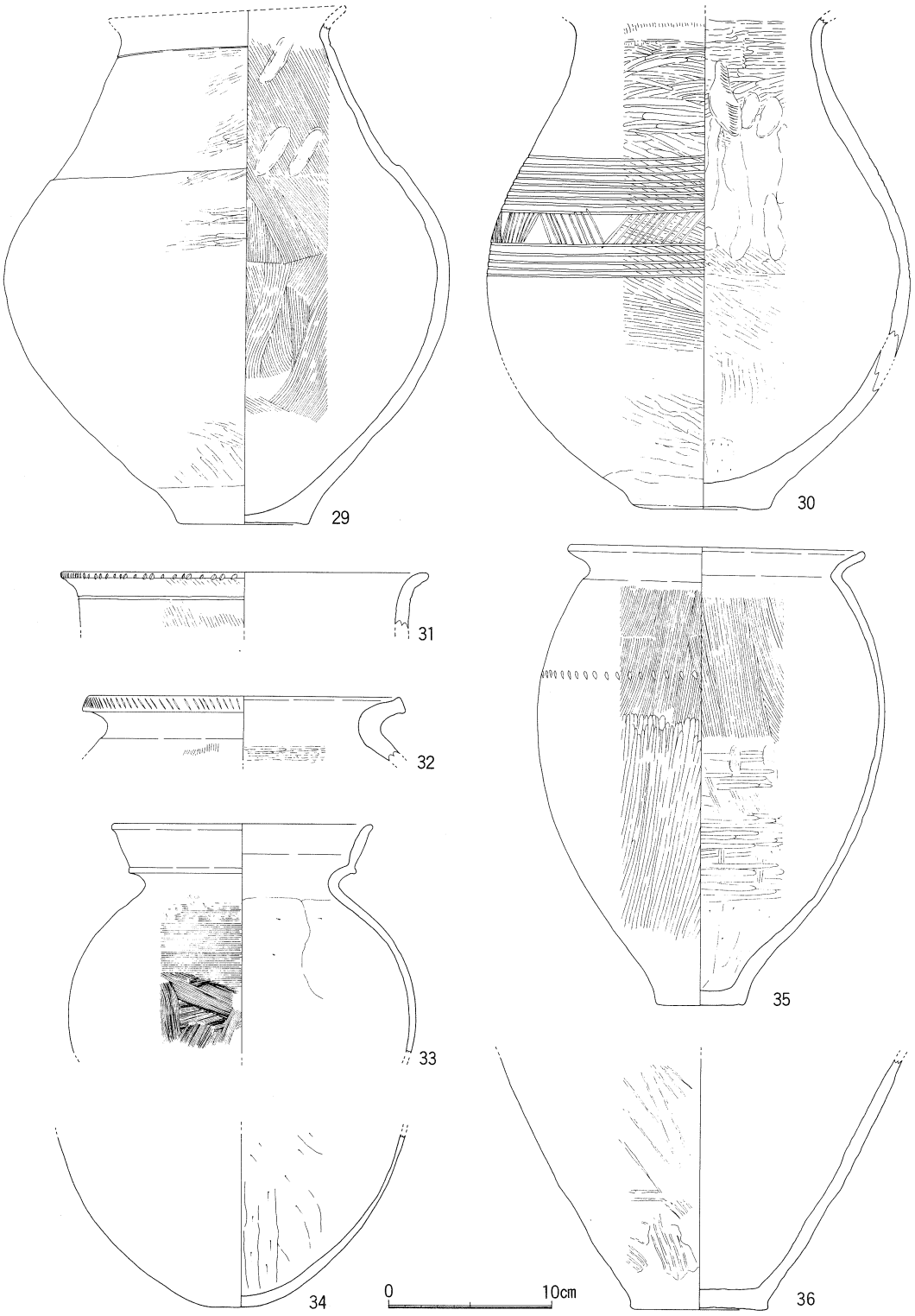
第28図　Ⅰ-a区(1)，Ⅰ-c区〔SK-16(2)，20(3・4・5)，27(7)〕出土遺物実測図



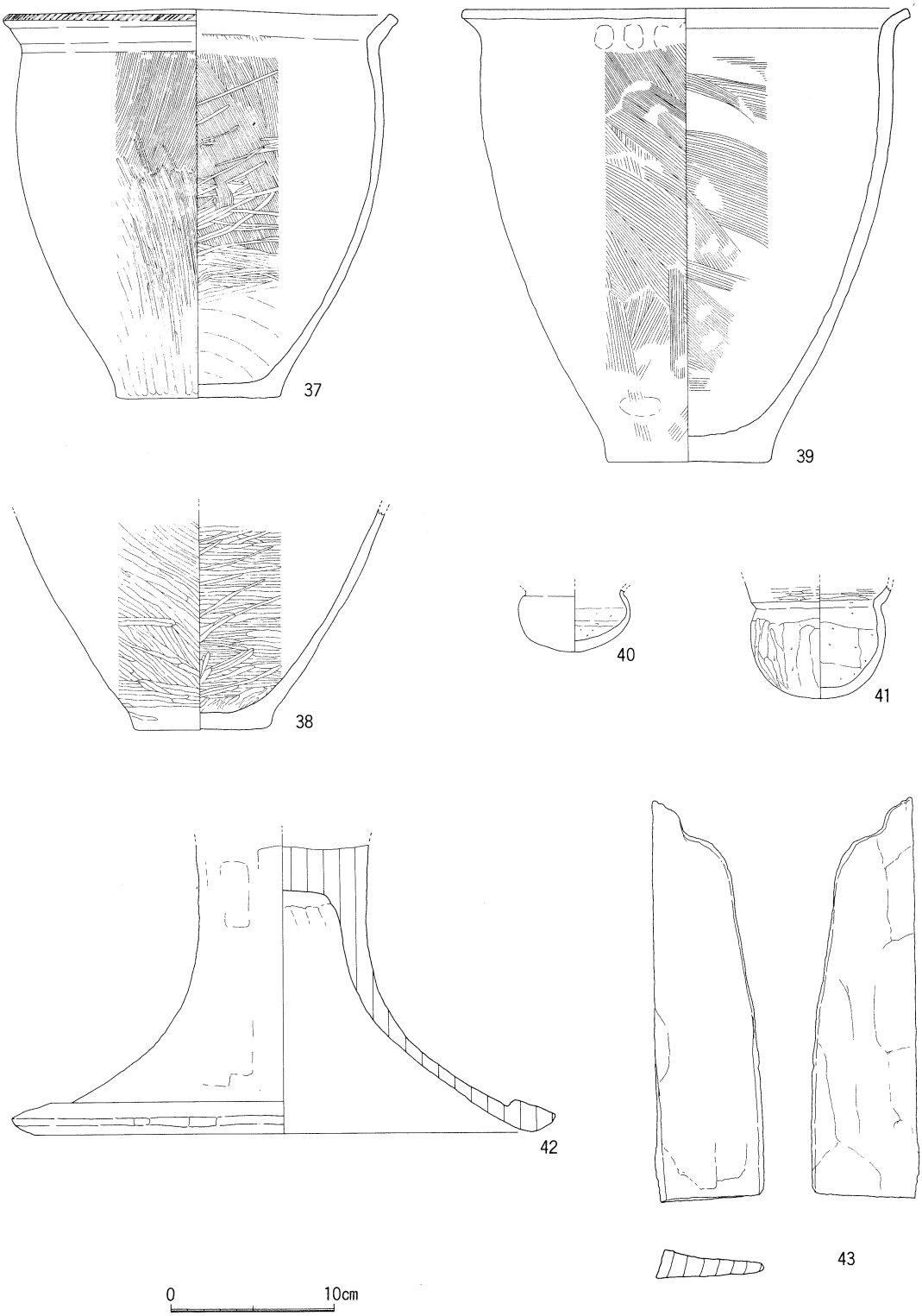
第29図　Ⅰ-c区〔SK-21(8)〕，Ⅰ-b区〔SK-35(9)，38(10・14)，42(11)，45(12・13)，48(15)，51(16)，52(19)，57(17・18)〕出土遺物実測図



第30図　Ⅰ-b区〔SK-65(20), 69(21～24), 70(27), 72(25), 74(28), 82(26)〕出土遺物実測図



第31図　Ⅰ-b区〔SK-74(29・30), 82(31), 83(32), 84(33～36)〕出土遺物実測図

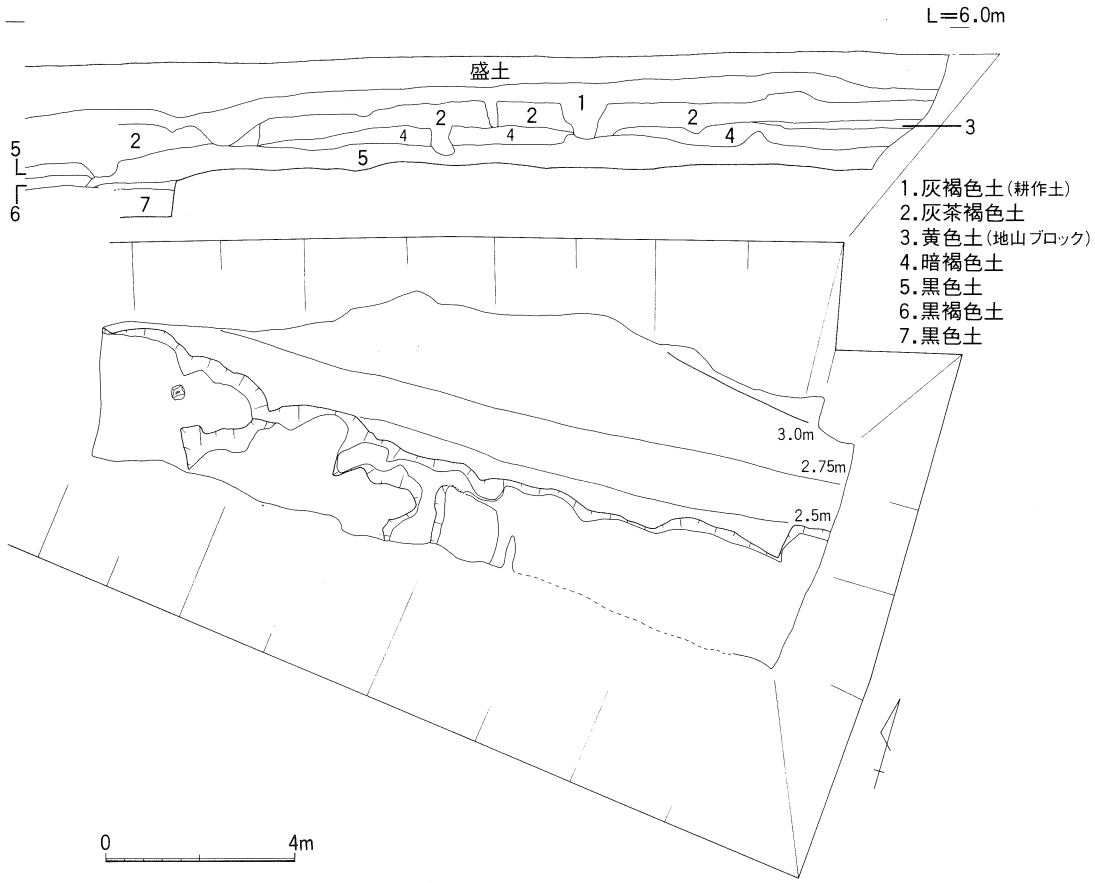


第32図　Ⅰ-b区〔SK-85(37・38・39)，87(40)〕出土遺物実測図

Ⅰ－ｄ区

ｄ区は，南側の丘陵部が，北へ向かって水田部に移行する部分にあたり，南北で最大149cmの高低差がある。南側に，最大で約４ｍ幅のテラス状の張り出しがあり，その北端と白色粘土の基盤層まで約60cmほどの段差がある。白色粘土層は，ａ，ｂ，ｃ区の白色粘土層とほぼ同じ標高であり，これらの調査区へ続くものと思われる。

遺物は，耕作土（灰褐色土）の下層の灰茶褐色土，暗褐色土，黒色土から出土した。テラス状の張り出し部分の灰茶褐色土層からの出土が多く，特に瓦は密集状態で，平瓦が1,222個，丸瓦が643個，合計1,865個という大量の出土が見られた。これらの瓦のうち，焼成の良い須恵質のものは全体の16.6％しかなく，白っぽい軟質のものが25.2％，土師質のものが58.8％を占め，全体として焼成が不良であった。また，ほとんどが破損しており，溶着したものも散見された。土器については，奈良から平安時代にかけての須恵器が主であり，特に平安時代のものが多かった。瓦もこの時期のものが大半を占めると考えられる。



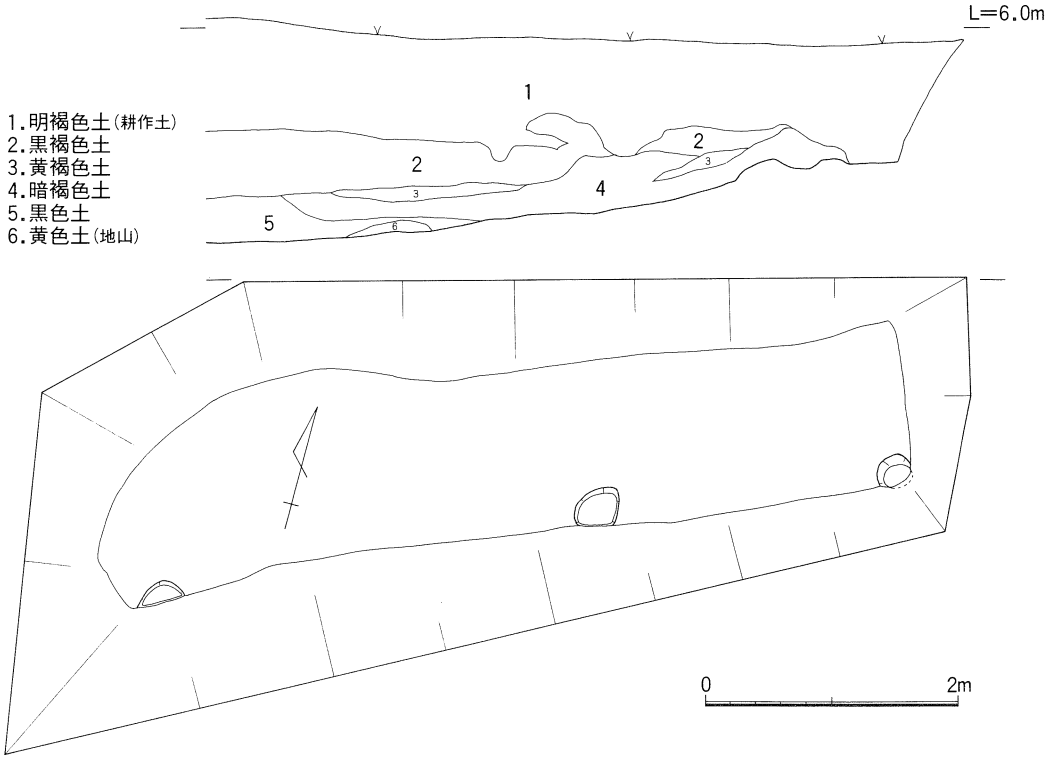
第33図　Ⅰ-ｄ区全体図

Ⅰ－ｅ区

ｅ区もｄ区と同様，丘陵部から水田部へと移行する部分にあるが，やや丘陵部よりで，地山面の標高は4.3ｍであり他の調査区よりも高い。また，東西方向で東側が80cm高く，南北方向で北側が30cmほど高くなっており，全体的にかなり傾斜していることから，北側から続く丘陵斜面の一部と考えられる。

土層の堆積状況は，まず，厚さ約80cmの耕作土（明褐色土）があり，その下層に最大で約40cmほどの厚さで黒褐色土が堆積し，さらに黄褐色土，暗褐色土，黒色土が約30cmほど堆積していた。黒褐色土以下の土層から遺物が出土した。出土した遺物は，奈良時代から平安時代にかけての須恵器が主で，出土数は少なかった。

地山から検出された三つのピットは，調査区南壁に沿う形でほぼ一直線上に並んでいた。直径はいずれも30cm程度であり，深さは10～15cmであった。これらのピットは，柱穴である可能性もあるが，地山面の傾斜がかなりきついことや，地山面を加工した跡も見られないことから，建物跡とは考えにくく，その性格は不明である。また，北東方向の至近距離に出雲国分尼寺跡があり，この調査区がその寺域の一部である可能性もあったが，今回の調査結果からは，確認できなかった。



第34図　Ⅰ-ｅ区全体図

Ⅰ－d区出土遺物（44～97）

坏（44～61）　坏は，高台の付かないもの（44～55），高台の付くもの（56～60）である。44～48は，坏体部が内湾気味に立ち上がり，口唇部が外反する。底部外面は，回転糸切り未調整である。45は，他に比べ器高が高く，4.5cmを測る。49～52は，体部が斜め上方へ直線的に開き，底部は回転糸切りにより切り離す。口径12.0～12.4cm，器高3.1～4.3cmを測る。胎土は，灰白色で焼成はやや不良なものである。51は，底部外面に「東□」の墨書が残っている。53・54は，坏部が直立気味に立ち上がり底部回転糸切りにより切り離す。55は，小形の坏で体部が口縁部へ向け開き気味に立ち上がる。56は，底部外面に「×」のヘラ記号がある。57～60は，体部が斜め上方へ直線的に立ち上がるもので，底部外面は回転糸きりにより切り離した後，高台を貼り付けている。61は，器壁が薄く，ナデによる凹凸が強く残る。

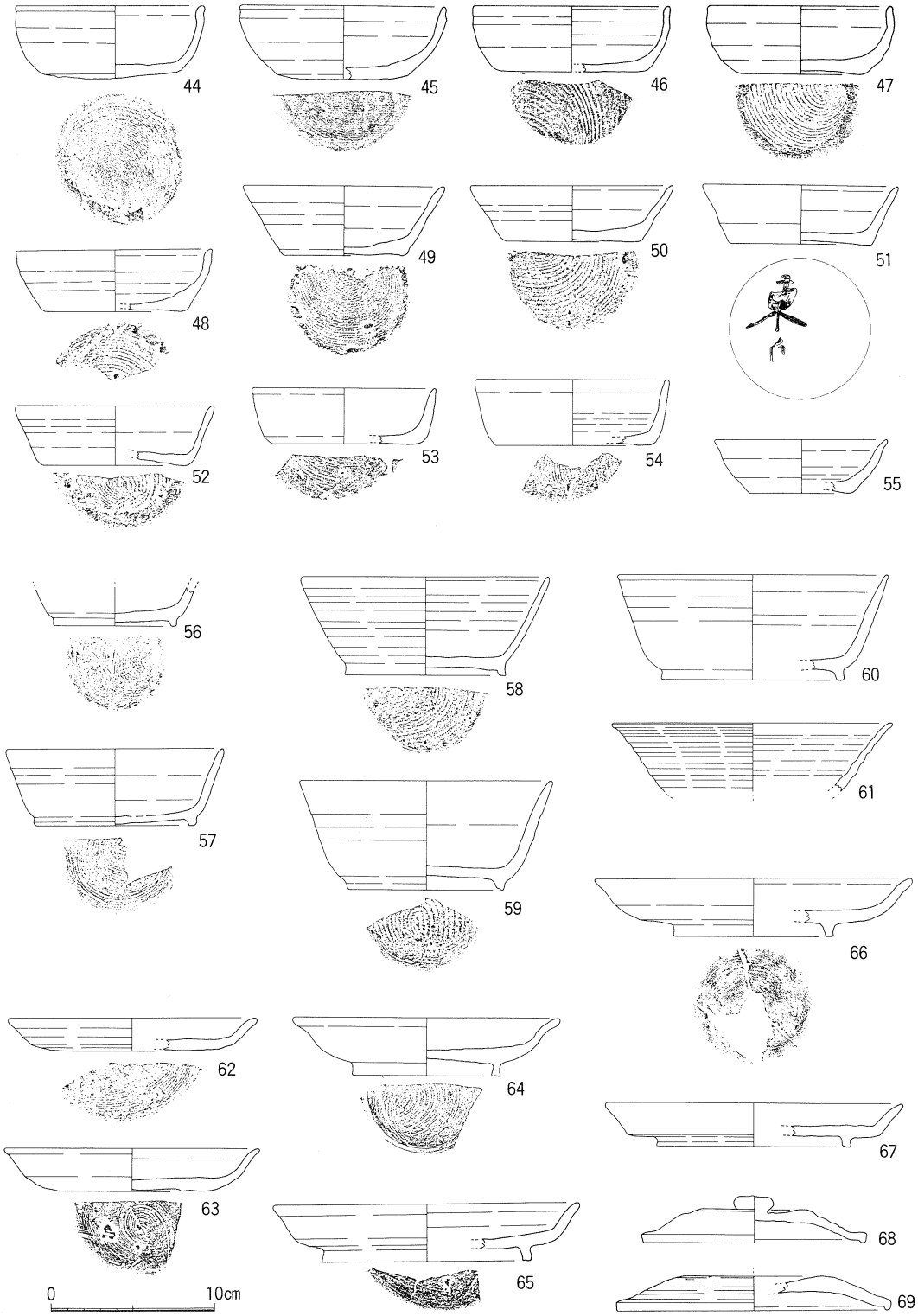
皿（62～67）　皿は，高台の付かないもの（62・63）と，高台の付く（64～67）である。62は，口径15.2cm，器高2.0cmと低いものである。64・66は，底径に対する口径比が1：1.8，1：1.9と倍近いが，65・67は1：1.46，1：1.54となる。64～66は，底部が回転糸切りで，67は底部をナデている。

蓋（68・69）　68は，頂部に扁平なつまみを付け，天井外面の周囲にヘラケズリを行なう。縁端部に丸味を持つ。

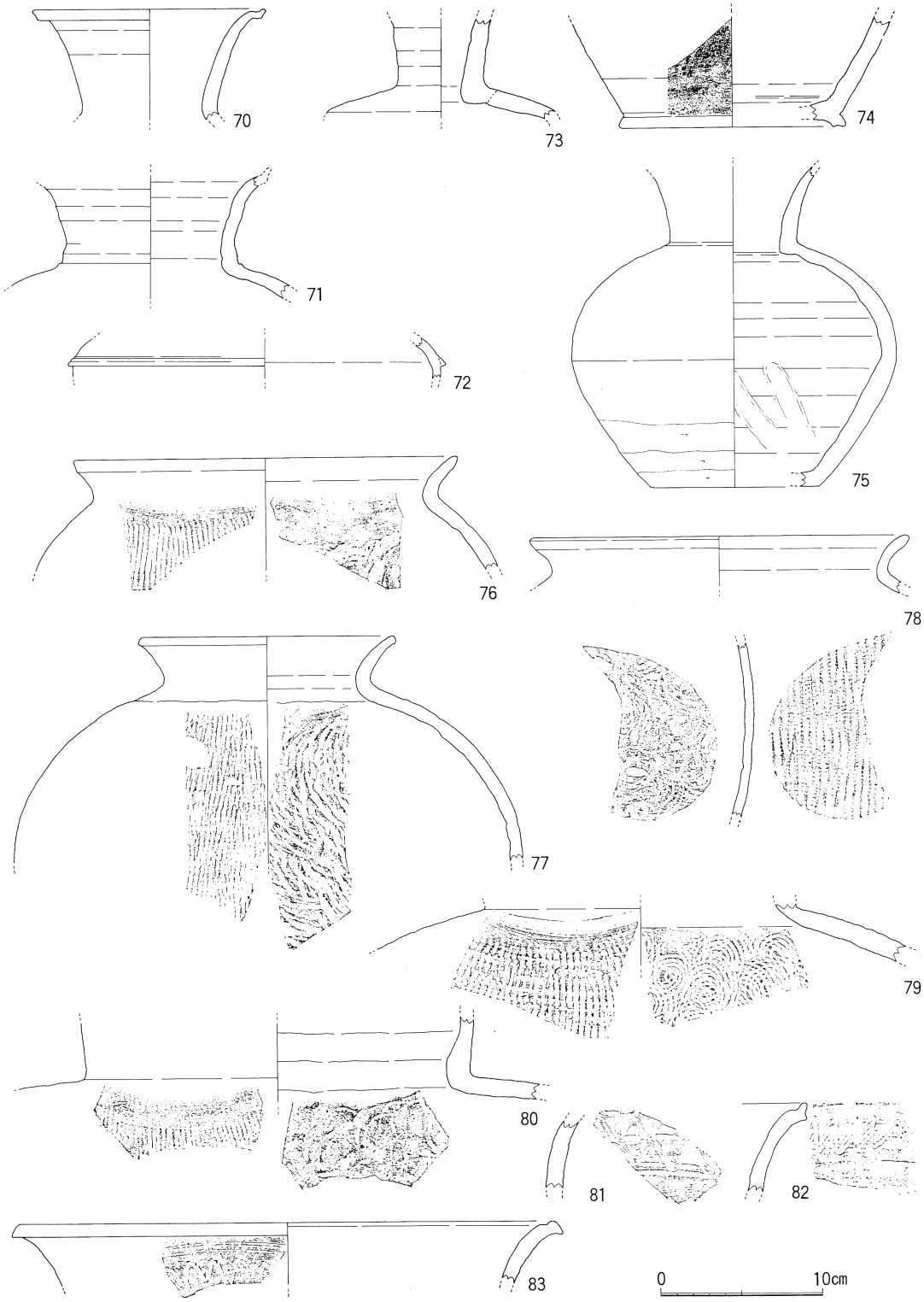
壺（70～75）　70・71は，壺の口縁部である。口縁が外反し，端部が上方へ突出する形となる。72は，肩部に突帯のめぐるものである。73は，頸の細い壺で，口縁部にかけて器壁は厚くなる。74は，高台の付く壺で，体部外面は平行叩きの後をナデている。75は，口縁上端部を欠くもので，体部に丸味を有し，底部近くにヘラケズリを施している。

甕（76～89）　76～78は，口縁部が「く」の字状に折曲し，やや外反している。体部外面は，平行叩き，内面に同心円叩きの後一部をナデ消している。80は，頸部から口縁部に向け直立して立ち上がり，体部内面の同心円叩きをナデ消している。81～83は，壺の口縁部であり，上端部を上方へつまみ出したような形を呈している。外面の上半にのみ，櫛描波状文を入れる。84・85ともに，内面の同心円叩きを一部ナデ消している。86は，内面の同心円叩きをほとんど消しており，同心円叩きの輪郭を残すのみである。87は，外面の平行叩きの幅が広く，内面の叩きは一部ナデ消している。88は，底部付近の破片である。内面の叩きを丁寧にナデ消している。89は，内面の叩きを完全にナデ消している。

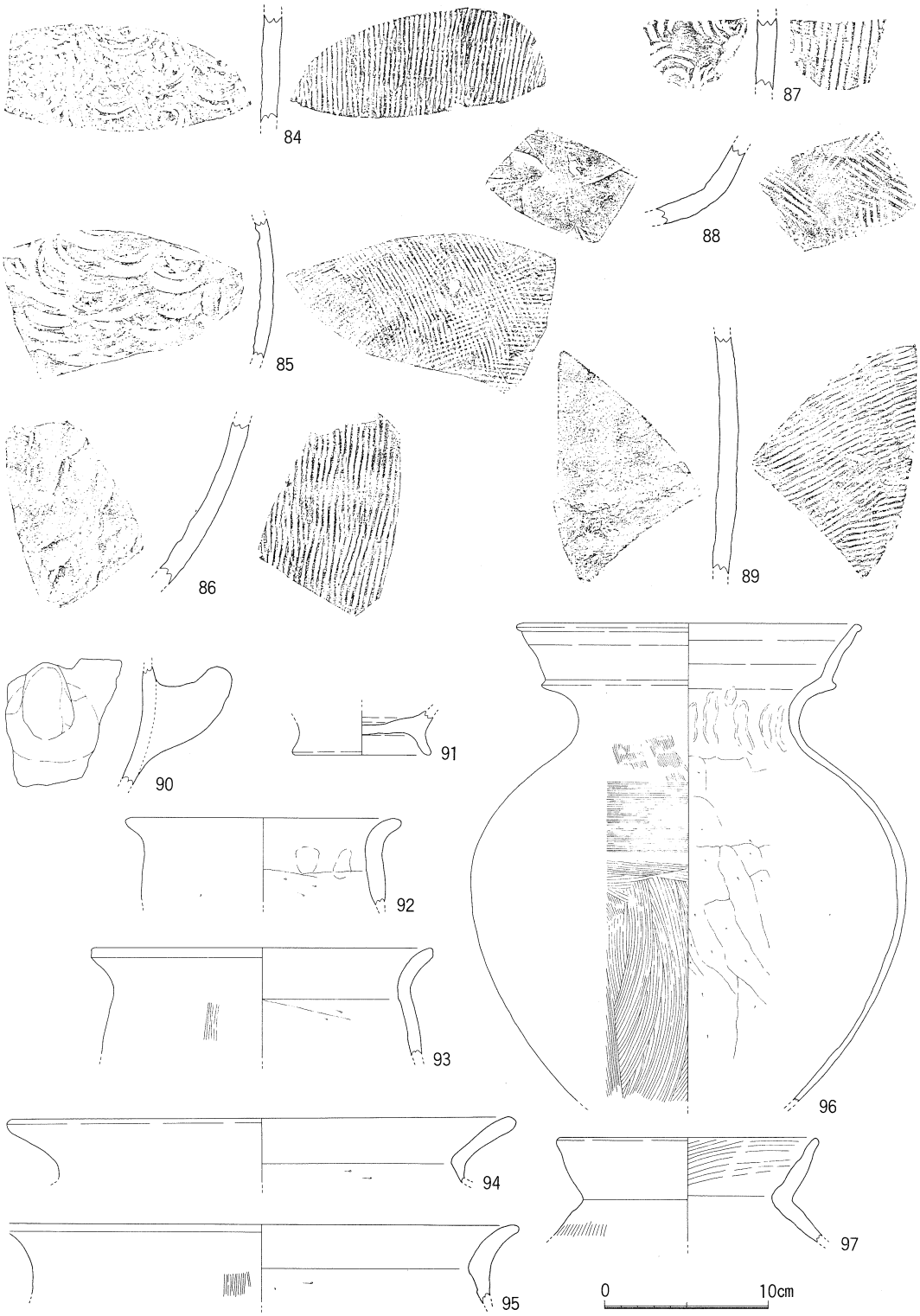
土師器（90～97）　96は，古墳時代の土師器・壺である。口縁部・上・下端とも外方へ突出しており，体部外面肩部に横方向のハケメ，下半に縦方向のハケメを施す。97は，口縁部が「く」の字状に折曲し，上端部に丸味を有す。口縁部内面は，ハケメの後ヨコナデ，体部外面にハケメ，内面



第35図　Ⅰ-d区出土須恵器実測図



第36図　Ⅰ-d区出土須恵器実測図



第37図　Ⅰ-d区出土遺物実測図

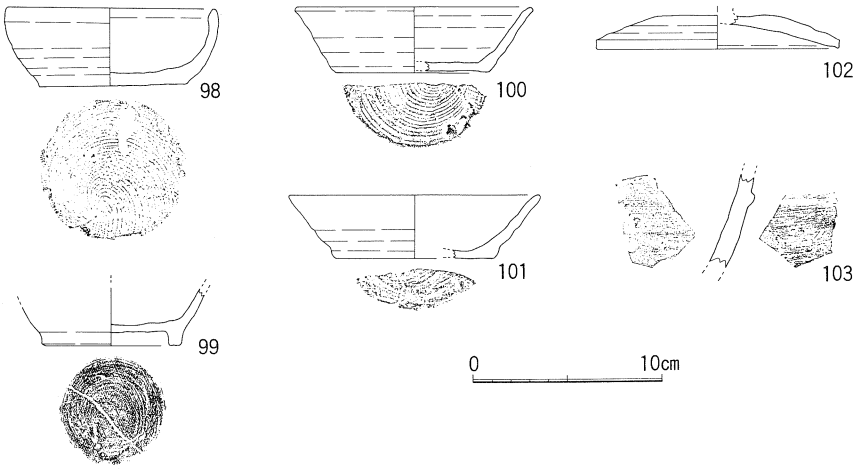
頸部以下へラケズリを施す。90は，土師器・甑の把手である。91は，坏の底部で，高台がやや外方へ向け付くもので，端部に丸味を有している。92～95は，土師器・甕である。口縁部がやや外反しており，93・95は体部外面にハケメを施す。内面頸部以下にヘラケズリを施している。

Ⅰ－d区出土遺物は，須恵器・坏（44～48），皿（62～66），蓋（68・69）が国庁編年第4形式(註1)，坏（49～60），壺（70・71），甕（76～89）が国庁編年第5形式(註2)であり，竹矢町神田遺跡(註3)，長嶺遺跡(註4)出土の須恵器と同一のもので，9世紀後半のものと思われる。土師器の92～95もこの時期のものと思われる。96は，古墳時代前期，小谷式のもので，97は古墳時代中期のものである。

Ⅰ－e区出土遺物（第38図）

98は，須恵器・坏で，体部が内湾気味に立ち上がり，口唇部がやや肥厚している。底部外面は，回転糸切り末調整で，極めて平坦な底部である。焼成は良好で，色調は灰色である。99は，高台の付く坏で，高台が下方へのびている。底部外面は，回転糸切りである。100，101は，体部が直線的に開く坏であり，器壁のやや薄いものである。底部外面は，回転糸切り未調整である。焼成は，やや不良な軟質のもので，色調は灰白色を呈する。底径と口径の比は，1：1.6である。102は，須恵器・蓋であり，つまみを欠いている。器高は低く，縁端部はわずかに折曲している。103は，壺の体部の破片である。体部外面に突帯のめぐるものであり，焼成は良好である。

Ⅰ－e区出土遺物の中で時期の判明するものは，98が出雲国庁編年第4形式(註5)であり，奈良時代のものである。100・101は，出雲国庁編年の第5形式(註6)であり，平安時代前半，9世紀後半頃のものと思われる。



第38図　Ⅰ-e区出土遺物実測図

Ⅰ－ｄ区出土瓦（第39～48図）

軒丸瓦（104～107）　出雲国分尼寺の分類[註7]によると，104・105は第二類である。中央の蓮子が5個，花弁が5葉，唐草文帯の外に珠文帯をめぐらしている。106・107は，第三類である。中央に花文，その外側に唐草文帯，さらにその外に珠文帯をめぐらしている。中央の花文が四葉形を呈している。

軒平瓦（110～117）　出雲国分尼寺の分類により，一部を出雲国分寺の分類による。110は，第一類で，国分寺創建時のものとされている。3個の花文と4個の唐草文を配し，その外側に珠文帯がめぐっている。唐草文の線も繊細で，花文が方形に近い形となっている。焼成は，良好である。111・112・115は，国分寺[註8]の分類による第二類である。花文，唐草文とも線が太く表現され，花文が円形に近い形となっている。113～118は，第四類とされるものである。第四類は，大きく2つに分類可能と思われ，113・114・118を第四類－1，114・117を第四類－2とした。第四類－1としたものは，唐草文がくずれたような文様で，118の文様の中央には花文，その周囲に唐草文のくずれたような形となっている。114・117は，文様が格子状の叩きにより表現されている。第二類～第四類の焼成はいずもれも軟質のものである。

平瓦（120～134）　凸面の調整が，縄目叩きと格子叩きの2つに分かれる。120～122は，縄目叩きのもので，120が通常の縄目（NB），122が横方向に叩かれた縄目（YNB）で離れ砂を残している。123は，平行叩きを行っている。124～134は，凸面格子叩きの平瓦である。124・125・128・130・131は，斜格子叩き（KC）の平瓦である。126・127は，細かい斜格子叩き（KH）を施す。129・132は，斜格子叩き（KD）で，132は凹面にナデで調整を行い，布目を消している。133，134は，凸面に格子叩き（KA）を行っている。

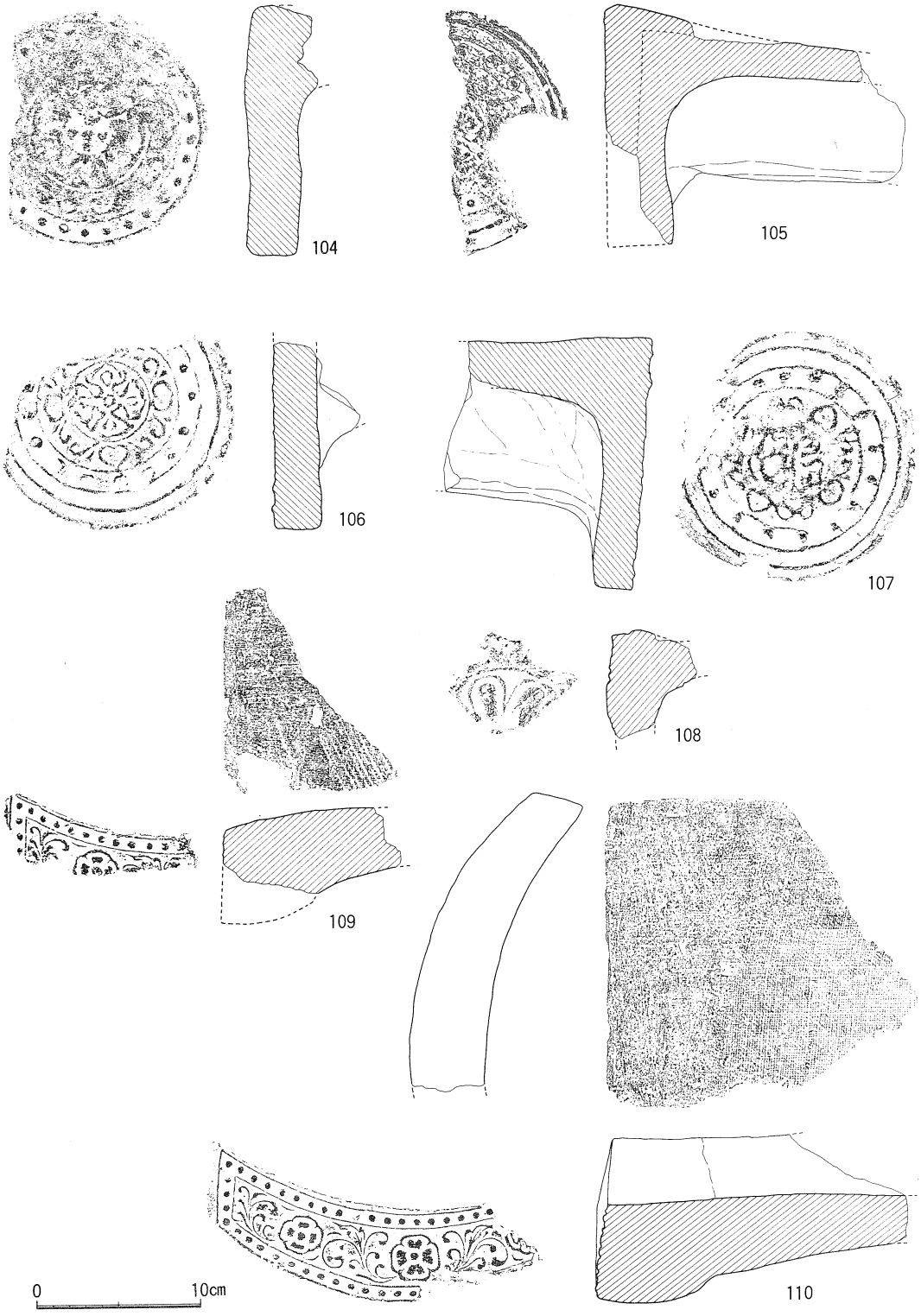
熨斗瓦（135～141）　135・136・138・140は，瓦を焼成前に半截している。137・139・141は，瓦を焼成後に半截して熨斗瓦としたものである。135・136は，凹面に模骨痕と思われる，幅3.5cmの単位で段が付き，粘土板桶巻作りの可能性がある。

隅切り瓦（142～144）　焼成前に隅を切り落としている。いずれも破片のため全形は不明である。142は，凸面に太い縄目叩き（NA）を行っている。143，144は，凸面に格子叩き（KA）を行っている。

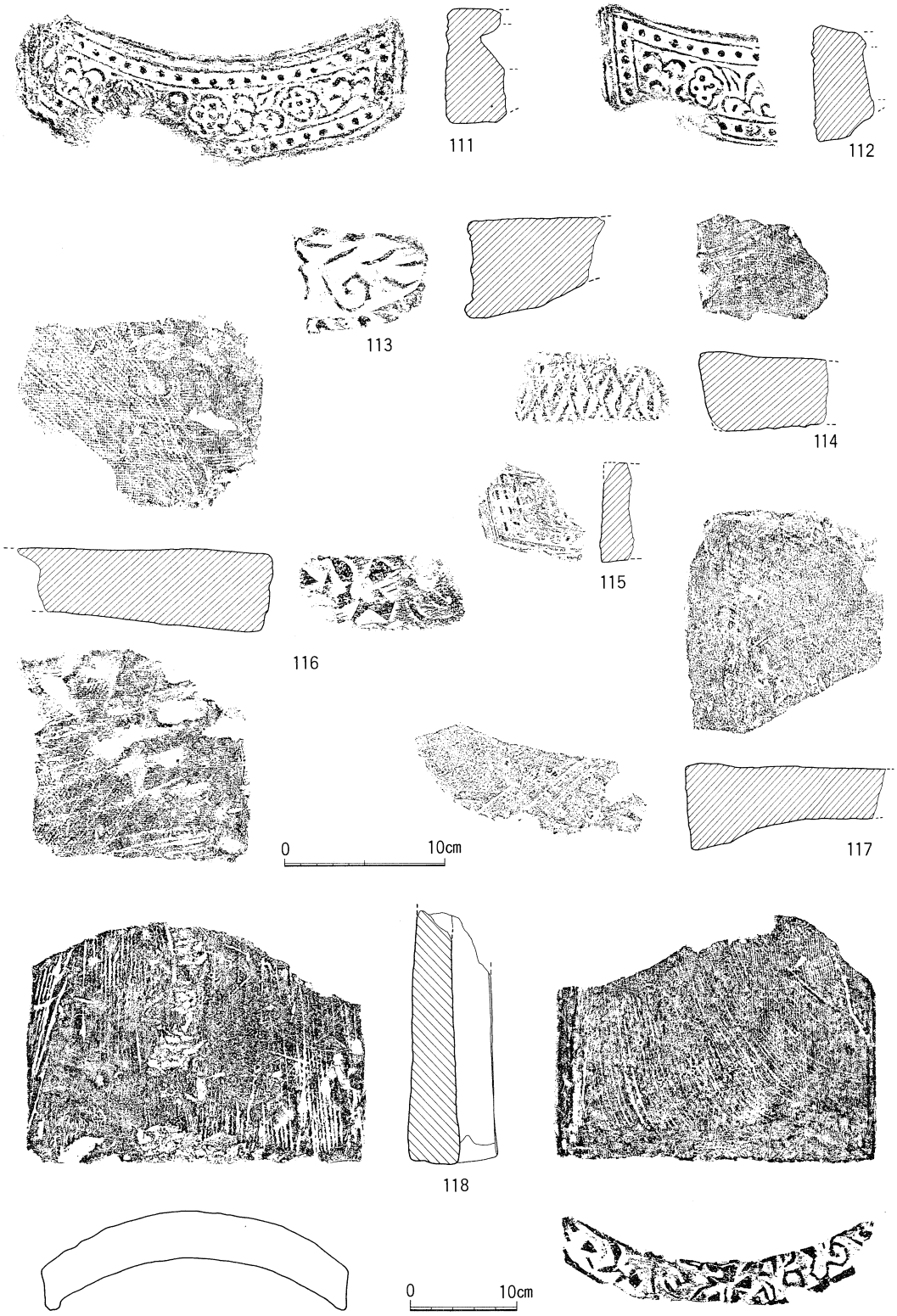
丸瓦（145～150）　丸瓦は，行基式（145・147）と玉縁部を有すもの（149）があり，凸面はナデ調整を行い，147，は一部縄目が残る。150は，凸面に「虫」の文字がヘラにより刻まれていた。

鬼板瓦　152は，左下端の部分で，153は，右上部，眉の部分である。

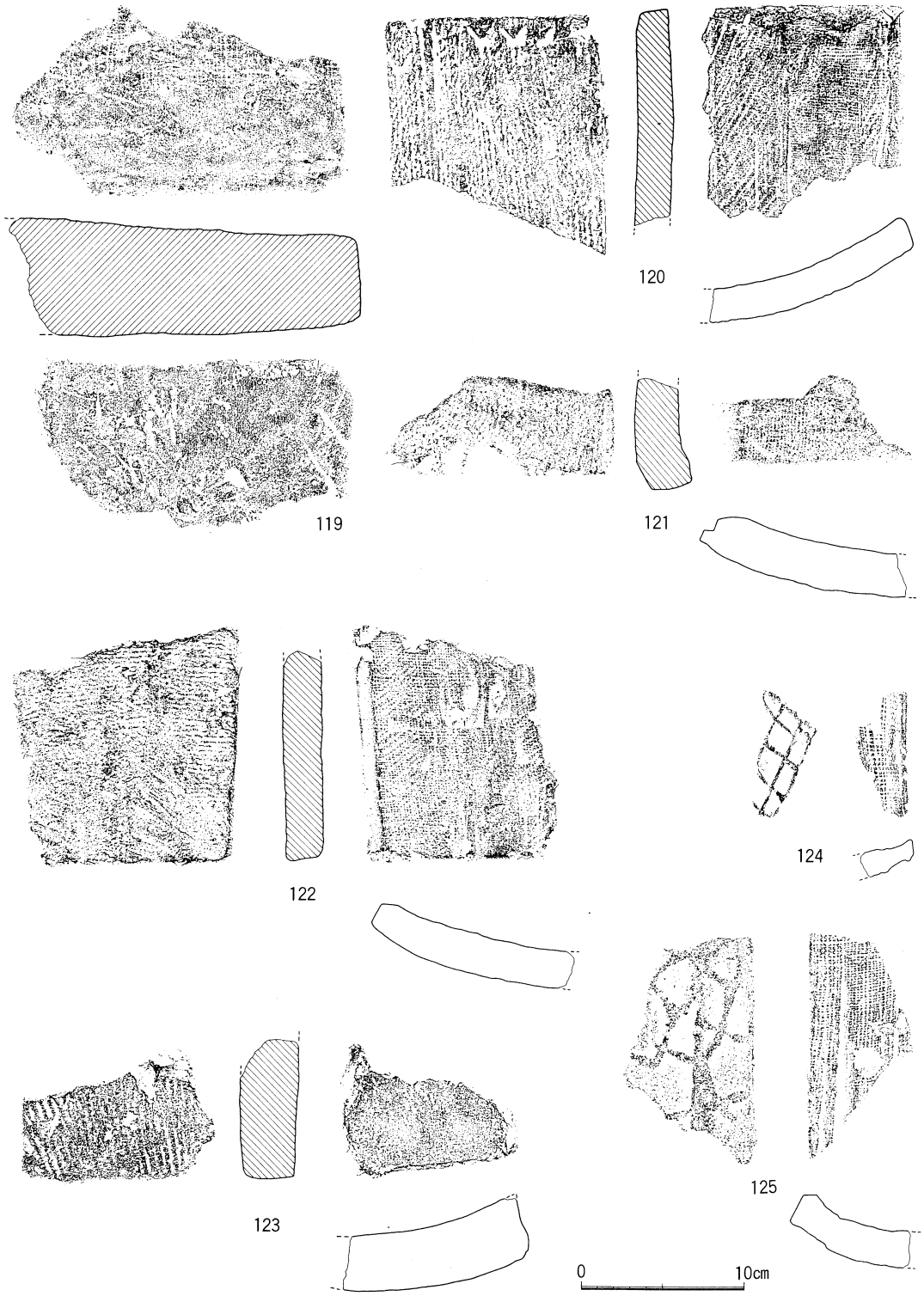
塼（150・154・155）　154は，厚さ7.6をcm測る。155は，長さ24.2cmを測る。3点とも焼成は不良である。



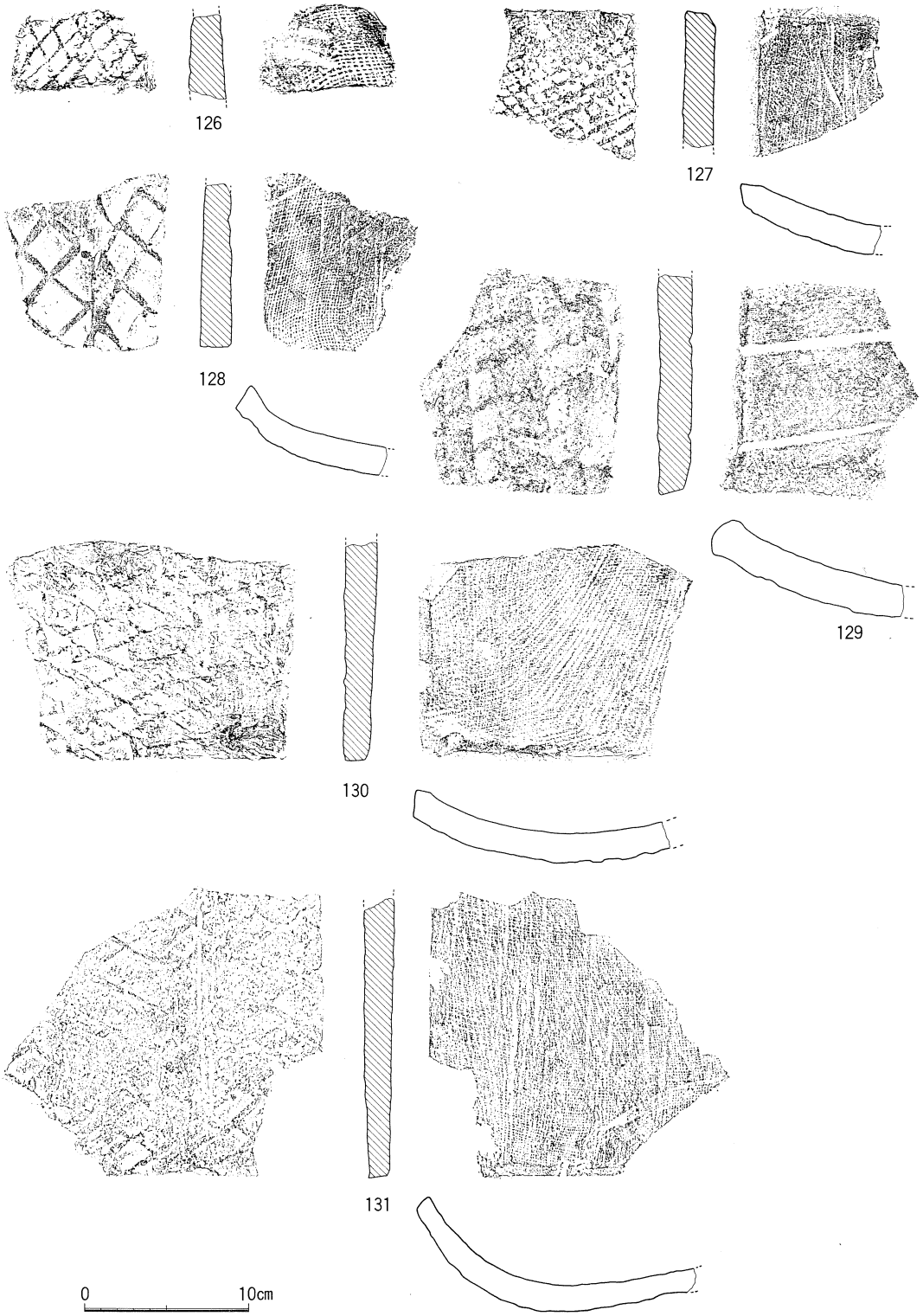
第39図　Ⅰ-d区出土瓦実測図



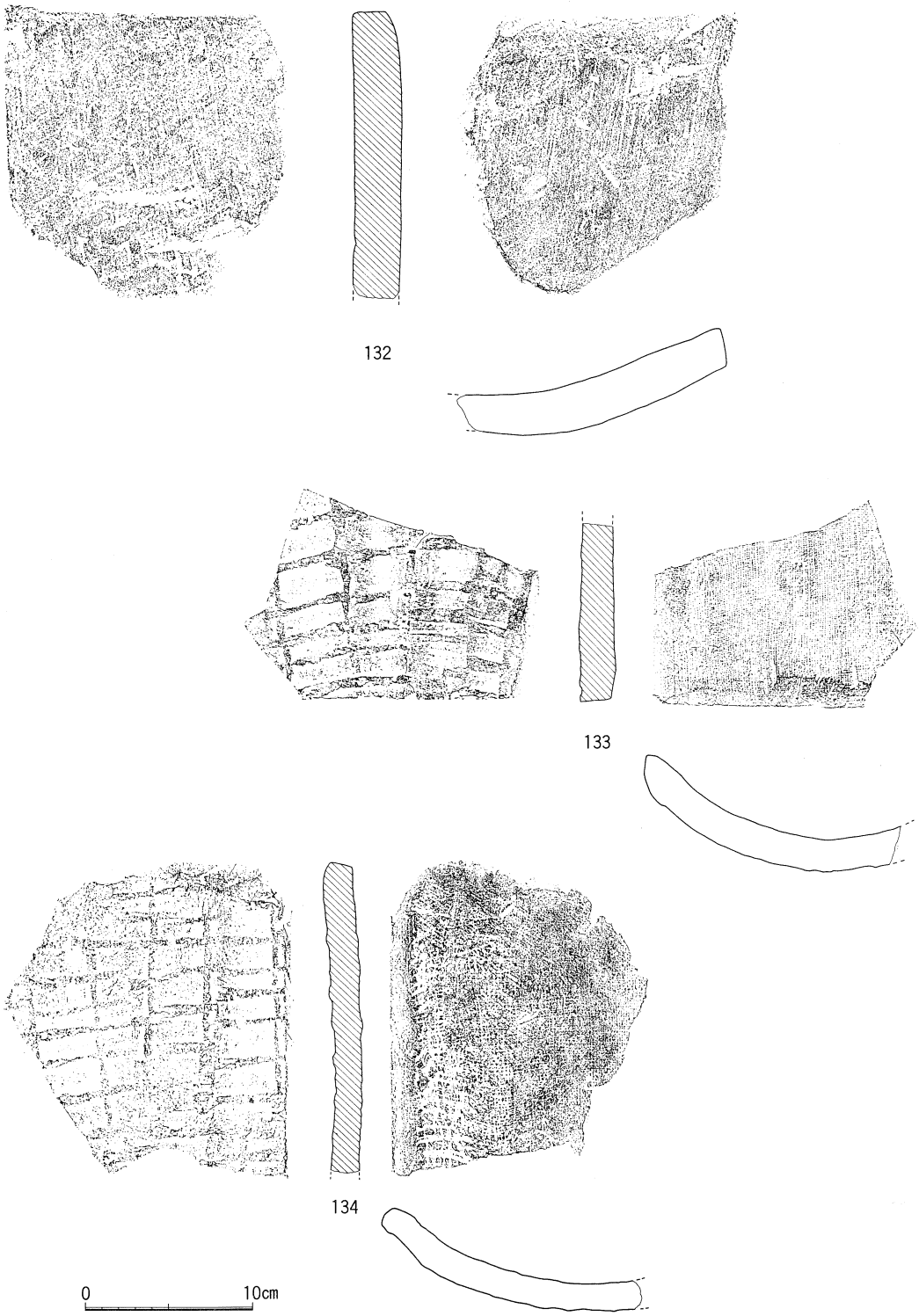
第40図　Ⅰ-d区出土瓦実測図



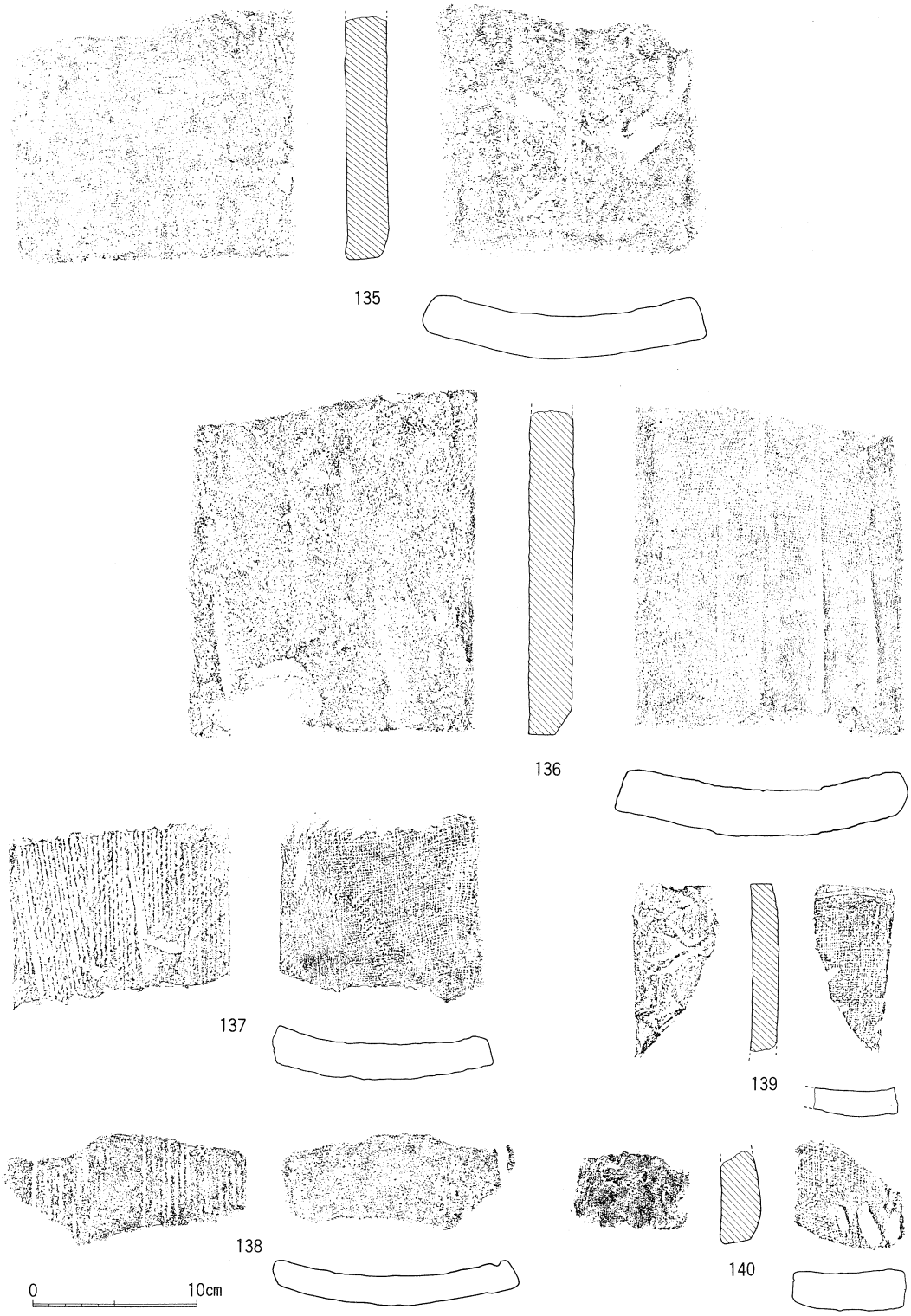
第41図　Ⅰ-d区出土瓦実測図



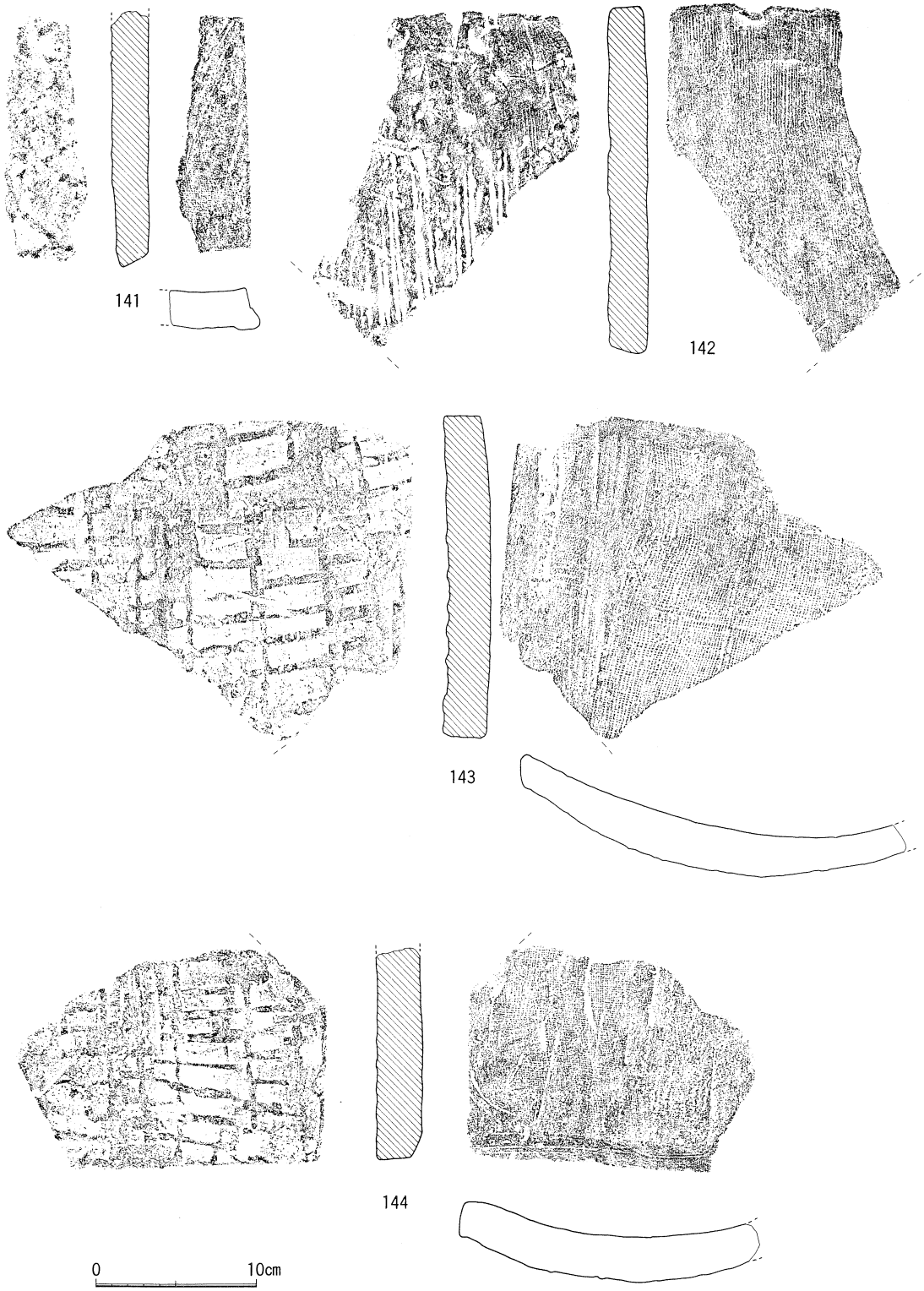
第42図　Ⅰ-d区出土瓦実測図



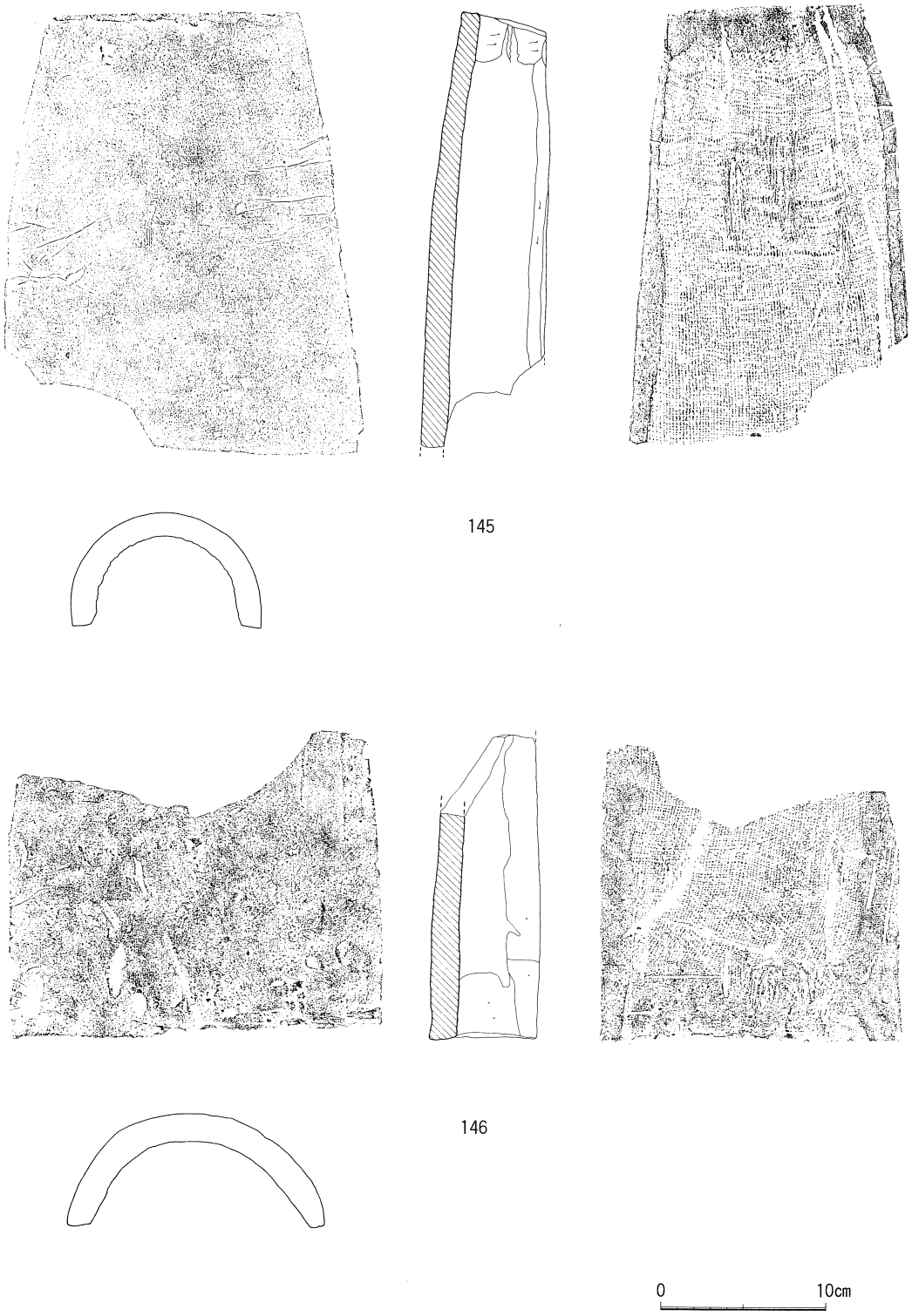
第43図　Ⅰ-d区出土瓦実測図



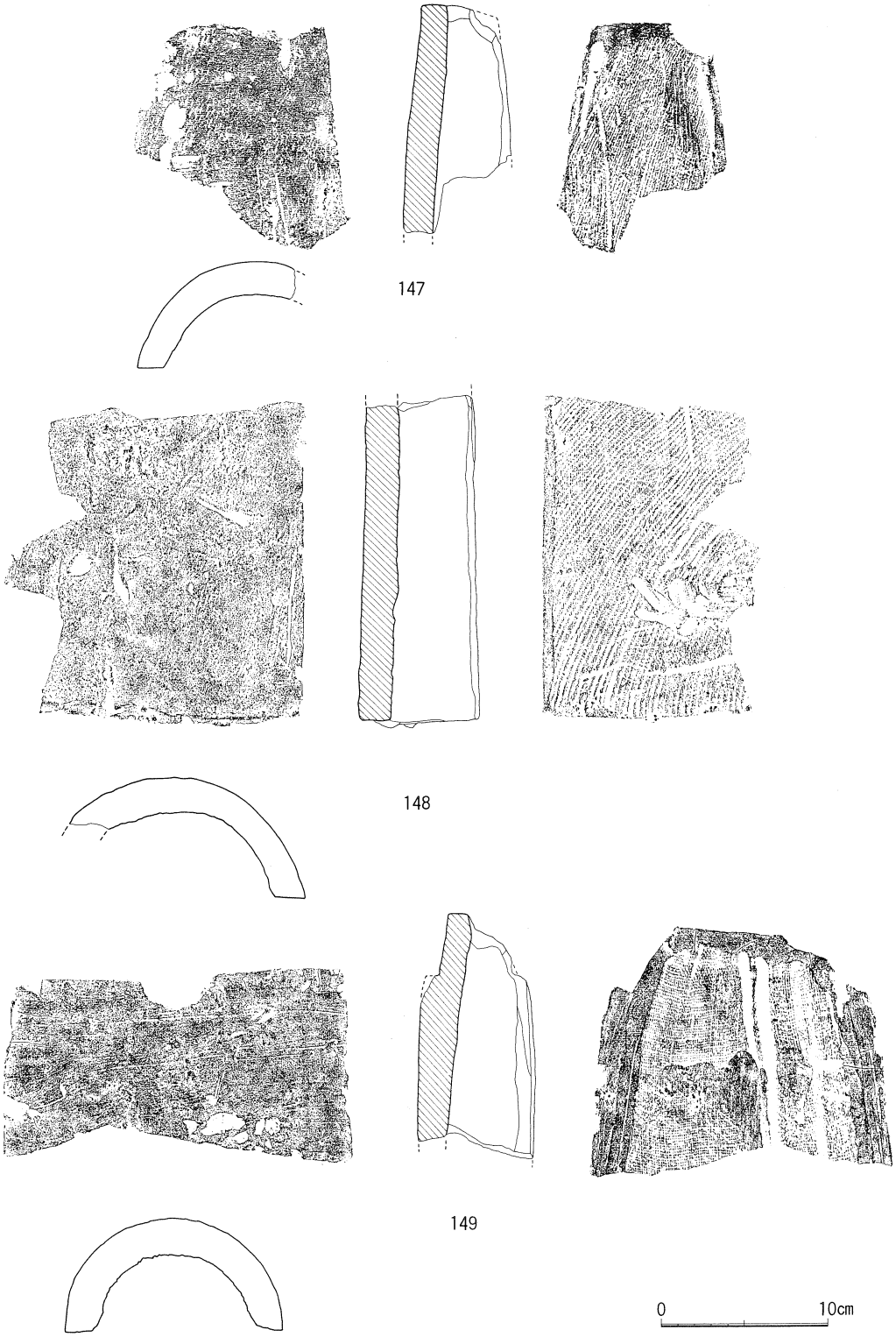
第44図　Ⅰ-d区出土熨斗瓦実測図



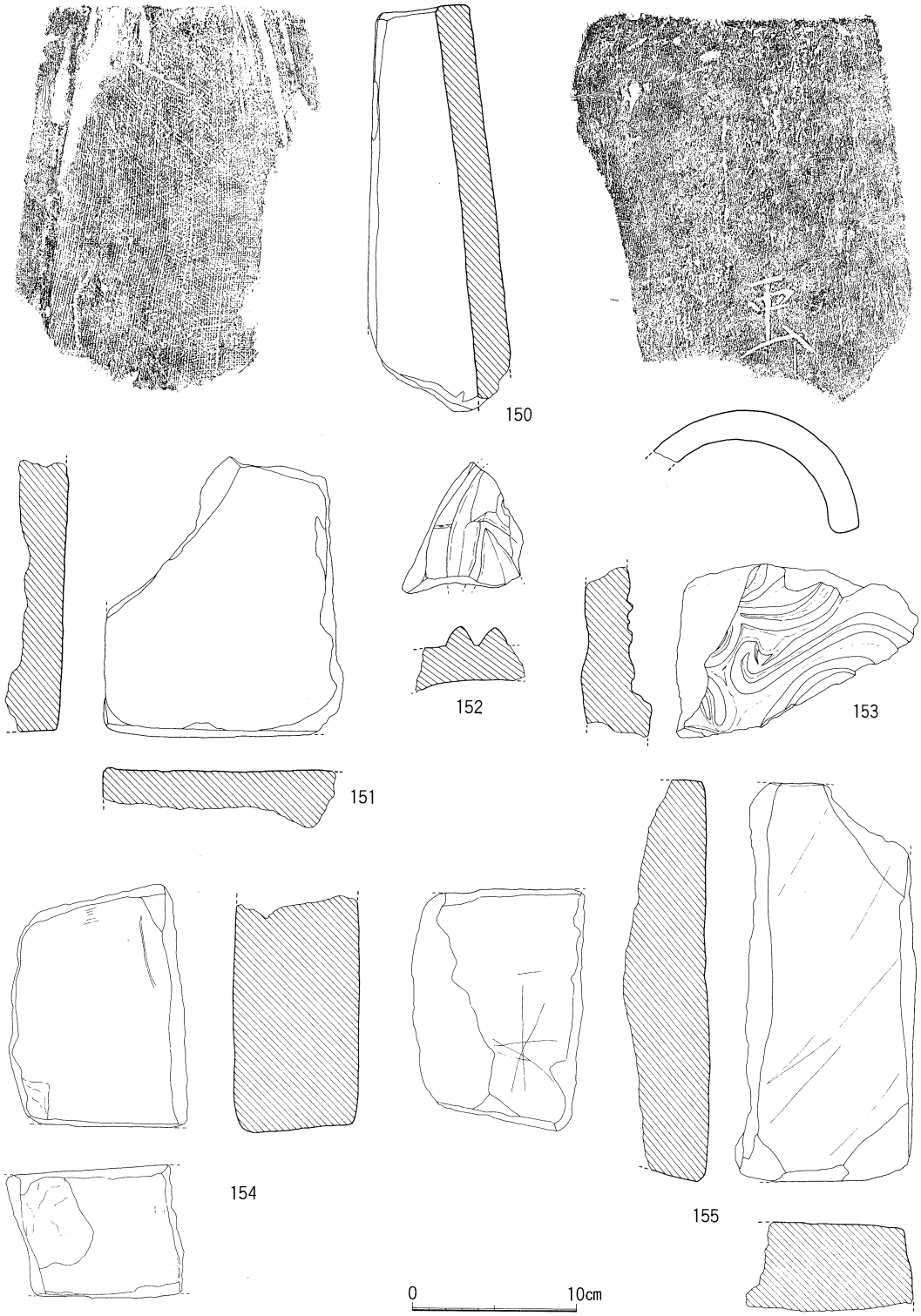
第45図　Ⅰ-d区出土瓦実測図



第46図　Ⅰ-d区出土瓦実測図



第47図　Ⅰ-d区出土瓦実測図



第48図　Ⅰ-d区出土瓦実測図

第Ⅱ調査区

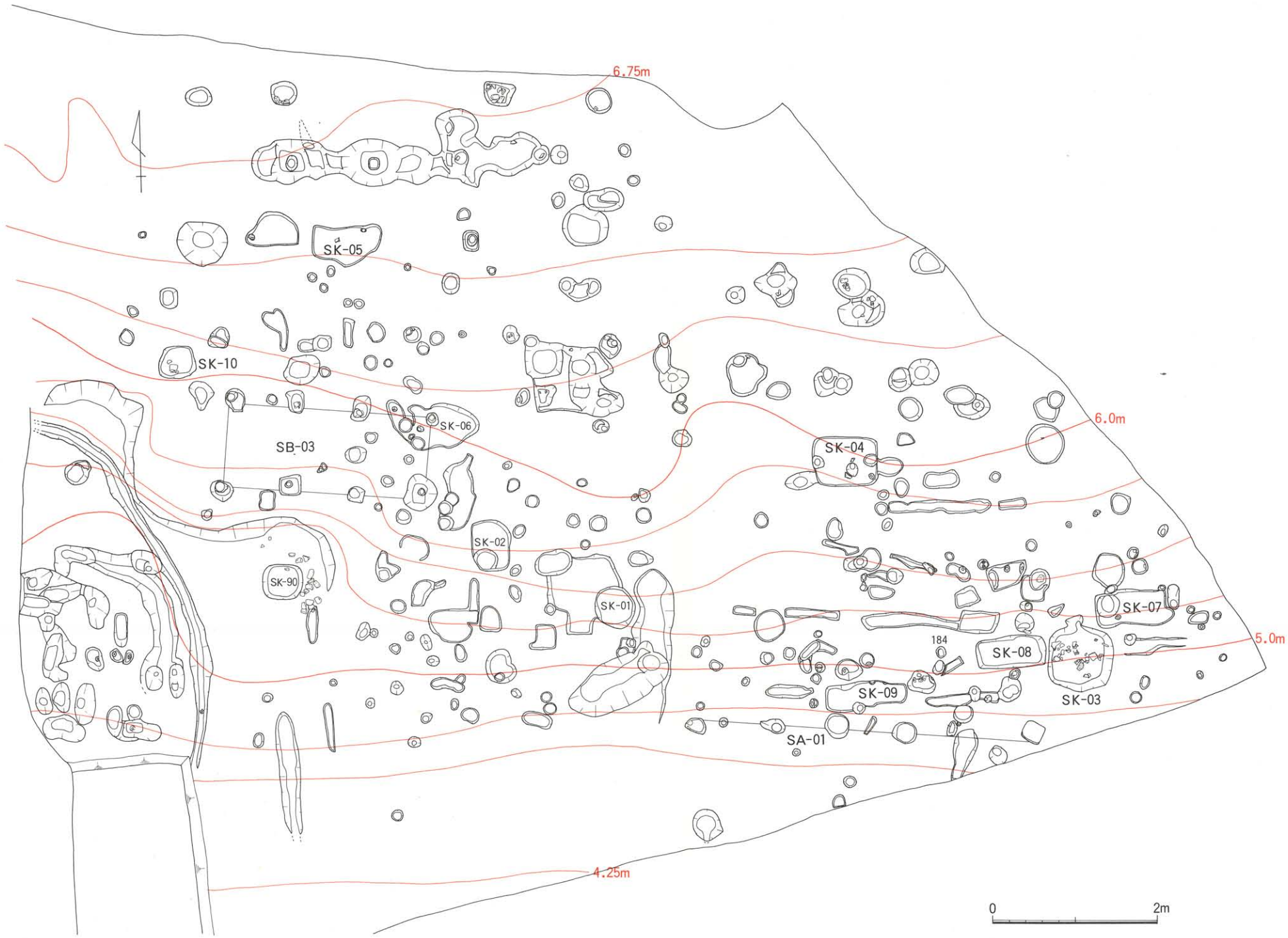
第Ⅱ調査区は，第Ⅲ調査区へ続く丘陵南側斜面の下部分で，上下２段に分かれている。上段は第Ⅲ調査区に続く斜面で，Ⅲ区の南端と約1.5mの段差がある。段の幅は，最大で８mあり，南北の高低差は約２mである。地山面はかなり凹凸が激しく，溝状の落込みも見られた。ここからは，25のピットが検出されたが，その性格は不明であり，遺物の出土も少なかった。下段は，上段南端と約１mの段差を持ち，南に向かって緩やかに傾斜している。下段の最大幅は，約20mあるが，その高低差は３m足らずである。全体に堆積土は少なく，表土の下に暗褐色土が薄く堆積し，その下層に地山面があった。ここからは，200余りのピット群が検出された。これらのピット群は，調査区中央部分と南東部分，南西部分及び西側部分に大別される。

調査区南東部分では，南東端から柵の跡と思われる柱列（SA－01）を検出し，その北側では溝状の遺構が検出された。これらは遺物などから平安時代の遺構と考えられる。この他にも２列の溝状の遺構があり，それらを挟む形でピットが検出されたが，遺構の性格は特定できなかった。また，この南東部分の暗褐色土層からは，平安時代のものと思われる瓦や須恵器・土師器が密集状態で多量に出土し，特にSA－01や溝状遺構の東端付近に集中（第62図）していた。また，地山面は南に向かって傾斜しているが，これらの遺物はほとんど同じレベルで出土し，地山面の傾斜とは必ずしも対応していないため，南側ほど地山面から浮いた状態となっていた。

中央部分では，平安時代のものと思われる建物跡（SB－03）を検出した。また，この部分の南側では，土壙墓３（SK－01，SK－02，SK－90）が検出され，これらの土壙には明灰色土が堆積していた。他の土壙やピットはほとんど，暗褐色土が堆積しており，特徴的な堆積状態を示す。

これらの土壙の内，SK－01からは，人間の歯と銅銭が出土したが，銅銭の銭文は判読できなかった。SK－02からは，熙寧元寳，紹聖元寳など北宋代の銅銭が出土した。ただし，これらの銅銭は，その字体などから日本で模鋳造されたものと思われる。SK－90は，中央西寄りにあり，土壙周辺に石積みが見られた。これらの遺物などから，この土壙は，近世初頭のものと考えられる。

南西部分には，溝状遺構（SD－01）に隔てられた部分があり，その北端で，下段斜面と約40cmの段差がある。この部分では，近世初頭と思われる柱穴を検出した。ここからは，17世紀初頭のものと思われる肥前系皿が出土したことから，この時期の建物跡と考えられる。これは第Ⅲ調査区の横穴が再利用された時期とほぼ一致すると思われ，また，調査区中央付近の土壙墓も同時期と思われることから，これらの遺構に関係する建物跡ではないかと思われる。西側部分は，帯状になっており，ここからは，近・現代のものと思われる柱穴を検出した。



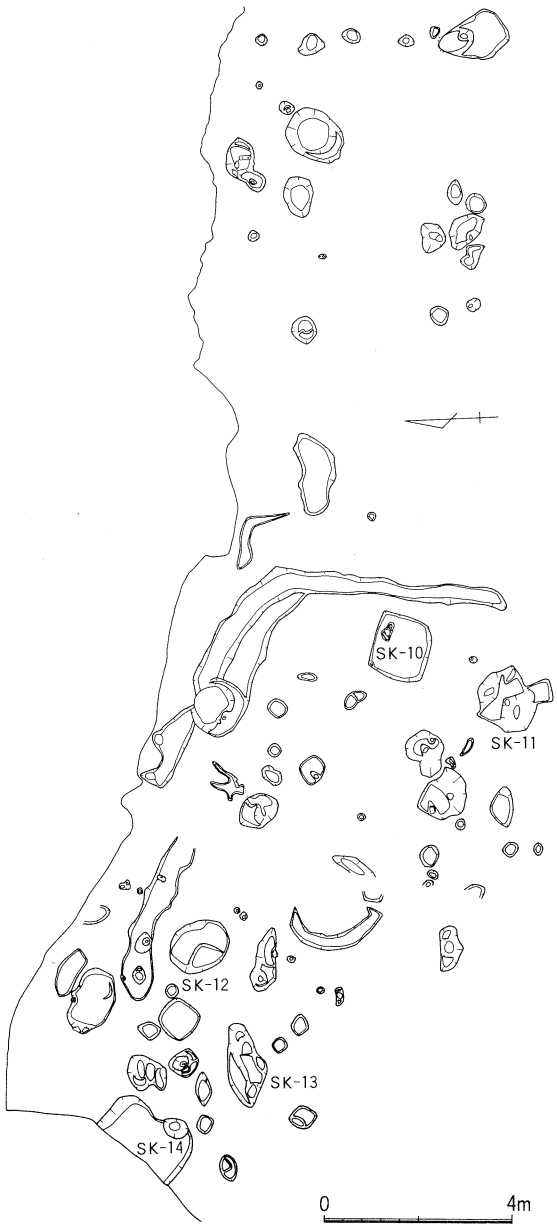
第49図　Ⅱ区遺構全体図

SB－03（第51図）

調査区中央付近で検出した。桁行３間，梁間１間の比較的小さな掘立柱建物跡と思われ，P_1からP_8までの８個の柱穴を検出した。柱間寸法はP_1～P_2が1.75m，P_2～P_3が1.57m，P_3～P_4が1.69mであり，南側桁行P_1～P_4は，5.01mを測る。また，P_5～P_6が1.63m，P_6～P_7が1.63m，P_7～P_8が1.75mあり，北側桁行P_5～P_8は，5.01mを測る。また，東側梁間P_8～P_1は1.98m，西側梁間P_4～P_5は2.04mを測る。P_1は，平面形が不整円形で直径が90cmを測り，SB－03の中で最大であり，底面に直径18cmのピットが穿たれていた。深さは66cmを測る。P_2は，平面形が不整方形で長軸42cm，短軸36cm，深さ45cmを測る。P_3は平面形が不整方形で，長軸54cm，短軸48cm，深さ36cmを測り，底面には直径18cmほどのピットが掘り込まれていた。P_4は平面形が不整円形で，直径が60cmを測る。底面からさらに直径30cmのピットが掘り込まれており，深さは66cmであった。P_5は平面形が不整円形で，直径は48cmを測る。底面に直径24cmのピットが掘り込まれていた。深さは54cmを測る。P_6は平面形が不整長方形で，長軸54cm，短軸36cm，深さ18cmを測る。P_7は平面形が不整長方形で，長軸60cm，短軸42cmを測る。底面に直径18cmのピットが掘り込まれていた。深さは63cmを測る。P_8は，平面形が不整円形で直径30cm，深さ29cmを測る。柱穴内から瓦が出土した。遺物などから平安時代の遺構と思われる。建物の主軸方位はN－101°－Eである。

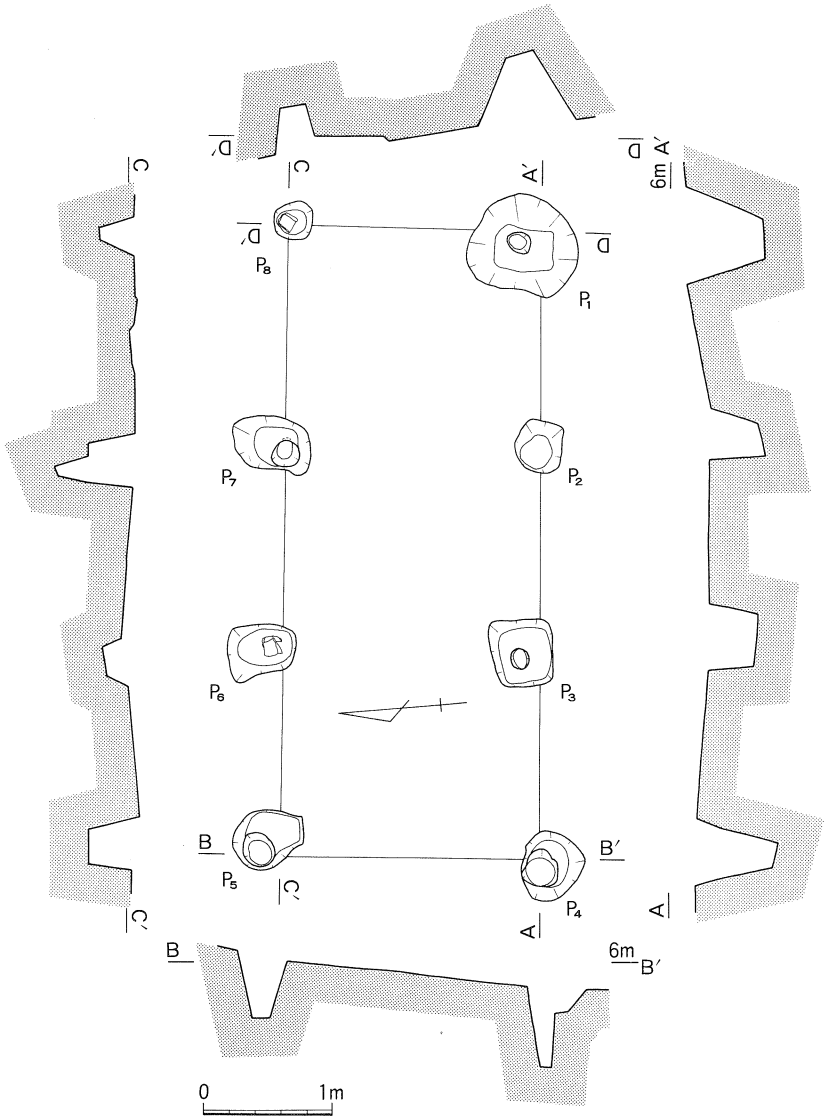
SA－01（第52図）

調査区南東端で検出した。P_1～P_6までの６個の柱穴が検出されたが，その柱間寸法は，P_1～P_2が1.98m，P_2～P_3がやや狭く，1.26mで，P_3～P_4が1.54m，P_4～P_5が1.50m，P_5～P_6が



第50図　Ⅱ区（西側）全体図

1.92mであった。P_1は，平面形が不製長方形で，長軸51cm，短軸48cm，深さ36cmを測る。P_2は平面形が不整長方形で，長軸36cm，短軸21cm，深さ12cmを測る。これは他の柱穴と比較してやや小さく，また柱穴の間隔から考えて，補助的な役割をもった柱の跡と考えられる。P_3は平面形が直径60cmの不整円形で，深さ30cmを測る。P_4も平面形が直径60cmの不整円形であり，深さ60cmを測る。P_5は平面形が不整楕円形であり，長径51cm，短径39cm，深さ18cmを測る。P_6も平面形が不整楕円形で長径51cm，短径33cm，深さ30cmを測る。この柱列は，傾斜面上を横切る形で並んおり，桁行北側と南側とでかなり高低差があることから建物跡とは考えにくく柵の列と思われる。柱列の軸方位は，N－101°－EでありSB－03と同一方位を示している。また，北側に柱列とほぼ平行する溝状遺構が検出されたが，柱列と何らかの関連があった可能性も高い。



第51図　SB-03実測図

SK－01（第53図）

調査区中央付近で検出した。平面形は不整円形で長軸が104cm，短軸が96cmであり，深さは47cmを測る。土層は，一層で明灰色土が堆積しており，土壙の中心のやや北西寄りから，人間の歯と銅銭が出土した。銅銭の銭文は判読できなかった。

SK－02（第53図）

調査区中央付近で検出した。平面形は不整長方形で，長軸124cm，短軸92cm，深さ23cmを測る。土層は，一層で明灰色土が堆積していた。土壙内から銅銭が出土し，銭文が，熙寧元寶及び紹聖元寶と判読できた。その字体などから熙寧元寶は，日本で模鋳造されたものと思われ，紹聖元寶は安南地方で鋳造され輸入されたものか，または日本で模鋳造されたものと考えられる。

SK－90（第53図）

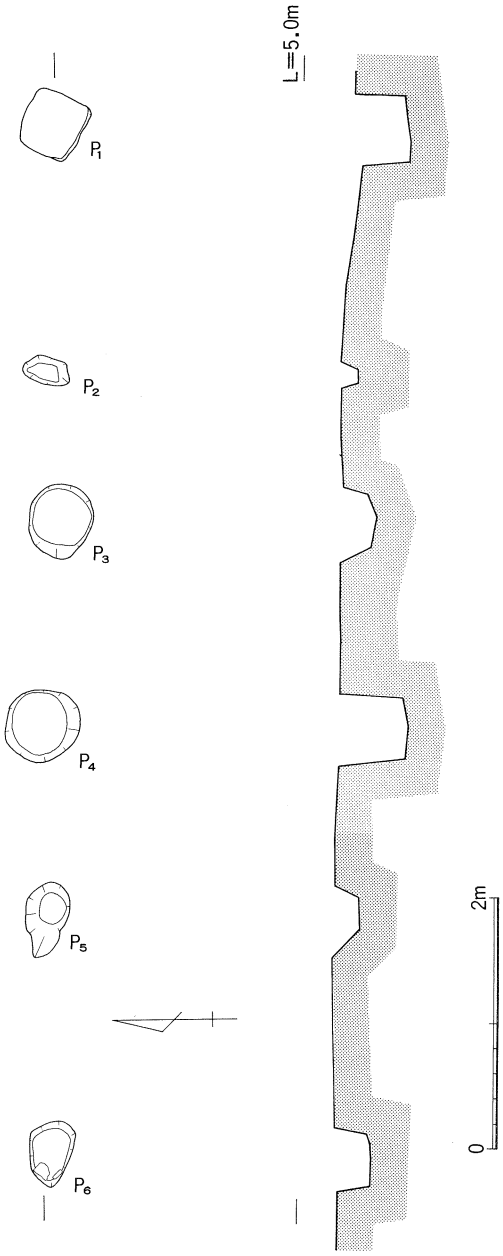
調査区中央西寄りで検出した。平面形は不整長方形で長軸は99cm，短軸は86cm，深さは25cmを測る。土壙の東南の地山面を中心に，長さ10～24cmの自然石による石積が出土した。石の規格はまちまちで，積み方にも特に規則性は認められなかった。土層は一層で明灰色土が堆積していたが，土壙内からは遺物は出土しなかった。

SD－01（第60図）

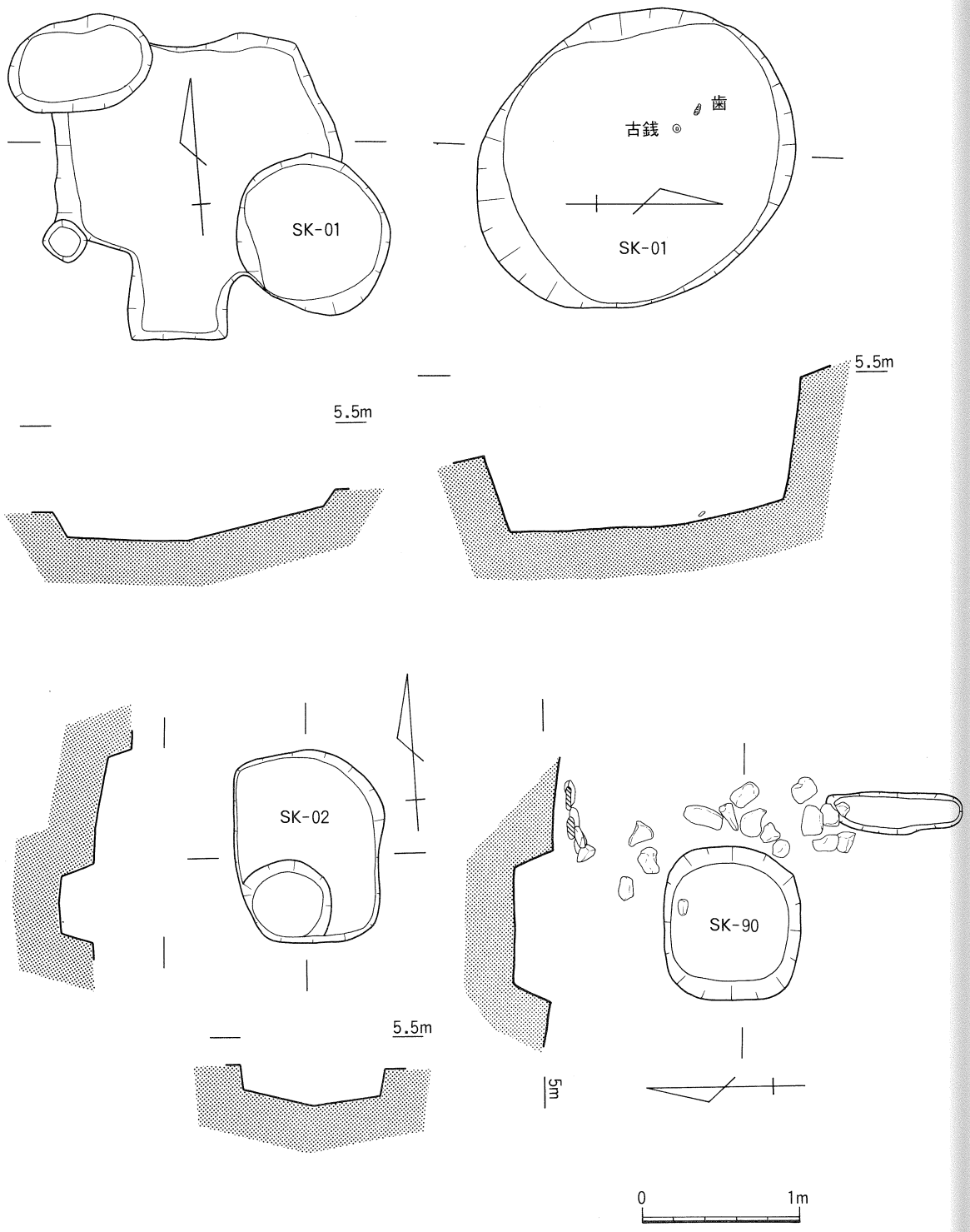
調査区南西部分の近世初頭の柱穴群を囲む形で検出された。北西から南方向に湾曲しながら走り，両端は調査区域外に伸びる。調査区域内では，長さ9.84mを測り，幅は0.20～0.52m，深さは0.13～0.56mを測る。北側ほど溝は深く，南側に行くにつれて浅くなり，南端で最も浅くなる。南端近くから，溝の底面からやや浮いた状態で陶磁器（176）が出土した。これは肥前系皿で，17世紀初頭のものであった。

SK－03（第57図）

第Ⅱ調査区の南東部に位置する土壙で，平面形は方形を呈している。規模は，1.52×1.84m，深さ40mを測る。土壙の覆土は，暗褐色土で須恵器（第55図），瓦（第56図）が出土している。



第52図　SA－01実測図



第53図　SK-01・02・90実測図

SK－03出土遺物（第55・56図）

158，159，160は，須恵器・坏である。坏は，体部が直線的に口縁部へ向け開き気味に立ち上がる。底部外面は，回転糸切り未調整である。いずれも，焼成は，不良で，色調は灰白色を呈している。160は，やや器高が低くなっている。161は，壺の口縁部である。口縁上端部をやや引き上げるようにナデている。口径7.7cmを測る。162は，甕の体部の破片で，外面を平行叩き，内面を同心円叩きの後一部ナデ消している。これらの須恵器の時期は，出雲国庁編年の5形式[註9]以降，9世紀後半頃と思われる。

166～171は，平瓦の破片である。163，164，166～168は，凸面調整が縄目叩き（NB）である。166は，凸面に離れ砂が多く付着しており，縄目が明瞭でない。169，170は，凸面調整が格子叩き（KC）であり，171は，凸面調整が斜格子叩き（KH）である。172～175は丸瓦で，凸面はいずれもナデている。173は，行基式とわかるものである。

SK－04（第57図）

第Ⅱ調査区の東側に位置する，長方形プランの土壙である。1.7m×0.9m，深さ0.16mを測る。

SK－05（第57図）

第Ⅱ調査区の北側に位置する，平面が不整形なプランである。長辺4.1m，短辺2.3m，深さ0.12mを測る。

SK－06（第57図）

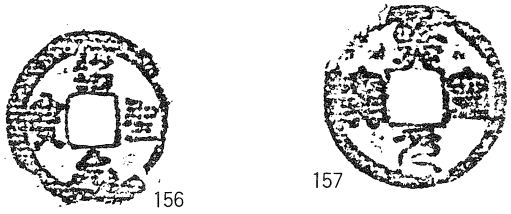
第Ⅱ調査区のほぼ中央に位置する，平面が不整形を呈する土壙である。長辺2.3m，短辺1.0m，深さ8.0cmを測る。

SK－07（第58図）

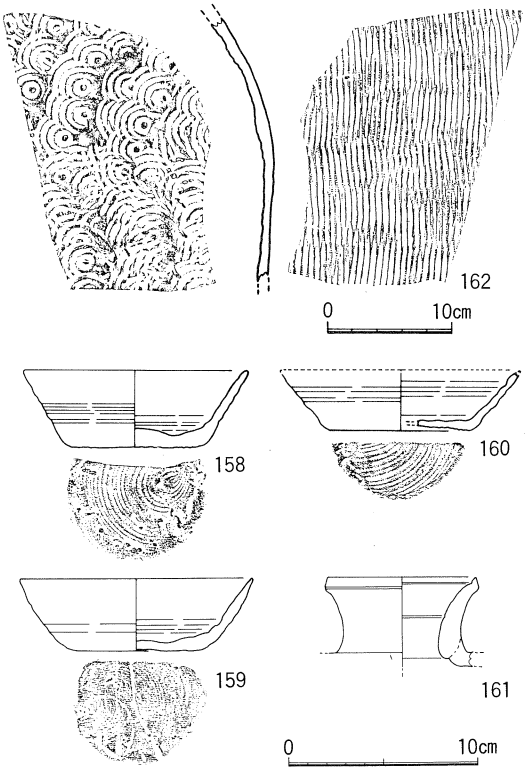
第Ⅱ調査区の東端に位置する，長方形プランの土壙である。長辺1.9m，短辺0.8m，深さ20cmを測る。この土壙は，東西方向に長軸方形を持つ。

SK－08（第58図）

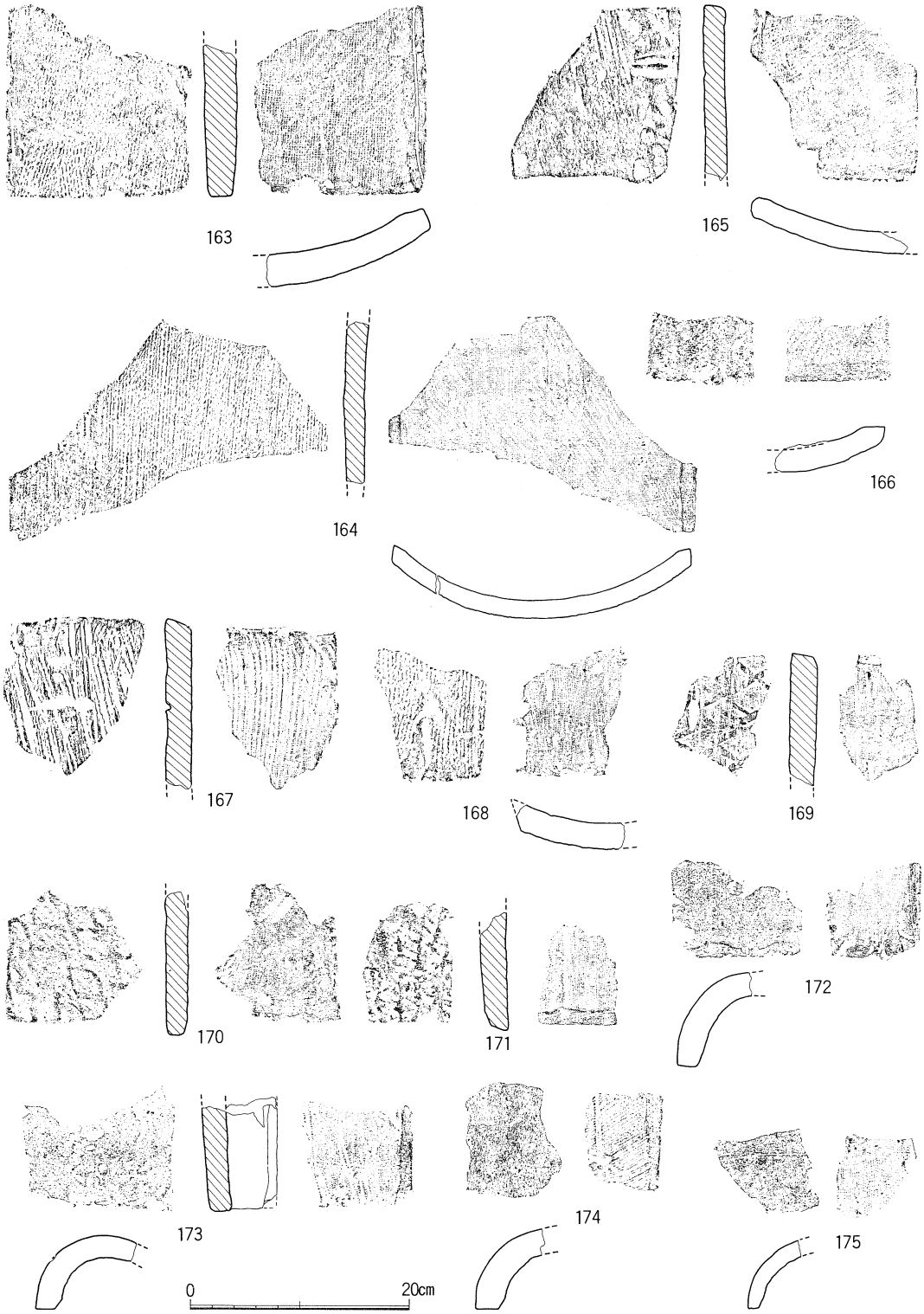
SK－04の西側に隣接して位置している。長辺1.7m，短辺0.74mを測る。



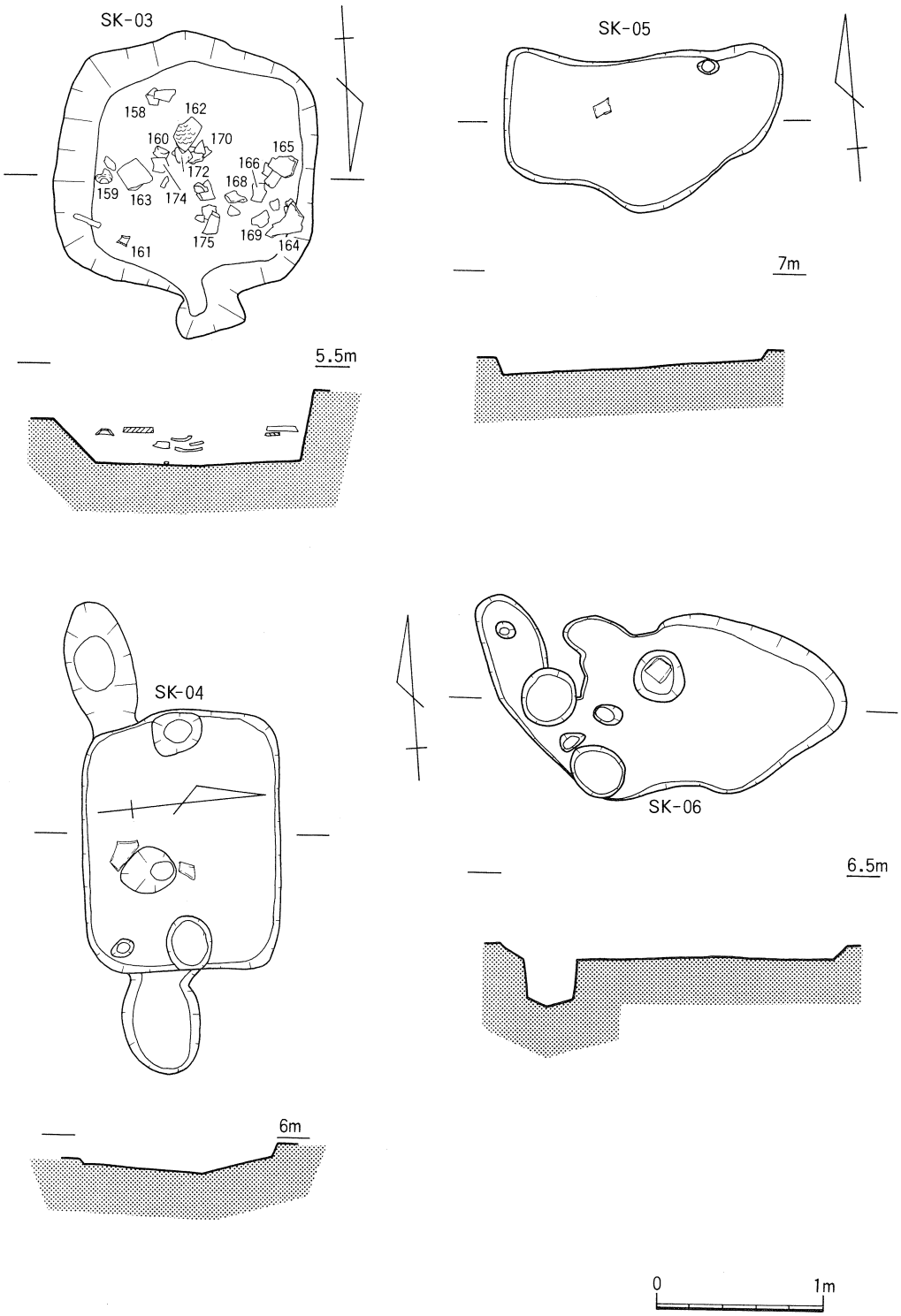
第54図　SK-02出土古銭



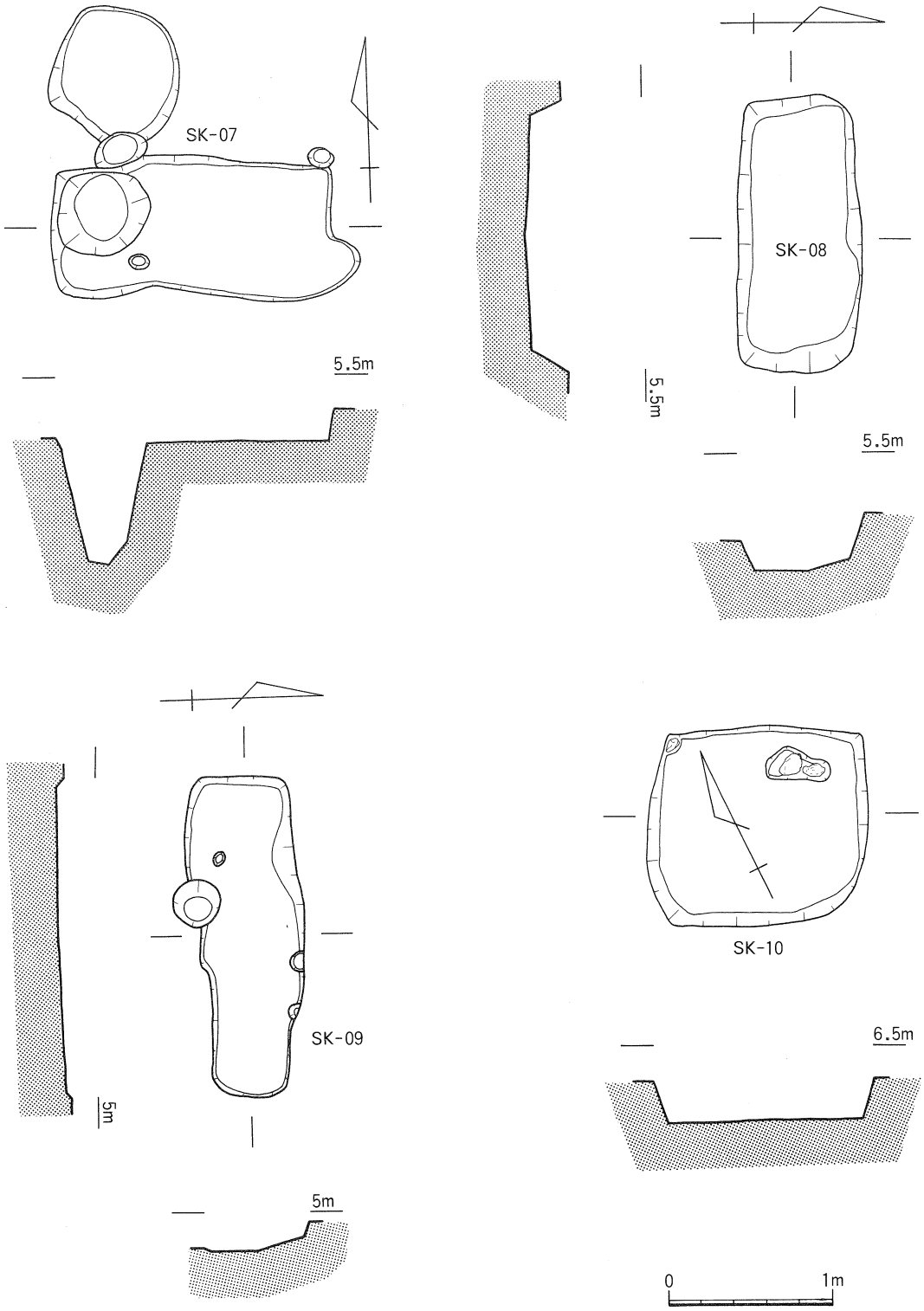
第55図　SK-03出土遺物実測図



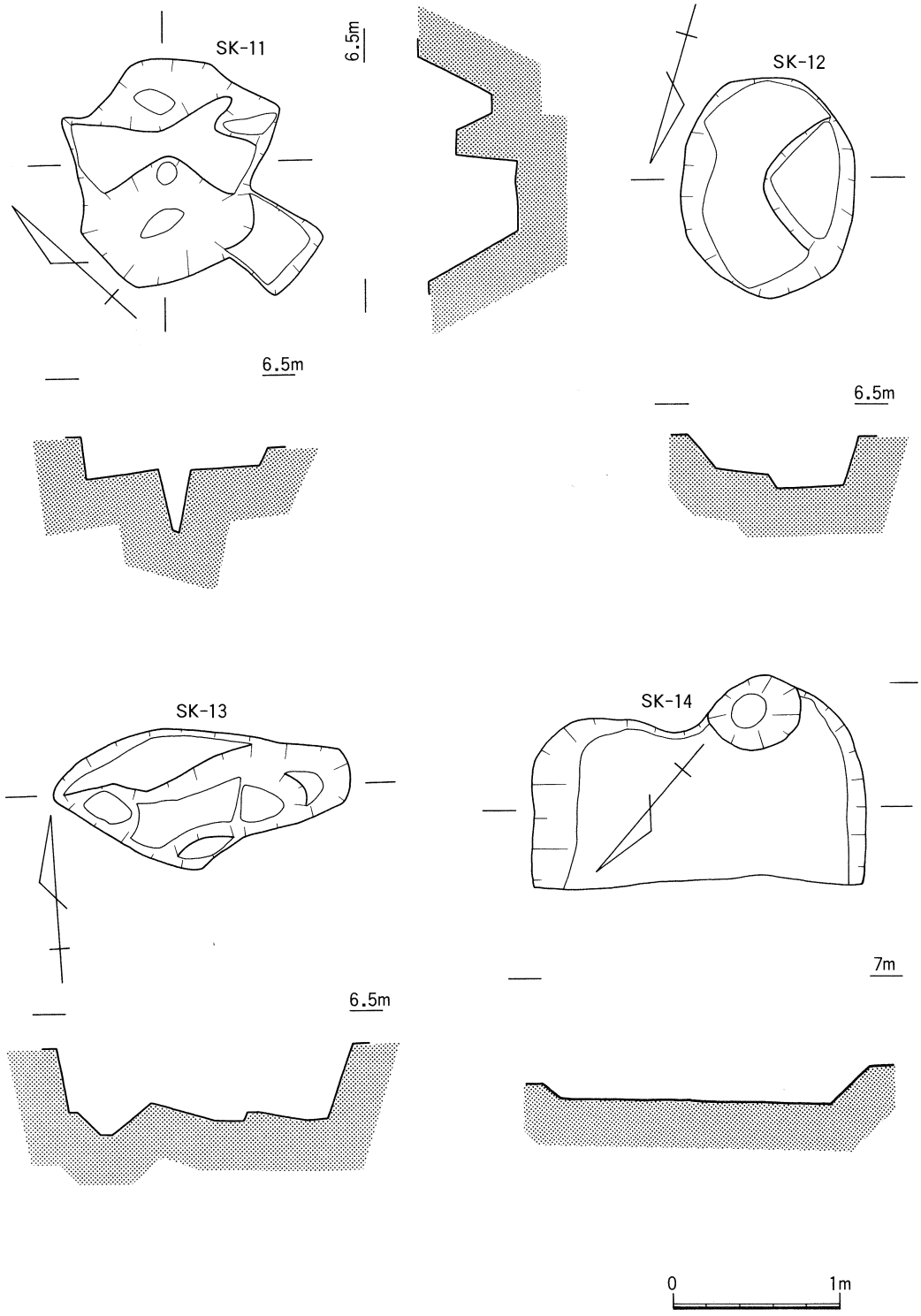
第56図　SK-03出土瓦実測図



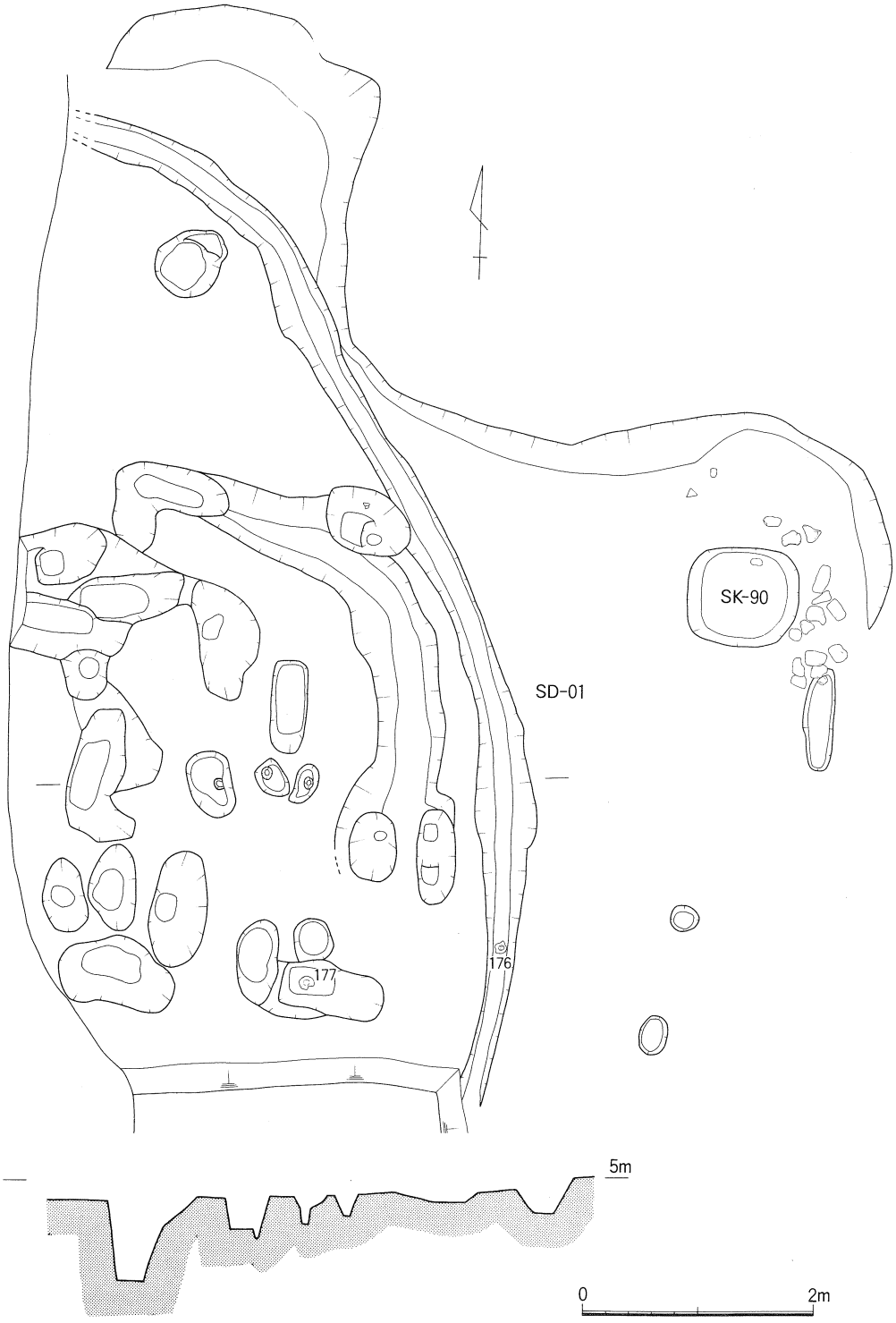
第57図　SK-03・04・05・06実測図



第58図　SK-07・08・09・10実測図



第59図　SK-11・12・13・14実測図



第60図　Ⅱ区南西部ピット，SD-01実測図

SK－09（第58図）

第Ⅱ調査区の東側に位置する長方形プランの土壙である。長辺1.95，短辺0.64m，深さ10cmを測る。

SK－03～04は，覆土に暗褐色土が入り込んでおり，SK－07～08は，長軸方向を同じくし，ほぼ等間隔を置いて位置している。SK－10～14は，第Ⅱ調査区の西側に位置しており，覆土は褐色土となり，時期は近世以降のものと思われる。

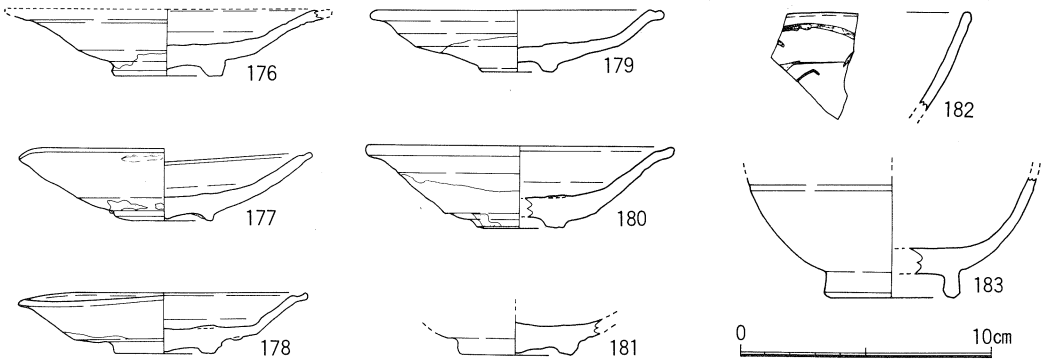
第Ⅱ調査区南西部（第60図）

第Ⅱ調査区の南西部に溝（SD－01）が孤状に位置している。この溝の南西側に，溝（SD－02）が「L」字状に位置している。この溝に接し，これより南西側にピットを22個検出している。このピットは，深さが20cm～74cmとなり，柱穴となるピットもあると思われるが，規格性は不明であった。また，このピットの西側は，近年まで宅地となっており前回調査の時点ではこのピットの続きは検出していない。

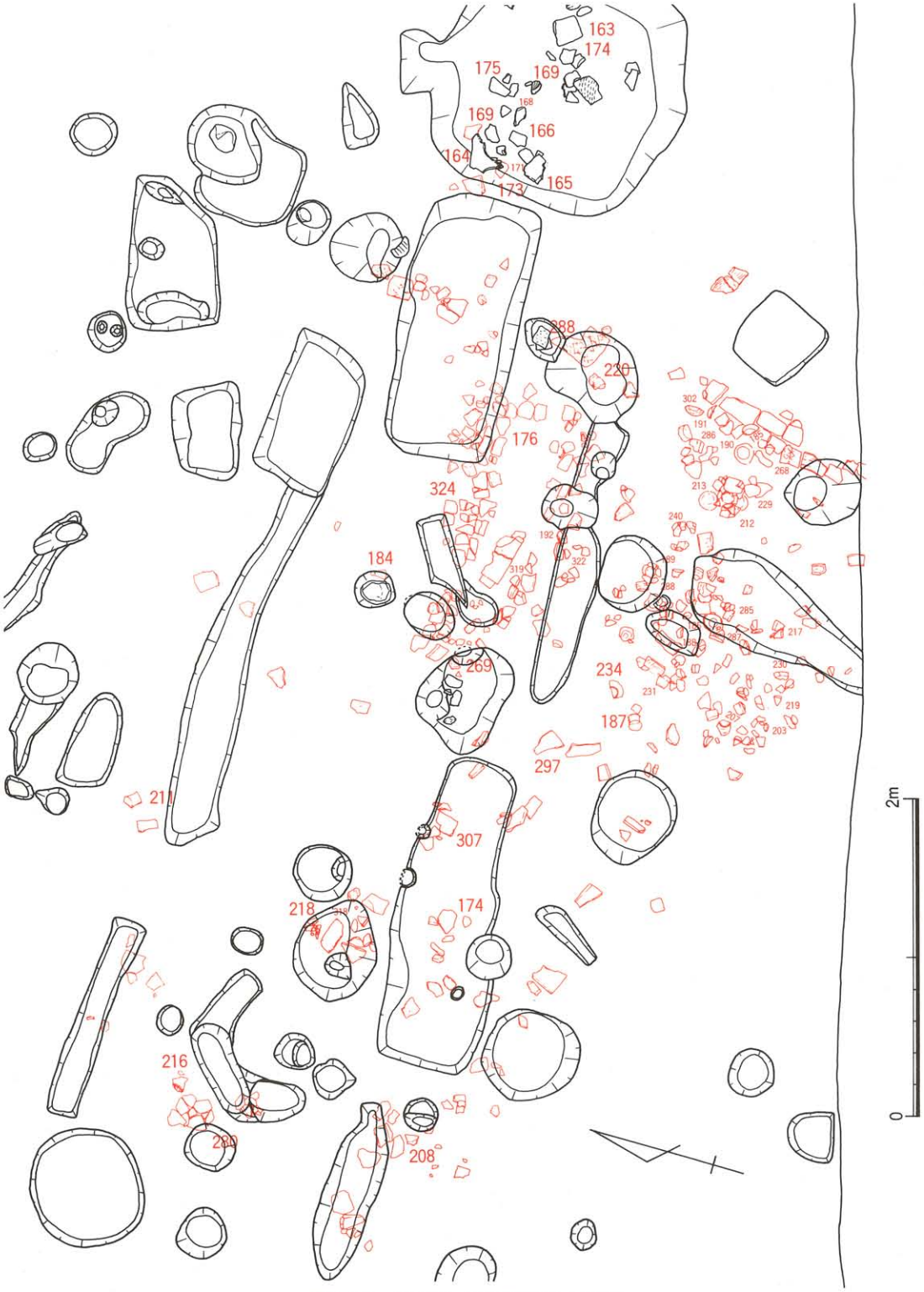
SD－01内から，176の肥前系皿が，ピット232から177の肥前系皿が出土しており，このピット・溝の時期は，近世初頭の頃と考えられた。

南西部出土遺物（第61図）

176～181は，肥前系皿である。176～180は，肥前系，砂目積みの深皿である。177は，口縁端部をやや外反させ，端部内側が浅く凹線上にめぐっている。178は体部途中で折曲して口縁部に至り，体部は直線的である。180は，口径12.3cm，器高3.2cmとやや高いものであり，体部に丸味を有している。これらの肥前系皿の時期は，砂目積みのものであり1610年～1630年の間のものとされている。182は，中国製青磁・碗の口縁部である。外面に雷文とその下に線描蓮弁文の一部が見られる。時期は，15～16世紀にかけてのものである。183は，中国製青磁・碗で14世紀末～15世紀中頃にかけてのものである。181は，肥前系・胎土目積みの皿であり，Ⅱ区西側のピットより出土している。砂目積みの皿より古い時期のものである。



第61図　Ⅱ区南西部出土遺物実測図



第62図　Ⅱ区南東部遺物出土状況

第Ⅱ調査区出土遺物（第63～68図）

63は，ピット中より半截された状態で出土している。底部外面は，外転糸切りで高台の付く壺である。

坏（185～220）　坏は，高台の付かないもの（185～204），高台の付くもの（206～220）である。201～204は，体部が内湾気味に立ち上がり，口唇部が直立か外反する。底部外面は，回転糸切り未調整である。185～199は，体部が斜め上方へ直線的に開き口縁部へ至る。器壁は全体的に薄く，色調は灰白色を呈し，焼成はやや不良である。底部と体部の境で破損するものが多く見られた。206～218の高台の付く坏は，体部が口縁へ向け直線的に立ち上がるものである。高台は，底部の外周沿いに下方へ向いている。217は，極めて大きなもので，口径17.5cm，器高8.0cmを図る。

皿（221～240）　皿は，高台の付くもの（221～224）と，高台の付かないもの（225～240）がある。221～224は，口径16.4～19.2cm，器高3.1～3.8cmを測り，高台のやや高いものである。225～240は，口径12.9cm～15.6cm，器高2.0～2.7cmを測る。225，232～235，237，240は，体部が直線的に開く形態のものである。226，228～230，239は，体部がやや外反気味に立ち上がるものである。高台の付かない皿は，いずれも焼成がやや不良で，色調は灰白色を呈している。

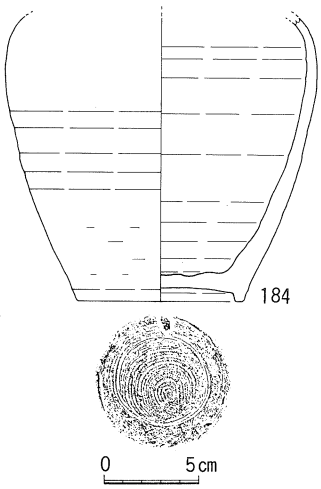
蓋（241～247）　241は天井外面に偏平なつまみの付くものである。241～245，247は，天井外面に回転糸切り跡が残り，天井の周囲にヘラケズリを施している。246は，口径25.2cmと極めて大型の蓋である。

甕（248～266）　248は，口縁部で外面上半に波状文が入り，端部は折曲し，上方へ向いている。251～264は外面に平行叩き，内面に同心円叩きを行った後を一部及び全面をナデている。266は，平底の底部で外面にカキ目調整，内面はナデている。250は，頸部から体部にかけての破片で体部外面に格子状の叩き目を行っている。

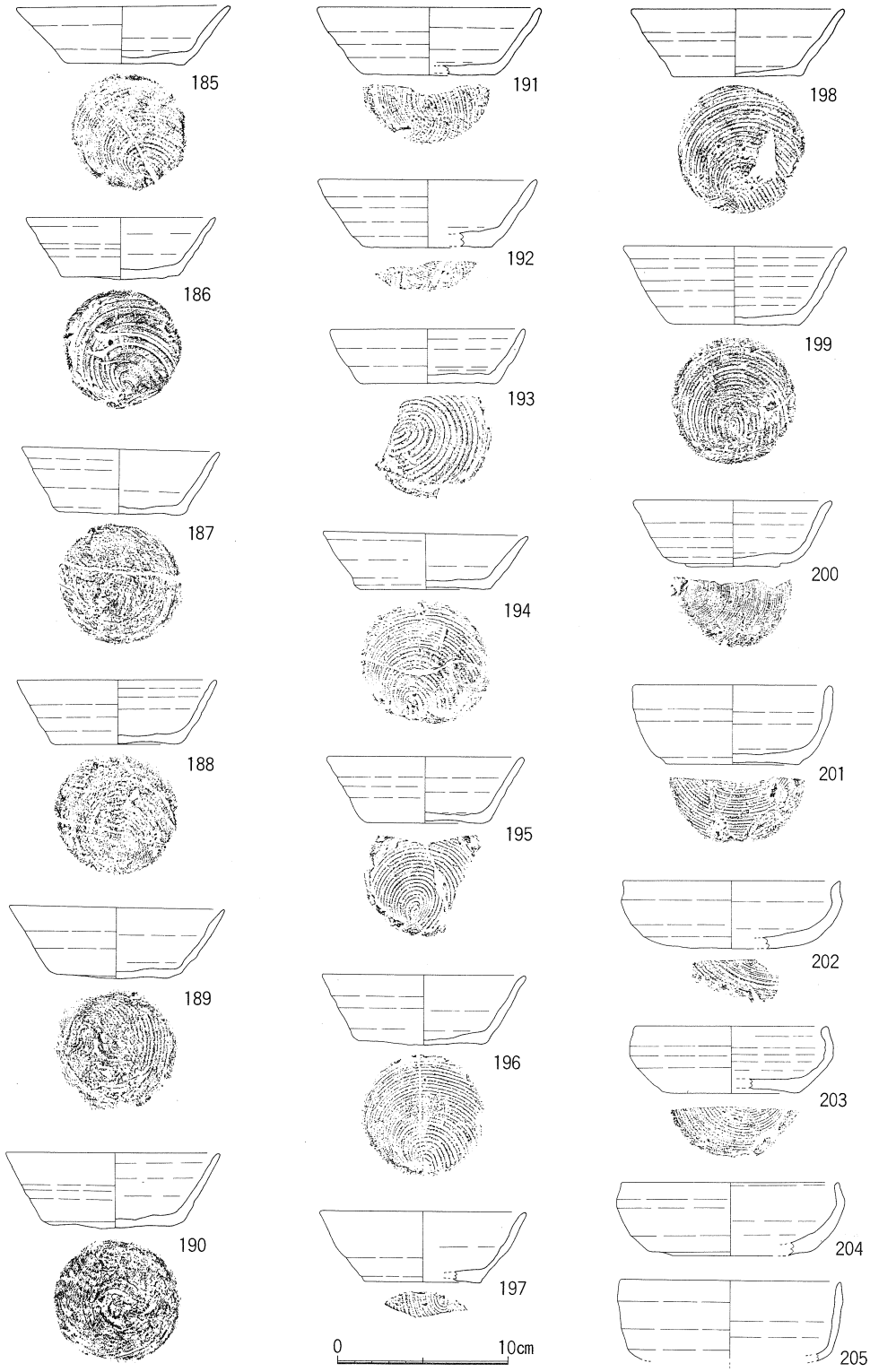
壺（267～276）　267，268は口縁部で，端部が折曲し上方へ伸びている。269，270，273は平底の底部で外面をナデている。274，275は同一個体と思われ，底部外面に回転糸切りを行っている。281は，灰釉の双耳壺の耳の部分である。胎土は，灰白色できめが細かい。

鉢（277～279）　口縁部の形態が外反，直立と異なり，底部の形態は不明である。

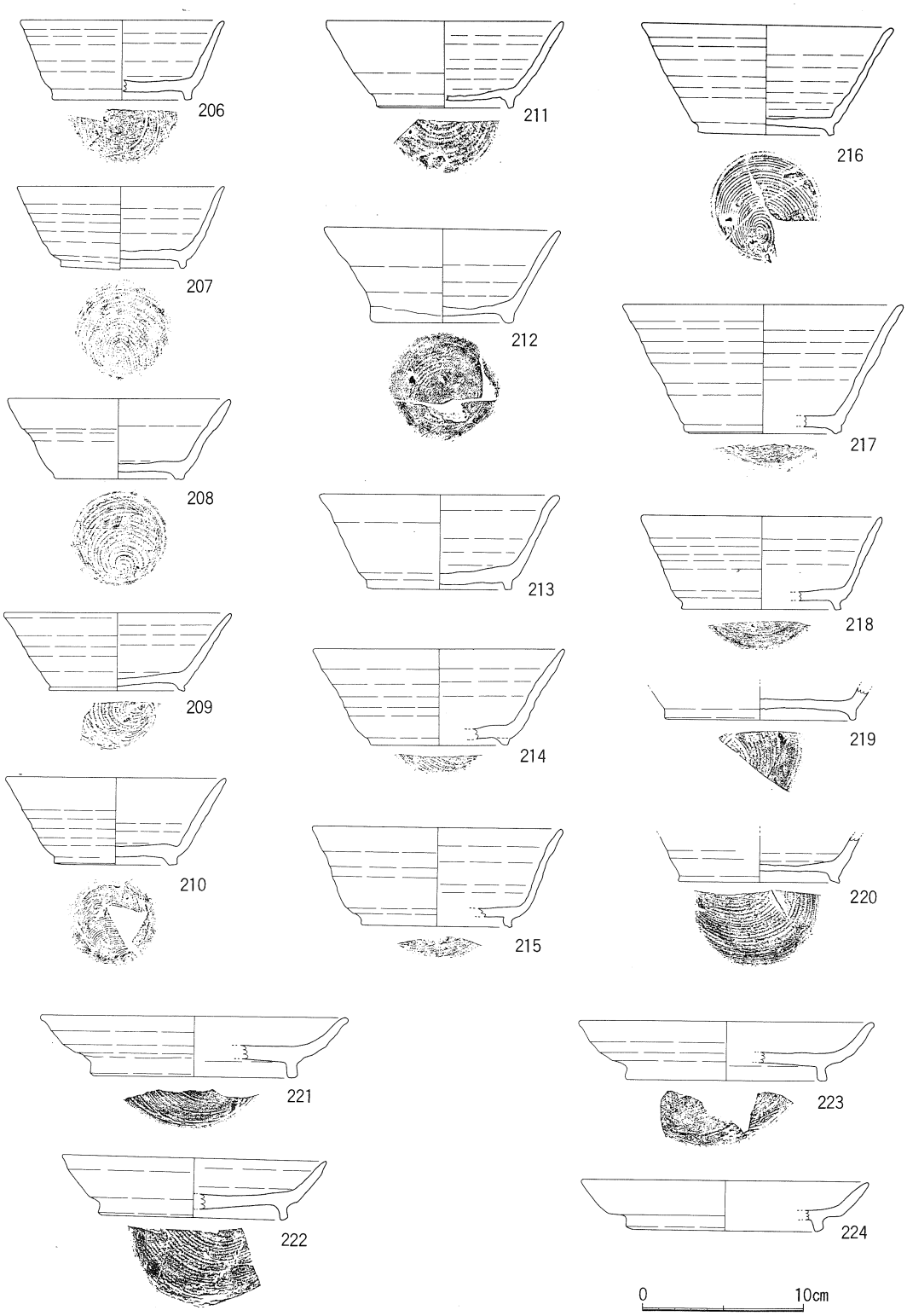
土師器（282～287）　282は，土師器，坏で底部外面に指頭によるナデ，口縁部ヨコナデを施す。283は，製塩土器で，



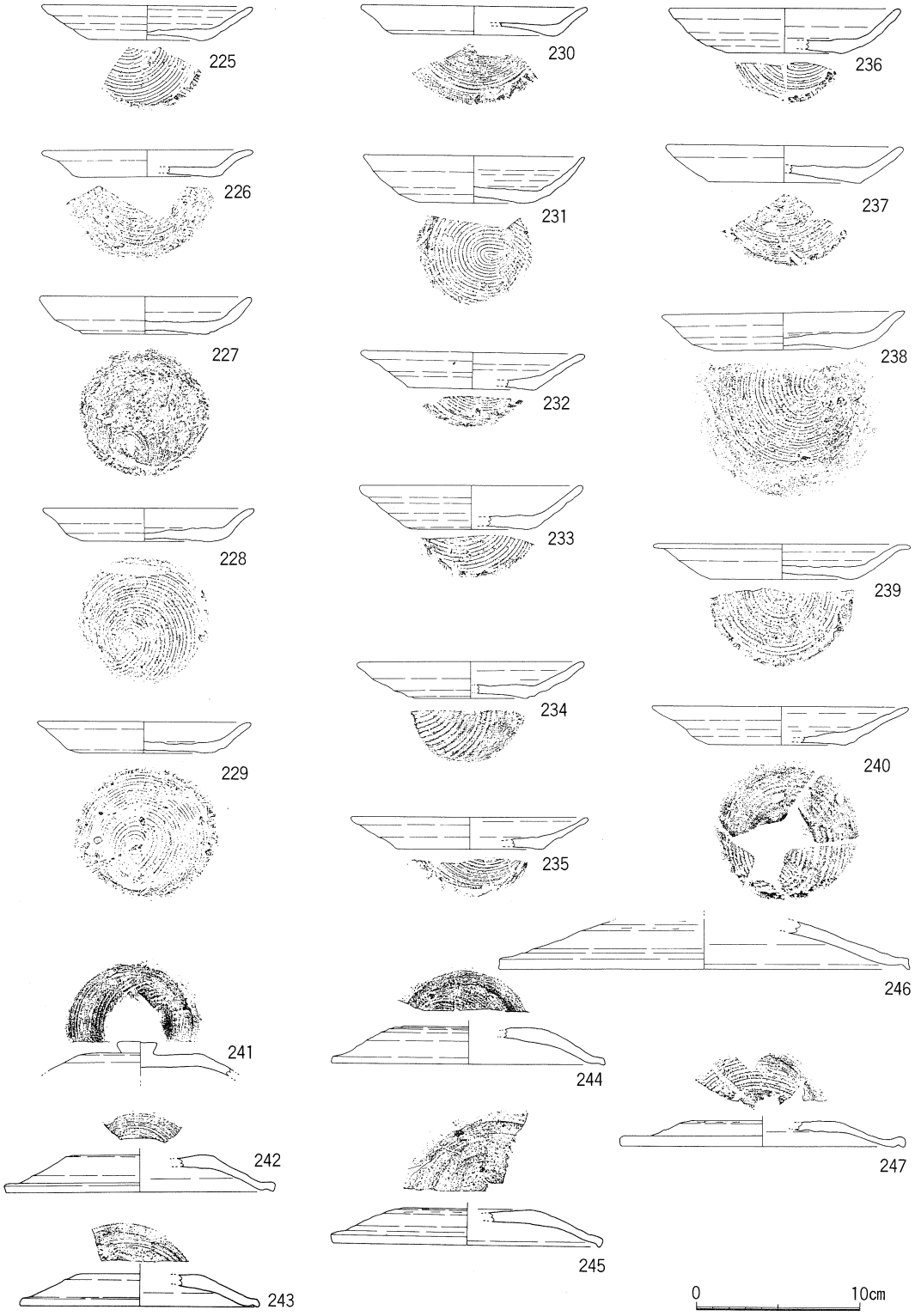
第63図　Ⅱ区南東ピット出土須恵器



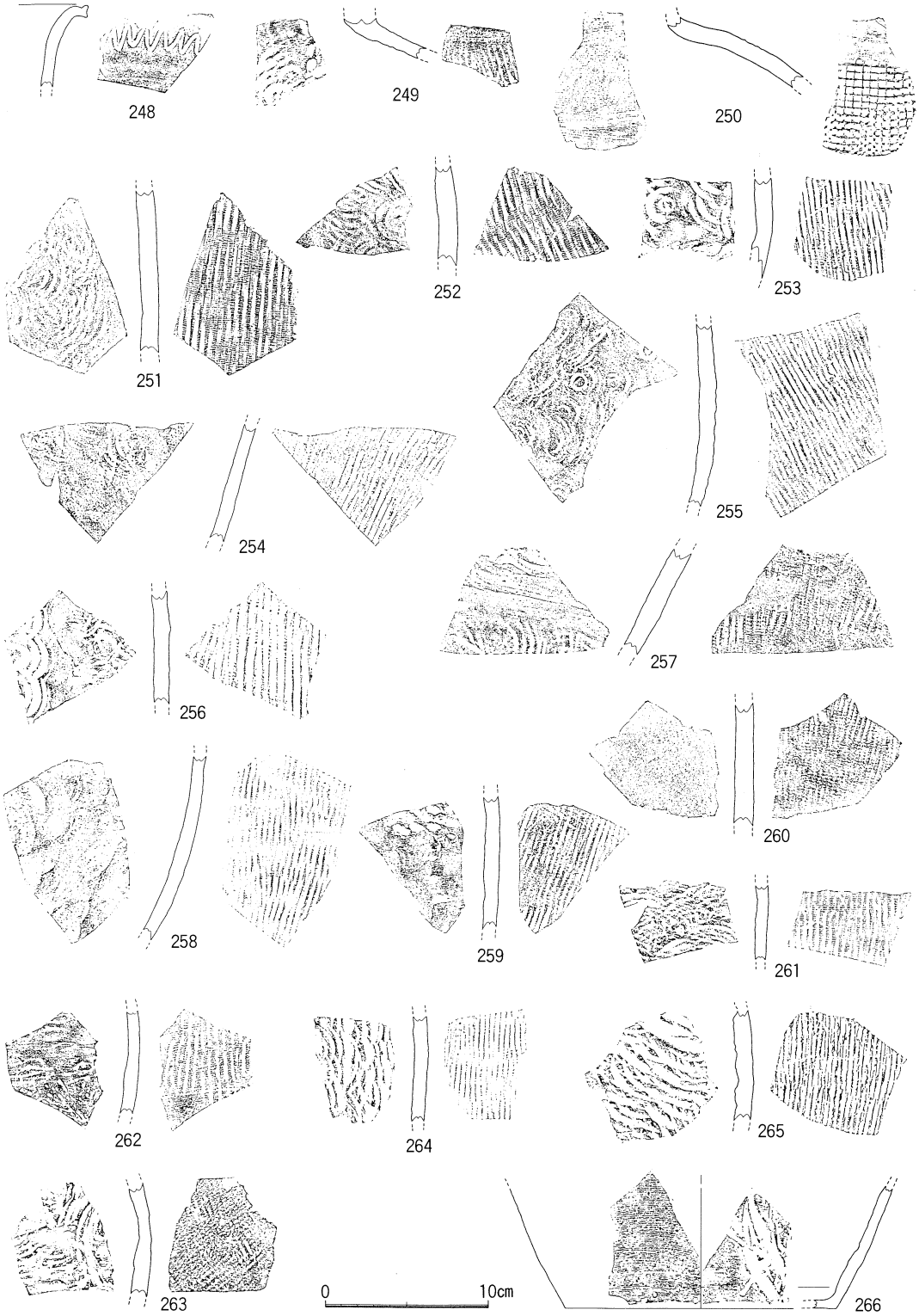
第64図　Ⅱ区南東部出土遺物実測図



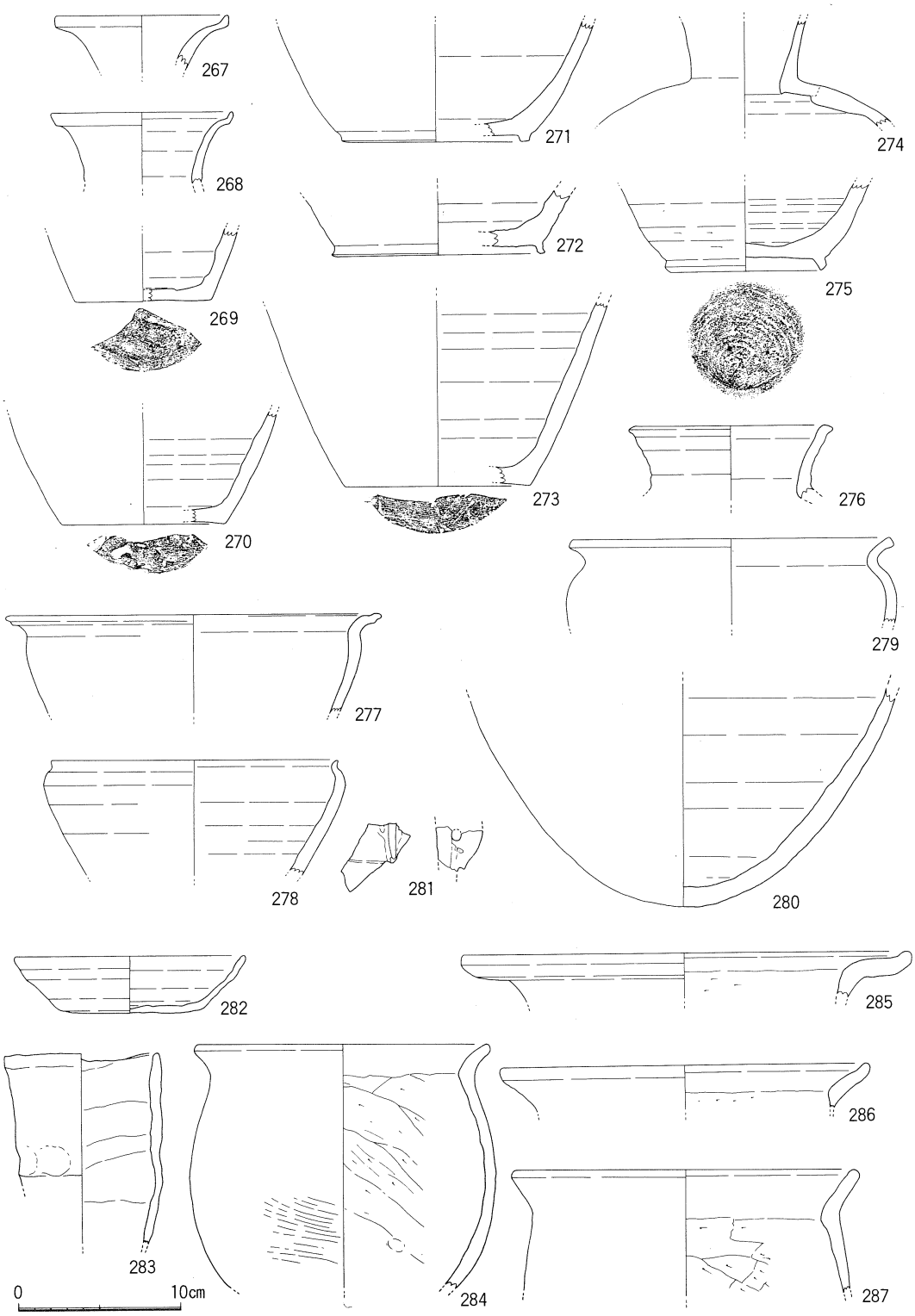
第65図　Ⅱ区南東部出土遺物実測図



第66図　Ⅱ区南東部出土遺物実測図



第67図　Ⅱ区南東部出土遺物実測図



第68図　Ⅱ区南東部出土遺物実測図

赤色を呈し，胎土中に褐色の粒子を含む。284～287は甕である。

これらの遺物の時期は須恵器坏（201～204），皿（221～204），蓋（241～247）が国庁編年第4形式，[註10] 坏（185～199，206～220），皿（225～240），壺（267～275）が国庁編年第5形式[註11]以降，竹矢町神田遺跡[註12]，長嶺土壙墓[註13]出土須恵器と同時期の9世紀後半と思われる。須恵器，甕は，250を除く他のものが，9世紀後半の時期と考えられる。

第Ⅱ調査区出土瓦（第69～74図）

軒平瓦（109，288，290～293）　出雲国分尼寺の分類[註14]によると，109，290，291が第一類で創建寺の瓦とされるものである。瓦当は花文と唐草文の一部が残っており，線の表現も繊細で花文が方形に近い形となっている。いずれも顎を作り，焼成は須恵質の良好なものである。288，292は第四類である。瓦当の文様が斜格子状の叩きにより表現することから，第Ⅰ調査区で分類した第四類－2に含まれる。両者とも顎はなく，広端面から瓦当部へかけて序々に厚くなっている。288は凸面に斜格子叩き（KF）がなされている。叩きは，幅5～6㎝の縦長の叩き具を使用している。焼成は，不良で，色調は灰白色を呈しておりやや軟質のつくりとなっている。292も焼成は不良である。

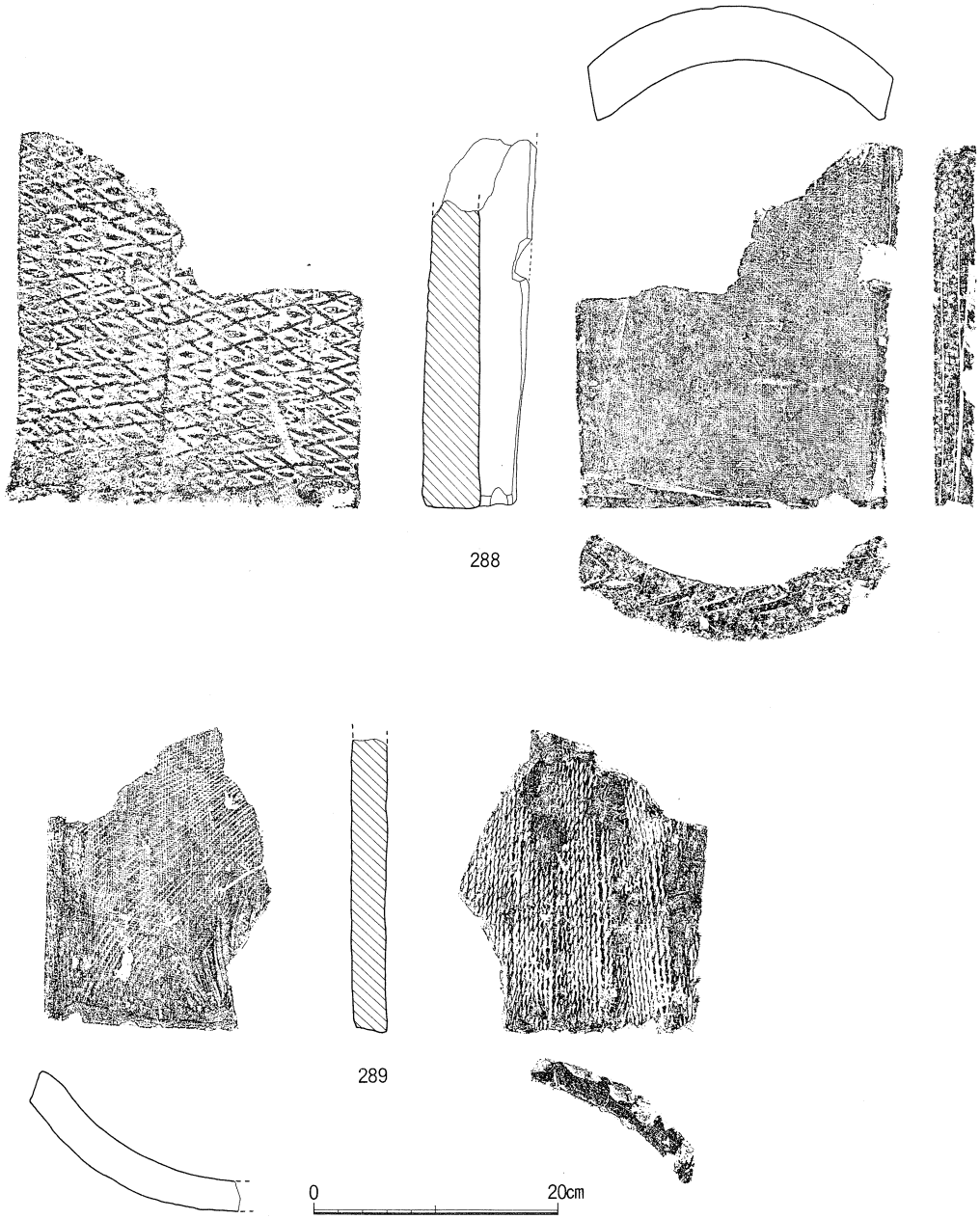
軒丸瓦（108，294～296）　出雲国分尼寺の分類によると，295，296が第二類，294が第三類，108が第5類に含まれる。296は，瓦当部の上半の破片であり瓦当筒部端面との接合部からはずれている。294は珠文が大きく，それぞれの間隔があいている。108は，中房に花弁が表現されるものである。これらは，いずれもが焼成が不良である。

平瓦（289，299～308，310～318）　凸面調整が縄目叩きと格子叩きの2つに別れる。289，299～304，307，308は縄目叩きのものである。289，299，301が通常の縄目叩き（NB），300，304，307，308が横方向に叩かれた縄目（YNB）で離れ砂が付着している。302は太い縄目叩き（NA）の後を一部ナデている。303は，通常の縄目の中に深いものを含む叩き（NB2）であり，凹面を一部ナデている。310～318は，凸面格子叩きの平瓦である。311，317が斜格子叩き（KF）であり，311は厚みがあり軒平瓦の可能性もある。310は細かな斜格子の深い叩き（KJ）である。313は細かな斜格子叩き（KF）で，314は細かな格子叩き（KG）である。316は，大きな正格子の叩き（KI），318は，大きな格子叩き（KA）である。

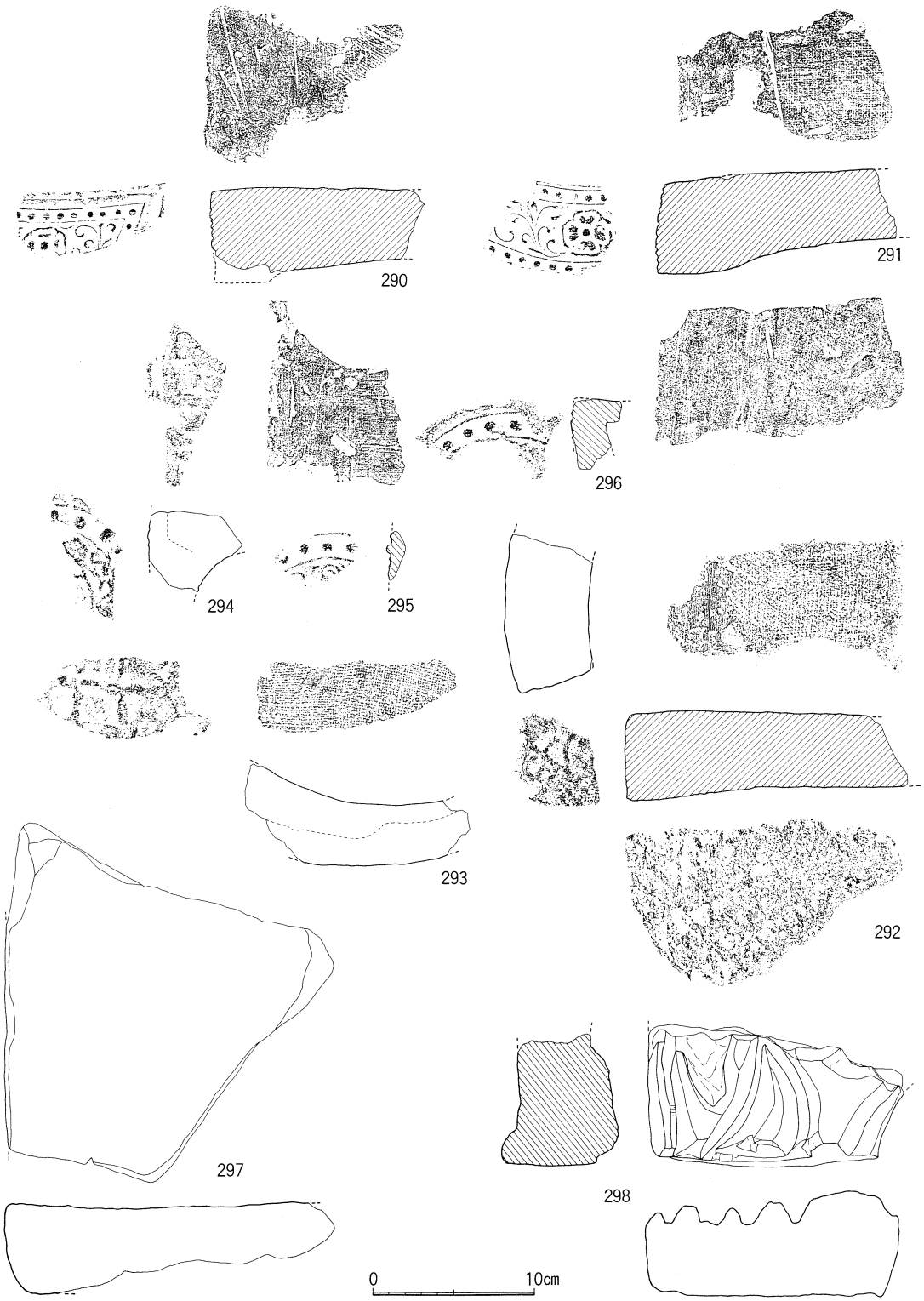
丸瓦（319～324）　丸瓦は，319が玉縁を持つもの，321，324が行基式のものである。319は，長さ36.0㎝，幅14.4㎝，玉縁部の長さ4.7㎝を測る。筒部，玉縁部とも凸面は，丁寧にナデている。323は，凸面に縄目叩きの痕が残っている。324は，凹面の布目痕に布のかがりぬいの痕跡がみられた。

塼（297，309）　297は，厚さ5.5㎝を測り，焼成が不良なため表面が風化しており，調整は不明である。309は表，裏に糸切り痕を残しており，厚さ2.4㎝を測る。一見平瓦とも思えたが断面が平坦なため塼と考えられた。

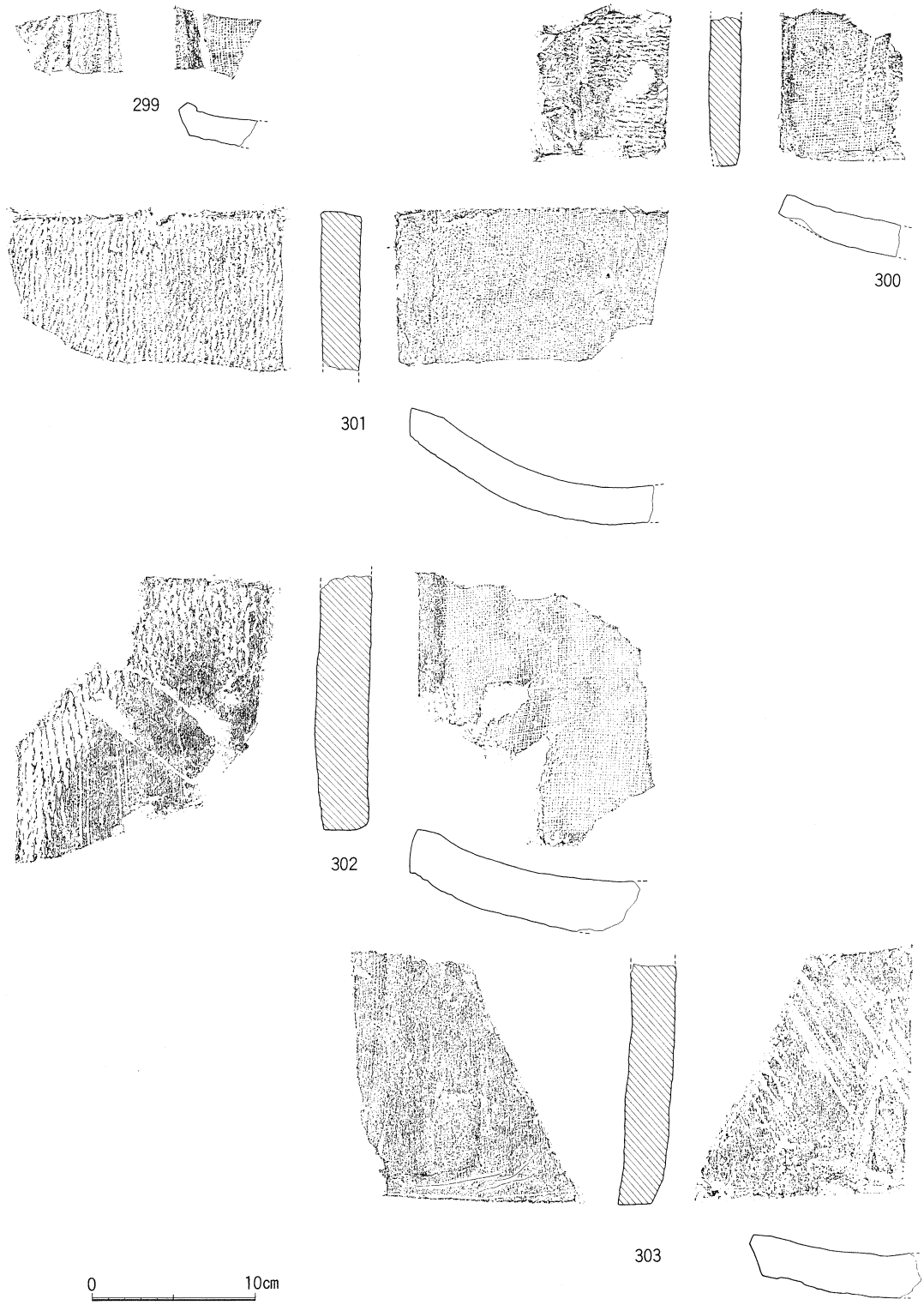
鬼板瓦（298）　鬼枝瓦の左下側の部分で下端が半円形に削られる形態のものであり，鬼の牙を表現したものと思われる。



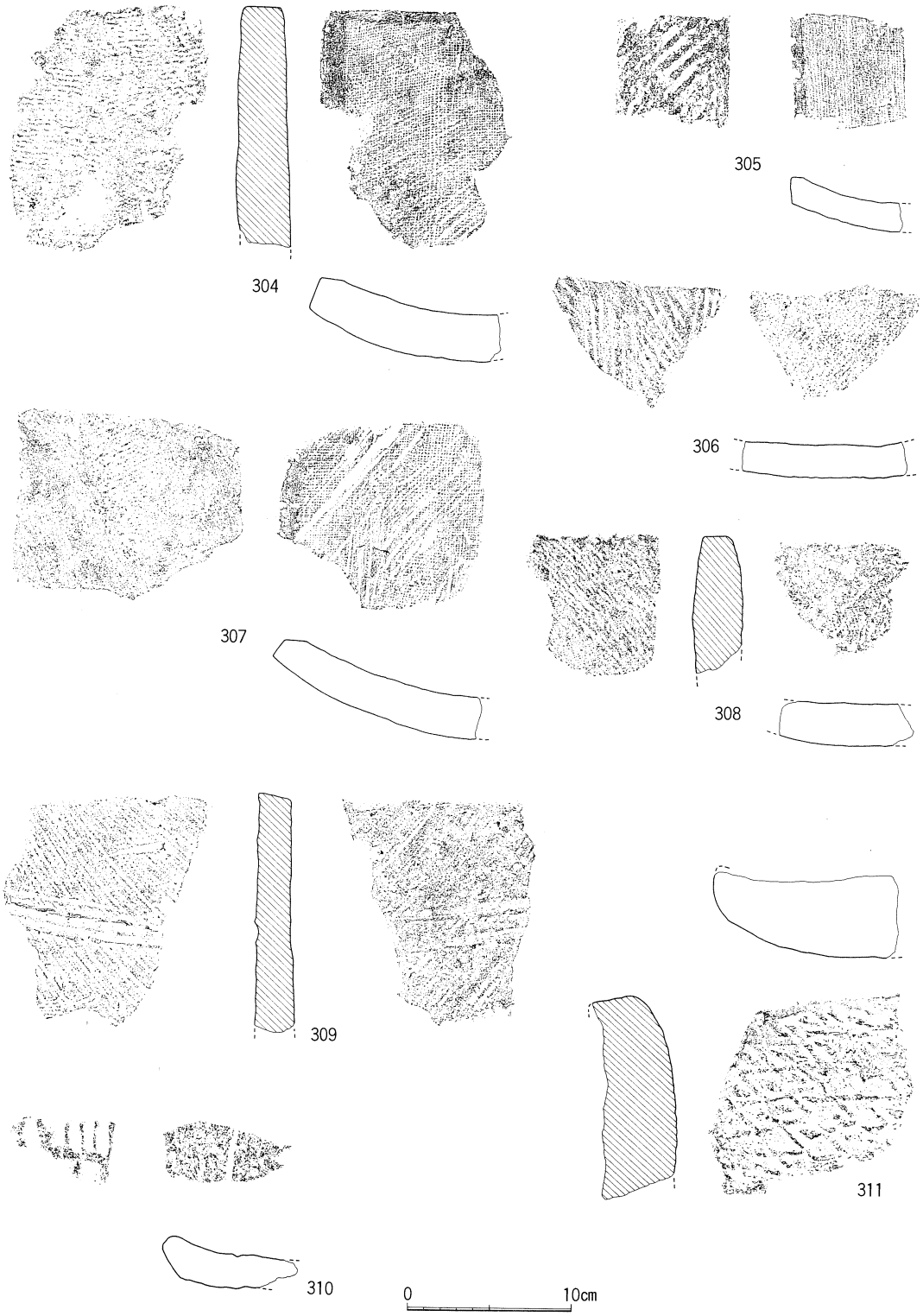
第69図　Ⅱ区南東部出土瓦実測図



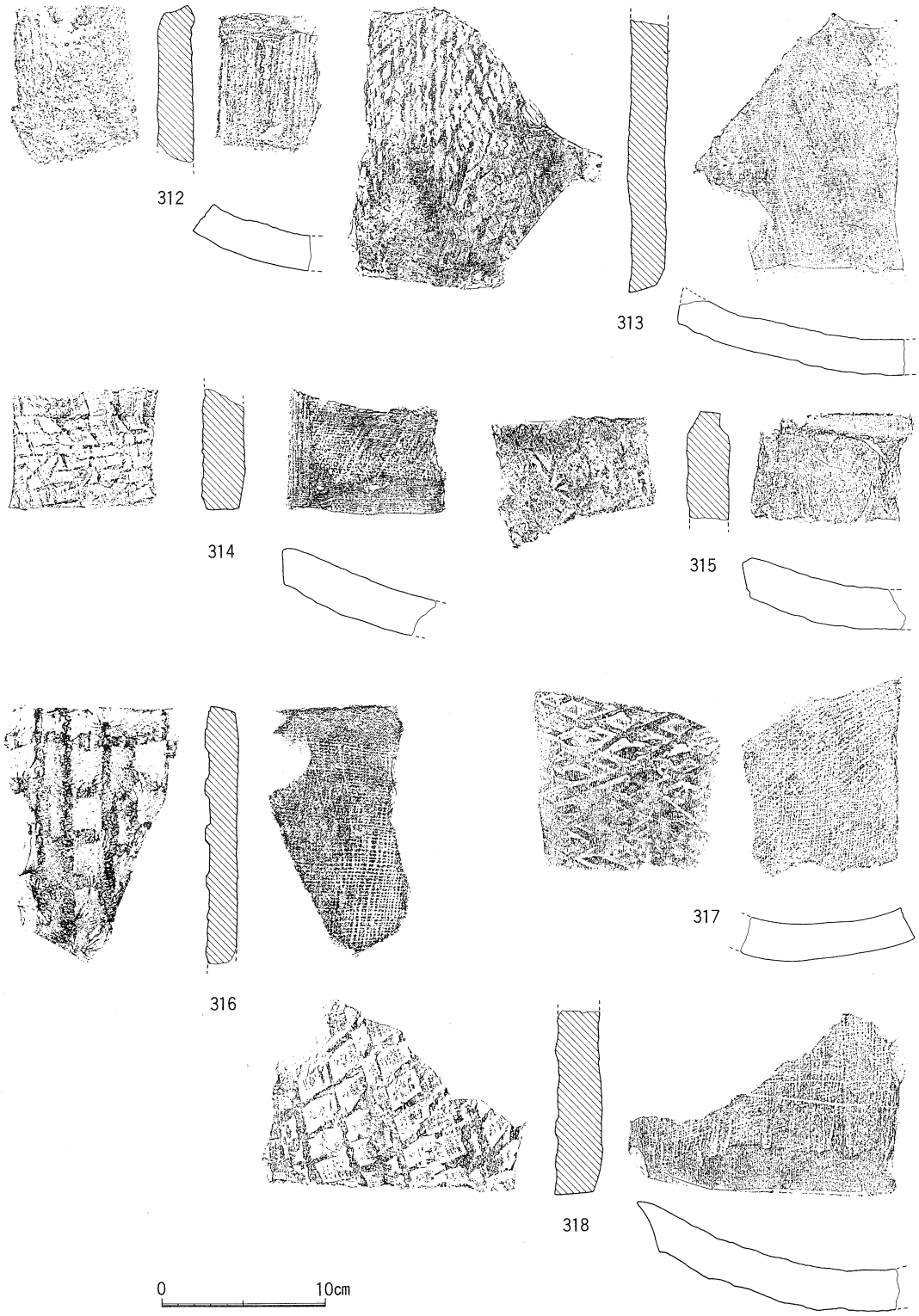
第70図　Ⅱ区南東部出土瓦実測図



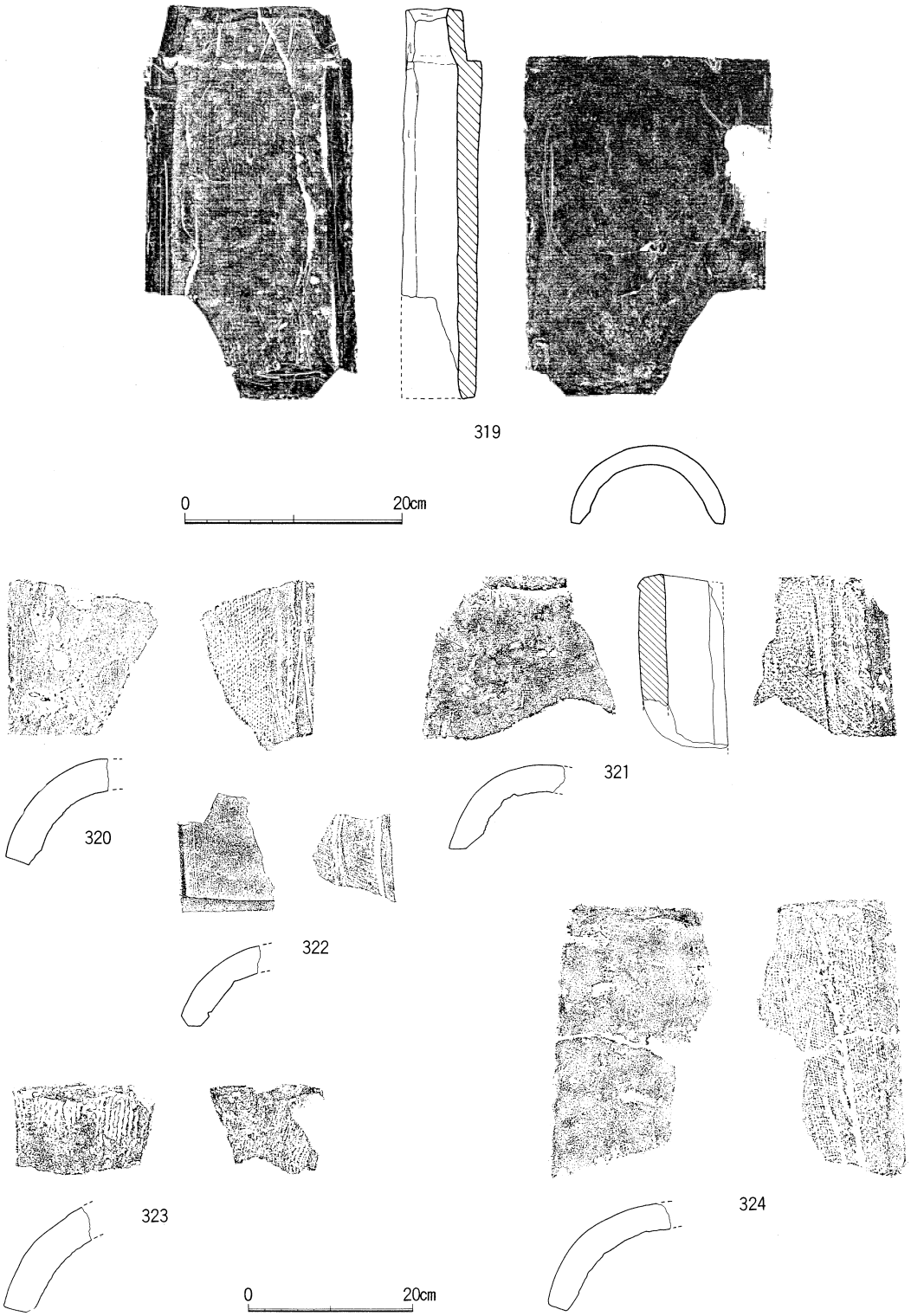
第71図　Ⅱ区南東部出土瓦実測図



第72図　Ⅱ区南東部出土瓦実測図



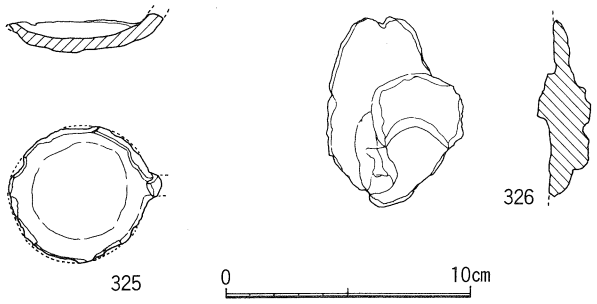
第73図　Ⅱ区南東部出土瓦実測図



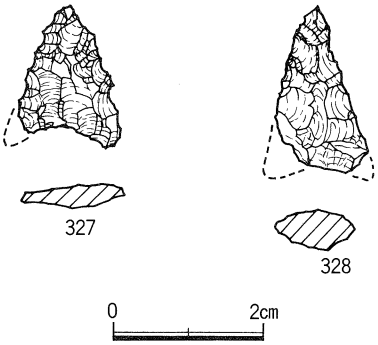
第74図　Ⅱ区南東部出土瓦実測図

第Ⅱ調査区出土青銅器（第75図）

325，326ともに，第Ⅱ調査区の南東部から出土している。325は匙状のもので，柄は欠いている。径5.5cm，厚さ0.4cmを測る。身の周囲が外反する形となっている。326は形態の不明のもので，片面が渦巻き状に中心に向け凹むような形である。もう片方の面は断面となっている。現存する長さ7.8cm，幅5.5cm，厚さ2.1cmである。



第75図　Ⅱ区南東部出土青銅器実測図



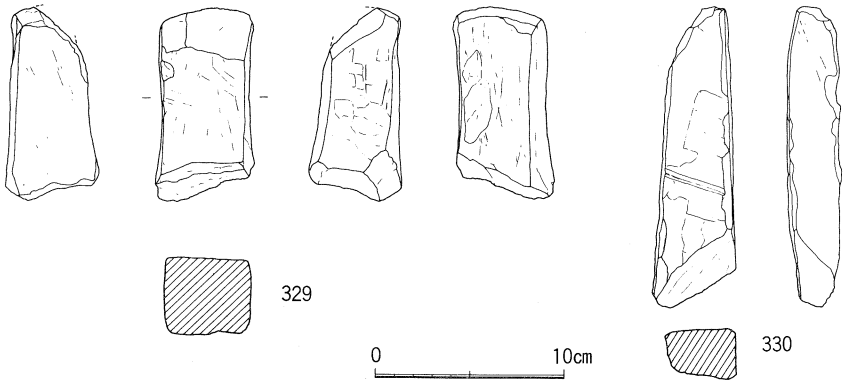
第76図　Ⅱ区出土石器実測図

第Ⅱ調査区出土石器（第76，77図）

327，328とも黒曜石製の石鏃である。両者とも凹基式でわたぐりは浅く弧状になっている。

329は，Ⅱ区南東部から出土している砥石である。長さ10.2cm，幅5.3cm，厚さ4.1cmを測る。4面とも使用されており，各面とも中央部は凹み，細かな磨痕が残っている。

330は，Ⅱ区出土の砥石であり，長さ16.0cm，幅4.4cm，厚さ2.7cmを測る。2面が平坦になっている。うち1面は，削り取られたように磨痕が残っている。



第77図　Ⅱ区出土石器実測図

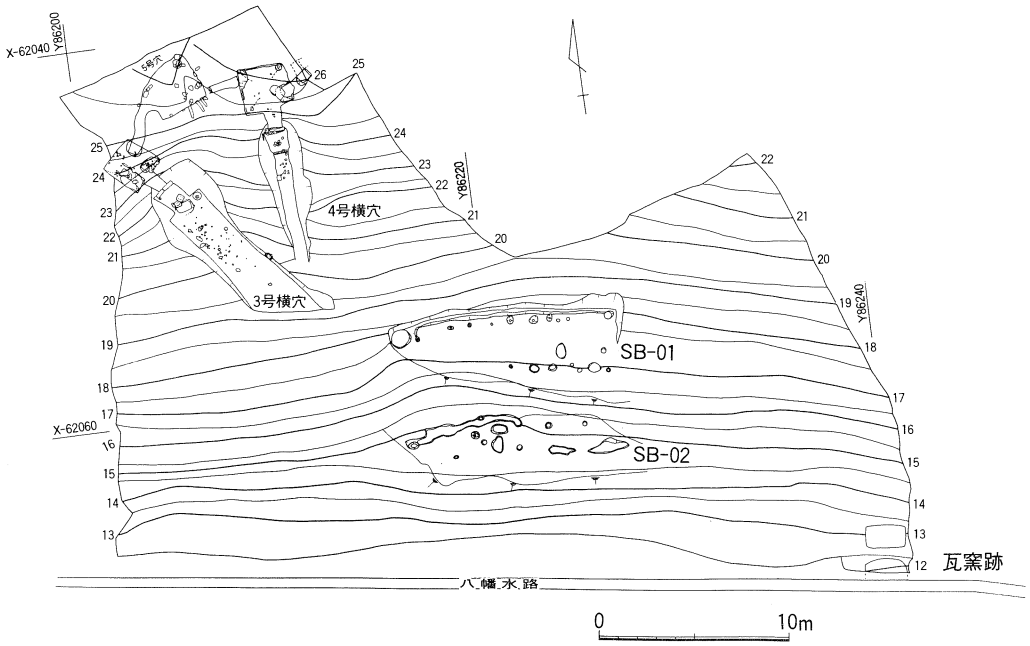
第Ⅲ調査区

第Ⅲ調査区は，標高12～26mの丘陵南側斜面に位置し，標高28mの頂上部には社日１号墳（１辺約10mの方墳）が築かれている。社日１号墳は，現在でも「社日さん」と称され，社日信仰に関する祭祀が毎年春秋の社日の日に行われている。

今年度の調査では，丘陵上部より横穴を２穴，中程より掘立柱建物を２棟，調査区南東隅より瓦窯跡１を検出した。横穴は昭和56年度の調査で，同丘陵の北側斜面から２穴（中竹矢１号横穴，２号横穴）を検出している関係から，これに続く通し番号で，３号横穴，４号横穴と呼称することとした。調査区南東隅の瓦窯跡は，東側に隣接する出雲国分寺瓦窯跡（県指定）の一部と考えられることから，調査後，現地保存することになった。

SB－01

第Ⅲ調査区中央部の標高19mの斜面を，東西12.6m，南北４mの幅で平坦に加工し，掘立柱建物を築いており，南側の一部は消滅している。壁際には，長さ10m，幅20～40m，深さ10mの溝が廻る。桁行は，東西方向に７間ないし８間になると思われるが，梁間は，柱穴は並びが明確でないため，確認できなかった。桁行の柱間距離は，西から順に1.0m＋1.2m＋0.98m＋1.2m＋0.88m＋0.45m＋0.5m＋2.15mを測る。覆土中から奈良時代から平安時代にかけての，須恵器や瓦片が出土している。

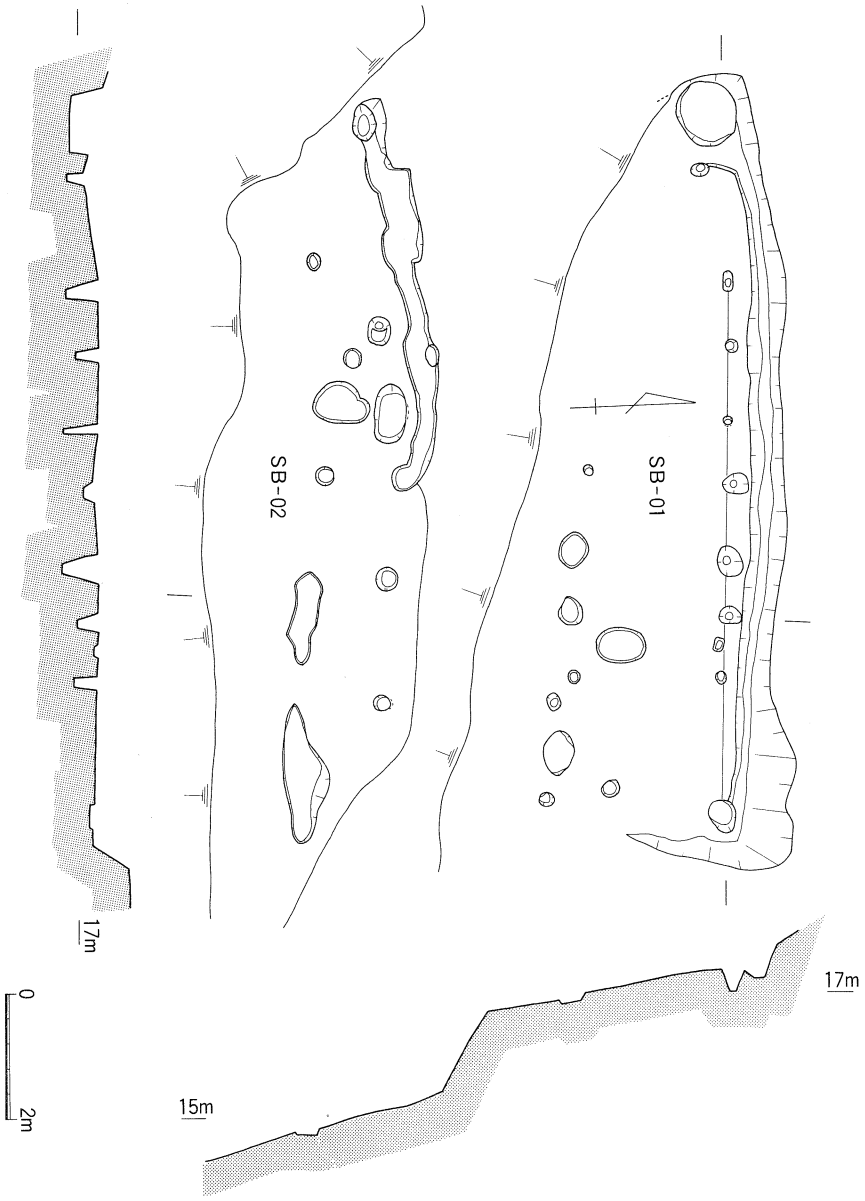


第78図　第Ⅲ調査区全体図

SB－02

SB－01の南側に位置し，標高15m～16mの斜面に築かれている。残存する平坦面は，東西13m，南北3.5mを測り，柱穴10と溝１を検出した。溝は平坦面の西側から中央部にかけて穿たれており，長さ6.2m，幅60cm，深さ15cmを測る。柱穴の残りが悪く，建物の規模を明らかにすることはできなかった。SB－01から奈良時代から平安時代にかけての須恵器片が少量出土している。

SB－01とSB－02との切り合い関係は，丘陵斜面の土層堆積状況等からは確認出来なかった。



第79図　SB-01・02実測図

3号横穴

第Ⅲ調査区北西隅の標高19～23mの丘陵南側斜面に穿たれている。玄室及び墓道の主軸方向はN－40°－Wで，南東方向に開口しており，玄室床面の標高は19.9mである。

前庭部は，地山斜面を削って長方形に造り出している。南東端から羨門部までの長さは8.4m，幅2.0m～2.5mを測り，横断面は「コ」の字を呈す。前庭中央より須恵器坏（331～336），壺（337），瓿（338）が出土している。

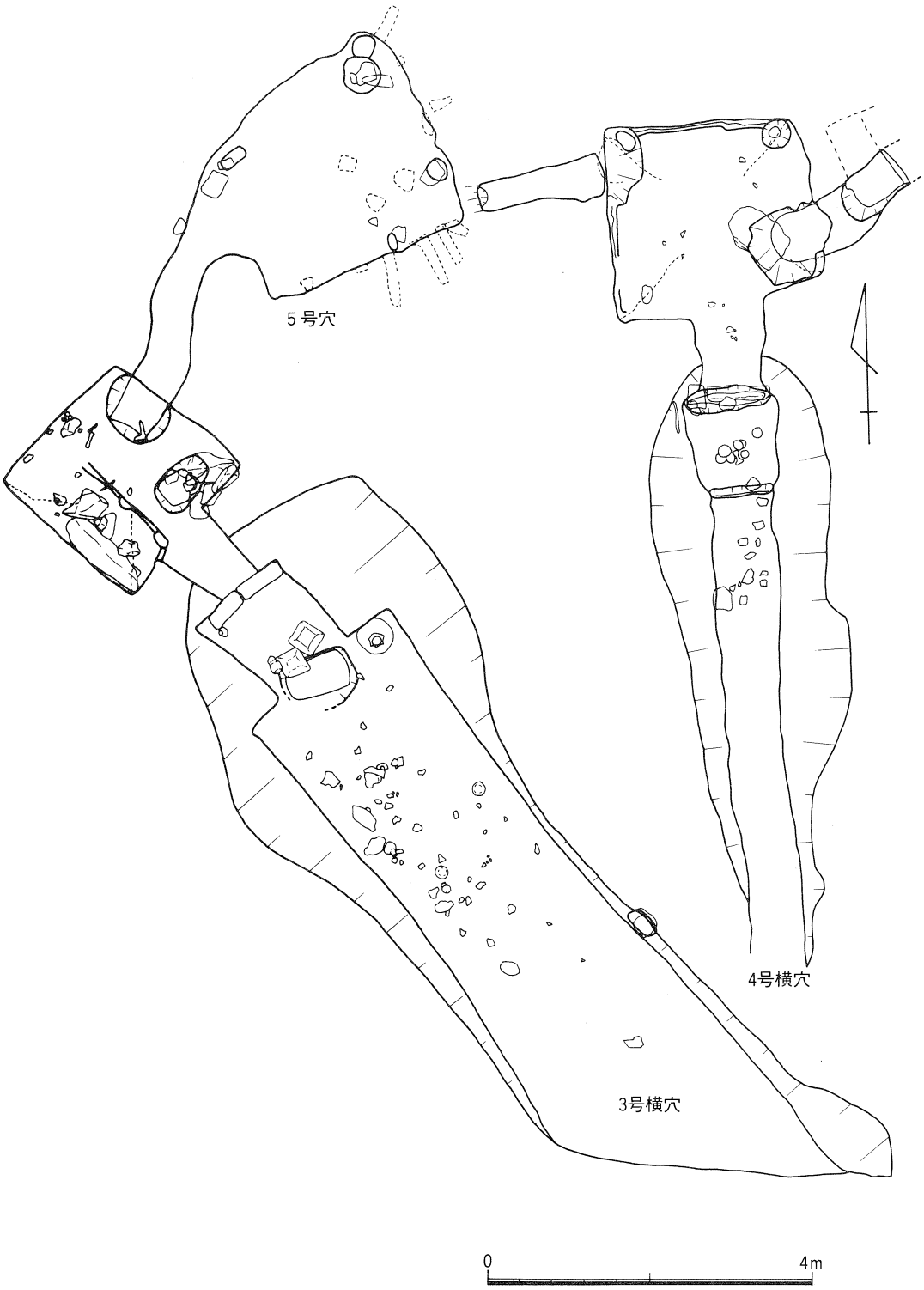
羨門部は間口1.3m，奥行き1.3mを測り，羨門部から羨道にかけての天井部は，後世に再利用した際に掘り崩されたようである。羨門部右袖には，須恵器の大甕が口を上に向けた状態で置かれていた。羨道は，左側が奥に向かってやや広がっており，床幅が羨門部で0.56m，玄室側で0.85mをそれぞれ測る。上部の残存高は1.0mであった。羨道入口で，後世に持ち込まれたと考えられる，幅10×20m，長さ1.05mの方柱状の石を検出した。

玄室は，平面プランが正方形に近い方形で，奥行きが2.05m，幅が入口で2.1m，奥壁で2.0m，高さ1.8mを測る。四壁と天井との間には境線が描かれており，天井部は家形を呈すと考えられるが，後世に幅15cm程の工具で全面にわたって削られているため，その原状は明確ではない。床面中央には玄室中軸線に沿って幅30cm，深さ4cmの溝が設けられており，これによって，左右に2つの屍床を造り出していたものと考えられる。

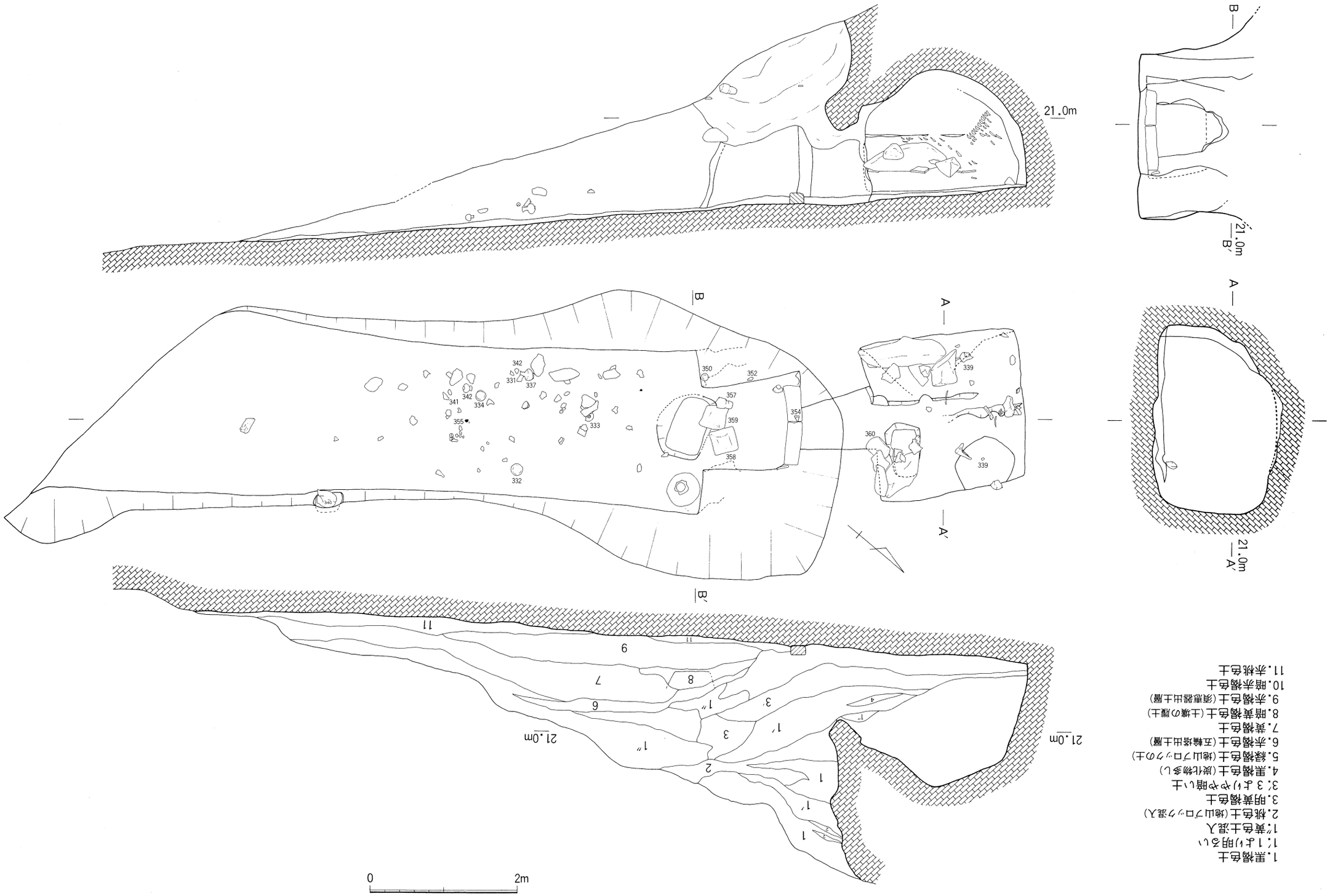
この他，玄室内では後世に築かれた遺構も確認した。右袖部の奥壁近くには，5号穴へと続くトンネル状の通路が開口しており，トンネルの直径は，玄室床面からの深さは50cmであった。また，玄室の入口に近い右袖部床面には，径46×72cm，深さ24cmの不整な楕円形の穴が穿たれていた。この穴を覆うように床面からやや浮いた状態で，14～80cmの大きさの偏平な自然石と五輪塔の水輪1が積まれており，左袖部床面にも15～115cmの大きさの同様な自然石が置かれていた。これらに伴って，牛の脊髄や顎骨が出土した。

土層の堆積状況は，前庭部から玄室にかけて，多量の土砂が堆積していた。前庭部から羨門にかけて堆積する第7～第10層は，横穴の埋葬後に堆積した土であると考えられ，7世紀末頃の須恵器の蓋坏や，壺などが出土している。また，前庭部中程の東壁には，第7層の上面から穿った穴が検出され，胴部を穿孔した土師器の甕が出土した。この土師器は，上記の須恵器と時期的にあまり差がないと思われることから，横穴の埋葬に関連した穴である可能性が高い。

第1層から第6層までは，後世に第7層から第10層までの埋土を掘り込んで，玄室内に進入しようとした後に，堆積したものである。羨門部入り口付近で，35×43cmの隅丸方形に近い形状の穴が第7層から第8層にかけて穿たれており，五輪塔の火輪や土師質土器の皿，磁器片などが穴よりやや高いレベルから出土している。磁器はその特徴から近世初頭ころのもので，この頃，横穴内に土



第80図　3号横穴，4号横穴，5号穴位置図



1. 黒褐色土
1; 1より明るい
1'' 黄色土混入
2. 桃色土(地山ブロック混入)
3. 明黄褐色土
3; 3よりやや暗い土
4. 黒褐色土(炭化物多し)
5. 緑褐色土(地山ブロックの土)
6. 赤褐色土(五輪塔出土層)
7. 黄褐色土
8. 暗黄褐色土(土壌の掘土)
9. 赤褐色土(須恵器出土層)
10. 暗赤褐色土
11. 赤桃色土

第81図　3　号　横　穴　実　測　図

壙状の穴やトンネル状の通路を築いたものと考えられる。

3号横穴出土遺物（第82図）

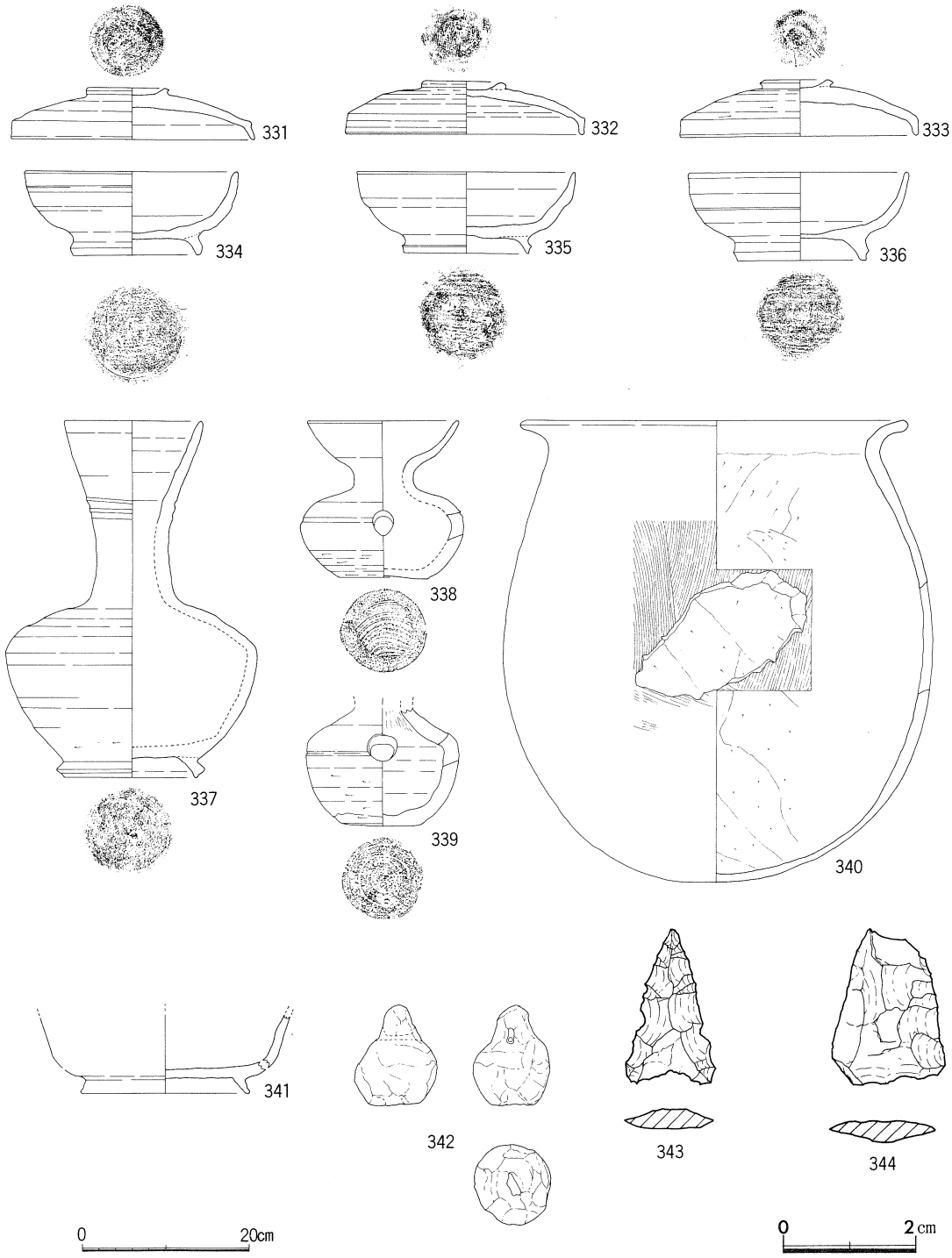
須恵器（331～339，349）　蓋・身が3セット出土している。蓋（331～333）は，同様の特徴を持つものである。口縁部は垂直かやや開き気味に立ち，天井外面は静止糸切りの後にヘラケズリを行い，ヨコナデにより輪状つまみを付けている。（蓋は口径14.2～14.5cm，器高3.1～3.4cmを測る）坏身（334～336）は，口縁部が，ゆるやかに湾曲して立ち上がり，端部に至る。底部は，静止糸切りの後に，やや外方へ開く高台を貼り付けている。335，336の高台部は，指頭により強くナデており，やや凹んでいる。体部内外面はナデ調整を行っている。坏身は口径12.8cm～13.2cm，器高4.9cm～5.3cmを測る。337は長頸壺で高台が付いている。口縁部はゆるやかに外反し，頸部に2条の沈線を入れている。体部内外面は，ヨコナデを施し，外面下半はヘラケズリの後に高台を貼り付けている。口径8.3cm，底径7.9cm，器高21.5cmを測る。338，339は甕である。338は，口縁部の径より体部が膨らんでいる。口縁部は，ゆるやかに折曲し端部に至る。体部下半にヘラケズリ，底部外面には静止糸切りの後，外周にヘラケズリを行っている。体部中程に円孔を穿け，沈線を入れている。口径9.1cm，底径5.3cm，器高9.4cmを測る。339は，口縁部を欠いており，体部外面下半にヘラケズリを施し，体部中程に円孔を穿け，沈線をめぐらしている。甕（349）は，口径18.2cm，器高44.2cmを測る。口縁外面に「＋」のヘラ記号が入る。

3号横穴出土の須恵器は，坏蓋が輪状つまみを有し，天井部が静止糸切り痕を残す。坏身は高台を有し，底部外面に静止糸切りにより切り離していることより，出雲国庁編年第1形式[註13]に含まれ，7世紀後半～8世紀初頭と思われる。

土師器（340～342）　甕（340）は，口径23.3cm，器高27.7cmを測る。体部中程に焼成後に穿孔を行っている。口縁内外面にヨコナデ，体部にハケメ，底部付近はハケメの後をナデ消している。341は，土師器・坏で高台が付いている。342は，土鈴で長さ6.0cm，幅4.9cmを測る。全体に指頭圧痕が残り，体部下半に穴が1つ穿けられ，中に土玉が2個入れられている。

鉄器（345～347）　345は，刀の身の一部である。347は刀の鍔が半分に折れたものである。この2点は，3号横穴前面の斜面より出土している。

3号横穴前庭部上層出土遺物（350～354）　351の土師器に350が覆せられた状態で出土している。350は，口径8.7cm，器高2.1cmを測り，底部に指頭圧痕を残し，丸底を呈している。351は，口径12.1cm，器高2.9cmを測る。底部外面に「θ」の墨書がみられる。この土師器皿の付近から肥前産の皿（352）と，白磁，碗の底部（354）が出土している。肥前産の皿は，底部を欠いているが，口縁部が外反しており，砂目積みの皿と思われ，時期は1610年～1630年の間と思われる。白磁，碗は，口縁に玉縁の付くもので12世紀頃と思われる。353は，4号横穴玄室から5号穴へ通じるトンネル状の穴か



第82図　3号横穴出土遺物実測図

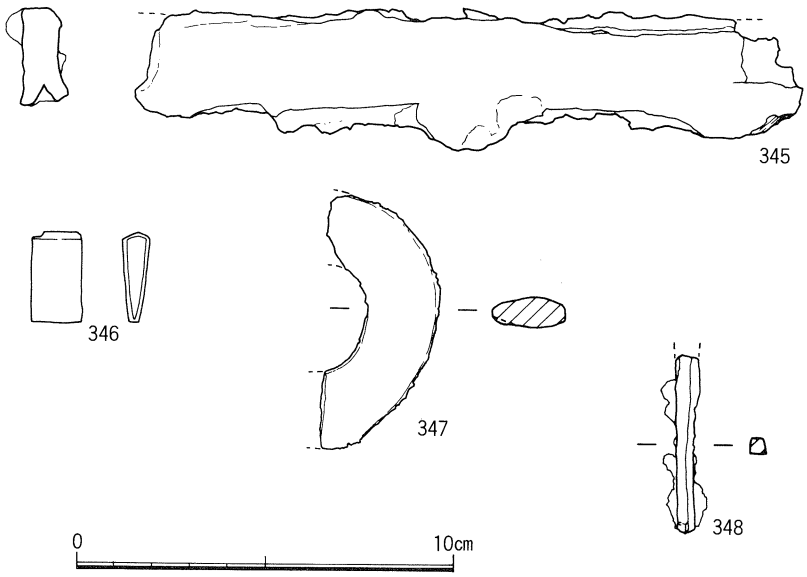
ら出土している。磁器の皿で，内面に砂目当痕が残り肥前産の皿で1610年～1630年のものである。五輪塔357～360は，３号穴前庭部，玄室から出土している。357の空風輪は，前庭部上方から出土している。空輪，風輪，差し込みを一つの石で作っており，空輪と風輪の間に界線がめぐっており，空輪の頂上に低い突起が見られる。高さ25.4cm，幅16.4cmを測る。358，359は，火輪で屋根の頂部，底面は平坦となっている。屋根の流れは，直線に近いものである。一辺33cm，高さ15cmを測る。359も火輪と同様の形態のもので，一辺35cm，高さ14.6cmを測る。360は水輪で玄室内から出土している。平面形は正円に近く，上下に大きな割り込みを入れており，ノミ痕が残っている。径34cm，高さ21.4cmを測る。

４号横穴

調査区の北西隅の標高21.0mに位置し，３号横穴の東に，開口部が隣接する形で穿たれている。玄室と墓道を結ぶ主軸の方位はN－3°－Wで，ほぼ南北の軸線に沿っており，南方向に開口している。玄室床面の標高は21.1mを測る。

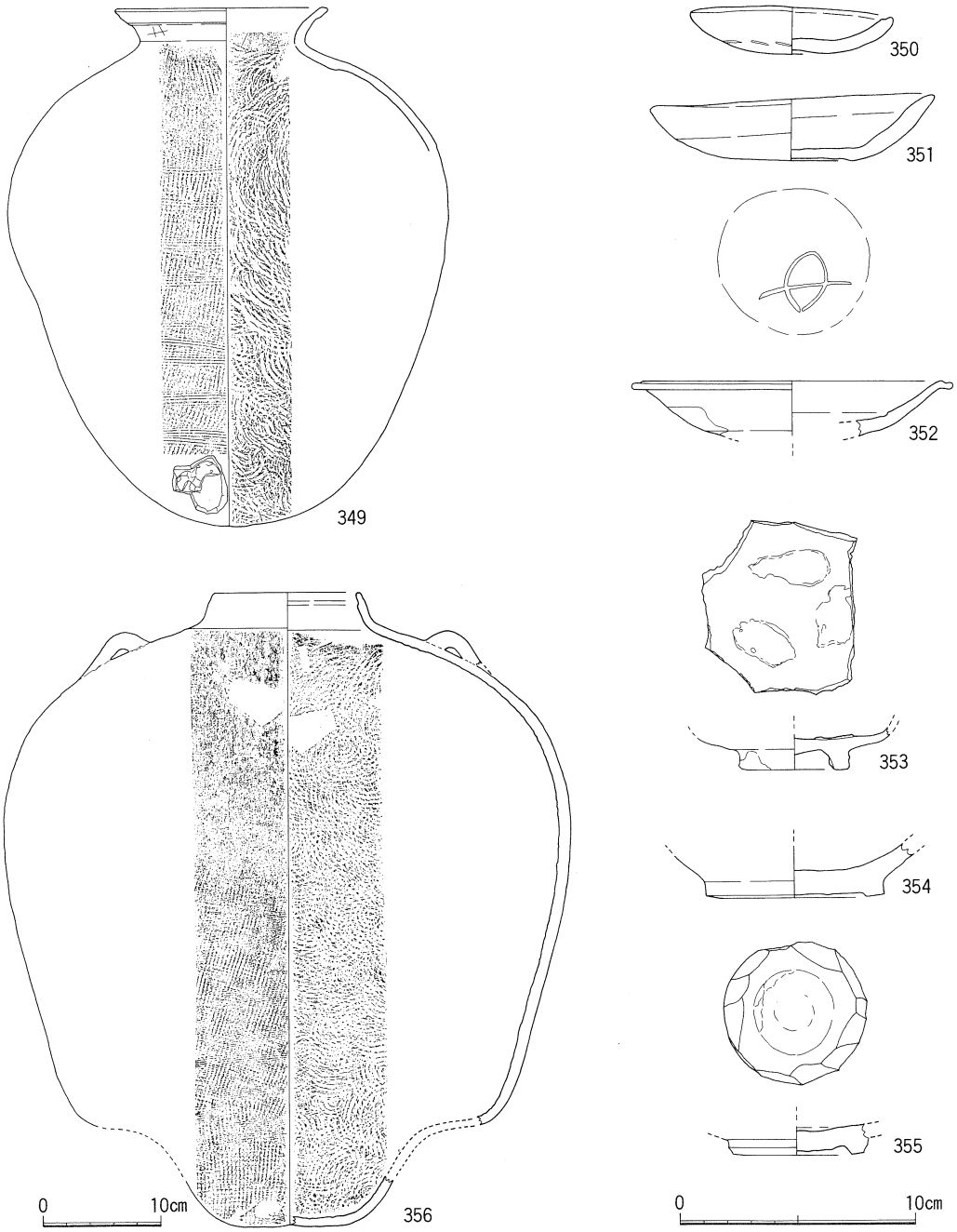
墓道は，長さ7.21m，床面幅0.6～0.8m，上端幅1.0～2.1mを測る狭長なもので，断面は浅い「U」字形を呈す。墓道床面の標高は20.5mで，隣接する３号穴の前庭部床面よりも，約1.0m高い位置にある。東壁の一部は崩壊しており，羨門部に近い西壁には，径40cm，奥行き70cmの横穴が穿たれていた。この穴の性格は不明である。

羨門部は間口0.7m，奥行き0.9mを測る。天井部は後世に横穴内へ侵入した際に，崩壊した塔であるが，本来は羨道の天井部よりやや高かったと推定される。墓道との境の床面に，長さ0.8m，



第83図　３号横穴(346)・４号横穴(348)出土遺物

幅12cm，深さ６cmの断面「Ｖ」字形の溝が掘られていた。また，羨門部と羨道の境の床面にも，長さ1.05m，幅28cm，深さ10cmの断面「Ｕ」字形の溝が認められ，溝の直上には，上半部が破損した板状の閉塞石が立てられていた。閉塞石は，110×72cm，厚さ16cmを測り，左壁との間に高さ45cm

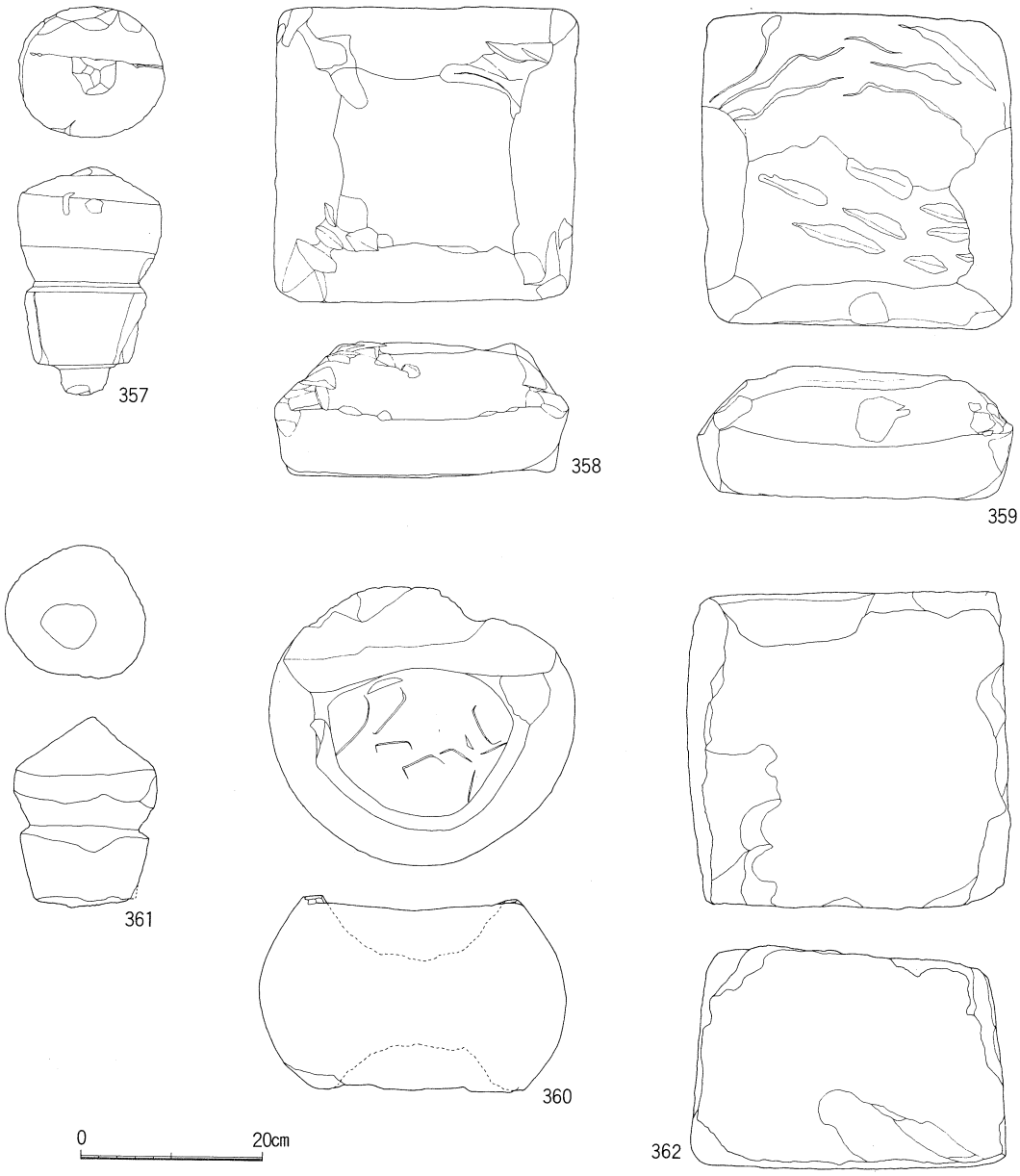


第84図　３号横穴前庭部(349～354)，４号横穴(355・356)出土遺物実測図

の方柱状の石を立てて，安定させていたようである。羨門中央部の，床面直上からは，横穴の遺体埋葬時に使用したと考えられる６世紀後半頃の須恵器が出土している（第88，99図）。

羨道は，羨門部で幅0.78m，玄門部で1.18mを測り，玄室方向に向かってやや開いている。高さは，112cmで，横断面が逆「U」字形を呈す。

玄室の平面は正方形に近く，奥行き2.35m，幅が入口で2.6m，奥壁で2.3m，高さ1.36mを測る。



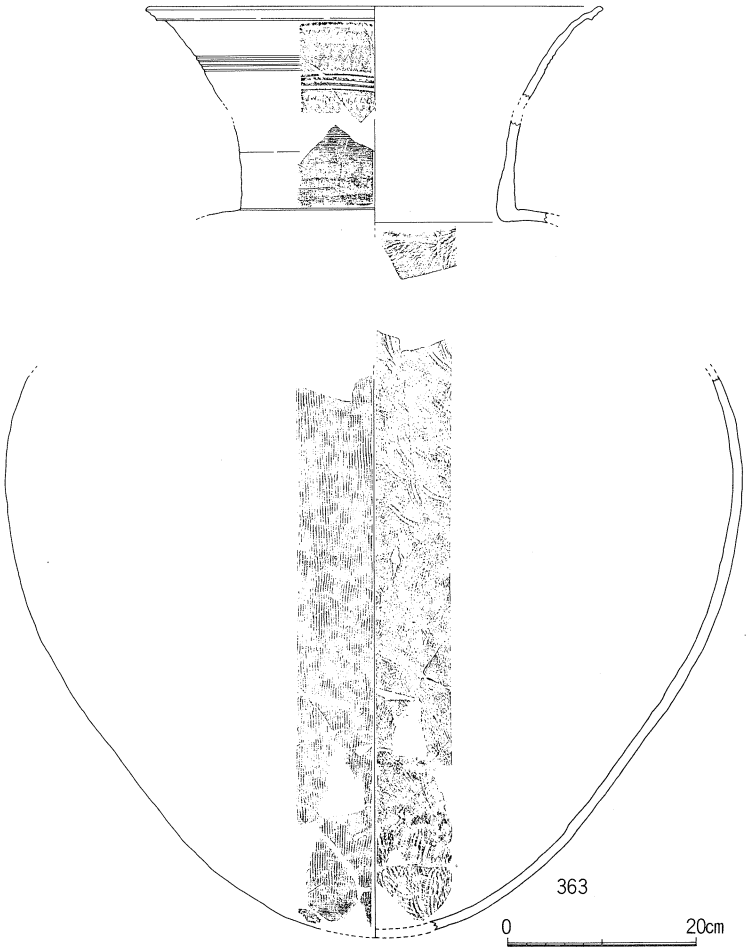
第85図　３号横穴(357～360)，４号横穴(361)，５号穴(362)出土五輪塔実測図

床面の壁際には奥壁から左袖にかけて，深さ３cmの溝が廻る。天井は丸天井で，各コーナーより４壁を画す境界線が上がるが，天井部で途切れる。天井には煤が付着しており，５号穴との通路の開口部付近にも灰が堆積していた。

玄室内の左右の袖部には，後世に穿たれたトンネル状の通路が認められ，左袖部の通路は５号穴へと続くものである。右袖部の通路入口には，破損した閉塞石の上半部がかぶさった状態で置かれていた。通路は東北方向へと伸び，調査区外へ続く。

土層の堆積状況は，墓道から羨門部に堆積する第５層から第12層は，横穴の埋葬後に堆積した土であると考えられ，須恵器片が出土した。

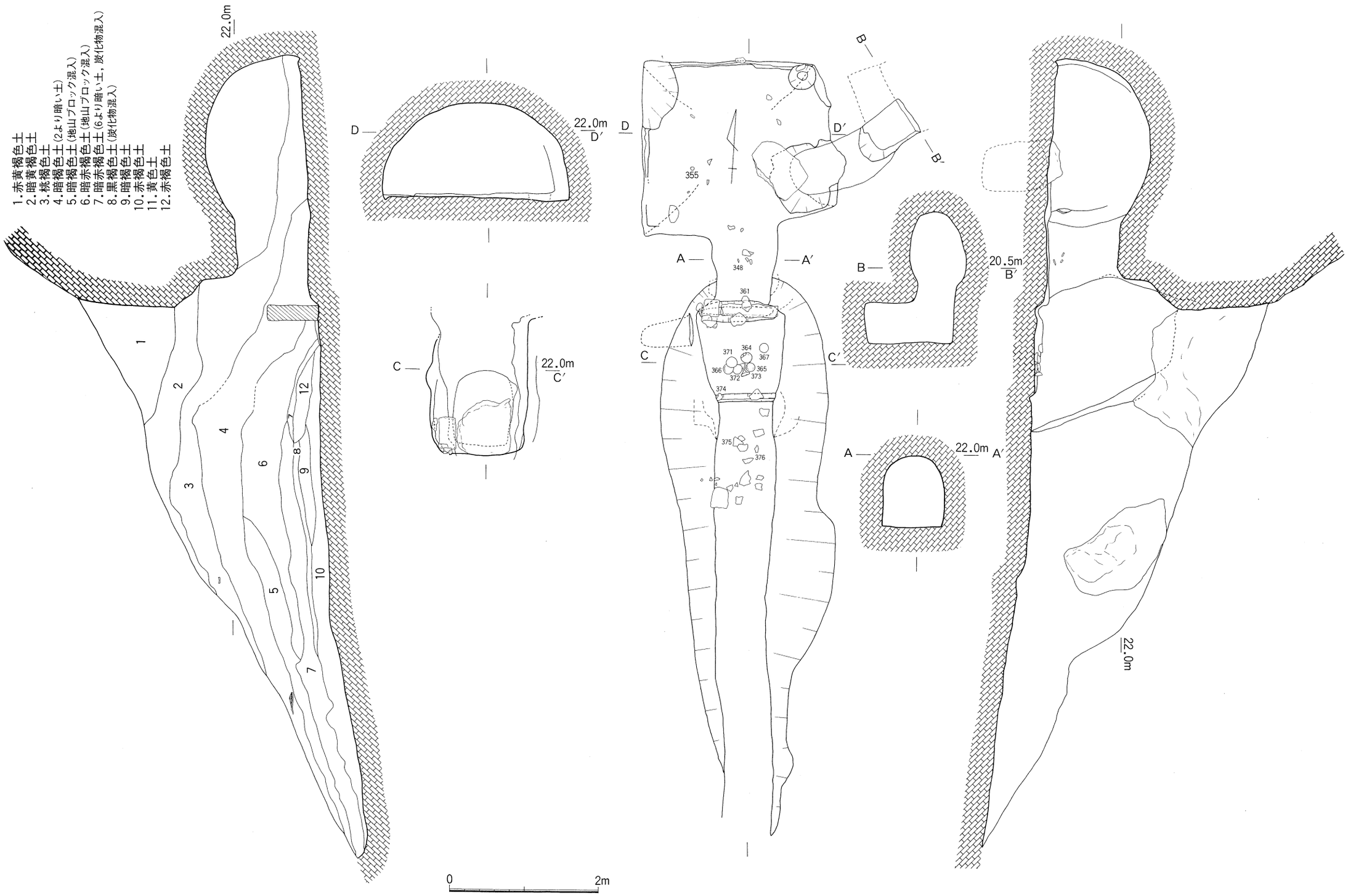
墓道から玄室にかけて，流れ込んでいた第１層から第４層は，後世に掘った穴に堆積した土である。玄室内に入る際に，閉塞石は破壊されたようである。第２層からは五輪塔の空風輪が，第３層，４層からは須恵器片が出土している。また，玄室内の第３層上面から，近世の白磁が出土しており，玄室内で火を炊いた痕跡は，この時期のものと思われる。



第86図　３号横穴出土須恵器実測図

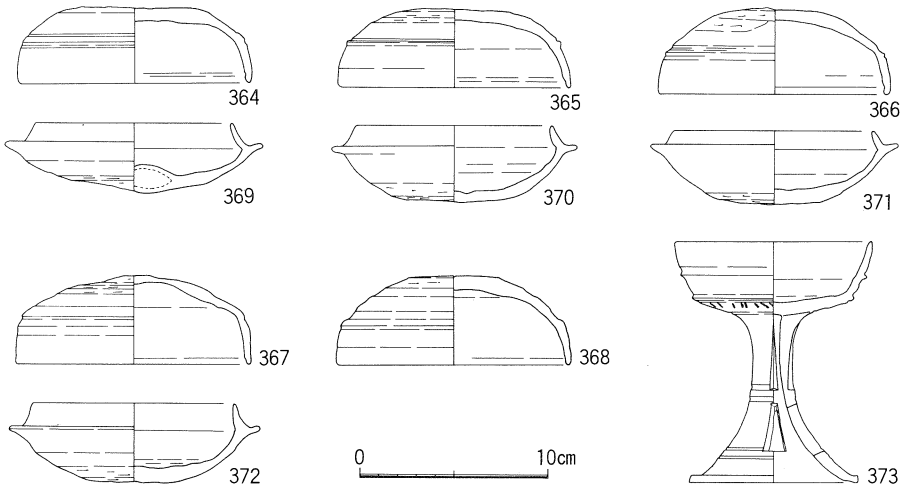
４号横穴出土遺物（第88図，89図）

須恵器坏（364～372），高坏（373）は，羨門部から出土している。坏・蓋（364～368）は，同様の形態を呈している。口縁部は，やや円湾し，天井部と口縁部の境に２条の沈線をめぐらし稜を作り出している。天井部外面にヘラケズリを施している。口縁部内面には，沈線が１本めぐっている。口径は，12.5cm，器高4.1～4.7cmを測る。369～

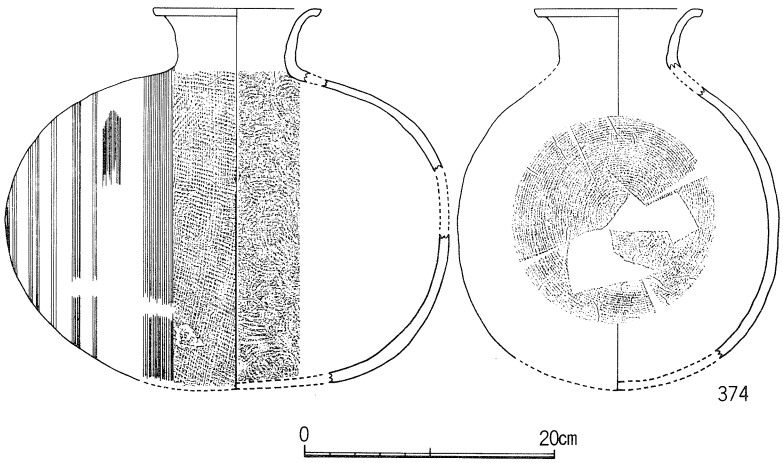


第87図　4　号　横　穴　実　測　図

372は，坏・身で口縁部が内傾して立ち上がり，底部外面にヘラケズリを施している。高坏（373）は，坏部外面に櫛描刺突文を入れている。脚切外面に２条ずつの沈線を上下２段に入れ，上下２段に３方の透かしを持っている。上段の透かしは三角形で貫通せず，下段は方形で貫通している。口径10.5cm，器高12.8cmを測る。横瓶（374）は，墓道覆土中より出土している。口縁部は外反し，体部外面に平行叩きの後にカキ目調整を行っている。体部内面は，同心円叩きを行っている。甕（356）も，墓道覆土中からの出土である。口縁部が内傾し，立ち上がりは短い。肩部外面が４ケ所，把手状になっている，蓋状のものを覆せていたものと思われる。外面の上半には，自然釉が付着している。これらの須恵器は，蓋・坏が，山陰須恵器編年Ⅲ期とされるものである。



第88図　４号横穴出土須恵器実測図



第89図　４号横穴出土須恵器実測図

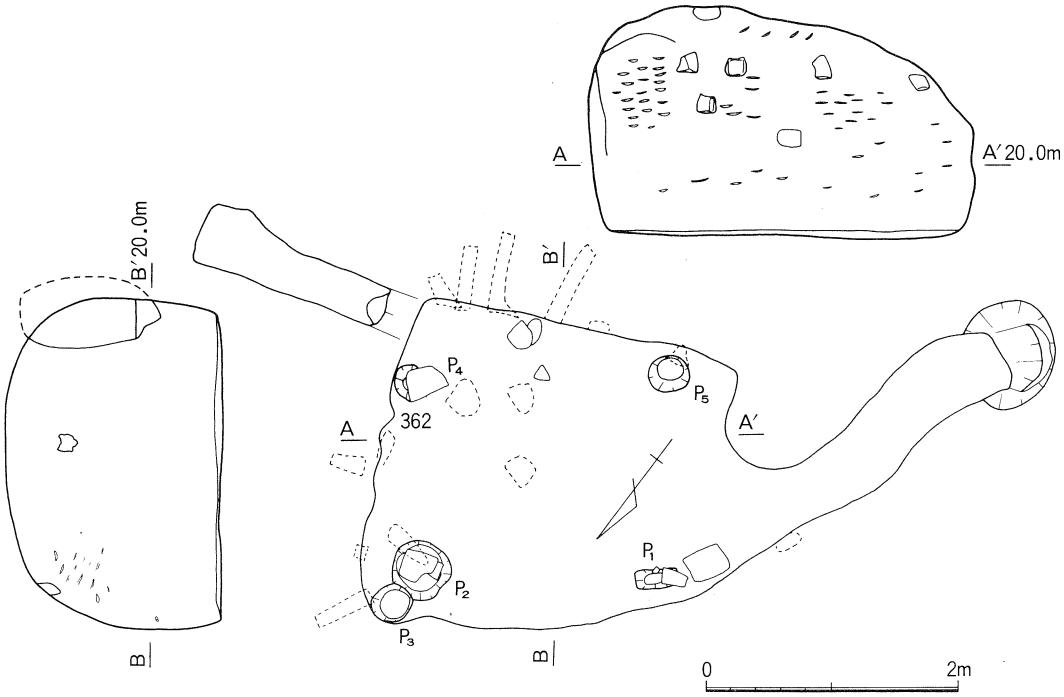
白磁，皿（355）は，４号横穴玄室内に流入した土の上部より出土している。中国製のもので，時期は，16世紀から17世紀前半頃のものである。五輪塔，空風輪（361）は，墓道の上層から出土している。空輪，風輪，差し込みが一つの石で作られるもので，差し込みを欠いでいる。

須恵器，大甕（363）は，３・４号横穴南側斜面から出土しており，どちらかの横穴からかき出されたものと思われる。口径，器高は，復元すると48.8cm，96cmになる。

５号穴

５号穴は，３号横穴玄室と４号横穴玄室の間に位置し，トンネル状の通路で３・４号横穴と結ばれている。室内の平面プランは，東西幅2.6m，南北幅2.6mの方形で，床面積は6.76m²を測る。天井部は丸天井で，床面からの高さは1.8mである。３号横穴玄室床面と５号穴床面との比高差は0.5m，４号横穴との比高差は，1.7mである，３号横穴との通路は５号穴北西隅の床面に近い高さに開口する。通路の主軸方位はN－25°－Eで，長さ2.8m，幅0.5m，高さ0.8mを測る。４号横穴との通路は長さ1.6m，幅0.3m，高さ0.4mを測り，主軸方位はN－60°－Eを示す。この通路の開口部は，５号穴南東隅の床面から0.44mの壁面に穿たれていた。

室内床面の４隅には，納骨を行ったと思われる穴（P_1～P_4）が認められた。P_1は径26×28cm，深さ23cm，P_2は径32×30cm，深さ24cm，P_3は幅36×16cm，深さ16cm，P_4は径46×46cm，深さ15cm，P_5



第90図　５号穴実測図

は径30×30cm，深さ27cmをそれぞれ測る。このうちP_1，P_2，P_4の穴の上には板状石が置かれていた。

壁面及び天井部には，5号穴製作時の加工痕がはっきりと残り，南壁と東壁には灯明に利用したと考えられる，煤の付着した小穴が穿たれていた。また，4面の壁には，床面から50cmの高さまで，赤色顔料で彩色されており，この赤色顔料は，自然科学分析の結果，ベンガラ成分であることが判明した。

5号穴出土遺物（362）

五輪塔の地輪で，断面がやや台形を呈している。幅36.2cm，高さ24.7cmを測る。

矢　倉

「矢倉」とは，丘陵の山腹につくった横穴式納骨墓で，鎌倉市を中心に散在し，鎌倉時代から室町時代中期頃にかけて造営されたものである。鎌倉時代以前にも南関東地方で，開口していた横穴墓（7～8世紀）を利用して祭祀を行っていた例も見られるが，これが「矢倉」に直接つながるものかどうかは明らかでない。

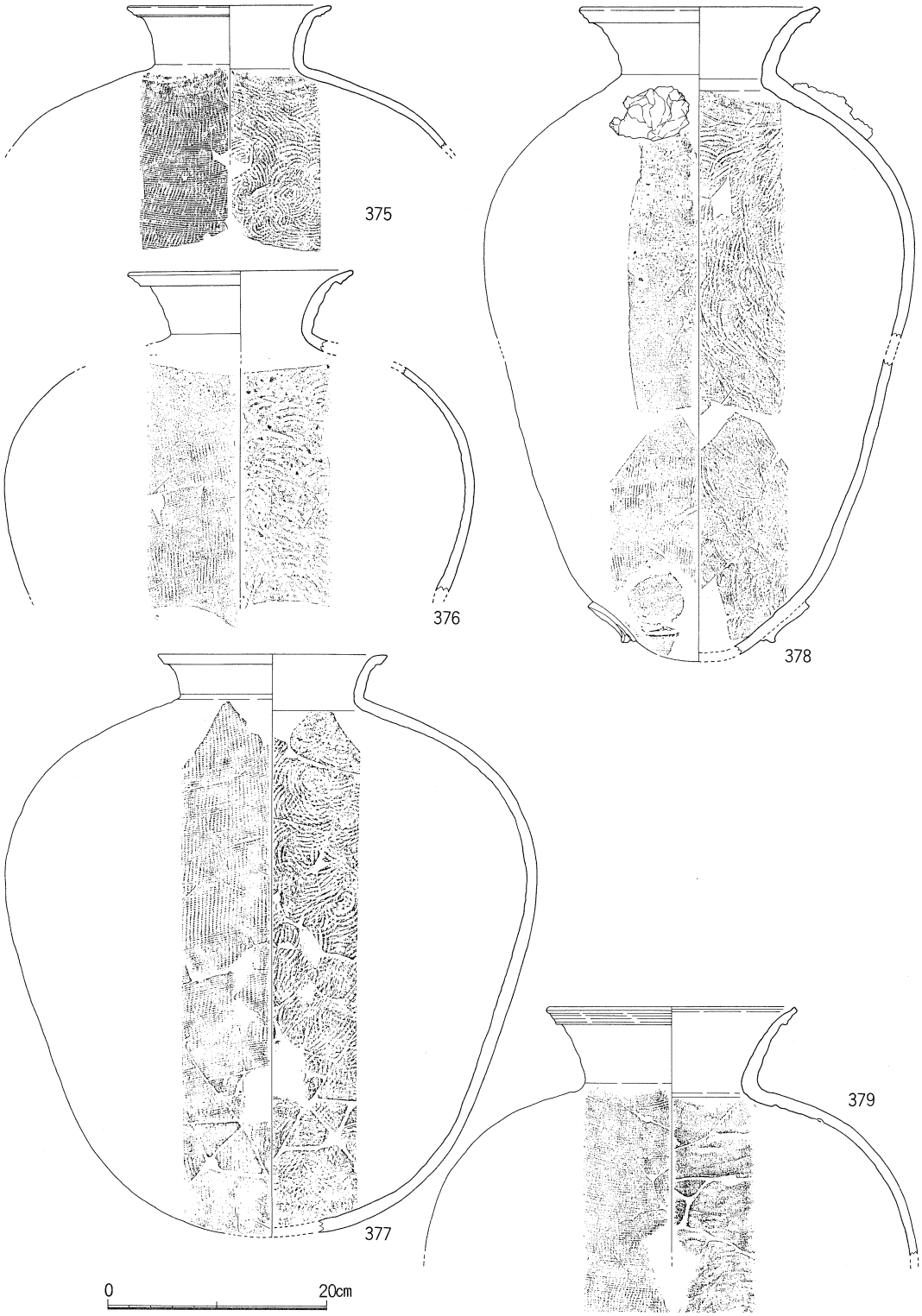
初期の「矢倉」には，内部に施設的な造り出しのないものが見られるが，やがて壁面や床面に納骨穴を穿って，火葬骨を埋葬するようになった。また，内部に供養のための石造りの地蔵や五輪塔，板碑などを安置したり，壁面を彫って造り出したものも見られる。「矢倉」は特に禅宗との関係が深く，主として禅宗寺院の周辺に位置し，修行の場として使われた場合もあったようである。

「矢倉」のほとんどは鎌倉市を中心に分布するが，能登半島でも「矢倉」状の遺構が検出されており，長崎県の対馬や福島県などでは，横穴墓から転用した例がよく見られる。

本遺跡の場合，3号横穴，4号横穴は後世になんらかの祭祀施設として再利用されており，更に横穴の玄室床面を掘り込んで，5号穴を設けている。5号穴の床面に，納骨穴らしいピットが認められる点や，室内に五輪塔が安置されていたらしい点などは，「矢倉」と共通の性格といえよう。ただ，時期的に「矢倉」の下限は15世紀と考えられ，中世末から近世に造られたと思われる5号穴とは，やや時期がずれる。また，内部構造や形態には相違点も多く，ただちに5号穴が「矢倉」であるとは言い切れないが，「矢倉」にはいくつかの異なった系譜があり，その亜流の一つである可能性は残しておきたい。

Ⅲ区出土須恵器

須恵器　甕（375～379）は，Ⅲ区3・4号横穴南側斜面から出土している。375は，口径18.8cmを測り，体部外面に平行叩きの後，カキメを行っている。376は，口径20.6cmを測る。外面に自然釉が付着している。377は，横穴北側の斜面上から出土しており，口径21.0cm，現存高54.0cmを測る。378は，口径22cm，器高60.7cmを測る。外面上部に自然釉が付着し，肩部に窯体，底部に坏が溶着している。309は，やや焼成の悪いもので，口径23cmを測る。



第91図　Ⅲ区出土須恵器実測図

瓦窯跡（第92図）

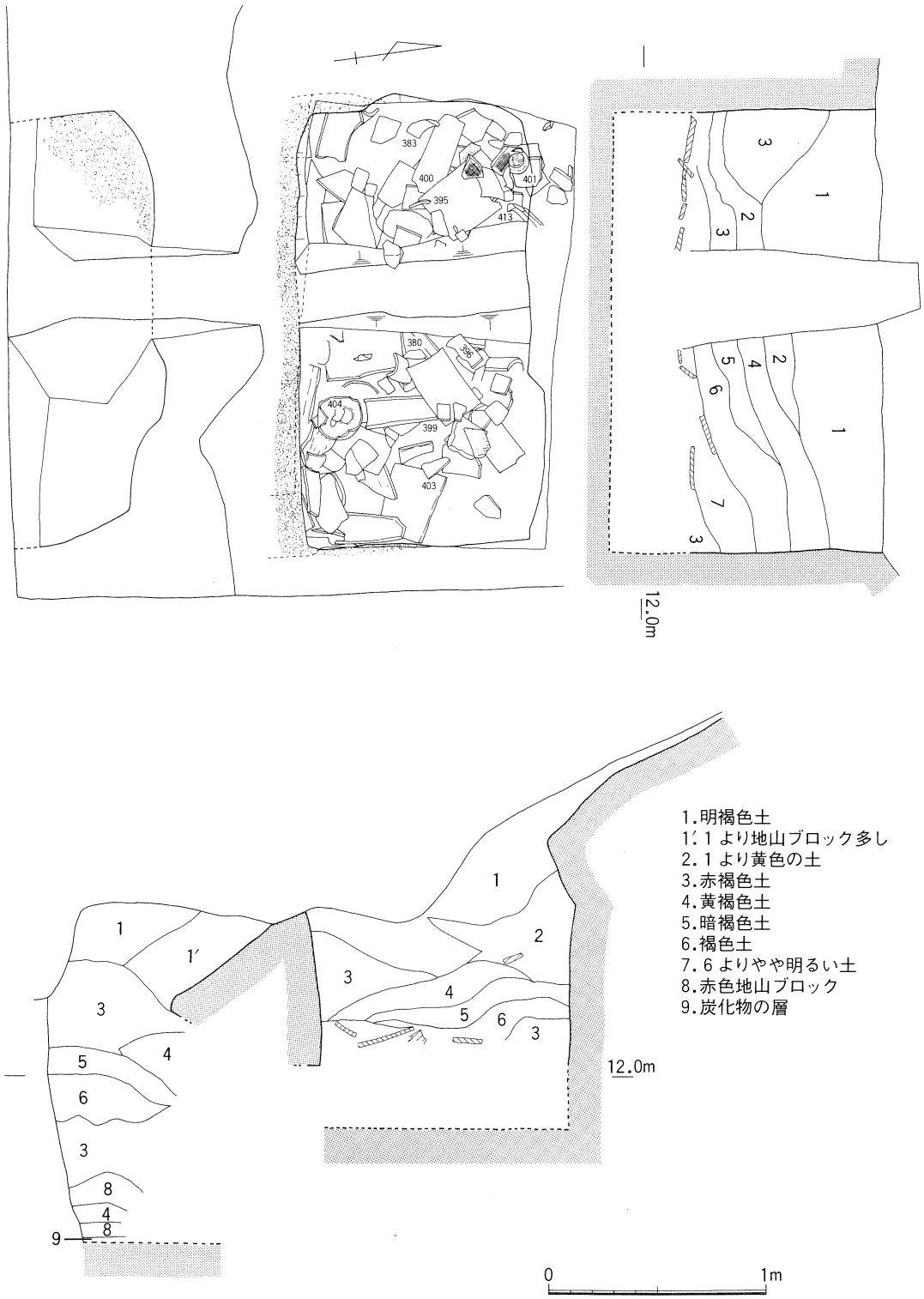
第Ⅲ調査区の南東隅，標高13mを測る丘陵斜面に位置している。今回調査した瓦窯跡の南東50mの場所に，県指定出雲国分寺瓦窯跡がある。この瓦窯跡は，崖面に窯体断面が露出しており，幅2.45m，高さ1.58mを測る。底面は，平坦であり，天井部は蒲鉾形を呈している。現在は，１基しか確認できないが，以前はこの瓦窯跡の西側５mの場所にも焼土がみられ，瓦窯跡が存在するとされていた。このことより，今回調査により検出した瓦窯跡は，３基目の瓦窯ということになり，従来の２基より標高が５m程高くなっている。

窯は，保存のため燃焼部の下半分は未検出で，燃焼部から燃焼部にかけて土層観察用のベルトを残したままとなっており，未確認の部分が多くなっている。焚口部分は，現在用水路が流れており検出不可能であった。用水路の南側を調査したところ，畑等の耕作によりかなり削平を受けており，地山面がほぼ平坦となっていた。

焼成部は，幅2.0m，深さ1.56mを測る。天井部が残る部分での高さは0.8mを測り，焼成部の床面は燃焼室より0.5m低くなっている。覆土は，底から炭化物の層，焼土層，赤褐色土，暗褐色土，明褐色土の順に堆積している。焼成部の西側には，覆土の最上部に焼土が入り込んでいた。覆土中からは，瓦等遺物は出土していない。

焼成部は，長方形プランを呈しており，幅2.05m，長さが上端で1.05m，下端で1.2mを測る。地山を掘り込んでおり，四壁はほぼ垂直に立ち上がる。北（奥）壁だけは，底から1.0mの高さまで垂直に立ち上がり，その後やや内傾し30cm程の高さを有している。南壁と東西両壁の焼成室寄りは，壁が焼けて赤褐色に変色しており，焼成室のプランを確認した時も，南側の壁上部は赤褐色に変色していた。燃焼室の南壁両端には，幅0.3m，高さ0.3mの火道があり，焼成室とつながっている。燃焼室の中央に土層観察用のベルトが残るため未確認であるが，現状では火道は両端２ケ所に位置している。燃焼室の底面の構造は，完掘していないので不明であるが，現状ではロストル等の構造は確認していない。燃焼室の中からは，瓦，須恵器，坏，壺が出土している。いずれも上層から下層まで分布しており，瓦は平瓦，丸瓦とも混在し，破片も多くみられた。瓦は規則的に並べられた状態ではなく，平坦に置かれているもの，立った状態のものとあり，瓦窯跡の中に瓦詰めされた状態というより，二次的に廃棄されたものと思われる。覆土は，上から明褐色土，黄褐色土，暗褐色土，褐色土の順に堆積している。いずれも焼土の赤色粒子，炭化物を含んだ土である。

この瓦窯跡は，やや傾斜した斜面に上部から燃焼室を長方形に掘り込み，焼成室は斜面の下側から横穴状に掘り込み，天井部に地山を残しながら，火道により燃焼室へと続けている。燃焼室の天井部は，地山の上に作られていたようである。


383
400
395
401
413
380
396
404
399
403
12.0m
1.明褐色土
1′.1より地山ブロック多し
2.1より黄色の土
3.赤褐色土
4.黄褐色土
5.暗褐色土
6.褐色土
7.6よりやや明るい土
8.赤色地山ブロック
9.炭化物の層
12.0m
0
1m

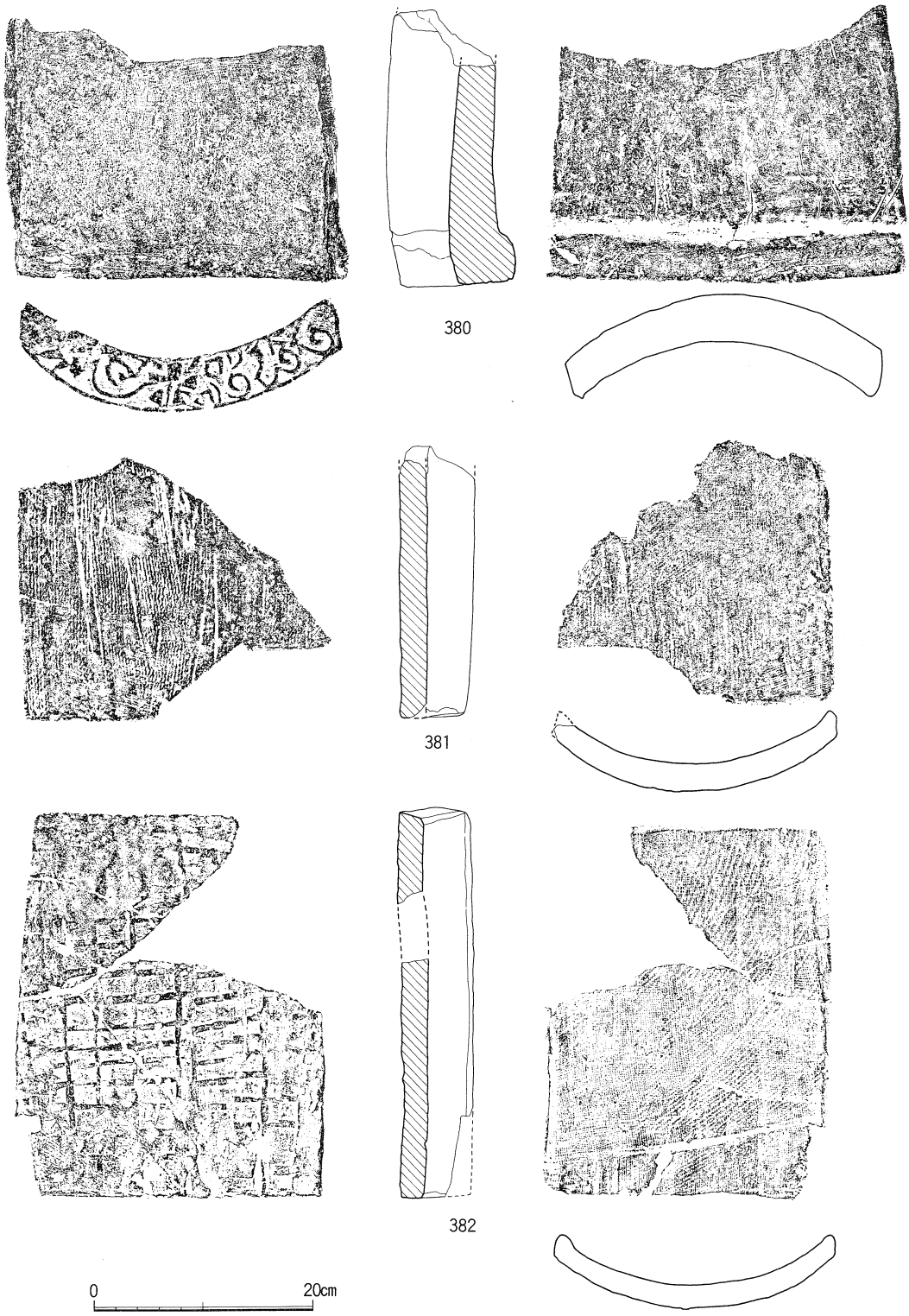
第92図　瓦窯跡実測図

瓦窯跡出土遺物（第93～99図）

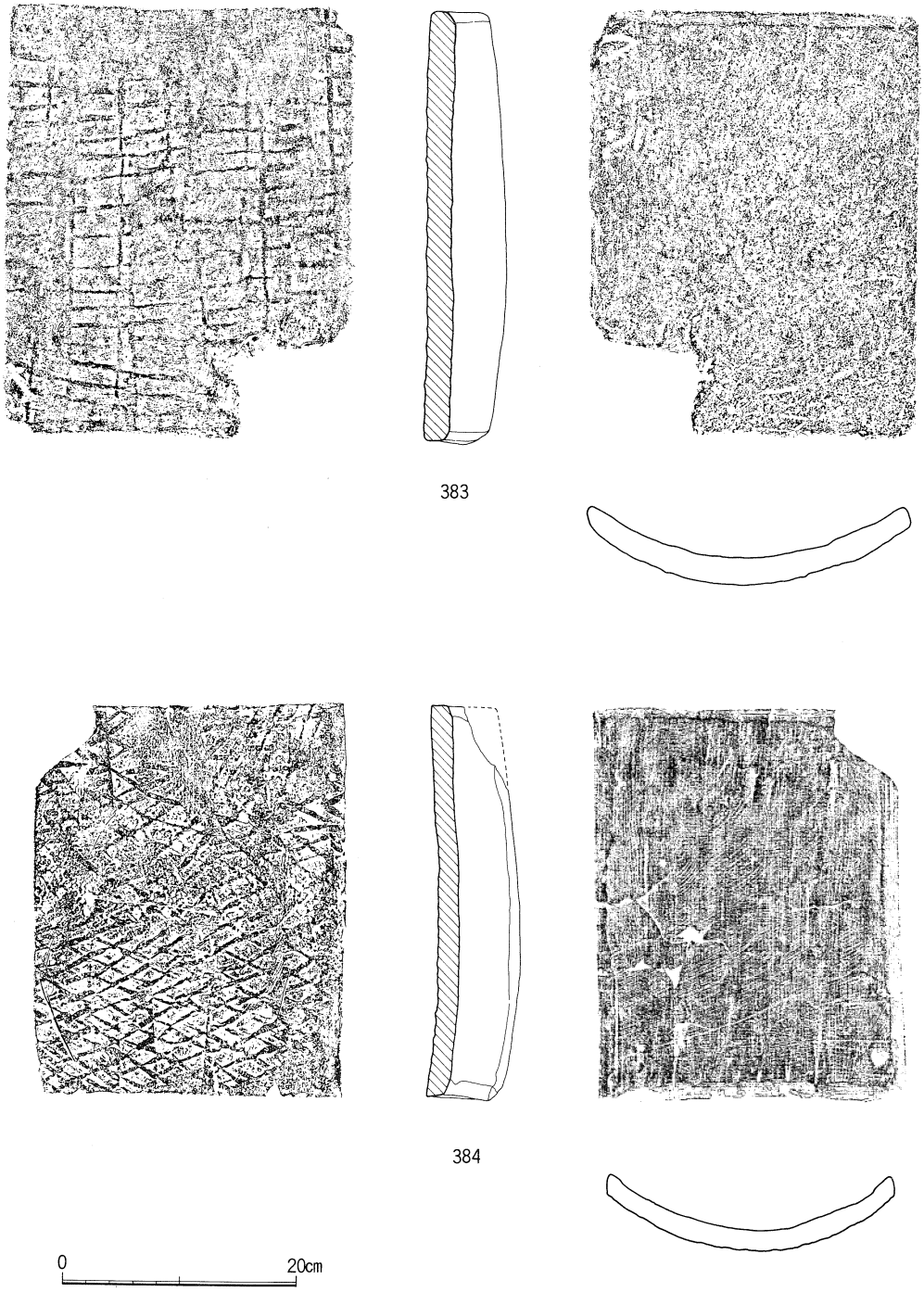
軒平瓦（380）　軒平瓦は，唯一380が出土している。瓦当の文様は，出雲国分尼寺[註16]の分類によれば第四類であり，今回出土の瓦分類で第四類－１としたものである。瓦当の中央と左側に花文を配し，その間に唐草文様を配している。焼成は，やや軟質で，顎を作り出している。

平瓦（381～385，387～397）　平瓦は，凸面調整が縄目叩きと格子叩きに別れる。382，387～391は，縄目叩きである。382は，縄目叩きの中に深い縄目のものを含む叩き（NB2）である。焼成は，やや軟質である。389は，太い縄目叩き（NA）である。388，390，391は通常の縄目叩き（NB）である。387は，縄目であるが，離れ砂が多く付着している。381～385，392～397は，格子叩きである。381，383は，格子叩き（KA）である。格子の個々が長方形を呈しており，いずれも焼成は不良で，383は凹面の布目痕が磨滅して見えないほどの軟質である。また，383は端面の両幅がほぼ同じため，広端面と狭端面の区別がつかないものである。縦が36.5cm，中央の幅28.0cmを測る。384，385は，斜格子叩き（KC）である。384は縦33.3cm，横245cmを測り，他に比べ一回り小さなものである。両側面も直線的になっており，広端面，狭端面の区別がつかないものである。焼成は，須恵質で良好で，色調は明灰色を呈している。385は，両側面が湾曲しており，焼成は不良で，やや軟質のものである。縦37.0cm，横27.8cmを測る。392は，細かな格子叩き（KG）であり，わずかに離れ砂が付着している。393，395は，正格子叩き（KI）である。393は，格子の凹みがかなり深いものであり，離れ砂も多く付着している。395は叩きは浅く，焼成は軟質である。394は，細かな格子叩き（KG）で，離れ砂が付着し，焼成は須恵質の良好なものである。396は大きめの斜格子叩き（KD）である。焼成は不良で黄白色を呈し，内面の布目も明瞭である。叩きは浅く，焼成は不良である。丸瓦（386，398，399，400）玉縁のつくものはみられず，確認したものは行基式のものだけである。399は，縦39.0cm，横17.8cmを測り，凸面はナデ調整を行っている。凸面は，布目痕が残り，両側面，両端面ともヘラケズリにより整えている。筒部の端面は，幅1.0cmほどヘラケズリを行って，端面へ向け細かくしている。400は縦39.5cm，横18.0cmを測る。両側面，両端面ともにヘラケズリを行っており，筒部側面は，幅1.2cmのヘラケズリを行っている。丸瓦は，凸面が丁寧なナデにより整えられている。いずれれも焼成は，不良であり，表面の色調は黒色を呈しており，胎土は灰褐色でやや軟質のものである。

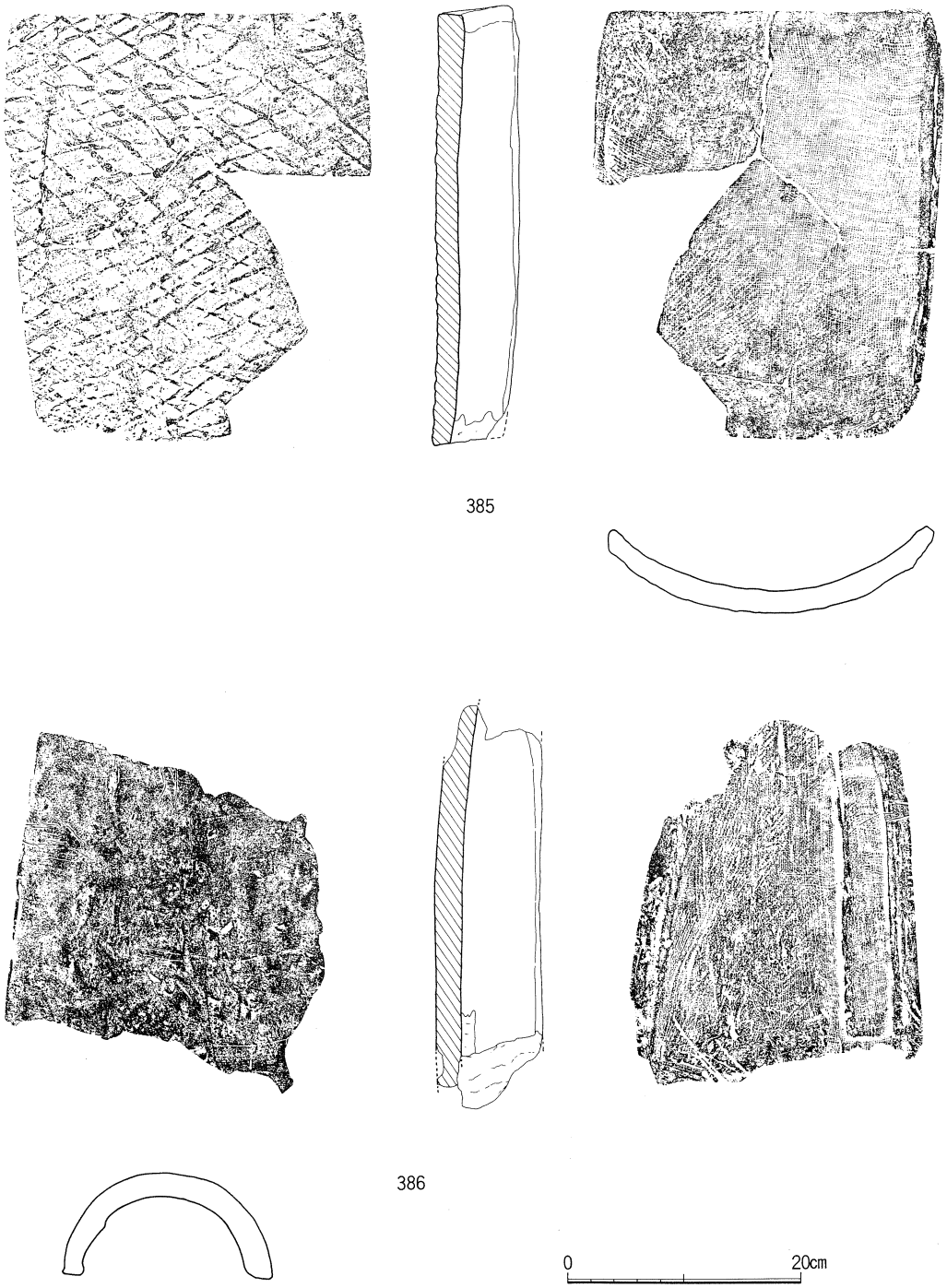
須恵器・坏（401）　瓦窯跡の覆土中のやや上部から出土している。底部は，回転糸切り後未調整である。体部は，直線的に口縁部へ向け開いている。底部は，器壁がやや厚く，口縁部もやや厚みを有している。体部内外面にヨコナデを行っている。焼成は，やや軟質のものである。口径12.6cm，器高4.1cmを測る。この須恵器の時期は，出雲国庁編年第５形式[註17]以降，神田遺跡，長嶺遺跡出土の須恵器に近いものと思われ，９世紀後半と思われる。



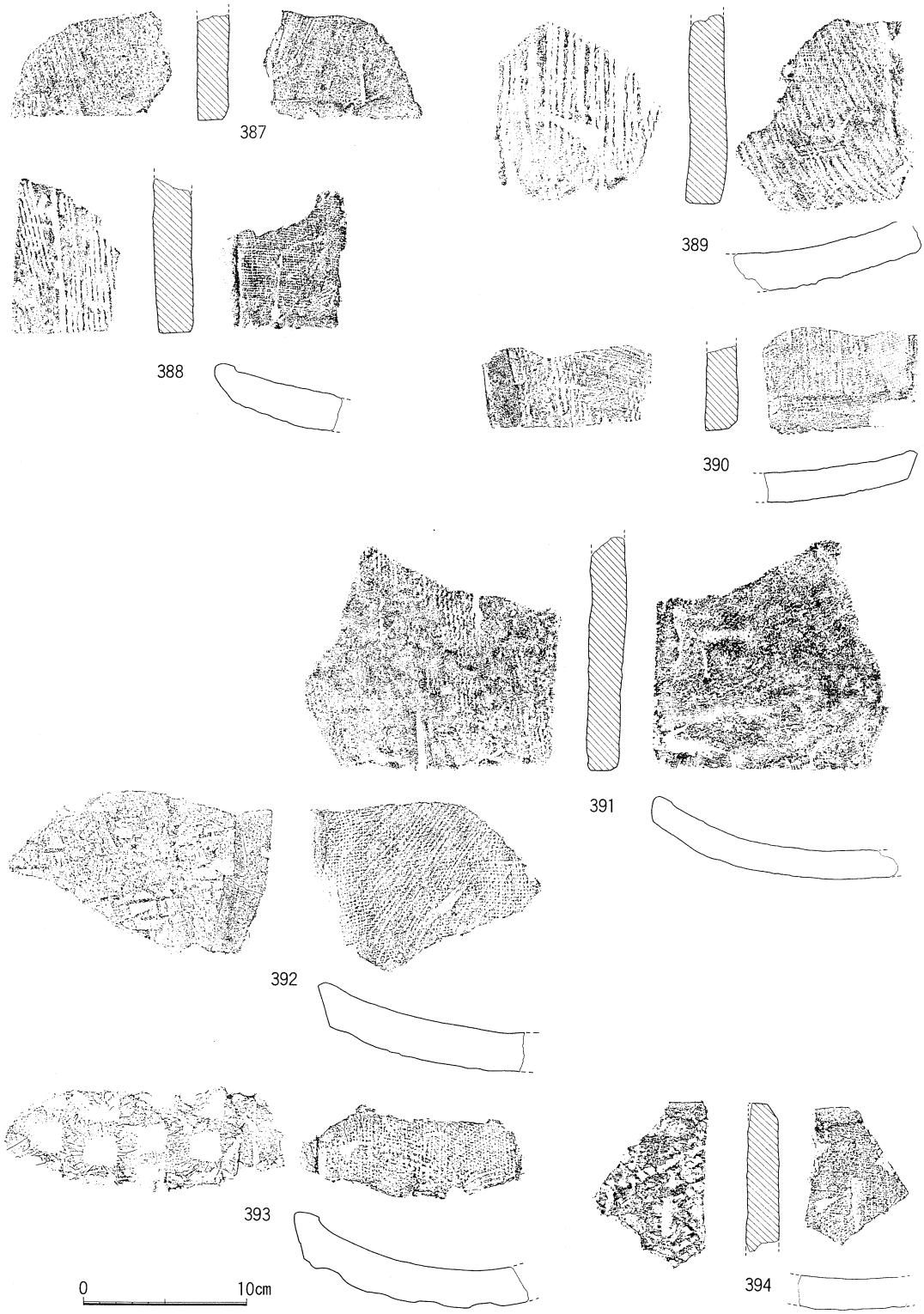
第93図　瓦窯跡出土瓦実測図



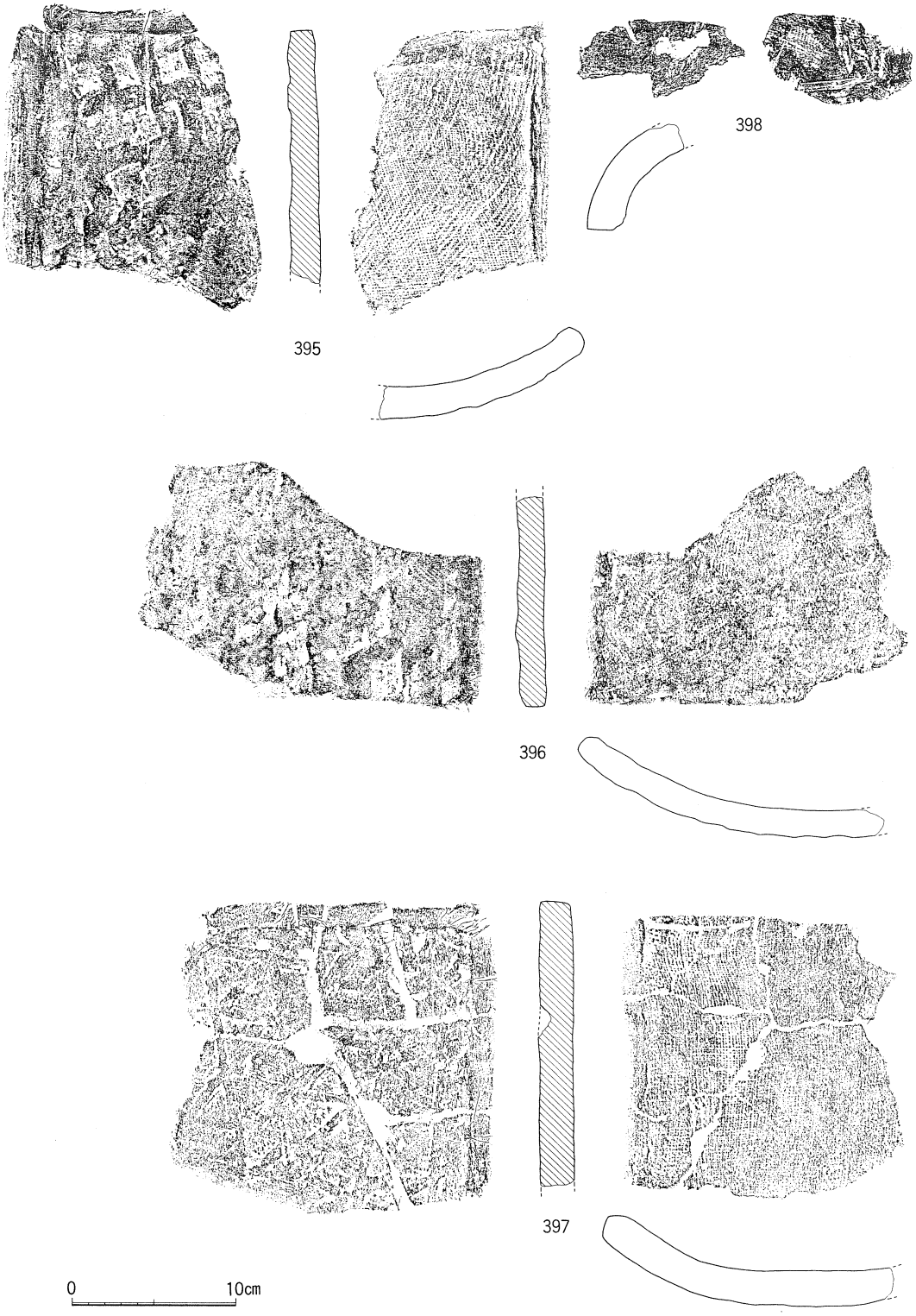
第94図　瓦窯跡出土瓦実測図



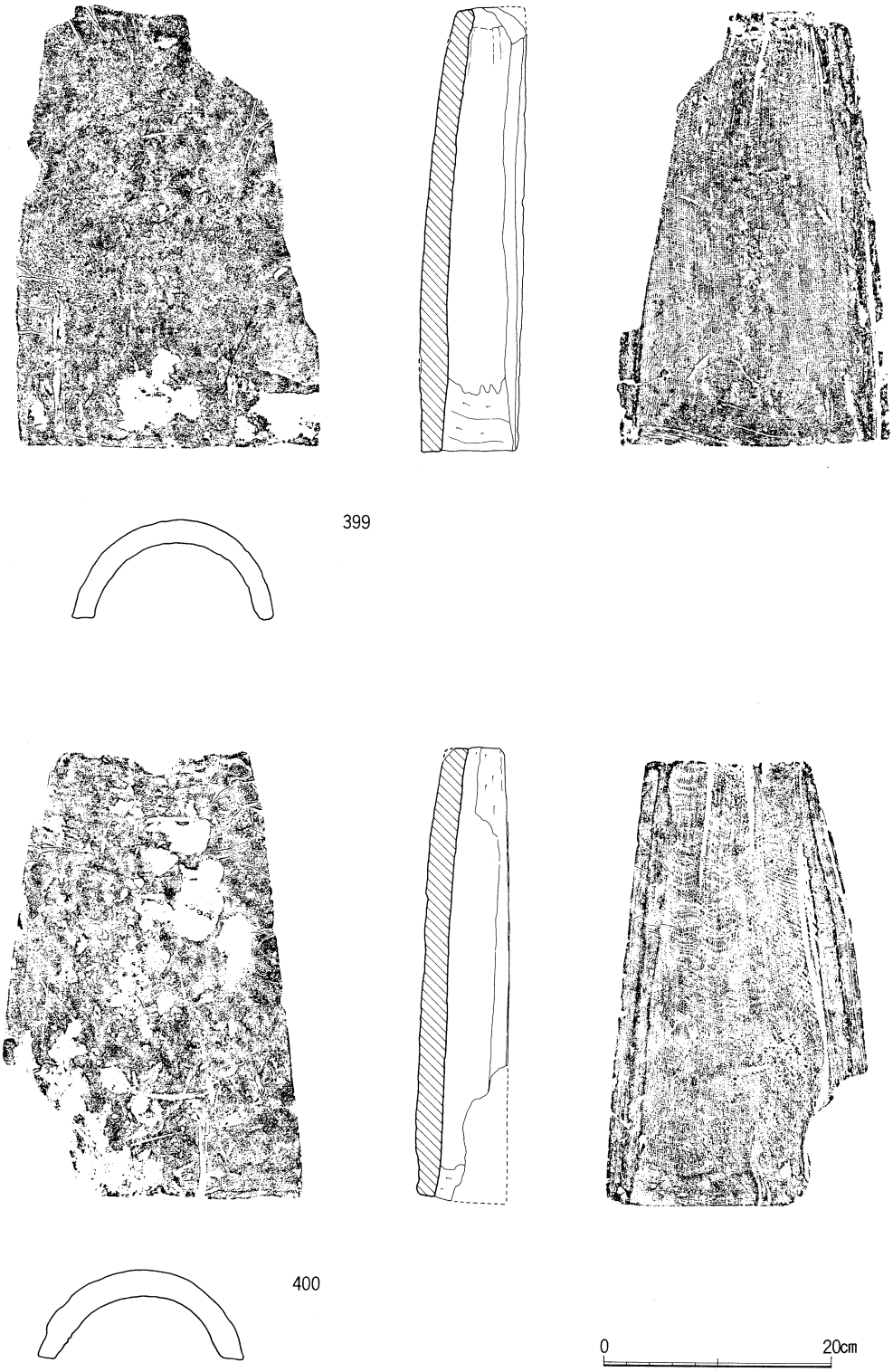
第95図　瓦窯跡出土瓦実測図



第96図　瓦窯跡出土瓦実測図



第97図　瓦窯跡出土瓦実測図



第98図　瓦窯跡出土瓦実測図

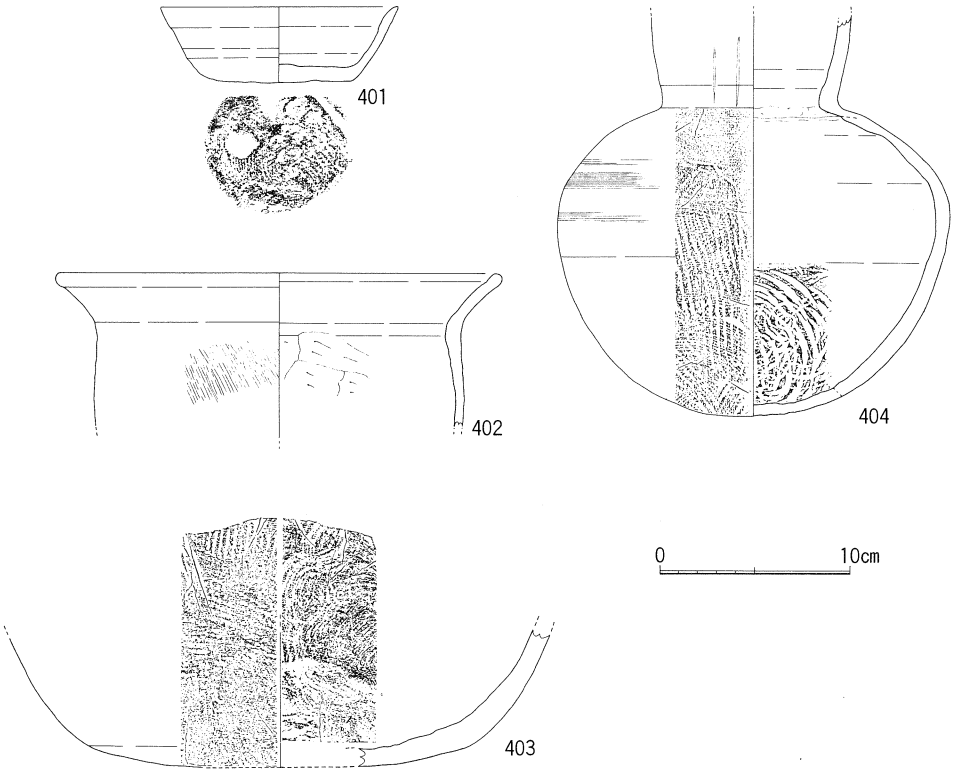
甕（403）　平底状の底部を有しており，外面に平行叩き，内面は同心円叩きを有している。底部内面は，同心円叩きの後にナデを施している。

壺（404）　口縁上端を欠くものである。底部は，丸底で体部外面に平行叩きの後にカキ目を施しており，上半はカキ目により叩きを消している。底部内面は同心円叩きが残り，体部内面上半はヨコナデを行っている。口縁部外面に「Ⅱ」のヘラ記号を入れている。残存高21.0cm，体部径20.6cmを測る。

土師器・甕（402）　「く」の字状に口縁部が開き，体部は直線的となっている。体部外面にハケメ，内部にヘラケズリを施している。

第Ⅳ調査区

第Ⅳ調査区は，丘陵北側斜面に位置する。調査区南側は北に向かって，かなり急峻な斜面になっており，南北の高低差は７ｍである。この斜面の北側に最大幅12ｍの，東西に帯状に延びる平坦面がある。この平坦面は北に向かって緩やかに傾斜しており，南北の高低差は約２ｍである。また，東西でも約1.5ｍの高低差があり，西側が低くなっている。この平坦面の北端は削られており，調査区外の水田面と約１ｍの段差がある。土層は，表土の下に褐色土が薄く堆積し，その下層から地



第99図　瓦窯跡出土遺物実測図

山面が検出された。

調査区南斜面からは，遺構は検出されず，遺物も出土しなかった。平坦面からは約200のピットが検出された。直径10～15cmの比較的小さなものが大半を占め，ピット内に褐色土が堆積しているものがほとんどであった。また，柱列など規格性のあるものは検出できなかった。これらのピット群は平坦面東部，中央部，西部に大別できる。平坦面の東部では溝状遺構２（SD－02，SD－03）が検出され，この二つの間では，直径24～72cmの比較的大きなピットが検出された。中央部では，直径の小さなピットがかなり密集した状態で検出された。また，この部分の北端では建物跡と思われる加工段（SB－01）が検出された。西部では，南側斜面との境界部分が段状に加工されている部分があり，溝が掘られていた。掘立柱建物の一部と思われるが，建物の規模は不明である。この付近から，土師質土器の小皿，白磁碗，褐釉四耳壺，など多くの遺物が出土している。また，西端近くのピット（P_{142}）からは，土師器の台付き皿，小皿，坏などがまとまって出土した。白磁碗は，11世紀後半から12世紀頃のものと思われ，これらの遺物・遺構もそのころのものと考えられる。ピットは，比較的疎らな状態で，段状遺構のある西南部にやや多かった。

SD－02

平坦面東側の，調査区南側斜面と平坦面との境界部分で検出された。東西方向に，平坦面の南端に沿う形で走っており，長さ8.76m，幅12～84cm，深さ２～33cmを測る。溝の南端は斜面を削り込む形になっており，北端と31cmの高低差がある。

SD－03

平坦面東端から東西方向に，SD－02とほぼ平行して走り，長さ3.48m，幅12～60cm，深さ２～20cmを測る。東端は調査区外へ続くと思われる。南端と北端との高低差は15cmほどである。底面から須恵器の坏などが出土した。

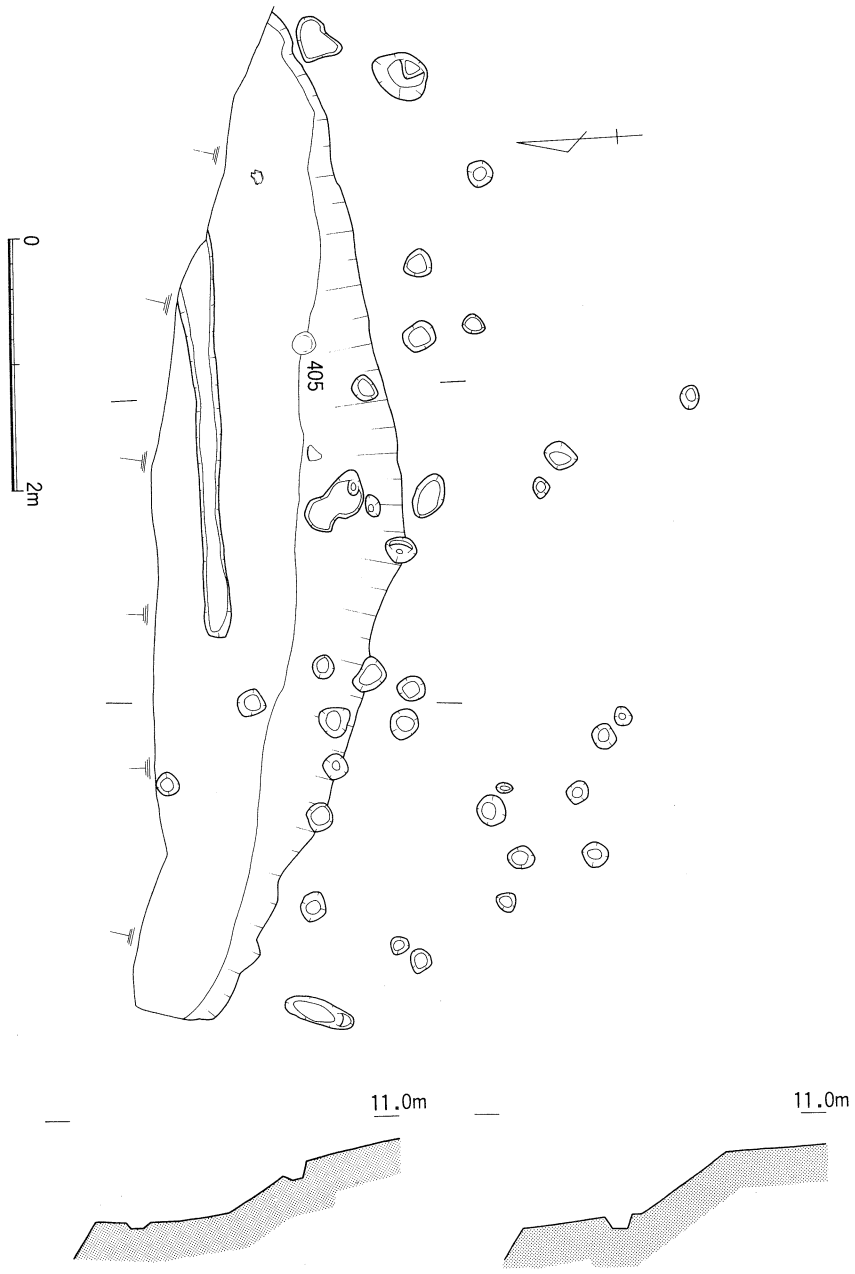
SB－04

平坦面中央の北端から検出された。平坦面から最小で14.5cm，最大で48cmの高低差を持つ加工面を削り出しており，その北端は，地山面が後世に削られ，欠損している。残存部分は，長さ7.92m，幅0.42～1.14mを測る。加工段傾斜面が比較的緩やかで，ここからはピット９が検出され，加工段平坦面との境界部分のピット及び地山面から，奈良時代のものと思われる須恵器の坏が出土した。これらのピットは，平面形は不整方形が多く，最大のもので長軸51cm，短軸24cmを測り，最小のものが長軸18cm，短軸12cmであった。加工段平坦面からは，ピット２（P_1，P_2）と溝状遺構（SD－04）が検出された。P_1は平面形が不整円形であり，直径21cm，深さ９cmを測る。P_2も平面形が不整円形であり，直径15.6cm，深さ11cmを測る。SD－04は，加工段平坦面のほぼ中央を東西に走り，西端は削られている。残存部分の長さは，3.22m，幅15cm～33cm，深さは２～８cmを測る。底面はほぼ

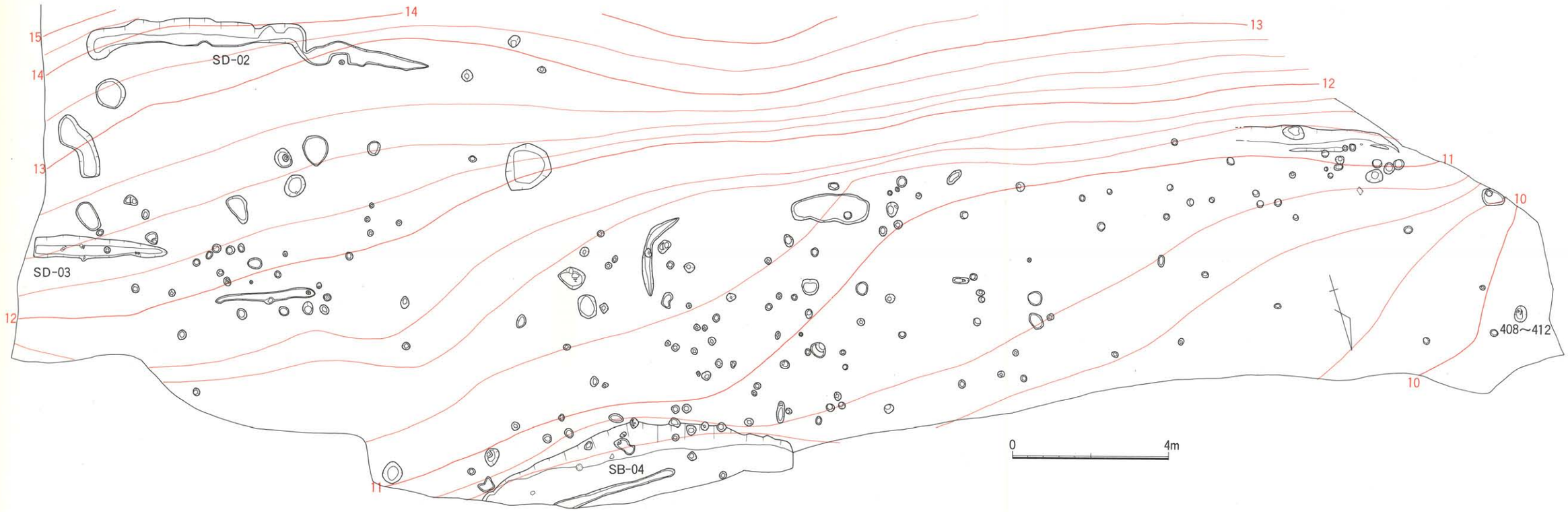
水平でほとんど傾斜を持たない。この溝状遺構及びピットは，掘立柱建物に伴うものと思われる。

SB－04出土遺物（第102図）

405は，須恵器の高台付の坏である。体部は，直線的に立ち上り，口縁端部に至る。口径16cm，器高6.1cmを測る。406は，底部の破片で，外底に回転糸切り痕が残る。407は体部が内湾しており，



第100図　Ⅳ区SB-04実測図



第101図　第Ⅳ調査区遺構全体図

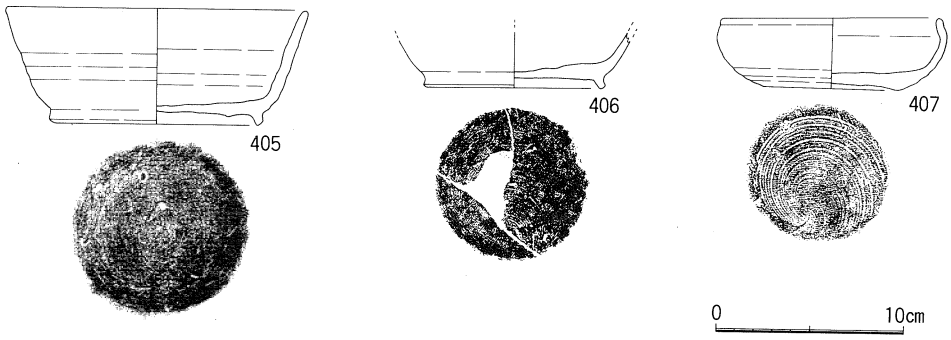
口縁端部が直立気味に立ち上がる。口径11.7cm，器高3.7cmを測る。

P142 出土土師器（第103図）　408，409は，台付皿である。底部は，回転糸切りを行っており，体部は直線的に開いている。409は皿にやや深みがあり，坏とも呼ぶべきものである。410，411は，小皿である。410は口径９cm，器高2.0cmを測り，底部外面に回転糸切り痕を残す。411は口径8.3cm，器高1.9cmを測り，体部の器壁にやや厚味を有するものである。412は坏であり，平底の外面に回転糸切り痕を残す。底径は，7.6cmを測る。

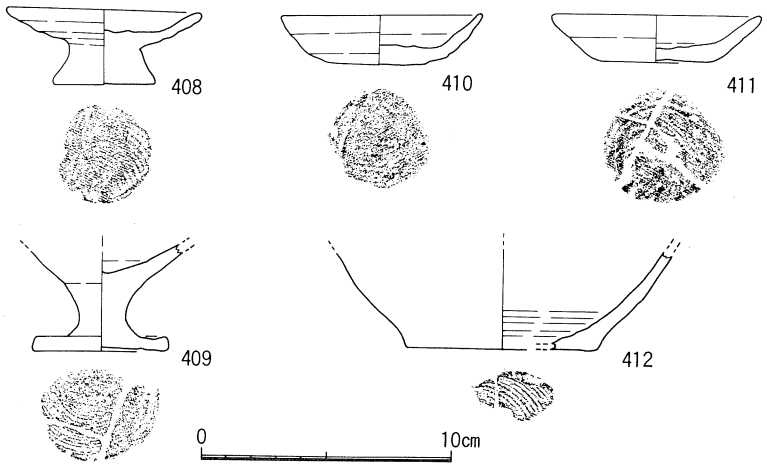
陶磁器（413～419）　413～418は，中国製白磁，碗である。413，414は玉縁が小さく，体部が内湾気味に立ち上がるものである。

化粧土の上に釉を施している。これらは，太宰府分類Ⅱ－Ⅰa類[註18]とされる。415，417は，玉縁の付く碗，太宰府分類Ⅳ－Ⅰa類[註19]である。419は，褐釉の四耳壺で，釉が剝離している。416，418は玉縁の付く碗より新しい時期のものである。

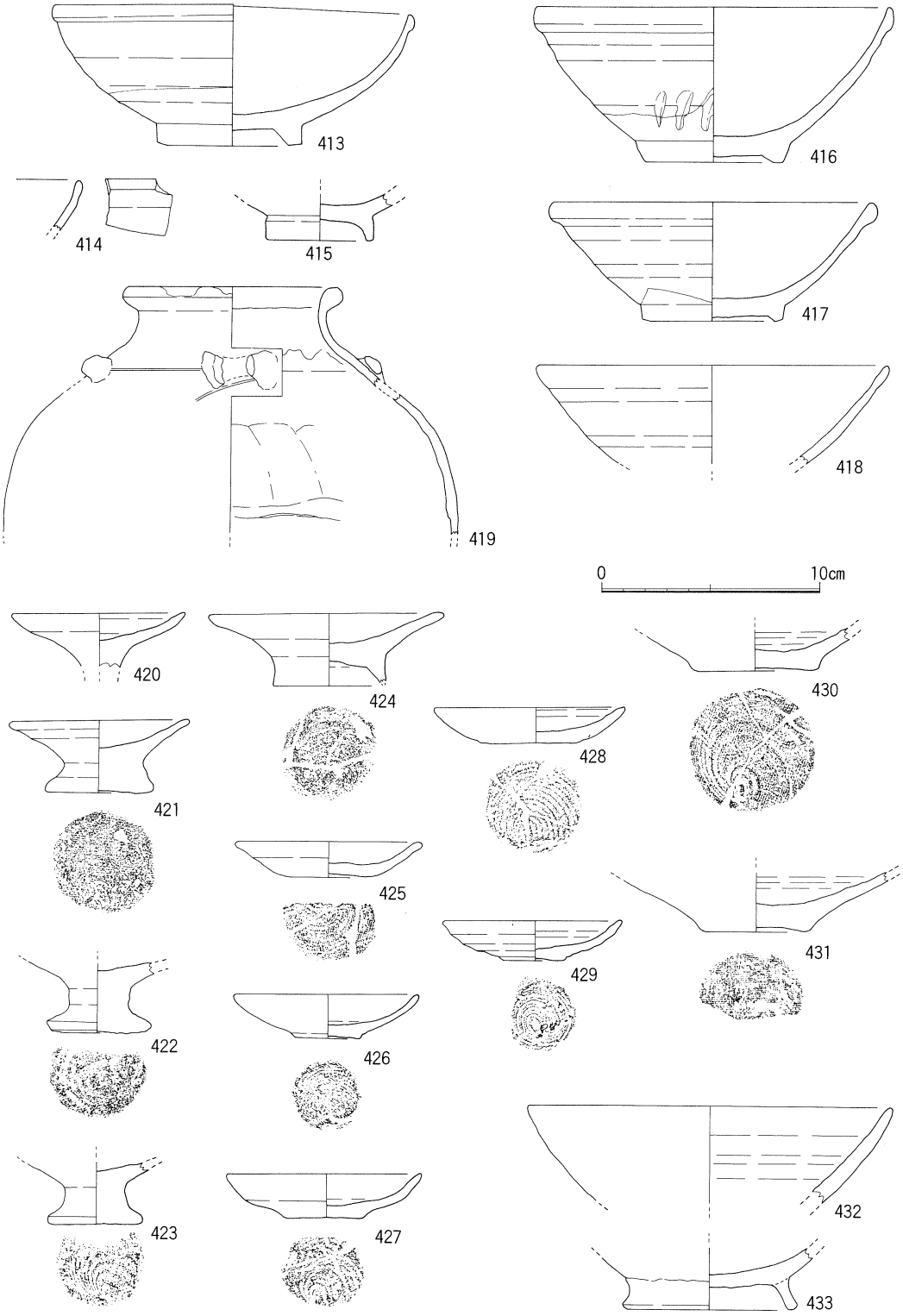
土師器（420～433）　420～424は，台付皿である。420は，皿がやや内湾して開くものである。421



第102図　SB-04出土遺物実測図



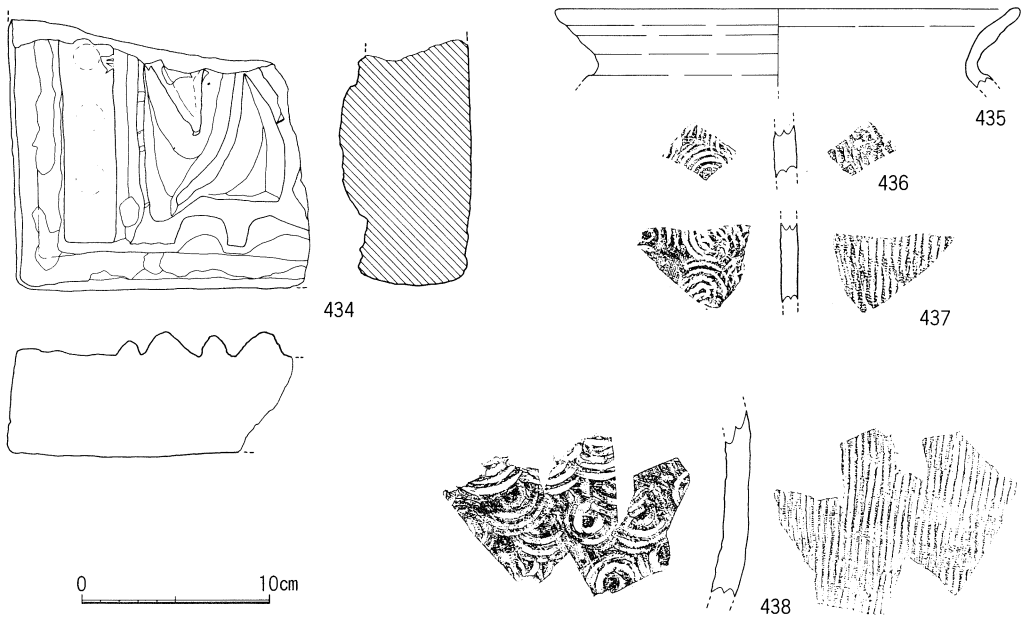
第103図　ピット出土遺物実測図



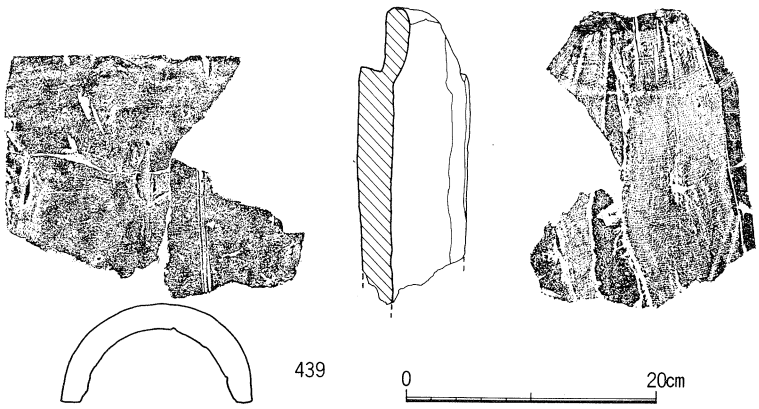
第104図　Ⅳ区出土遺物実測図

は，皿が直線的開き，口縁部へ続いている。422，423は，台部のみで，底部外面に回転糸切り痕を残す。424は，高台を有し，皿は直線的に開いている。425～429は，小皿で体部は内湾しており，底部はいずれも回転糸切りである。これらの土師器は，白磁，碗に伴うものと思われる。

須恵器（435～438）　435～437は，同一固体の甕と思われ，口縁内外面にヨコナデを施し，体部外面に平行叩き，内面に同心円叩きの後を一部ナデている。435は，体部の平行叩きにやや幅を有し，円面の同心円叩きもやや粗いものである。

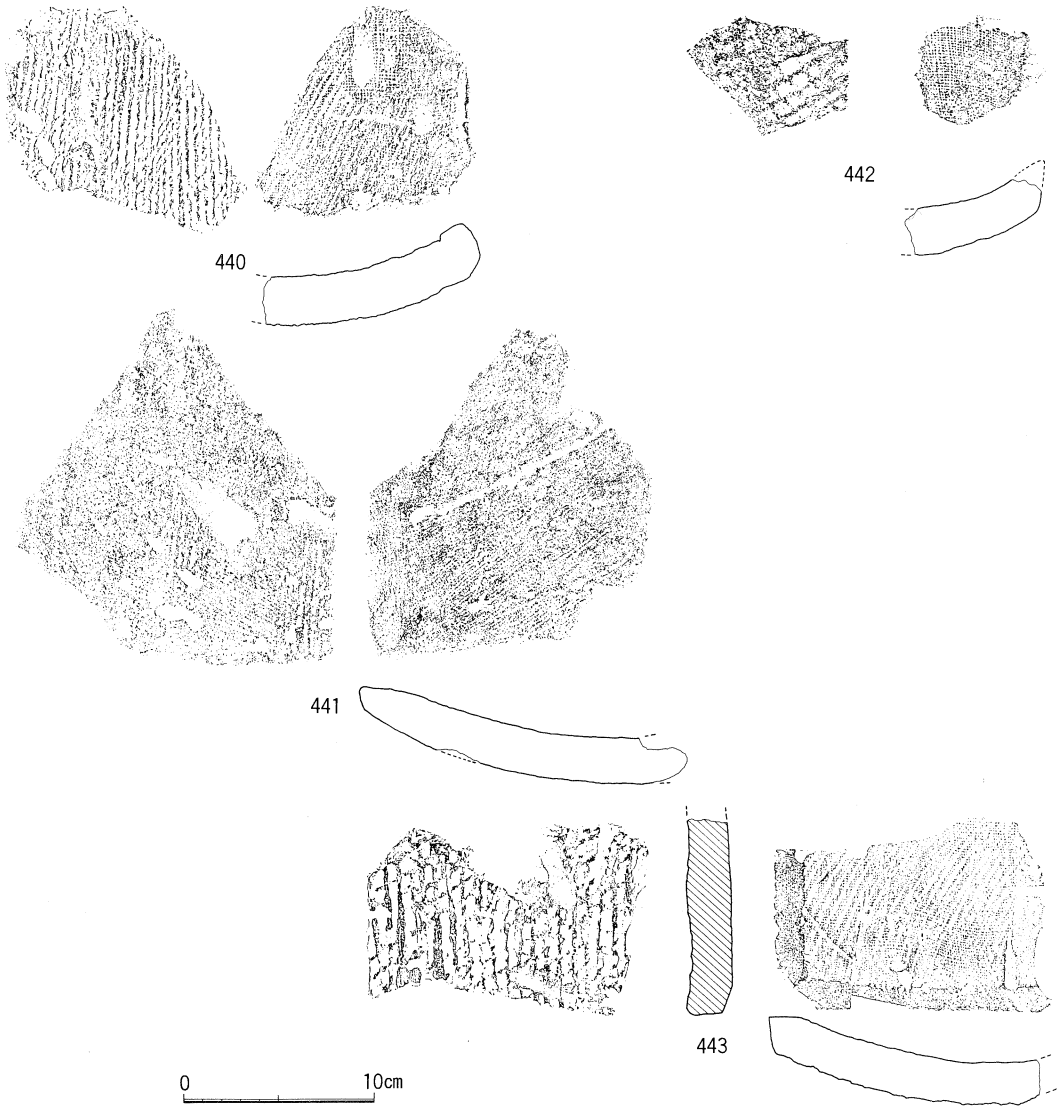


第105図　Ⅳ区出土遺物実測図



第106図　Ⅳ区出土瓦実測図

瓦（434，439～443）　434は，鬼板瓦で側部から上部にかけて周囲に珠文の付くものである。左下側の部分で牙を表現している。439は，玉縁の付く丸瓦である。440～443は，平瓦である。440，441は，凸面調整が通常の縄目叩き（NB）である。441は，離れ砂が多く付着している。442は，細かい格子叩き（KK）である。離れ砂が多く付着している。443は，細かな斜格子叩き（KH）である。



第107図　Ⅳ区出土瓦実測図

V　中竹矢遺跡出土の瓦について

中竹矢遺跡から，出土した瓦片は総数2,755個に及ぶ。その内訳は，表３の通りであり，その７割近くが第Ⅰ調査区の瓦溜まりから出土したものである。これらの瓦が，どのような傾向を持つのかを図108の瓦分類基準に基づいて，分類・整理した。これらは破片により分類しており，原体の復元は出来ていない。そのため叩きの分類は，重複する可能性がある。なお，この瓦の分類は，林健亮原案による。

平瓦については，叩きの文様，側部及び端部の形式，焼成によって分類した。各分類基準についての結果は，表４及び表５（グラフA1～A4）の通りである。各分類項目について，その傾向を以下に簡単に述べる。

①叩　　き：全体に格子がやや多いが，縄目とほとんど数量的な差はない。平叩きはほとんどなかった。格子には比較的多くのパターンが見られるが，縄目には大きな差はなく縄目Ｂが集中して見られる（グラフA1)。

②側　　部：形式10と８がほとんどであり，形式の判明した瓦片の７割を占める（グラフA2)。

③端　　部：端部は，形式16が多い。形式にばらつきが少なく，不明のものを除くと15，16，17以外の形式はほとんどない（グラフA3)。

④焼　　成：焼成がよくないものが多く，焼成の良好なものは全体の２割程度であった（グラフA4)。

各分類基準について，調査区ごとの特徴は見られず，概ね各調査区とも全体の比率と同様の傾向を示した。また，叩き文様と，焼成及び側部の形式の相関関係についても調べてみたが，特に顕著な特徴は見られなかった。

丸瓦については，端部形式，調整，焼成及び側部の形式によって分類した。各分類基準についての結果は，表６及び表７（グラフB1～B4）の通りである。以下，各分類項目についての特徴を述べる。

①端部形式：不明のものが多く，全体の特徴は一概にはいえないが形式の判明したものの内７割が行基式であり，これが中竹矢遺跡における丸瓦の中心的な形式であったと考えられる（グラフB1)。

②凸面調整：表及び図中の記号は，次のような意味を表す。K＝ケズリ，KN＝ケズリ・ナデ，NB＝ナデ，NK＝縄ケズリ。調整は，ケズリが大部分を占める（グラフB2)。

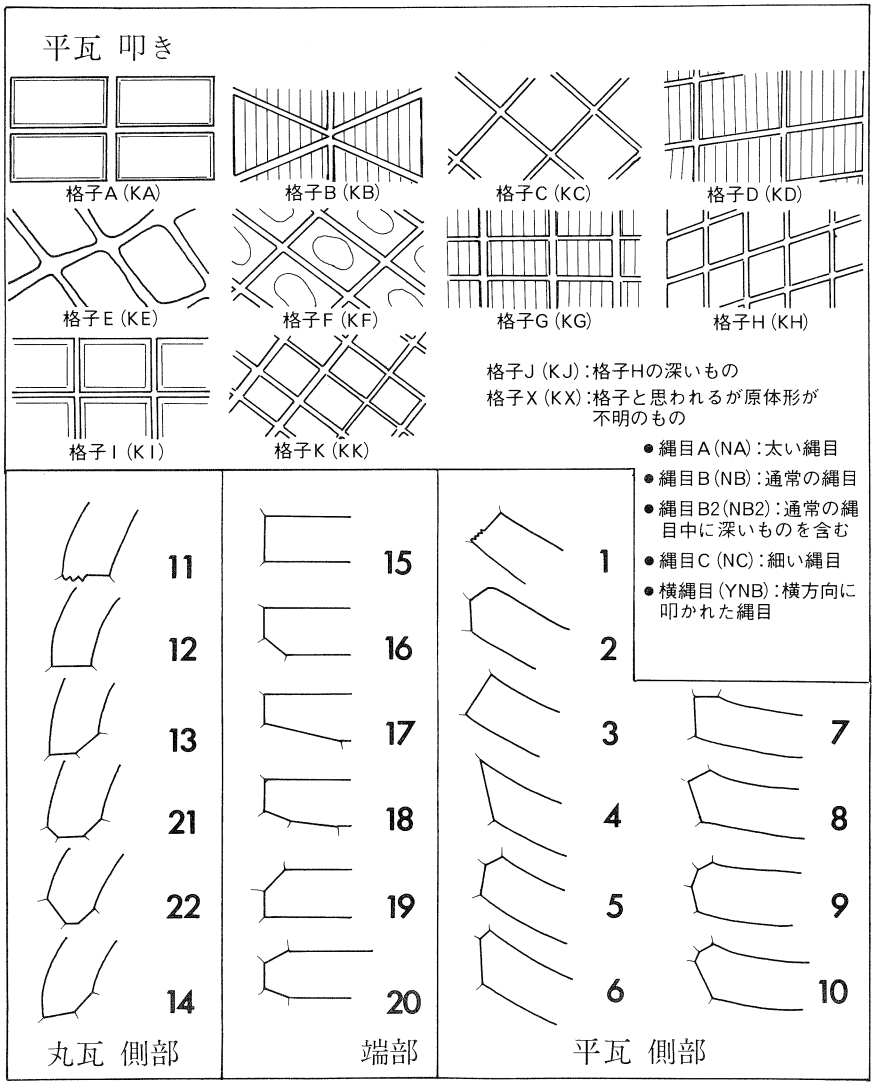
③焼　　成：平瓦とほぼ同様の傾向が見られ，全体的に焼成はあまり良くない（グラフB3)。

④側部形式：形式13がほとんどを占め，形式のばらつきも少ない（グラフB4)。

上記以外に，行基・玉縁式と焼成との相関関係を調べたが，図109のように行基式は一般に焼成が悪く，玉縁式は焼成が良いという結果を得た。サンプル数が丸瓦出土数の15%程度なので一概には言えないが，このことから行基式よりも時期的に下がることが推察できる。

第３表　中竹矢遺跡瓦出土数

	平　瓦	丸　瓦	合　計
第Ⅰ調査区	1,222	643	1,865
第Ⅱ調査区	447	341	788
第Ⅲ調査	76	26	102
全調査区	1,745	1,010	2,755

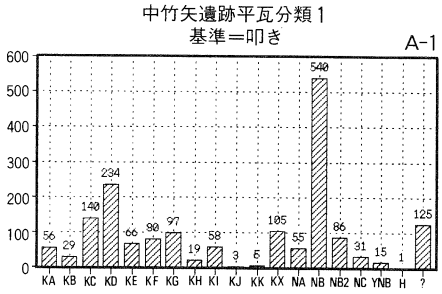


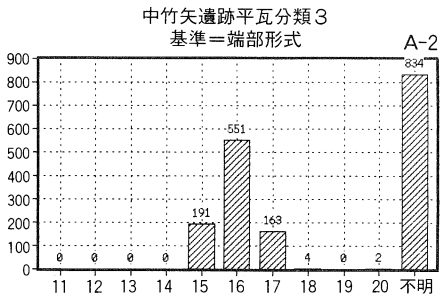
第108図　瓦 分 類 基 準

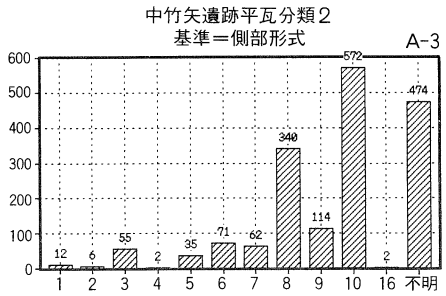
第4表　中竹矢遺跡平瓦分類表

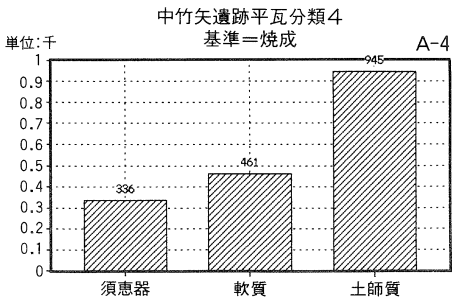
基準	叩き			側部			端部			焼成		
	分類	出土数	%	分類	出土数	%	分類	出土数	%	分類	出土数	%
	格子A	56	3.2	1	12	0.7	11	0	0.0	須恵質	336	19.3
	格子B	29	1.7	2	6	0.3	12	0	0.0	軟質	461	26.4
	格子C	140	8.0	3	55	3.2	13	0	0.0	土師質	945	54.2
	格子D	234	13.4	4	2	0.1	14	0	0.0			
	格子E	66	3.8	5	35	2.0	15	191	10.9			
	格子F	80	4.6	6	71	4.1	16	551	31.6			
	格子G	97	5.6	7	62	3.6	17	163	9.3			
	格子H	19	1.1	8	340	19.5	18	4	0.2			
	格子I	58	3.3	9	114	6.5	19	0	0.0			
	格子J	3	0.2	10	572	32.8	20	2	0.1			
	格子K	5	0.3	16	2	0.1	不明	834	47.8			
	格子その他	105	6.0	不明	474	27.2	合計	1,745				
	縄目A	55	3.2	合計	1,745							
	縄目B	540	30.9									
	格子B2	86	4.9									
	縄目C	31	1.8									
	横縄目	15	0.9									
	平行	1	0.1									
	不明・なし	125	7.2									
	合計	1,745										

第5表　瓦分類グラフ





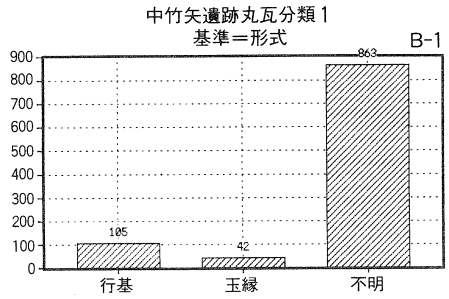


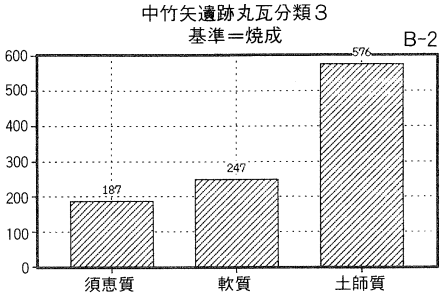


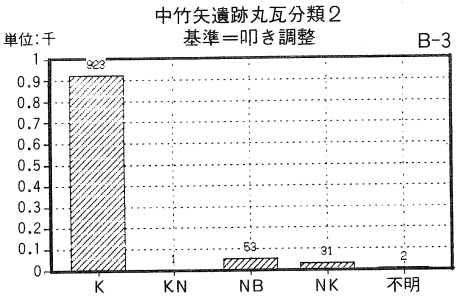
第6表　中竹矢遺跡丸瓦分類表

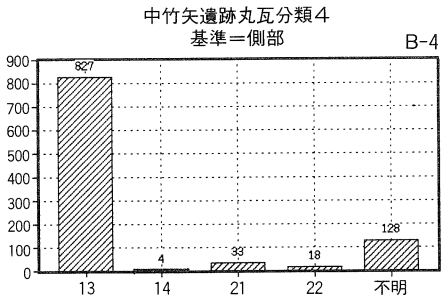
基準	形式			凸面調整			焼成			側部		
	分類	出土数	%	分類	出土数	%	分類	出土数	%	分類	出土数	%
	行基	105	10.4	K	923	91.4	須恵質	187	18.5	13	827	81.9
	玉縁	42	4.2	KN	1	0.1	軟質	247	24.5	14	4	0.4
	不明	863	85.4	NB	53	5.2	土師質	576	57.0	21	33	3.3
	合計	1,010		NK	31	3.1				22	18	1.8
				不明	2	0.2				不明	128	12.7

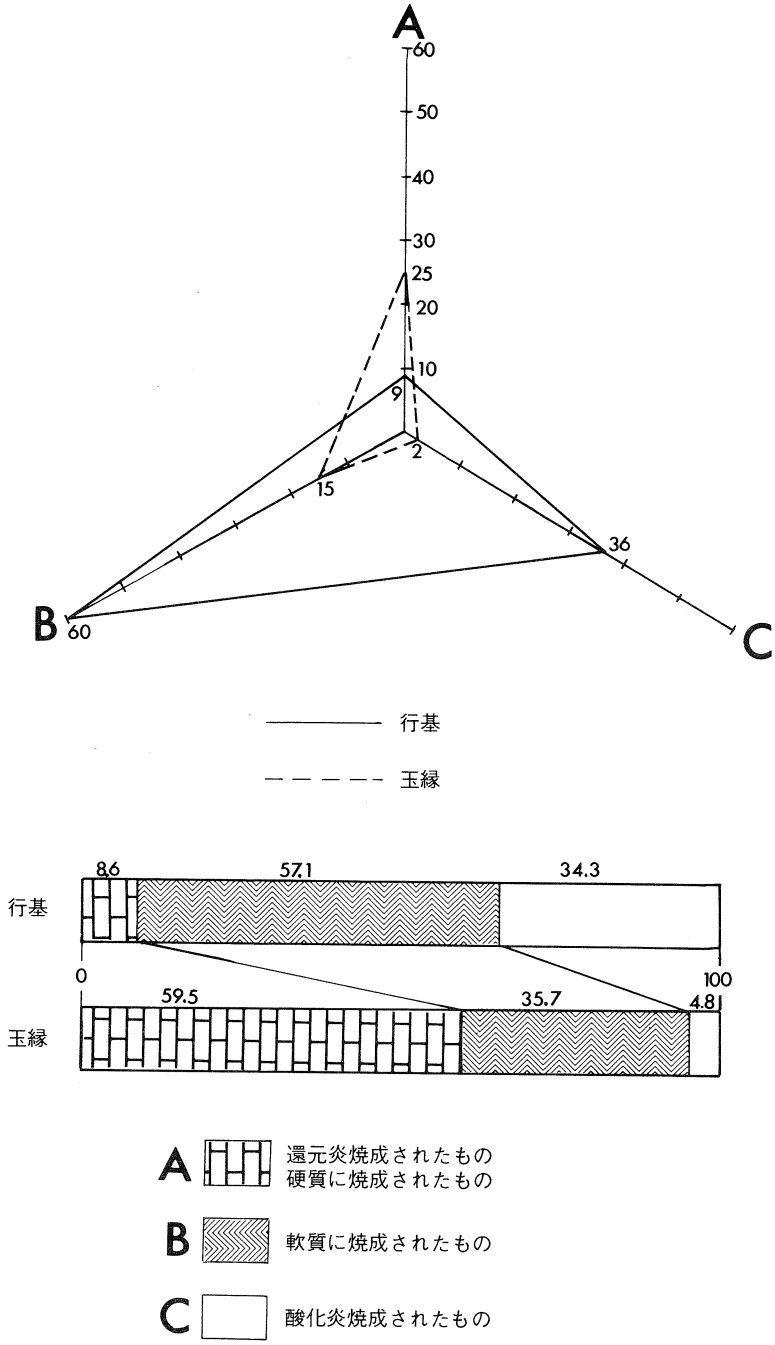
第7表　丸瓦分類グラフ











第109図　丸瓦形式，焼成相関グラフ

Ⅵ　自然科学的分析

松江市中竹矢遺跡3号横穴出土のウシBos taurus

早稲田大学
金　子　浩　昌

腰椎，肋骨，下顎骨及び脛骨が検出されている。

腰　椎

棘突起，横突起を欠く，破損の状況から埋存時には完存する状態であったものと思われる。椎体の間接板が脱れているところから若い固体のものと思われる。

肋骨片

2点あるが，別々のものであろう。これも骨端を欠くが，破損部は新しい。1点は左側のもの。

下顎骨

左側の下顎骨がある。欠損する部分が骨端に多少見られるが，ほぼ全体をうかがうことのできる標本である。おそらく埋存時にはこれも完存していたものであろう。

本標本は乳臼歯が萠出し，さらにM_1，M_2まで完出し，M_3は歯槽内に萠出を開始する直前の状態，I_1が萠出し始めた状態である。およそ生後18ケ月の個体とみられる。

脛　骨

左側のもので，近・遠両骨端を欠いている。おそらく両端が骨化しないままの状態で破損したのであろう。若い固体のもので，下顎骨と同じ個体のものと考えている。

以上5点程のウシの遺体はおそらく同一の体のものと考えられるが，全身の骨格としてはごく僅かなものであり，解体されたものがはこびこまれたのではないかと思われる。その目的あるいは意図がどのようなものであったかを今知ることは難しいと思う。しかし，何らかの呪術的な行為と関りがあることも考えられ，明治，大正年代位までは各地にのこっていたと考えられる雨乞いの祭りが考えられてくるのである。池にウシを投げ込むとか，ウシの首を切って滝に投げ込むといった雨乞いの祭りが，この地方でどの程度行われていたか確かでないが，横穴が祈とうに使われていたということなのであろうか。

計 測 値（単位：㎜）

下顎長（Gonion～Infradentale）	298.0
下顎長（Condyle～Infradentale）	306.5
下顎枝幅（Goc～M_2歯槽縁）	83.0（推定）

dm_2～dm_4	54.3
dm_2～M_2	115.0
M_1～M_2	61.0

	dm_2	dm_3	dm_4	M_1	M_2	I_1	I_2
歯冠長	9.75	16.69	26.61	28.59	32.55	14.95	13.38
歯冠幅	6.87	10.44	15.04	15.33	13.73	9.72	

I_2：未萠出歯，I_1：一部萠出

脛骨現存長	204.4
骨体径（最小）	29.70
腰椎椎体長	37.82

松江市中竹矢遺跡Ⅲ区５号穴の側壁下部に塗りめぐらされた赤色顔料物質の化学分析

武庫川女子大学薬学部
安田博幸・森　眞由美

中竹矢遺跡は松江市竹矢町字畑廻地区に位置しⅠ区からⅤ区に分けられている。その中でⅢ区は丘陵斜面にあり，この丘陵上部より横穴２穴（３号穴，４号穴）が検出され６世紀後半から７世紀後半の遺物が出土している。この２基の横穴は近世の初頭に再利用されており，２つの横穴をトンネル状につなぎ，中間に長い部屋（５号穴）を造り出している。５号穴は，平面プランが台形で，天井は丸天井をなしている。南壁と東壁には小さな横穴が掘られ，火を焚いた痕跡がみられることなどから，近世初頭の時期に祭祀などに使用されたものと考えられている。
また，５号穴の下半部には，赤色顔料が皮膜状に塗りめぐらされて残っている。

今回，この赤色顔料物質について，地山の土壌を対照物質とする材質的鑑定分析を依頼されたので，まず，筆者らの常法[(1)]とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析で定性的鑑定を行ない，つづいて，赤色土壌としての材質定量分析を実施して，両物質を比較した結果，所見を得たので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

試料１

中竹矢遺跡５号穴の東側壁下部より削って採取され，側壁の地山土壌の混じっている赤色顔料物質（13ｇ）。その最も赤い部分20㎎を〔Ⅰ〕の微量定性分析用試料として用いる。また，全試料を乳鉢で粉末化し，120°で２時間乾燥したものを〔Ⅱ〕の定量分析用の試料とする。

試料２

中竹矢遺跡５号穴の南側壁下部より削って採取され，側壁の地山土壌の混じっている赤色顔料物質（３ｇ）。その最も赤い部分20㎎を〔Ⅰ〕の微量定性分析用試料として用いる。また，全試料を乳鉢で粉末化し，120°で２時間乾燥したものを〔Ⅱ〕の定量分析用の試料とする。

試料３

中竹矢遺跡５号穴の北側壁下部より削って採取され，側壁の地山土壌の混じった赤色顔料物質（６ｇ）。その最も赤い部分20㎎を〔Ⅰ〕の微量定性分析用試料として用いる。また，全試料を乳鉢で粉末化し，120°で２時間乾燥したものを〔Ⅱ〕の定量分析用の試料とする。

試 料 4

中竹矢遺跡５号穴の北側壁上部より採取された淡茶褐色の地山土壌（11ｇ）。その20㎎を〔Ⅰ〕の微量定性分析用試料として用いる。また，全試料を乳鉢で粉末化し，120°で２時間乾燥したものを〔Ⅱ〕の定量分析用の試料とする。

試 料 5

中竹矢遺跡５号穴東側壁上部より採取された淡茶褐色の地山土壌（15ｇ）。その20㎎を〔Ⅰ〕の微量定性分析用試料として用いる。また，全試料を乳鉢で粉末化し，120°で２時間乾燥したものを〔Ⅱ〕の定量分析用の試料とする。

〔Ⅰ〕５号穴側壁下部に塗布された赤色顔料物質等についての微量定性分析

試料検液の作製

上記の微量定性分析用試料のそれぞれをガラス尖型管に移し，濃硝酸１滴と濃塩酸３滴を加え，加温し，酸可溶性成分を溶解させたのち，適当量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ，酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して，ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。試料検液の番号は，試料番号にそれぞれ対応させる。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙№51B（２㎝×40㎝）を使用し，ブタノール硝塩酸を展開溶媒として，試料検液と，対照の鉄イオン（Fe^{3+}）と水銀イオン（Hg^{2+}）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し，その一方は検出試薬として１％ジフェニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し，もう一方には検出試薬として0.05％ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して，それらの際に，ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は次頁の表１，表２のとおりである。

表1　ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

試　　料	Rf　値（色　調）
試料検液 1	0.12（紫褐色）
試料検液 2	0.11（紫褐色）
試料検液 3	0.13（紫褐色）
試料検液 4	0.13（紫褐色）
試料検液 5	0.15（紫褐色）
Fe^{3+}標準液	0.14（紫褐色）
Hg^{2+}標準液	0.90（紫　色）

表2　ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

試　　料	Rf　値（色　調）
試料検液 1	呈色スポット発現せず
試料検液 2	呈色スポット発現せず
試料検液 3	呈色スポット発現せず
試料検液 4	呈色スポット発現せず
試料検液 5	呈色スポット発現せず
Fe^{3+}標準液	呈色スポット発現せず
Hg^{2+}標準液	0.90（橙　色）

判　　定

以上の結果のとおり，中竹矢遺跡Ⅲ区5号穴の側壁の下半部分に皮膜状に塗りめぐらされていた赤色顔料は，東，南，北のいずれの側壁試料からも水銀朱（HgS）に由来するHg^{2+}が全く検出されなかったことから，顔料はすべてベンガラ（Fe_2O_3）であると判定される。また，当然のことながら，地山土壌が水銀（Hg）成分をいっさい含んでいないことも確認された。

〔Ⅱ〕5号穴側壁下部に塗布された赤色顔料物質等の材質定量分析

上記のように，中竹矢遺跡Ⅲ区5号穴の下部に塗りめぐらされていた赤色顔料物質はベンガラ成分であることが明らかとなったが，その素材はおそらく鉄成分の多い赤色土壌が利用されたものと考えられる。そこで，その赤色土壌の採取地の土壌と，本遺跡の所在位置土壌との材質的関係を調べるために，試料1～3（地山土壌の混じる赤色顔料物質）と試料4，5（5号穴上部2ケ所より採取の地山土壌）について鉄成分および，土壌成分の定量分析を行ない，比較検討を試みた。

定量分析操作と分析結果

既述の「分析用試料の採取」の項に記した各定量分析用試料の約１ｇを，精密に量り取ってそれぞれのビーカーに移し，濃塩酸40mℓを加えゆるやかに１時間加熱する。ついで，酸不溶性成分をあらかじめ精秤してあるガラスろ過器で吸引してこし分け，少量の蒸留水で洗浄後分離する。ガラスろ過器上の酸不溶性成分（ケイ酸塩類）は乾燥状態において坪量する。ろ過した溶液の方は上記の洗浄液と合わし，蒸留水で正確に250mℓに希釈してから二分する。その一方の200mℓは，アンモニアを加えてアルカリ性にし，その際析出する金属水酸化物の沈澱をろ紙上にわけとり加熱乾燥した後，ルツボに移して１時間熱灼灰化する。ルツボ内に残る物質（金属酸化物）を秤量すれば，酸化鉄（Fe_2O_3）と酸化アルミニウム（Al_2O_3）の合計量を得る。二分した残余の50mℓは，その中の一定量ずつ（１回に20mℓで２回実験する）をとって，ヨウ素法滴定を利用して鉄成分（Fe^{3+}）の定量を行ない，Fe_2O_3の量に換算する。さきのFe_2O_3とAl_2O_3の総量からFe_2O_3量を差し引けばAl_2O_3量を求め得る。

このようにして得られる酸不溶性成分，酸可溶性の鉄成分（Fe_2O_3），酸化溶性のアルミニウム成分（Al_2O_3）の各成分量の採取試料量に対する比をとることにより，試料土壌中の各成分の含量％が算出される。

ほかに，土壌の特徴を調べる一助として，カルシウム（Ca）・マグネシウム（Mg）・チタン（Ti）について原子吸光分析法で定量分析を行ない，それぞれ酸化カルシウム（CaO）・酸化マグネシウム（MgO）・酸化チタン（TiO_2）の含量％として算出する。

以上の操作の結果得られた試料１～５の定量分析値は表３のとおりである。

表３　中竹矢遺跡Ⅲ区５号穴の赤色顔料物質等の材質定量分析値（％）

試料	主成分（％）			微量成分（％）		
	酸不溶性成分	Al_2O_3	Fe_2O_3	CaO	MgO	TiO_2
試料１	82.12	8.11	4.69	0.01	0.24	0.18
試料２	83.87	6.47	4.35	0.01	0.21	0.20
試料３	80.92	10.48	3.76	0.01	0.23	0.17
試料４	89.59	4.91	2.49	0.01	0.23	0.17
試料５	88.95	5.23	2.66	0.01	0.22	0.18

考　　察

以上の分析結果から，今回分析した中竹矢遺跡Ⅲ区５号穴の５試料は，材質的にも，３ケ所で採取された赤色顔料（試料１～３）と，側壁上部２ケ所で採取された地山土壌（試料４，５）の２グループに分かれることがわかった。赤色顔料試料はすべて酸不溶性成分81～84％，$Fe_2O_3$４～５％のグループ，一方，地山土壌試料２種は，ともにきわめて近似した値で，酸不溶性成分89～90％，$Fe_2O_3$２～３％のグループに属することから，両者は材質的に明らかに異なり，赤色顔料の顕著な赤色はベルガラ成分（酸化鉄，Fe_2O_3）量の多さに因っていることが首肯される。すなわち，５号穴側壁下部に塗りめぐらされた赤色顔料の素材としては，化学的風化が進んで，鉄含量の多くなった地山以外の赤色土壌が利用されたものと考えられる。

なお，一言付言したいのは，試料１～３では，「試料の外観および，分析用試料の採取」の項に記したように，５号穴側壁下部からの試料採取時に，地山土壌があわせて削り取られているが，定量分析用の試料の調製にあたって，われわれは，赤色顔料と地山土壌との分別が困難なために，両者をあわせた全量を均一にして，分析用試料として分析したことである。

したがって，試料１～３の各分析値には，試料４，５の分析値が寄与していると考えられる。この点を考慮すれば，試料１～３の赤色顔料の赤色の起因成分のFe_2O_3％の実際の値は，もう少し上昇し，地山土壌の該値との差はさらに若干大きくなって，地山土壌との違いを顕著に示すことになろう。

（1991年４月分析）

註

1) 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『斉藤　忠 編集　日本考古学論集Ⅰ　考古学の基本的諸問題』吉川弘文館　pp.389－407　(1986)
安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝流に関する２，３の考察」『橿原考古学研究所論集第７』 吉川弘文館　pp.449－471　(1984)

Ⅶ　ま　と　め

今回検出した遺構は，弥生時代以降，近世まで続いていた。それぞれの遺構は，調査区各々のまとまりで見ることとする。

第Ⅰ調査区－ａ，ｂ，ｃからは，前回調査区に続くと思われる土壙が73基確認された。土壙内から縄文時代晩期，弥生時代前期・中期・後期，古墳時代前期・中期の遺物が出土している。土壙は平面形，床面等に規格性は無く，壁面も不明瞭であった。同じ意宇平野地内の間内遺跡[註20]でも同様の土壙を検出しており，ここでは，土壙が白色粘土に掘り込まれ，掘り方，壁とも明瞭であった。中竹矢遺跡の土壙の性格としては，土壙墓，貯蔵穴等が考えられているが，土壙が掘り込まれた土層が灰白色粘質土であり，土器等の焼成に使用した粘土を採掘した跡と考えられる。採掘を繰り返したため，各土壙が切り合い，掘り方が不明瞭となったものである。次にⅠ－ｄ区は，丘陵と水田部の境となっており，ここでは瓦，須恵器の包含層が厚く堆積していた。この須恵器は，大部分が平安時代に属し，一部奈良時代を含み，瓦もこれらと同時期と考えられた。瓦は，Ⅰ－ｄ区の北側に位置する県史跡出雲国分寺瓦窯跡の灰原から流れ込んだものがあり，瓦が溶着したもの，窯の焼き台（図版57）も含まれる。瓦には，焼成前，焼成後に加工した熨斗瓦，隅切り瓦も出土することより，東側に隣接する国分尼寺で使用，廃棄したものも含まれると思われる。文字瓦（150），墨書土器（51）も国分尼寺で使用したものと思われる。

第Ⅱ調査区からは，掘立柱建物跡（SB－03）と柵列（SA－01）を検出し，遺物としては，南東部分において，瓦，須恵器が集中して出土している。SB－03，SA－01の時期は南東部から出土した須恵器より９世紀後半と思われる。須恵器・坏は，体部が直線的に開き，高台を有すもの，無高台のものがあり，全体に軟質の焼成である。これらは，神田遺跡[註21]，長嶺遺跡土壙出土[註22]のものと同時期であり，古曽志１号窯出土[註23]の資料に近いものである。坏には，蓋が伴わなくなっており，他に皿，壺，甕といった器種も伴っている。須恵器・甕は，外面の平行叩きの間隔が粗くなり，内面の同心円叩きを一部ナデ消すといった特徴がみられる。SK－03においては，須恵器・坏，甕，壺に瓦が共伴している。この土壙は，出土した坏から９世紀後半のものと思われる。この時期の軒瓦の瓦当文様の解るものとしては，軒平瓦（288）が南東部より，須恵器に伴って出土している。この軒平瓦の瓦当は，国分尼寺の分類で第四類[註24]とされるものである。その他の平瓦，丸瓦も一部創建時の軒平瓦の破片を含むものの，９世紀後半頃の遺物が大部分と考えられる。

第Ⅲ調査区からは，横穴を２基検出している。前回の調査で，北側斜面において，当地方に横穴が導入された段階のもの２基（１号横穴，２号横穴）を調査している。今回は，南側斜面より４号

穴・Ⅲ期[註25]の新しい段階（6世紀後半）を3号穴・Ⅳ期[註26]（7世紀末～8世紀初頭）のものを検出した。4号穴は墓道が細長く，床面が丸味を有している。玄室は，平面形がやや台形気味で，天井部は丸天井であり，稜線を四隅に表現するが，途中で途切れている。4号穴は，玄室の形態が後世の二次的使用により残りが悪いが，整正家形を呈しており，前庭部の極めて広い，大きな作りとなっている。また，この二つの横穴は，近世初頭に再利用され，五輪塔，土師器，陶磁器が出土している。両横穴は，トンネルで結ばれ，5号穴という第3の部屋が作り出されている。5号穴の床面には納骨穴があり，鎌倉時代の矢倉に通じるような祭祀的性格があったと思われる。この時期には，前回調査で検出した修法壇状の遺構があり，丘陵上が祭祀の場として使われていたようである。第Ⅲ区からは瓦窯跡が検出され，従来のものと合わせると3基目の瓦窯跡[註27]であり，国分寺，国分尼寺で使用した瓦を焼いていたと思われる。瓦窯跡から出土した軒平瓦は，国分尼寺の分類で第四類[註28]とされるものである。また，瓦窯跡の覆土中より須恵器・坏（401）が出土しており，時期は9世紀後半と考えられる。瓦は，平瓦の凸面調整に縄目叩き，格子叩きの2種類がある。いずれも焼成は不良である。また，丸瓦も焼成が軟弱であり，これらの時期的特徴と思われる。

第Ⅳ調査区からは，多くの柱穴を検出している。これらは，直径20cm程の小さなものである。出土した陶磁器が，12世紀代の白磁碗であり，土師器・小皿・台付皿・坏もこれに伴うと思われる。前回の調査でも，加工段と柱穴を検出しており，今回調査の柱穴と同時期と考えられる。丘陵南側斜面のⅢ区に平安時代前半の建物が作られ，北側斜面には平安時代後半の建物が作られている。

今回の中竹矢遺跡の調査では，出雲国分寺，国分尼寺と関連のある，瓦窯跡，掘立柱建物跡を検出している。Ⅱ区から検出した建物跡は，尼寺の寺域から西側にはずれているが，出土した遺物に瓦を多く含んでいることより，Ⅲ区検出の瓦窯跡との関連があったと思われる。また，瓦，須恵器とも国分寺，尼寺の創建時の遺物は少なく，平安時代の遺物を主としており，この時期までは尼寺が継続していたことが確認できた。Ⅳ区から検出した遺構は，白磁等の遺物を含むことより，公的な役所，寺に関連した人々の建物と考えられる。

註

（1） 坪井清足・町田　章「遺物」『出雲国庁発掘調査概報』 松江市教育委員会　1970年
（2） 註1に同じ
（3） 島根県教育委員会『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 1987年
（4） 松江市教育委員会『中竹矢後1号墳，長嶺遺跡』 1986年
（5）（6） 註1に同じ
（7） 山本　清「出雲」『新修国分寺の研究・第四巻，山陰道と山陽道』 1991年
（8） 註7に同じ

(9)(10)(11)　註1に同じ
(12)　註3に同じ
(13)　註4に同じ
(14)　註7に同じ
(15)　註1に同じ
(16)　註7に同じ
(17)　註1に同じ
(18)　横田賢次郎，森田　勉「太宰府出土の輸入陶磁器について―形式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4集　九州歴史資料館　1978年
(19)　註18に同じ
(20)(21)　註3に同じ
(22)　註4に同じ
(23)　島根県教育委員会『古曽志遺跡発掘調査報告書』　1989年
(24)　註7に同じ
(25)　山本　清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』　1960年
(26)　註24に同じ
(27)　岡崎雄二郎「出雲国分寺瓦窯址について」(島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘』第35号　1979年
(28)　註7に同じ

土 器 観 察 表

挿図番号	出土地点	種 類	器 種	法 量(cm)	胎 土	焼 成	色 調
28図－ 1	Ⅰ－a区	土師器	甕	口径 15.3 器高 24.4	砂粒少，密	土師，良好	黄灰褐色
28図－ 2	Ⅰ区 SK－16 No.1	土師器	甕	口径 15.4 器高(21.3)	砂粒含む，密	良好	黒色
28図－ 3	Ⅰ区 SK－30 No.1	弥生	壺	口径 29.2 器高 13.0 底径 10.2	砂粒少，密	良好	外：黒色，内：黄灰白色
28図－ 4	Ⅰ区 SK－20 No.1	弥生	壺	口径 26.0 器高(24.4)	砂粒少，密	良好	黄灰色
28図－ 6	Ⅰ－c区	弥生	甕	口径 15.7 器高(5.2)	砂粒少，密	良好	黄灰色
28図－ 7	Ⅰ－c区 SK－27	弥生	甕	口径 27.8 器高(5.6)	大きめ砂粒含む，密	良好	明灰褐色，外：黒色
29図－ 8	Ⅰ区 SK－21 No.1	弥生	壺		砂粒含む，密	良好	外：黄白色，内：暗灰色
29図－ 9	Ⅰ－b区 SK－35	縄文	鉢		砂粒含む，密	良好	明褐色
29図－ 10	Ⅰ－b区 SK－38	弥生	高坏，脚部	器高(8.7) 底径 14.0	砂粒含む，密	良好	明灰褐色，一部黒色
29図－ 12	Ⅰ－b区 SK－45 No.2	弥生	壺	口径 27.2 器高(4.9)	砂粒多し，密	普通	灰褐色
29図－ 13	Ⅰ－b区 SK－45 No.1	土師器	壺	器高(23.5)	砂粒多し，密	良好	黄白色
29図－ 14	Ⅰ－b区 SK－38	弥生	高坏	口径 22.4 器高 19.0 底径 14.5	砂粒少，密	良好	暗灰褐色
29図－ 15	Ⅰ－b区 SK－48 No.1	弥生	壺	器高(13.9) 底径 7.1	砂粒含む，密	良好	黒色，明黄灰色
29図－ 16	Ⅰ－b区 SK－51 No.1	弥生	底部	器高(8.6) 底径 9.0	大きめの砂粒含む，密	良好	暗褐色
29図－ 17	Ⅰ－b区 SK－57	弥生	底部	器高(4.6) 底径 8.0	砂粒多し，密	良好	外：黄白色，内底：黒色
29図－ 18	Ⅰ－b区 SK－57	土師器	甕	口径 18.5 器高(12.8)	砂粒多し，密	土師，良好	灰白色
29図－ 19	Ⅰ－b区 SK－52 No.1	弥生	甕	口径 22.9 器高(16.2)	砂粒少，密	良好	明黄灰褐色
30図－ 20	Ⅰ－b区 SK－65 No.5	縄文	深鉢	口径 31.5 器高(19.9)	砂粒多し，密	良好	外：黒色，内：灰褐色
30図－ 21	Ⅰ－b区 SK－69	弥生	甕(庄内式)		細かい砂粒多し，密	良好	暗褐色
30図－ 22	Ⅰ－b区 SK－69	弥生	甕	口径 20.2 器高(5.7)	砂粒含む，密	良好	明灰褐色，黄白色
30図－ 23	Ⅰ－b区 SK－69	土師器	甕	器高(15.0)	砂粒多し，密	良好	黄白色
30図－ 25	Ⅰ－b区 SK－72 No.1	弥生	底部	器高 3.7 底径 8.0	細かい砂粒多し	良好	明灰褐色
30図－ 26	Ⅰ－b区 SK－82 No.1	弥生	底部	器高(3.2) 底径 9.4	大きめ砂粒含む	良好	外：一部暗灰色，内：黄白色
30図－ 27	Ⅰ－b区 SK－70 No.1	土師器	甕	口径 17.0 器高(26.8)	砂粒含む，密	土師，良好	明灰褐色
30図－ 28	Ⅰ－b区 SK－74	弥生	壺	器高(16.1) 底径 10.2	大きめ砂粒多し，密	良好	黄白色

挿図番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
31図－ 29	Ⅰ－b区 SK－74 No.1	弥生	壺	器高(30.7) 底径 8.1	大きめ砂粒多し	良好	暗黄灰色
31図－ 30	Ⅰ－b区 SK－74 No.4	弥生	壺	器高(30.2) 底径 8.4	砂粒多し，密	良好	外：黒褐色，内：黄灰色
31図－ 31	Ⅰ－b区 SK－82	弥生	甕	口径 22.4 器高(3.4)	大きめ砂粒含む，密	良好	明灰褐色
31図－ 32	Ⅰ－b区 SK－83	弥生	甕	口径 18.8 器高(3.9)	砂粒含む，密	良好	黄白色
31図－ 33	Ⅰ－b区 SK－84 No.1	土師器	甕	口径 15.9 器高(14.1)	砂粒含む，密	良好	黄白色
31図－ 34	Ⅰ－b区 SK－84 No.3	土師器	底部	器高(10.6)	砂粒含む	良好	暗褐色
31図－ 35	Ⅰ－b区 SK－84	弥生	甕		砂粒含む，密	良好	外：黒褐色，内：黄褐色
31図－ 36	Ⅰ－b区 SK－84 No.2	弥生	底部	器高(15.3) 底径 8.4	大きめ砂粒含む，密	良好	明灰褐色
32図－ 37	Ⅰ－b区 SK－85 No.2	弥生	甕	口径 24.2 器高 23.9 底径 10.1	砂粒含む，密	良好	外：黒褐色，内：黄褐色 底：黒色
32図－ 38	Ⅰ－b区 SK－85 No.4	弥生	底部	器高(13.5) 底径 8.5	砂粒少，密	良好	明黄褐色，黒色
32図－ 39	Ⅰ－b区 SK－85 No.1	弥生	甕	口径 27.5 器高 27.9 底径 9.8	大きめ砂粒	良好	茶褐色
32図－ 40	Ⅰ－b区 SK－87	土師器	小形丸底壺	器高(3.8)	砂粒多し，密	良好	黄白色
32図－ 41	Ⅰ－b区	土師器	小形丸底壺	器高(7.3)	砂粒含む，密	良好	黄白色，一部黒色
32図－ 42	Ⅰ－b区	木器	高坏	口径 30.6 器高(19.9)			征目取
32図－ 43	Ⅰ－b区	木器	板状木製品	6.6×24.6 ×1.8			征目取
35図－ 44	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 11.6 器高 4.7	砂粒含む	普通	灰色
35図－ 45	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 12.6 器高 4.5	砂粒含む	良好	灰色
35図－ 46	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 12.1 器高 4.0 底径 8.0	砂粒含む	良好	灰色
35図－ 47	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 11.4 器高 4.2 底径 7.2	砂粒含む	不良	浅黄橙色
35図－ 48	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 12.0 器高 3.8 底径 8.3	砂粒含む	良好	灰色
35図－ 49	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 12.4 器高 4.3 底径 7.2	砂粒含む	良好	灰色
35図－ 50	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 12.4 器高 3.4 底径 8.2	砂粒含む	普通	暗緑灰色
35図－ 51	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 12.0 器高 3.1 底径 8.8	砂粒含む	やや不良	灰色
35図－ 52	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 12.2 器高 3.6 底径 8.8	砂粒含む	普通	暗赤褐色
35図－ 53	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 11.3 器高 4.4 底径 8.8	砂粒含む	普通	灰色
35図－ 54	Ⅰ－d区	須恵器	坏	口径 11.9 器高 4.0 底径 9.4	砂粒含む	良好	灰色

挿図番号	出土地点	種　類	器　　種	法 量(cm)	胎　　土	焼　　成	色　　調
35図－ 55	I－d区	須恵器	坏	口径 10.6 器高 4.3 底径 5.3	砂粒含む	良好	灰色
35図－ 56	I－d区	須恵器	坏	器高(2.9) 底径 7.5	砂粒含む	普通	灰色
35図－ 57	I－d区	須恵器	坏	口径 13.3 器高 4.7 底径 10.0	砂粒含む	良好	灰色
35図－ 58	I－d区	須恵器	坏	口径 15.2 器高 6.0 底径 9.9	砂粒含む	良好	灰色
35図－ 59	I－d区	須恵器	坏	口径 15.5 器高 6.7 底径 9.6	砂粒含む	良好	灰色
35図－ 60	I－d区	須恵器	坏	口径 16.6 器高 6.9 底径 11.2	砂粒含む	良好	灰色
35図－ 61	I－d区	須恵器	坏	口径 17.2 器高 4.2	ち密	良好	灰色
35図－ 62	I－d区	須恵器	皿	口径 15.2 器高 2.0 底径 8.0	砂粒含む	普通	灰色
35図－ 63	I－d区	須恵器	皿	口径 15.6 器高 2.6 底径 9.0	砂粒含む	普通	灰色，底：明赤褐色
35図－ 64	I－d区	須恵器	盤	口径 16.4 器高 3.6 底径 9.1	砂粒含む	良好	橙灰色
35図－ 65	I－d区	須恵器	盤	口径 18.7 器高 3.5 底径 12.8	砂粒含む	普通	灰色
35図－ 66	I－d区	須恵器	盤	口径 19.4 器高 3.5 底径 9.8	砂粒含む	普通	灰色
35図－ 67	I－d区	須恵器	盤	口径 18.2 器高 2.6 底径 11.9	砂粒含む	良好	灰色
35図－ 68	I－d区	須恵器	蓋	口径 13.8 器高 2.9	ち密	不良	茶褐色
35図－ 69	I－d区	須恵器	坏蓋	口径 16.6 器高(2.6)	砂粒含む	良好	灰色
36図－ 70	I－d区	須恵器	壺	口径 14.4 器高(6.9)	砂粒含まず，密	良好	明灰色
36図－ 71	I－d区	須恵器	壺	器高(7.6)	砂粒少，密	良好	灰白色
36図－ 72	I－d区	須恵器	瓶	器高(2.5)	砂粒含まず，密	良好	灰白色
36図－ 73	I－d区	須恵器	壺	器高(5.2)	砂粒少，密	良好	明灰色
36図－ 74	I－d区	須恵器	壺	器高(6.8) 底径 14.0	砂粒少，密	良好	灰色
36図－ 75	I－d区	須恵器	壺	器高(19.8) 底径 10.4	砂粒含まず，密	良好	外：赤灰色，内：灰色
36図－ 76	I－d区	須恵器	甕	口径 23.7 器高(7.2)	砂粒少，密	良好	明灰色
36図－ 77	I－d区	須恵器	甕	口径 15.9 器高(13.9)	砂粒少，密	やや不良	明灰色
36図－ 78	I－d区	須恵器	甕	口径 23.4	砂粒少，密	良好	灰色
36図－ 79	I－d区	須恵器	甕	器高(2.6)	砂粒含まず，密	良好	灰色，断面：赤灰色
36図－ 80	I－d区	須恵器	甕	器高(5.2)	砂粒含まず，密	良好	灰色

挿図番号	出土地点	種　類	器　　種	法 量(cm)	胎　　土	焼　　成	色　　調
36図－ 81	Ⅰ－d区	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	外：灰色，内：暗灰色
36図－ 82	Ⅰ－d区	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	暗灰色
36図－ 83	Ⅰ－d区	須恵器	甕	口径 32.9 器高(3.9)	砂粒含まず，密	良好	灰色
37図－ 84	Ⅰ－d区	須恵器	甕		砂粒含まず，密	須恵，やや不良	明灰色
37図－ 85	Ⅰ－d区	須恵器	甕		砂粒含まず，密	須恵，良好	明灰色
37図－ 86	Ⅰ－d区	須恵器	甕		砂粒含まず，密	須恵，良好	灰色
37図－ 87	Ⅰ－d区	須恵器	甕		砂粒少，密	須恵，良好	灰色
37図－ 88	Ⅰ－d区	須恵器	甕		砂粒少，密	須恵，良好	外：茶灰色，内：暗灰色
37図－ 89	Ⅰ－d区	須恵器	甕		砂粒少，密	須恵，普通	外：灰色，内：明灰褐色
37図－ 90	Ⅰ－d区	土師器	甑(把手)		0.2～0.3㎜程度の砂粒多く含む	やや不良	赤黄色を呈す
37図－ 91	Ⅰ－d区	土師器	底部	器高(2.8) 底径 8.5	0.2～0.3㎜程度の砂粒含む	やや不良	淡黄茶色
37図－ 92	Ⅰ－d区	土師器	甕	口径 16.8 器高(5.1)	径1～2㎜程度の砂粒多量に含む	やや不良	茶褐色
37図－ 93	Ⅰ－d区	土師器	甕	口径 20.8 器高(6.7)	径1㎜程度の砂粒多量に含む	不良	外：淡灰褐色，内：淡赤茶色
37図－ 94	Ⅰ－d区	土師器	甕	口径 32.3 器高(3.9)	径1㎜程度の砂粒多量に含む	やや不良	外：赤茶褐色，内：乳褐色
37図－ 95	Ⅰ－d区	土師器	甕	口径 31.6 器高(4.8)	径1㎜程度の砂粒多量に含む	やや不良	淡赤茶色
37図－ 96	Ⅰ－d区	土師器	甕	口径 21.1 器高(29.3)	細かい砂粒多し，密	土師，良好	黄白色，一部黒色
37図－ 97	Ⅰ－d区	土師器	甕	口径 15.5 器高(6.3)	0.2～0.3㎜程度の砂粒多量に含む	良好	茶灰色
38図－ 98	Ⅰ－e区	須恵器	坏	口径 10.9 器高 4.1 底径 7.3	砂粒含む	良好	灰褐色
38図－ 99	Ⅰ－e区	須恵器	高台付坏	器高 3.0 底径 7.4	砂粒少，密	須恵，不良	明灰色
38図－100	Ⅰ－e区	須恵器	坏	口径 12.5 器高 3.5 底径 8.4	砂粒含む	普通	灰色
38図－101	Ⅰ－e区	須恵器	坏	口径 13.0 器高 3.3 底径 8.3	砂粒含む	普通	橙灰色
38図－102	Ⅰ－e区	須恵器	坏(蓋)	口径 13.0 器高(1.8)	砂粒含む	良好	灰色
38図－103	Ⅰ－e区	須恵器	瓶		砂粒少，密	良好	明灰色
54図－156	Ⅱ区 SK－02 No.1	古銭					
54図－157	Ⅱ区 SK－02 No.1	古銭					
55図－158	Ⅱ区 SK－03 No.26	須恵器	坏	口径 11.9 器高 4.1	ち密，灰色	良好	灰色を呈す

挿図番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
55図－159	Ⅱ区 SK－03 No.23	須恵器	坏	口径 12.3 器高 3.8	ち密	やや不良	淡灰色
55図－160	Ⅱ区 SK－03 No.18	須恵器	坏	口径(12.6) 器高(3.2)	ち密	不良	外：乳茶色，内：乳赤茶色
55図－161	Ⅱ区 SK－03 No.21	須恵器	壺	口径 7.7 器高(4.7)	ち密，0.2m程度の長石含む	良好	暗灰色
55図－162	Ⅱ区 SK－03 No.15	須恵器	甕		砂粒含まず，密	良好	明灰色
61図－176	Ⅱ区 No.232	陶器	肥前，皿	口径(12.3) 器高(2.6)	灰色	良好	緑灰色
61図－177	Ⅱ区 P－232	陶器	肥前，皿	口径 11.7 器高 2.9 底径 3.4	灰白色	良好	釉(うす緑色)
61図－178	Ⅱ区 南西部	陶器	肥前，皿	口径 11.5 器高 2.4 底径 4.0	灰白色	良好	釉(うす緑色)
61図－179	Ⅱ区	陶器	肥前，皿	口径 11.8 器高 2.4 底径 2.8	灰色	良好	緑色
61図－180	Ⅱ区 南西	陶器	肥前，皿	口径 12.3 器高 3.2 底径 3.5	灰白色	良好	茶灰色
61図－181	Ⅱ区 P－218	陶器	肥前，皿	器高(1.5) 底径 4.4	灰色	良好	釉(緑色)
61図－182	Ⅱ区 南西	磁器	青磁		灰白色	良好	うす緑色
61図－183	Ⅱ区 南西	磁器	青磁碗	器高(4.8) 底径 4.9	灰白色	良好	白味がかった緑色
63図－184	Ⅱ区 P－116	須恵器	壺	器高(15.0) 底径 8.9	砂粒多し，密	良好	明灰色
64図－185	Ⅱ区 No.294	須恵器	坏	口径 12.5 器高 3.5 底径 6.9	砂粒少，密	やや不良	灰白色
64図－186	Ⅱ区 No.165	須恵器	坏	口径 11.1 器高 3.7 底径 6.9	砂粒少，密	やや不良	灰色
64図－187	Ⅱ区 No.106	須恵器	坏	口径 11.6 器高 3.8 底径 7.1	砂粒少，密	やや不良	灰白色，口縁端が灰色
64図－188	Ⅱ区 No.163	須恵器	坏	口径 11.7 器高 3.8 底径 7.2	砂粒少，密	やや不良	灰白色
64図－189	Ⅱ区 No.159	須恵器	坏	口径 12.6 器高 4.2 底径 6.7	ほとんど砂粒含まず	やや不良	灰白色
64図－190	Ⅱ区 No.300	須恵器	坏	口径 12.5 器高 4.5 底径 7.0	砂粒少，密	やや不良	灰白色
64図－191	Ⅱ区 No.285	須恵器	坏	口径 13.2 器高 4.0 底径 7.7	砂粒多し，密	良好	灰色
64図－192	Ⅱ区 No.203	須恵器	坏	口径 12.9 器高 4.0 底径 7.6	砂粒多し，密	良好	灰色
64図－193	Ⅱ区 南東	須恵器	坏	口径 11.4 器高 3.2 底径 7.8	砂粒少，密	良好	灰色
64図－194	Ⅱ区 No.60	須恵器	坏	口径 12.0 器高 3.4 底径 8.0	砂粒少，密	やや不良	灰色，灰白色
64図－195	Ⅱ区 南東部	須恵器	坏	口径 11.6 器高 3.9 底径 6.7	砂粒少，密	良好	灰白色
64図－196	Ⅱ区	須恵器	坏	口径 11.95 器高 4.2 底径 7.3	砂粒少，密	やや不良	灰白色
64図－197	Ⅱ区 排土 南東	須恵器	坏	口径 12.1 器高 4.2 底径 6.9	砂粒少，密	良好	灰色

挿図番号	出土地点	種　類	器　　種	法 量(cm)	胎　　土	焼　　成	色　　調
64図－198	Ⅱ区 南東	須恵器	坏	口径 12.5 器高 4.0 底径 7.7	砂粒少，密	やや不良	灰色
64図－199	Ⅱ区 P－157	須恵器	坏	口径 13.0 器高 4.6 底径 7.4	砂粒少，密	良好	灰色，外面一部：暗灰色
64図－200	Ⅱ区 南東	須恵器	坏	口径 11.6 器高 3.9 底径 5.5	砂粒少，密	良好	灰色
64図－201	Ⅱ区	須恵器	坏	口径 11.7 器高 4.7 底径 7.8	砂粒少	良好	灰色
64図－202	Ⅱ区 南東	須恵器	坏	口径 12.7 器高 4.0	砂粒少，密	良好	灰色
64図－203	Ⅱ区 No.124	須恵器	坏	口径 11.4 器高 4.0 底径 8.0	砂粒少，密	良好	灰色
64図－204	Ⅱ区 南東	須恵器	坏	口径 12.8 器高 4.3 底径 6.8	砂粒少，密	良好	灰色
64図－205	Ⅱ区 南東	須恵器	碗	口径 12.8 器高(4.7)	砂粒少，密	良好	暗灰色
65図－206	Ⅱ区 南東	須恵器	坏	口径 12.7 器高 4.9 底径 8.7	砂粒含む，密	良好	灰色
65図－207	Ⅱ区 No.116 No.121 No.141	須恵器	坏	口径 12.9 器高 5.2 底径 7.75	砂粒少，密	良好	明灰色
65図－208	Ⅱ区 No.13	須恵器	坏	口径 13.9 器高 5.0 底径 8.15	砂粒少，密	良好	明灰色
65図－209	Ⅱ区 南東	須恵器	坏	口径 14.2 器高 4.8 底径 8.5	砂粒少，密	良好	明灰色
65図－210	Ⅱ区 南東	須恵器	坏	口径 13.8 器高 5.4 底径 7.7	砂粒含む，密	普通	明灰色
65図－211	Ⅱ区 南東 No.39	須恵器	坏	口径 14.8 器高 5.4 底径 8.6	砂粒少，密	良好	暗灰色
65図－212	Ⅱ区 No.316 No.318	須恵器	坏	口径 14.8 器高 5.9 底径 8.9	砂粒少，密	やや不良	外：暗灰色，内：灰白色
65図－213	Ⅱ区 No.319	須恵器	坏	口径 15.0 器高 5.9 底径 9.0	砂粒少，密	不良	外：灰色と白色の混入 内：赤灰色
65図－214	Ⅱ区 南東	須恵器	坏	口径 15.7 器高 6.0 底径 8.6	砂粒少，密	良好	明灰色
65図－215	Ⅱ区 南東	須恵器	坏	口径 15.6 器高 6.1 底径 9.4	砂粒少，密	良好	暗灰色
65図－216	Ⅱ区 No.30	須恵器	坏	口径 15.75 器高 6.9 底径 8.6	砂粒少，密	良好	灰色
65図－217	Ⅱ区 南東 No.171	須恵器	坏	口径 17.5 器高 8.0 底径 9.2	砂粒少，密	やや不良	灰白色
65図－218	Ⅱ区 No.40	須恵器	坏	口径 15.0 器高 5.8 底径 10.0	砂粒少，密	良好，硬緻	暗灰色
65図－219	Ⅱ区 No.127	須恵器	坏	器高(2.1) 底径 12.0	砂粒含む，密	良好	灰色
65図－220	Ⅱ区 No.278	須恵器	坏	器高(2.9) 底径 10.0	砂粒少，密	良好	明灰色
65図－221	Ⅱ区 南東	須恵器	盤	口径 19.2 器高 3.8 底径 12.5	細かい砂粒多し	良好	明灰色
65図－222	Ⅱ区 南東	須恵器	盤	口径 16.4 器高 3.7 底径 11.4	砂粒細かい，密	良好	灰色
65図－223	Ⅱ区 南東	須恵器	盤	口径 18.4 器高 3.7 底径 12.6	砂粒含む，密	良好	灰色

挿図番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
65図－224	Ⅱ区 南東	須恵器	盤	口径 18.0 器高 3.1 底径 11.7	砂粒少，密	良好	灰色
66図－225	Ⅱ区	須恵器	皿	口径 12.9 器高 2.1 底径 7.0	砂粒少，密	良好	灰色
66図－226	Ⅱ区	須恵器	皿	口径 12.9 器高 1.65 底径 8.2	砂粒少，密	良好	灰色
66図－227	Ⅱ区 No.323	須恵器	皿	口径 13.0 器高 2.3 底径 7.8	砂粒少，密	やや不良	灰白色，一部灰色
66図－228	Ⅱ区 No.156	須恵器	皿	口径 12.9 器高 2.0 底径 7.7	砂粒少，密	普通	灰色，端部：灰白色
66図－229	Ⅱ区 No.321 瓦溜	須恵器	皿	口径 13.0 器高 1.9 底径 8.0	砂粒少，密	良好	明灰色
66図－230	Ⅱ区 No.130	須恵器	皿	口径 13.9 器高 1.8 底径 9.9	砂粒含む，密	良好	灰色
66図－231	Ⅱ区 No.150 No.322	須恵器	皿	口径 13.5 器高 2.9 底径 6.5	砂粒少，密	良好	灰色
66図－232	Ⅱ区 南東	須恵器	皿	口径 13.8 器高 2.2 底径 7.9	砂粒含まず，密	やや不良	灰白色，灰色のまんだら模様
66図－233	Ⅱ区 南東	須恵器	皿	口径 13.7 器高 2.7 底径 7.1	砂粒少，密	やや不良	灰白色，一部灰色
66図－234	Ⅱ区 No.103	須恵器	皿	口径 14.0 器高 2.25 底径 6.9	砂粒含む，密	普通	灰白色
66図－235	Ⅱ区	須恵器	皿	口径 14.6 器高 2.0 底径 9.2	砂粒少，密	良好	明灰色
66図－236	Ⅱ区 南東	須恵器	皿	口径 14.2 器高 2.7 底径 7.0	砂粒少，密	良好	灰色
66図－237	Ⅱ区 南東	須恵器	皿	口径 14.6 器高 2.25 底径 9.4	砂粒含む，密	良好	灰色
66図－238	Ⅱ区 No.331	須恵器	皿	口径 14.8 器高 2.3 底径 8.5	砂粒多し，密	良好	灰色
66図－239	Ⅱ区 南東	須恵器	皿	口径 15.8 器高 2.2 底径 8.8	砂粒少，密	良好	灰色
66図－240	Ⅱ区 No.193	須恵器	皿	口径 15.65 器高 2.35 底径 7.9	砂粒含む，密	やや不良	灰白色，口縁端：暗灰色
66図－241	Ⅱ区 南西	須恵器	蓋	器高(2.2)	砂粒含む，密	良好	外：灰褐色，内：暗灰色
66図－242	Ⅱ区	須恵器	蓋	口径 16.4 器高(2.3)	砂粒少，密	良好	灰色
66図－243	Ⅱ区	須恵器	蓋	口径 14.7 器高(2.0)	砂粒少，密	良好	灰色
66図－244	Ⅱ区 南西	須恵器	蓋	口径 16.8 器高(2.3)	砂粒少，密	良好	灰色
66図－245	Ⅱ区 南東	須恵器	蓋	口径 16.4 器高(2.2)	砂粒少，密	良好	灰色
66図－246	Ⅱ区 No.175	須恵器	蓋	口径 25.2 器高(2.9)	砂粒含まず，密	やや不良	灰白色
66図－247	Ⅱ区 南東	須恵器	蓋	口径 17.5 器高(1.6)	砂粒少，密	良好	茶灰色，灰色
67図－248	Ⅱ区 南東	須恵器	甕		砂粒含まず，密	良好	灰色，断：赤灰色
67図－249	Ⅱ区 排土	須恵器	甕		砂粒含まず，密	良好	外：灰白色

挿図番号	出土地点	種　類	器　　種	法 量(cm)	胎　　土	焼　　成	色　　調
67図－250	Ⅱ区 表採	須恵器	甕		砂粒含まず，密	良好	外：灰白色，内：黒灰色
67図－251	Ⅱ区 南西	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	外：暗灰色，内：灰色
67図－252	Ⅱ区 南東	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	暗灰色
67図－253	Ⅱ区	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	明灰色
67図－254	Ⅱ区 P－27	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	灰色
67図－255	Ⅱ区 南東	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	灰色
67図－256	Ⅱ区 南東	須恵器	甕		砂粒含まず，密	良好	灰色
67図－257	Ⅱ区 南東	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	外：暗灰色，内：灰色
67図－258	Ⅱ区 南東	須恵器	甕		砂粒含まず，密	良好	灰色
67図－259	Ⅱ区	須恵器	甕		砂粒含まず，密	良好	灰色
67図－260	Ⅱ区 南東	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	明灰色
67図－261	Ⅱ区	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	灰色
67図－262	Ⅱ区 南東	須恵器	甕		砂粒少，密	良好	灰褐色
67図－263	Ⅱ区 南東	須恵器	甕		砂粒含まず，密	やや不良	外：灰白色，内：赤灰色
67図－264	Ⅱ区 南東	須恵器	甕		砂粒含まず，密	良好	暗灰色
67図－265	Ⅱ区 瓦溜	須恵器	甕		砂粒含まず，密	良好	灰色
67図－266	Ⅱ区 南東	須恵器	壺or甕		砂粒含む，密	良好	灰色
68図－267	Ⅱ区	須恵器	壺	口径 10.7 器高(3.4)	砂粒少，密	良好	灰色
68図－268	Ⅱ区 No.299	須恵器	壺	口径 11.2 器高(4.4)	砂粒少，密	良好	灰白色
68図－269	Ⅱ区 No.97 No.98	須恵器	壺	器高(4.4) 底径 8.4	砂粒少，密	良好	外：灰色，内：灰白色
68図－270	Ⅱ区	須恵器	壺	器高(6.9) 底径 10.0	砂粒含まず，密	良好	明灰色
68図－271	Ⅱ区 南東	須恵器	壺	器高(7.4) 底径 11.6	砂粒少，密	普通	灰白色
68図－272	Ⅱ区 南東	須恵器	壺	器高(3.9) 底径 13.1	砂粒少，密	良好	明灰色
68図－273	Ⅱ区 南東	須恵器	壺	器高(11.3) 底径 11.4	砂粒少，密	良好	外：灰色，断：赤灰色
68図－274	Ⅱ区	須恵器	壺	器高(6.6)	砂粒少，密	良好	外：灰色，内：明灰色 断：明赤灰色
68図－275	Ⅱ区	須恵器	壺	器高(5.4) 底径 9.2	砂粒少，密	良好	灰色

挿図番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
68図－276	Ⅱ区 南東	須恵器	壺	口径 12.55 器高(4.5)	砂粒少，密	良好	明灰色
68図－277	Ⅱ区 南東	須恵器	鉢	口径 23.1 器高(6.2)	砂粒少，密	良好	灰色
68図－278	Ⅱ区 No.194	須恵器	鉢	口径 17.6 器高(7.1)	砂粒少，密	良好	明灰色
68図－279	Ⅱ区 南東	須恵器	鉢	口径 19.6 器高(5.3)	砂粒少，密	良好	灰色
68図－280	Ⅱ区 No.29	須恵器	甕	器高(13.75)	砂粒少，密	不良	外：灰色，内：灰白色
68図－281	Ⅱ区	陶器	灰釉壺		砂など含まず，密	良好	灰白色
68図－282	Ⅱ区 No.195	土師器	坏	口径 14.2 器高 3.5 底径 9.0	砂粒少，密	良好	黄白色
68図－283	Ⅱ区 南東	土師器	製塩土器	口径 9.5 器高(11.8)	茶色の粒子含む	普通	黄桃色
68図－284	Ⅱ区 瓦溜	土師器	甕	口径 18.2 器高(15.0)	砂粒含む，密	良好	桃褐色
68図－285	Ⅱ区 No.166	土師器	甕	口径 27.6 器高(2.8)	砂粒多し，密	良好	黄色
68図－286	Ⅱ区 No.289	土師器	甕	口径 22.7 器高(2.7)	砂粒多し	良好	灰褐色
68図－287	Ⅱ区 No.145	土師器	甕	口径 21.4 器高(7.6)	砂粒含む，密	良好	灰褐色
75図－325	Ⅱ区 南東	青銅器	さじ状のもの				
75図－326	Ⅱ区	青銅器					
82図－331	Ⅲ区 3号穴 No.31	須恵器	坏，蓋	口径 14.5 器高 3.1 天井径4.9	砂粒含む	良好	灰色
82図－332	3号穴 No.68	須恵器	坏，蓋	口径 14.4 器高 3.2 天井径5.1	砂粒含む	良好	灰褐色
82図－333	3号穴 No.47 No.46	須恵器	坏，蓋	口径 14.2 器高 3.4 天井径4.4	砂粒含む	良好，堅緻	灰色
82図－334	3号穴 No.23	須恵器	坏，身	口径 12.8 器高 5.1 底径 7.9	砂粒含む	良好	灰褐色
82図－335	3号穴 No.72	須恵器	坏，身	口径 13.1 器高 4.9 底径 7.5	細かい砂粒含む	良好，堅緻	白灰色
82図－336	3号穴 No.73	須恵器	坏，身	口径 13.2 器高 5.3 底径 7.7	砂粒含む	良好	灰褐色
82図－337	3号穴 No.33	須恵器	壺	口径 8.3 器高 21.5 底径 7.9	砂粒含む	良好	黒褐色
82図－338	3号穴 No.24	須恵器	瓶	口径 9.1 器高 9.4 底径 5.3	1㎜程度の砂粒含む	良好，堅緻	暗灰色
82図－339	3号穴 No.82,83, 94,118,120	須恵器	瓶	器高(7.1) 底径 4.6	砂粒少，密，胎土表面へ黒色の付着物有	良好	青灰色
82図－340	Ⅲ区 3号穴 No.63	土師器	甕	口径 23.3 器高 27.7	砂粒多し，密	良好	黄白色，一部暗褐色
82図－341	Ⅲ区 3号穴 No.15	土師器	坏	器高(4.5) 底径 10.1	砂粒少，密	普通	黄桃色
82図－342	Ⅲ区 3号穴 No.32	土師器	土鈴	幅4.9× 長6.0	砂粒多し，密	良好	黄白色

挿図番号	出土地点	種　類	器　　種	法 量(cm)	胎　　土	焼　　成	色　　調
83図－345	3号穴	鉄器	刀	3.95×(17.75)×1.7			
83図－346	3号穴 No.89	鉄器	刀	2.45×(1.4)×0.8			
83図－347	Ⅱ区	鉄器	刀のつば	6.8×0.85			
83図－348	Ⅲ区 4号穴 No.45	鉄器	角釘	1.25×(4.8)×0.45			
84図－349	Ⅲ区 3号穴	須恵器	甕	口径 18.2 器高 44.15	砂粒含む，密	良好	灰褐色
84図－350	3号穴 No.2	土師器	小皿	口径 8.65 器高 2.05	砂粒少，密	良好	黄白色
84図－351	3号穴 No.1	土師器	皿	口径 12.1 器高 2.9	砂粒含まず，密	良好	黄白色
84図－352	3号穴 No.34	陶器	唐津・皿	口径 13.7 器高(2.4)	明灰色	良好	黄白色
84図－353	3号穴 No.133	磁器	青磁・碗	器高(1.7) 底径 4.75	灰白色	良好	釉，うす緑色
84図－354	3号穴 No.5	磁器	白磁・碗	器高(2.2) 底径 7.6	白色，密	良好	白色
84図－355	Ⅲ区 4号穴 No.60	磁器	碗	器高(1.25) 底径 5.95	灰白色	良好	釉，うす緑色(透明ぽい)
84図－356	4号穴	須恵器	甕	口径 12.4 器高 54.3 胴部最大径 48.2	ち密	良好	外部上半部：暗緑色(釉) 〃 下半部：灰色 内面：淡灰色
86図－363	Ⅲ区 3号穴 中央穴 暗褐色土	須恵器	壺	口径 48.8	1㎜程度の砂粒含む	良好，底部やや不良	灰色，底部内面：灰黄色
88図－364	4号穴 No.34	須恵器	坏・壺	口径 12.4 器高 4.1	細かい砂粒含む，密	良好	灰色
88図－365	4号穴 No.29	須恵器	坏・蓋	口径 12.4 器高 4.15	砂粒含む，密	良好	灰色
88図－366	4号穴 No.32	須恵器	坏・蓋	口径 12.3 器高 4.6	砂粒含む，密	良好	明灰色
88図－367	4号穴 No.37	須恵器	坏・蓋	口径 12.5 器高 4.7	砂粒含む，密	良好	灰色
88図－368	4号穴	須恵器	坏・蓋	口径 12.5 器高 4.7	砂粒少，密	良好	灰色
88図－369	4号穴 No.35	須恵器	坏・身	口径 10.4 器高 4.8	砂粒少，密	良好	灰色
88図－370	4号穴 No.30	須恵器	坏・身	口径 10.3 器高 4.1	砂粒少，密	良好	明灰色
88図－371	4号穴 No.33	須恵器	坏・身	口径 10.6 器高 3.9	砂粒含む，密	良好	灰色
88図－372	4号穴 No.31	須恵器	坏・身	口径 10.7 器高 4.2	砂粒含む，密	良好	灰色
88図－373	4号穴 No.28	須恵器	高坏	口径 10.5 器高 12.75 底径 8.95	細かい砂粒多し，密	良好	明灰色
89図－374	4号穴 No.14他	須恵器	横瓶	口径 13.5 器高(30.0)	砂粒含む	良好	灰褐色
91図－375	Ⅲ区	須恵器	甕	口径 18.8 器高(13.15)	径0.5～0.9㎜程度の砂粒含む，ち密	良好	灰色
91図－376	Ⅲ区 暗褐色土	須恵器	甕	口径 20.6	ち密	良好	口縁外面～内面：緑釉，ケイ部外面：淡灰色，薄く釉がかかる

挿図番号	出土地点	種　類	器　種	法量(cm)	胎　土	焼　成	色　調
91図－377	Ⅲ区 尾根上	須恵器	甕	口径 21.0 器高(54.0)	ち密	やや不良	淡灰色
91図－378	Ⅲ区	須恵器	甕	口径 22.1 器高(60.7) 体部最大径 39.5	ち密	良好	外面口縁～体部上半：緑灰色 体部～底部：灰色 内面：灰色
91図－379	Ⅲ区	須恵器	甕	口径 23.0 器高(22.7)	ち密	良好	淡黄灰色
99図－401	Ⅲ区 瓦窯跡 No.1	須恵器	坏	口径 12.55 器高(4.1)	砂粒少，密	やや不良	灰色
99図－402	瓦窯跡 No.23	土師器	甕	口径 23.5 器高(8.1)	大きめ砂粒を多く含む	良好	黄桃色
99図－403	瓦窯跡 No.24	須恵器	甕	器高(6.9)	砂粒少，密	良好	外：灰色，内：灰白色
99図－404	瓦窯跡 No.36	須恵器	壺	器高(21.1)	砂粒少，密	良好	灰色
102図－405	Ⅳ区 No.3	須恵器	坏	口径 16.1 器高 6.1 底径 10.7	細かい砂粒多し，密	須恵，やや不良	明灰色
102図－406	Ⅳ区	須恵器	坏	器高(3.0) 底径 9.5	細かい砂粒含む，密	須恵，不良	灰色
102図－407	Ⅳ区	須恵器	坏	口径 11.7 器高 3.7 底径 7.2	細かい砂粒含む，密	須恵，良好	暗灰色
103図－408	Ⅳ区 P－142	土師器	台付皿	口径 7.7 器高 3.0 底径 4.0	砂粒含まず，密	良好	赤橙色
103図－409	Ⅳ区 P－142	土師器	台付皿	器高(3.9) 底径 5.4	砂粒含まず，密	良好	黄白色
103図－410	Ⅳ区 P－142	土師器	小皿	口径 9.0 器高 2.0 底径 3.6	砂粒少，密	良好	黄桃色
103図－411	Ⅳ区 P－142	土師器	小皿	口径 8.3 器高 1.9 底径 4.5	砂粒含まず，密	良好	赤橙色
103図－412	Ⅳ区 P－142	土師器	坏	器高(4.0) 底径 7.6	砂粒含まず，密	良好	赤橙色
104図－413	Ⅳ区 西部下側 No.5	磁器	白磁・碗	口径 16.3 器高 6.5 底径 6.6	白色，密	良好	釉，黄白色
104図－414	Ⅳ区 中央部下	磁器	白磁・碗		灰白色，密	良好	灰白色
104図－415	Ⅳ区 西側	磁器	白磁・碗	口径 16.3 器高 7.1 底径 6.2	灰白色	良好	釉，うす緑がかった灰色
104図－416	Ⅳ区 西部下側	磁器	白磁・碗	器高(2.2) 底径 4.9	黄味がかった白色	良好	白色，全体に褐色がかる
104図－417	Ⅳ区 西側	磁器	白磁・碗	口径 15.0 器高 5.5 底径 6.4	気泡が入り密，白色	良好	釉，灰白色
104図－418	Ⅳ区 西側 西 (ベルト東)	磁器	白磁・碗	口径 16.2 器高(5.7)	灰白色	良好	灰白色
104図－419	Ⅳ区 下段(溝)	陶器	褐釉・四耳壺	口径 10.1 器高(11.8)	灰白色，ち密	良好	黄灰白色
104図－420	Ⅳ区 西側	土師器	台付皿	口径 8.0 器高(3.0)	砂粒含まず，密	土師，普通	黄桃色
104図－421	Ⅳ区 (ベルト東)	土師器	台付皿	口径 8.2 器高 3.3 底径 5.0	砂粒少，密	土師，普通	黄桃色，黄色
104図－422	Ⅳ区	土師器	台付皿	器高(3.2) 底径 4.7	砂粒少	土師，普通	黄色
104図－423	Ⅳ区	土師器	台付皿	器高(3.0) 底径 4.3	砂粒含む，密	土師，普通	黄色

挿図番号	出土地点	種　類	器　　種	法 量(cm)	胎　　土	焼　　成	色　　調
104図－424	Ⅳ区 東部下側	土師器	皿	口径 10.8 器高 3.3 底径 5.2	砂粒少，密	土師，普通	黄色
104図－425	Ⅳ区 西 （ベルト東）	土師器	小皿	口径 8.6 器高 1.6 底径 4.2	砂粒少，密	土師，良好	黄色
104図－426	Ⅳ区	土師器	小皿	口径 8.5 器高 2.0 底径 3.0	砂粒少，密	土師，普通	赤桃色
104図－427	Ⅳ区 西部下側	土師器	小皿	口径 8.9 器高 2.0 底径 3.6	砂粒，金雲母含む	土師，普通	灰褐色
104図－428	Ⅳ区 西部 （壁土）	土師器	小皿	口径 8.8 器高 1.7 底径 4.3	砂粒含まず，密	土師，良好	黄白色
104図－429	Ⅳ区 西側	土師器	小皿	口径 8.2 器高 1.8 底径 2.8	砂粒含まず，密	土師，普通	黄桃色
104図－430	Ⅳ区	土師器	坏	器高(2.2) 底径 5.4	砂粒含まず，密	土師，普通	外：桃色，内：黄色
104図－431	Ⅳ区 西側	土師器	坏	器高(2.8) 底径 5.0	砂粒少，密	土師，普通	桃色
104図－432	Ⅳ区	土師器	坏	口径 16.7 器高(4.5)	砂粒少，密	土師，普通	黄褐色
104図－433	Ⅳ区 No.1	土師器	坏	器高(2.8) 底径 7.6	砂粒含む	普通	外：黄褐色，内：黒色
105図－435	Ⅳ区 P－81	須恵器	甕	口径 24.9 器高(4.0)	砂粒少量含む，密	須恵，良好	外：灰白色
105図－436	Ⅳ区 P－81	須恵器	甕		砂粒少量含む，密	須恵，良好	外：灰白色
105図－437	Ⅳ区 東部下側	須恵器	甕		砂粒含まず，密	良好	灰色
105図－438	Ⅳ区 西側	須恵器	甕		砂粒含まず，密	須恵，良好	灰色

石 器 観 察 表

挿図番号	出土地点	器　　種	法　　量　(cm)	重　量(g)	材　　質
28図－ 5	Ⅰ－c区 SK－20	磨製石斧	5.7×15.5×4.1	577	
29図－ 11	Ⅰ－d区 SK－42	石包丁	(6.7)×5.4×0.5	26.55	
30図－ 24	Ⅰ－d区 SK－69 No.2	石斧	6.6×(8.8)×4.3	336	
76図－327	Ⅱ区 南東	石鏃	(1.3)×2.0×0.3	0.55	
76図－328	Ⅱ区 上段中央	石鏃	(1.2)×(2.2)×0.5	1.05	
77図－329	Ⅱ区 No.266	砥石	5.3×(10.2)×4.1	302	
77図－330	Ⅱ区	砥石	4.4×16.0×2.7	226	
82図－343	Ⅲ区 3号穴 No.71	石鏃	1.3×2.4×0.3	0.7	サヌカイト
82図－344	3号穴 No.58	石鏃	1.7×(2.3)×0.4	1.2	サヌカイト
85図－357	3号穴 No.4	五輪塔	16.0×25.4×14.6		
85図－358	3号穴 No.44	五輪塔	長辺33.0×短辺32.8×全高15.0		
85図－359	3号穴 No.45	五輪塔(火輪)	長辺34.9×短辺34.7×全高14.6		
85図－360	3号穴 No.116	五輪塔	最大径34.0×最大高21.4		
85図－361	Ⅲ区 4号穴 No.36	五輪塔(空輪部)	15.9×21.2×14.8		
85図－362	Ⅲ区 5号穴 No.6	五輪塔	長辺36.2×短辺35.3×全高24.7		

瓦観察表（平瓦）

挿図番号	出土地点	叩き	調整	側部	端部	離れ砂	焼成	布目	粘土つぎ目	備考
41図－120	Ⅰ－d区	NB	×	9	16	×	B	×	×	平
41図－121	Ⅰ－d区	NB	×	1	16	○	W	×	×	平
41図－122	Ⅰ－d区	YNB	○ ケズリ	8	15	○	W	×	×	平
41図－123	Ⅰ－d区	平行	○ ナデ	3	15	×	B	×	×	平
41図－124	Ⅰ－d区	KC	×	8	－	○	W	×	×	平
41図－125	Ⅰ－d区	KC	○ ナデ	8	－	○	B	×	×	平
42図－126	Ⅰ－d区	KH	×	－	－	○	W	×	×	平
42図－127	Ⅰ－d区	KH	×	8	16	×	B	×	×	平
42図－128	Ⅰ－d区	KC	×	3	15	×	W	×	×	平
42図－129	Ⅰ－d区	KD	×	9	16	×	W	ヒモ	×	平
42図－130	Ⅰ－d区	KC	×	8	18	×	W	×	×	平
42図－131	Ⅰ－d区	KC	×	7	16	×	B	×	×	平
43図－132	Ⅰ－d区	KD	○ ナデ	7	16	○	W	×	×	平
43図－133	Ⅰ－d区	KA	×	10	16	×	B	×	×	平
43図－134	Ⅰ－d区	KA	×	9	16	○	B	×	×	平
44図－135	Ⅰ－d区	?	×	9	16	×	W	×	×	平（熨斗瓦）
44図－136	Ⅰ－d区	?	×	7	16	×	W	×	×	平（熨斗瓦・模骨）
44図－137	Ⅰ－d区	NB	×	7	－	×	W	×	×	平（熨斗瓦）
44図－138	Ⅰ－d区	NB2	×	8	－	×	W	×	×	平（熨斗瓦）
44図－139	Ⅰ－d区	KC	×	1	16	×	W	×	×	平（熨斗瓦）
44図－140	Ⅰ－d区	?	×	3	15	×	W	×	×	平（熨斗瓦）
45図－141	Ⅰ－d区	KC	×	1	16	×	W	×	×	平（熨斗瓦）
45図－142	Ⅰ－d区	NA	×	3	16	×	W	×	×	平（隅切り瓦）
45図－143	Ⅰ－d区	KA	×	10	16	×	W	×	×	平（隅切り瓦）
45図－144	Ⅰ－d区	KA	×	7	16	×	W	×	×	平（隅切り瓦）
56図－163	Ⅱ区 SK－03 No.20	NB	×	7	16	○	W	×	×	平

挿図番号	出土地点	叩き	調整	側部	端部	離れ砂	焼成	布目	粘土つぎ目	備考
56図－164	Ⅱ区 SK－03 No.1	NB	×	8	－	×	B	×	×	平
56図－165	Ⅱ区 SK－03 No.6	?	×	9	16	×	W	×	×	平
56図－166	Ⅱ区 SK－03 No.4	NB	×	10	16	○	B	×	×	平
56図－167	Ⅱ区 SK－03 No.14	NB	×	3	15	×	W	×	×	平
56図－168	Ⅱ区 SK－03 No.9	NB	×	4	15	×	W	×	×	平
56図－169	Ⅱ区 SK－03 No.3	KC	○ ナデ	－	16	×	W	×	×	平
56図－170	Ⅱ区 SK－03 No.16	KC	×	3	15	×	W	×	×	平
56図－171	Ⅱ区 SK－03 No.7	KH	×	－	16	×	B	×	×	平
69図－288	Ⅲ区 No.276									軒平
69図－289	Ⅱ区 No.330	NB	×	8	17	×	B	×	×	軒平
71図－299	Ⅱ区 南東	NB	×	10	－	×	B	×	×	平
71図－300	Ⅱ区 南東	YNB	×	7	16	○	W	×	×	平
71図－301	Ⅱ区 No.327	NB	×	8	15	×	B	×	×	平
71図－302	Ⅱ区 No.281	NA	×	7	15	×	W	×	×	平
71図－303	Ⅱ区	NB2	○ ナデ	10	16	×	B	×	×	平
72図－304	?	YNB	×	7	16	○	W	×	×	平
72図－305	Ⅱ区 上段中央	KH	×	8	－	○	B	×	×	平
72図－306	Ⅱ区	KH	×	－	－	○	B	×	×	平
72図－307	Ⅱ区 No.79	YNB	×	7	－	○	W	×	×	平
72図－308	Ⅱ区	YNB	×	－	16	○	W	×	×	平
72図－309	Ⅱ区 南東	－	×	－	15	－	W	×	×	平
72図－310	Ⅱ区	KJ	×	9	－	－	W	×	×	平
72図－311	?	KF	×			－	W	×	×	平
73図－312	Ⅱ区 南東	－	○ ナデ	1	16	○	B	×	×	平
73図－313	Ⅱ区 南東	KH	×	7	16	－	B	×	×	平
73図－314	Ⅱ区	KG	×	8	16	－	W	×	×	平
73図－315	Ⅱ区	KB	×	10	17	○	B	×	×	平

挿図番号	出土地点	叩き	調整	側部	端部	離れ砂	焼成	布目	粘土つぎ目	備考
73図－316	Ⅱ区	KI	×	－	17	－	W	×	×	平
73図－317	Ⅱ区	KF	×	1	－	－	W	×	×	平
73図－318	Ⅱ区 No.42	KA	×	8	16	－	B	×	×	平
93図－380	Ⅲ区 3号窯 No.40									軒平
93図－381	Ⅲ区 東側瓦溜	NB2	×	8	16	－	W	×	×	平
93図－382	Ⅲ区 東側瓦溜	KA	×	8	16	－	W	×	×	平
94図－383	Ⅲ区 SK－01 No.28	KA	×	8	16	－	W	×	×	平
94図－384	Ⅲ区 東側瓦溜	KC	×	8	16	－	B	×	×	平
95図－385	Ⅲ区 東側	KC	×	9	17	－	W	×	×	平
96図－387	Ⅲ区 東側	?	○ ナデ	－	16	○	B	×	×	平
96図－388	Ⅲ区 東側瓦溜	NB	×	9	17	－	W	×	×	平
96図－389	Ⅲ区	NA	×	7	15	－	W	×	×	平
96図－390	Ⅲ区 SK－01 No.37	NB	×	6	16	－	B	×	×	平
96図－391	Ⅲ区 SK－01 No.38	NB	×	8	16	－	W	×	×	平
96図－392	Ⅲ区 東側瓦溜	KG	×	10	－	○	W	×	×	平
96図－393	Ⅲ区	KI	×	10	－	○	W	×	×	平
96図－394	Ⅲ区 東側	KH	×	－	16	－	B	×	×	平
97図－395	Ⅲ区 SK－01 No.9	KI	×	10	16	－	W	×	×	平
97図－396	Ⅲ区 SK－01 No.12	KD	×	7	16	－	W	×	×	平
97図－397	Ⅲ区 3号窯 No.43	KB	×	7	15	－	W	×	×	平
107図－440	Ⅳ区 西側	NB	×	8	－	－	W	×	×	平
107図－441	Ⅳ区 西側	NB	×	8	16	－	W	×	×	平
107図－442	Ⅳ区 西側	KK	×	8	－	○	B	×	×	平
107図－443	Ⅳ区 西 (ベルト東)	KH	×	8	16	－	B	×	×	平

瓦 観 察 表（丸瓦）

挿図番号	出土地点	玉緑or行基	叩き調整	側 部	端部（前・後）	焼 成	布 目	粘土つぎ目	備　　考
46図－145	Ⅰ－d区	行	ケズリ	13	R・20	W	×	×	丸
46図－146	Ⅰ－d区	?	ケズリ	13	F・17	W	×	×	丸
47図－147	Ⅰ－d区	行	NBケズリ	13	R・16	W	×	×	丸
47図－148	Ⅰ－d区	?	NBケズリ	13	F・19	W	×	×	丸
47図－149	Ⅰ－d区	玉	ケズリ	13	R・16	W	×	×	丸
48図－150	Ⅰ－d区	行	ケズリ	13	R・15	W	×	×	丸
56図－172	Ⅱ区 SK－03 No.17	?	ケズリ	13	F・20	B	×	×	丸
56図－173	Ⅱ区 SK－03 No.2	行	ケズリ	13	R・15	B	×	×	丸
56図－174	Ⅱ区 SK－03 No.19	?	ケズリ	13	－	B	×	×	丸
56図－175	Ⅱ区 SK－03 No.12	?	ケズリ	13	－	B	×	×	丸
74図－319	Ⅱ区 No.250	玉	ケズリ	13	R・20,F・17	B	×	×	丸
74図－320	Ⅱ区 瓦溜	玉	ケズリ	13	－	W	×	×	丸
74図－321	Ⅱ区 南東	玉	ケズリ	13B	－	B	×	×	丸
74図－322	Ⅱ区 No.201	行	ケズリ	13	R・19	W	×	×	丸
74図－323	Ⅱ区	?	NBケズリ	13	15	W	×	×	丸
74図－324	Ⅱ区 No.244	?	ケズリ	13	19	W	○	×	丸
95図－386	Ⅲ区 東側	?	ケズリ	13	－	W	×	×	丸
97図－398	Ⅲ区 SK－01 No.37	?	ケズリ	13	－	W	×	×	丸
98図－399	Ⅲ区 SK－01 No.33	行	ケズリ	13	R・15,F・17	W	×	×	丸
98図－400	Ⅲ区 SK－01 No.29	行	ケズリ	13	R・15,F17	W	×	×	丸
106図－439	Ⅳ区 西側	玉	ケズリ	13	R・20	W	×	×	丸

図　　版

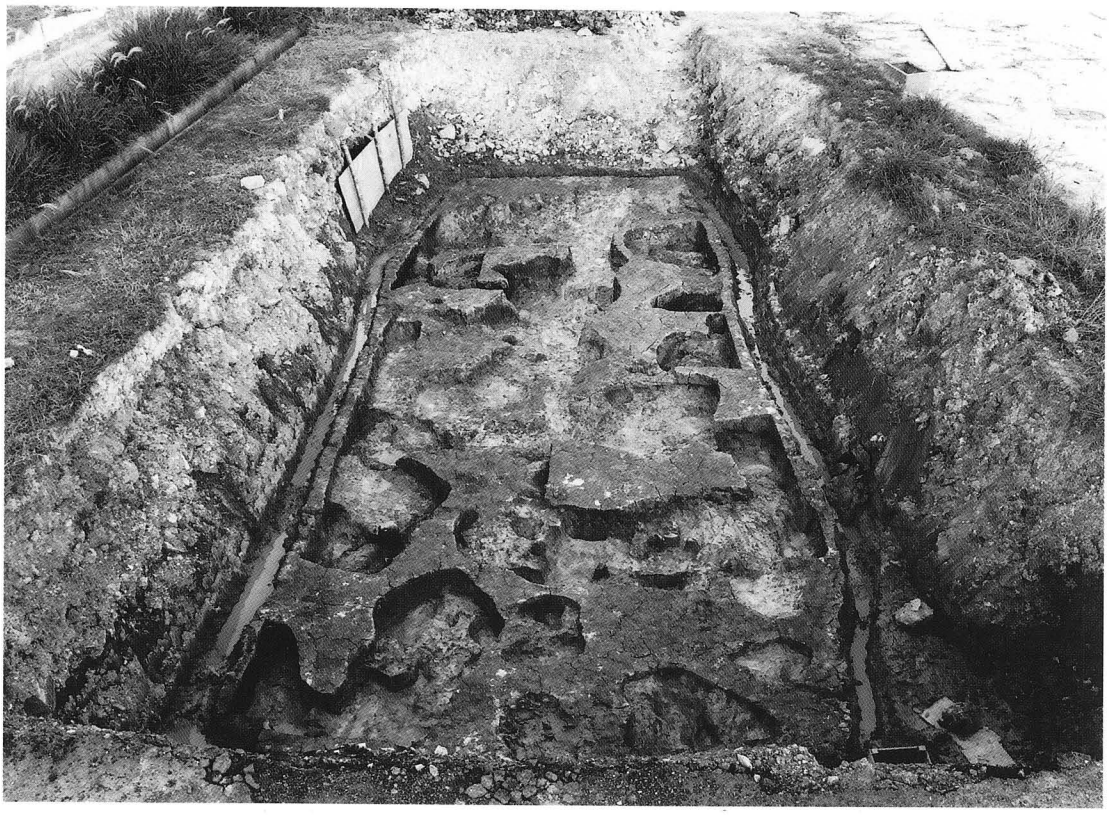
中竹矢遺跡遠景（意宇平野南側より）

Ⅰ-a区全景（北西より）

図版 2

Ⅰ-b区全景（南側上空より）

Ⅰ-b区全景（東より）



Ⅰ-c区全景(西より)

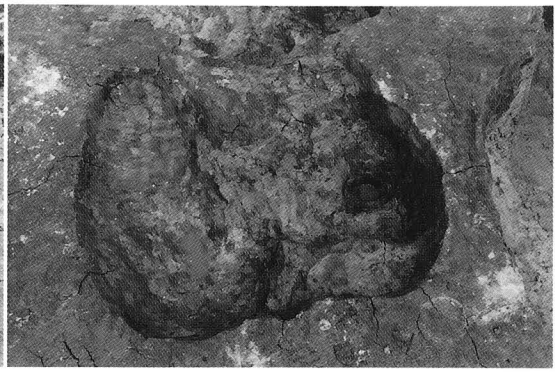
Ⅰ-d区全景(西より)

図版 4

Ⅰ-d区北壁

Ⅰ-e区全景(西より)

SK-17



SK-18

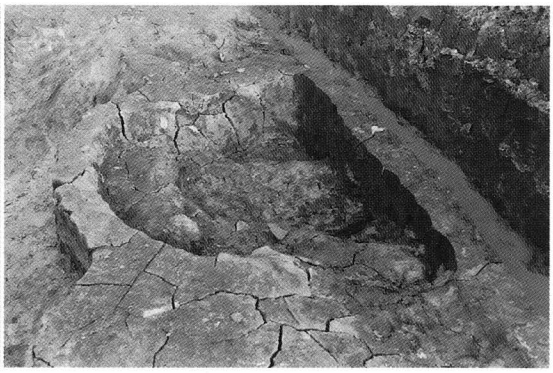
SK-19

SK-20

SK-21

SK-22

SK-24



SK-29

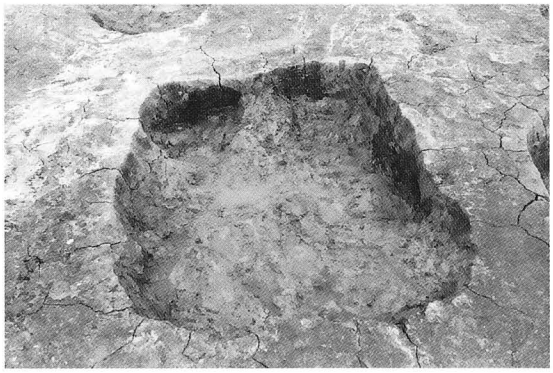
図版 6

SK-36

SK-88

SK-39

SK-40

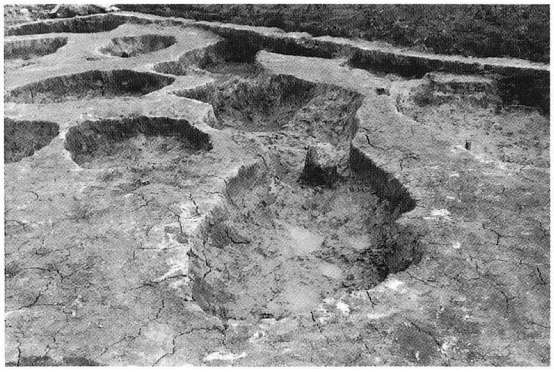


SK-41

SK-42

SK-43

SK-45



SK-46

SK-47

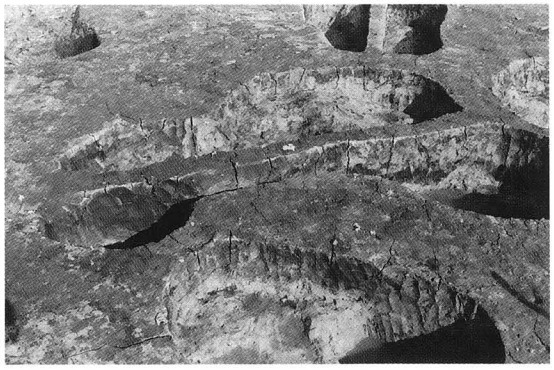
SK-48

SK-49

SK-50

SK-51

SK-52



SK-53